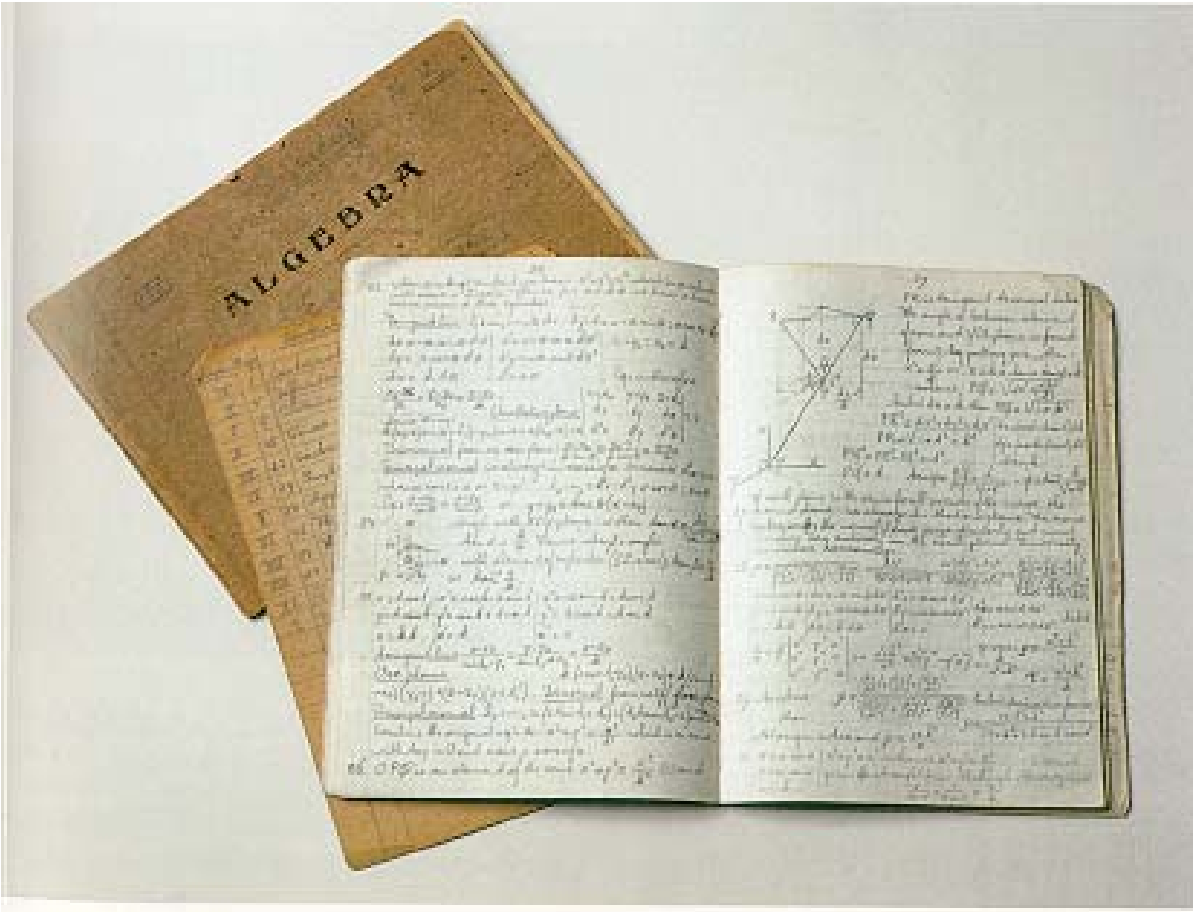
日記でみる日本占領時代の蘭印

チマヒ四に於いて書かれた日記



Nederlands Instituut voor Oorlogsdocumentatie（オランダ戦争資料研究所）

この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994 年に当時の村山富市首相が提唱した＜平和友好交流計画＞から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004 年、オランダ戦争資料研究所
A digital version of this manuscript can be studied on http://niod.nihon.nl

日記でみる日本占領時代の蘭印

チマヒ四に於いて書かれた日記

編纂：Mariska Heijmans-van Bruggen

編集：Richard Voorneman and Elisabeth Broers

翻訳：Tomoko Schenk-Onishi and Takako Shibayama Reinhardt

目次

背景 1

序 3

移送と収容 25

収容所組織 ー 欧州人並びに日本人収容所幹部 44

日本人による抑留者の扱い 66

収容所経済と食糧事情 81

就労状況 116

健康状態と医療事情 134

イラスト 151

教育・娯楽・宗教関係 154

道徳・社会・政治意識 171

人間関係と性意識 182

収容所外部との接触 196

チチャレンカ鉄道敷設作業 214

平和通告 224

出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる＜日記シリーズ＞が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バッカー社（アムステルダム、2001－2002 年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅捜索の際に日記が見つかると罰を受ける可能性があった。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。

選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分をさらに細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがあり、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療情況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代

オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後から書き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。

序

経緯

1944年1月、日本側はジャワ島全土に収容する約２万人に到る民間人男子抑留者全員を西部ジャワにあるバンドンの高原へ移すことに決定した。その理由として、抑留者を集合させ、見張りの強化及び監視要員の削減をはかることをあげた。また、男子を内陸に集中させて万一の連合軍上陸に備え、その中でも依然、活力ある男子が敵の手中に収まるのをできる限り長期間回避するためとも伝えられた。抑留者を集合させる場所として、チマヒのチマヒ４号収容所とバロス第３収容所、バンドンのチクダパトウ収容所を指定した。

バンドンの西方約15ｋｍに位置するチマヒは、戦前、ジャワ島におけるKoninklijk Nederlands Indisch Leger - 王立蘭領東インド義勇軍（KNIL - 蘭印軍）の守備隊駐屯地であったこともあり、軍隊の建物がその場の様子を明確にしている。チマヒ４号収容所は、蘭印軍の第４及び第９歩兵大隊が戦前に兵営したふたつの駐屯場を配置していた。これら駐屯場は軍用地内のほぼ中央に位置していた。近隣には、軍病院、日本軍占領下には食糧が貯蔵された山岳砲兵隊兵舎、そして戦前、閲兵式が行われた通称「競馬場」があった。これらふたつの大隊駐屯場には、1942年3月から捕虜の最終グループが突然移送される1944年1月末までの期間中は戦争捕虜が収容されていた。

移送

チマヒ４号収容所は、1944年2月から1945年10月まで民間人男子を対象とする強制収容所として使用された。抑留者の第一陣は1944年2月2日に到着し、戦争捕虜の最終グループが出発した時の慌ただしさを考慮しても非常に混乱した状態を呈していたといえる。また、抑留者がここで目にしたものは、1942年5月5日に同地で処刑されたアンボン人とメナド人7人の墓であった。これらの墓は夕方逃げ出し、翌朝こっそり戻る戦争捕虜が被った事実を見せしめることにもなった。ある日記の作者が記した、同軍人７人の妻たちも殺されたという事実は出典資料内で確証されない。

1944年2月20日までは、数日の間隔をおいて抑留者のグループがチマヒ４号収容所へ移送された。これらグループはバンドン、ボイテンゾルフ（旧称ボゴール）、チルボン、ジョクジャカルタ、マラン、ヌガウイ、ペカロンガン、セラン、スカブミ、タンゲラン、 テガルにある収容所出身であった。少年と男子の大部分は、以前既に、他の収容所から上記の場所に

ある収容所に移されたのであった。1944年2月19日の抑留者総数は9538名に到り、国籍は31を数えた。しかし、抑留者の大部分はオランダ人だった。

収容所が満杯となる最初の抑留者の流入後も、1945年8月までの期間にわたり抑留者グループの移動は定期的に行われ、新しいグループが到着する一方、チマヒ４号収容所から他の場所へ移されるグループもあった。新入グループはほとんど、西部ジャワの婦女子収容所にいた10歳以上の少年、及び年老いた男子で形成されていた。＊日本社会では10歳は成人となる年齢とされた。そのため、この年齢に達した少年は母親のもとから離され、男子または少年対象の別の収容所へ移された。

収容所から出たいくつかの移送の中に特記すべきものがある。1944年8月10日、同月の初めに日本軍の命令により名のり出を余儀なくされた約200名の陸海軍兵士がチマヒ４号収容所を発った。1945年12月に編纂された収容所報告書内の一部によると、日本軍収容所監督は日本支持派として身ら言明した人物 P.H. ファン・デン・エックホウトを起用し、この登録を推進したとされている。これに関する事柄は、「政治的関係」の項目に記す。同陸海軍兵士は戦争捕虜としてバタビアの第１０大隊収容所へと移され、その一部が、労働に課さるべく外地（ビルマ、日本、スマトラ）へと移送された。1944年10月と1945年5月にそれぞれ約1400名及び35名の所謂「指導的人物」とユダヤ人がチマヒ４号収容所から徒歩30分に位置するバロス第３収容所へ発った。この指導的人物には行政官吏、宣教師、牧師、上級警察官、フリーメーソン団員が属した。日本軍は彼らを収容所内の不和の種をまく者である「ジャハッツ」（悪人、犯罪人）として扱った。また、これは彼らがチマヒ４号収容所から移された理由でもあった。日記のある作者はこれに関し、「抑留者約１万名の大収容所内の指導的人物は、彼らによる講義があまりに多く開かれ、情報の提供がされすぎるという理由で移される」と述べている。

さらに、1944年12月及び1945年5月には、6回にわたりおよそ500名と760名の老人や重病人がチマヒ４号収容所から移送された。その大部分の者は医学的に見ても移動が許されないほど病んでいた。同移送は、セマランにあるバンコン収容所、アンバラワにあるアンバラワ７号収容所、バタビアのマテル・ドロロサ収容所へ向けて行われた。前者ふたつの収容所は老人や病気の男子に加え、少年も抑留された。マテル・ドロロサ収容所では病人だけを対象に収容した。これら人々の大半は解放まで生存できなかったか、その直後に死亡した。

チマヒ４号収容所の病人の一部は、チマヒにある軍病院から上述の収容所へ移された。この軍病院は1944年3月以降、バンドンとチマヒの収容所に抑留されている手術や特別医療処置を必要とする病気の抑留者を対象に中央収容所病院として配置された。しかし、1945年4月から同軍病院は日本軍兵士のみを受入れていた。そのため強制収容所内の病人はその時期から降伏まで中央収容所病院として配置されていたチマヒの少年用バロス第２収容所に隣接したウイレムストラート地区へとチマヒ４号収容所の外部雑役班により運ばれた。

最終となる約2000名の男子と少年の移送が1945年7月25日にチチャレンカ近隣の簡易収容所へ向けて行われた。彼らはチチャレンカとマジャラヤ間の鉄道敷設のための労働に課さ

れた。日本側がこの区間の鉄道敷設を望んだ理由は不明である。チマヒ４号収容所に加え、チマヒとバンドンにある他の収容所からも男子や少年がチチャレンカへ移された。バンドンのチクダパトウ収容所からの抑留者のグループは毎日鉄道でチチャレンカへと運ばれた。そして、夕方このグループは再びバンドンへと戻された。

元かわら工場であったチチャレンカ収容所の状況は非常に悪かった。抑留者は、以前にはかわらを乾燥するために使用された低い屋根のバラックに寝かされた。壁は柵とも言えるものであった。というのは、ここは依然、焼くかわらを乾燥するためバラックに風入れをする配慮がされており、実際にこの状況におかれた。水は不足し、病気疾患の危険なしでは飲めないほど汚染していた。加え、重労働により既に栄養不良にある抑留者はさらに衰弱していった。5日後既に、病人と衰弱した抑留者はチマヒ４号収容所へと戻された。チマヒ４号収容所からチチャレンカへ向けて抑留者の第2回目の移送が予定されていたが、実施前に日本降伏となった。1945年8月19日と20日に、チチャレンカにいたチマヒ４号収容所からの抑留者は再び収容所に戻された。

日本降伏までのチマヒ４号収容所の生活

第４及び第９大隊の駐屯場は元来、最高2500名収容用に作られていた。民間人男子収容所として、11歳以上の少年から老人まで様々な年齢の男子約1万名が抑留されていた。国籍も多様であり、その大部分はオランダ国籍を有していたがアルメニア人、ノルウエー人、中国人、英国人、米国人もここに抑留されていた。チマヒ４号収容所にいた約600名の中国人はいわゆる重慶（チョンチン）派の人々であった。彼らは重慶にあり、連合国側についていた蒋介石総統率いる中国国民党の支持者で、皆、中国系の大企業の代表、医師、技師などジャワの中国人社会では重要人物にあった。

1944年4月1日までチマヒ４号収容所は、ジャワ島のその他全ての民間人収容所と同様に日本の民事行政部による管理下にあった。4月1日から収容所管理は、ナカタ・マサユキ大佐の指揮する日本軍当局によりなされることとなった。正式には、民間人抑留者は1943年11月7日の勅令により軍当局の直轄におかれたが、ジャワでは1944年4月1日になって初めてこの規定が発効した。注目すべきことには、いくつかの日記の中では1944年3月1日を収容所の管理が軍に移管された日としていることである。確かに、収容所では1944年4月1日に新しい訓令が抑留者に発表され、同月内に新しく日本軍の収容所長が着任した。

1944年2月に既に採用されていた欧州人収容所総監督の地位にはカーレル H.V.デ・ヴィルネフ公が置かれた。彼は1945年5月まで欧州人収容所長としての任務を果たした。その後、彼は何人かの欧州人収容所組織幹部を含む指導的人物34名とともにバロス第３収容所へ移された。1945年5月から日本降伏まで、収容所長の地位は、欧州人収容所管理における労働・社会

部のリーダーとして従事していたJ.F.G.ステイン、別名ハインツの手中にあった。

収容所の敷地面積は約2000平方メートルあった。この敷地内に抑留者の大部分は以前、蘭印軍兵士が起居した石造りの兵舎に暮らした。部屋不足から収容場所として一部ビリックの壁(竹で編んだマット)が付いたバラックが使用された。収容所は11の班に区分され、1945年6月からはこれは12班となった。各班は組毎に分割された。班と組別にそれぞれリーダーが置かれた。さらに、各雑役にもリーダーが指名された。収容所内、特に炊事場の雑役に課されたばかりでなく、収容所外部での各種雑役にも抑留者グループがかりだされた。その代表的なものは農作業であったが、防空壕の建設、アンディール空港付近の道路拡張工事など軍事的な雑役もあった。農作業として抑留者は主に、チマヒ近郊のチミンディとグヌン・ボホン地域に従事した。チミンディでは、「ゾネフーヴェ」農場で働らかされた。グヌン・ボホンでは、ウビ畑の耕作と手入れをしなければならなかった。これら雑役は、鉄条網の張られた収容所に抑留されている者には、一時でも外に出られるという長所を生んだ。加え、外部雑役の最大の利点は働くことにより報酬やパンの特配を受けることができたことである。また、現金や食糧を入手する目的でこれら外部雑役の際は取引が盛んに行われ、これを手段に収容所へは密かに食糧が持ち込まれた。このような行為は禁じられており、発覚した場合、その抑留者は厳罰に科されることになっていたが、飢えに駆られて不正に食糧を収容所内へ持ち込み続けた。他には、リーダーの名を取って「ルーリンク雑役」と呼ばれた作業があった。この雑役は石鹸の製造、衣類の修繕、木材を利用したボタンやサンダルの製作、その他、木工や金属加工など技術的性格を持っていた。また、このルーリンク雑役として、収容所内で死亡した人のため、棺を作ることがあった。棺は何枚かの板で作られたが、1944年末以降には遺体はアシや竹で編まれたマットにくるんで埋葬された。

抑留者は、各自10ギルダーを正式に所持することが許されていた。これ以上の現金は横浜正金銀行へ預け入れることができ、毎月、預金の中から10ギルダーが持ち主に支払われた。この金で必需品を買い足すこともされた。横浜正金銀行は、1942年4月に全ての蘭領東インド系金融機関の資産を買収した三つの日本の銀行のひとつであった。蘭領東インド系の各銀行は閉鎖されたが、日本降伏に際しても未だこの整理作業は完了していなかった。実際には、この10ギルダーの支払いを翌月あるいは長い間待たなければならなかった。チマヒ４号収容所では横浜正金銀行からの支払いは1944年6月3日に初めて行われた模様である。

収容所の大方の抑留者は、許可されていた10ギルダー以上の現金を所持していた。その理由のひとつには、金を引き渡すべく日本軍の命令に単に従わなかったり、無視したことによる。他の理由は、収容所内外で頻繁に取引が行われたことである。収容所の外で衣料、腕時計、指輪などを売ることにより、抑留者は収容所内で補充食を買うための金銭を得た。加えて、インフレが激しく、物価がかなり上昇したため、物品を売って得た金額と支出する金額は10ギルダーを大幅に上回った。また、収容所内でも自作の食べ物や飲物を売るなどの商売がなされた。例えば、日記のある作者は、自分で作ったスープやコーヒーを売った。

日々の食糧に欠乏し、その質の悪さから抑留者たちは病気にかかりやすくなっていた。特に赤痢の場合には、チマヒ４号収容所内の元厩舎に患者を個別に収容する設備があった。日記のふたりの作者が「ＢＡ」に関して記しているが、これは恐らく伝染病棟の略語と思われる。

収容所内の人間関係は食糧とプライバシー欠如の影響を受けて悪化した。収容所での暮らしの状態が悪くなると人々はますます自分中心に行動し、お互に助け合うことが減少した。特に、食糧の特配を得るチャンスが多い外部雑役の割り当ての際に不正が発生した。中には、生き残る欲望に駆られ利己的になった者もいた。過密な環境により仲間との関係にかなりの負担が生じたことは明白である。加えて、チマヒ４号収容所では緊張した政治的関係が存在していた。このことに関しては、以下に述べる。

政治的関係

チマヒ４号収容所の民間人抑留者の大半は日本人に嫌悪感を抱いていた。しかしながら、収容所内の各種の階層にあるいくつかの抑留者グループは、すすんで彼らに協力する用意があった。これらグループのひとつに国家社会運動家党、即ち東インドＮＳＢ党があった。このＮＳＢは、ヒットラーの唱えるナチズムに傾倒したオランダ本国にある政党であったが、ここの場合は反ユダヤ主義とは無関係にあった。1931年末以降、ＮＳＢはオランダで活動を開始し、その2年後には蘭領東インドで東インドＮＳＢを結成するに到った。ドイツが1940年にオランダに侵入した際、東インドＮＳＢ党員のほとんど全員は敵国に協力した罪で拘留された。1942年3月には、拘留されてたＮＳＢ党員は日本軍占領下に釈放された。日本軍が1942年から1943年の期間内に全ての欧州人男子を抑留した時には、ＮＳＢ党員も例外とされず、再度収監された。

チマヒ４号収容所にいた約80名のＮＳＢ党員は、全員一緒に個別の兵舎に収容された。彼らは J.W.ホラーマンの指揮下にあった。このグループは収容所内の施策にはほとんど加わらなかったため、欧州人収容所監督はその任務実行において、彼らの存在がほとんど支障とならなかった。しかし、欧州人収容所監督は、軍事的作業に抑留者が利用されることに異議を日本人監督に申立てた時、ホラーマンはＮＳＢ党グループが日本軍のために作業を行う用意がある旨、日本人監督に書簡を出した。1944年9月、ＮＳＢ党グループのメンバー全員が釈放された。

欧州人収容所監督にとり最も障害となったグループは、ピーター・ヘンドリック・ファン・デン・エックホウト率いるＰＡＧＩグループであった。このＰＡＧＩメンバー約70名は、「ボールボーイ」とも呼ばれた。混乱を避けるために記されることは、ボールボーイという用語が通称「ニッポン・ワーカー」グループの意味で日本軍占領下に使用されたことである。つまり、日本軍占領時にそのまま仕事に従事していた欧州人と印欧人は、暫定的に抑留されることはな

かった。目印に彼らは赤い玉が付いた帯を腕に着装していた。

Persaudaraan Asia Golongan Indonesia（アジア同胞インドネシア・グループ）略称してＰＡＧＩグループは、1943年4月に東部ジャワのクシリール強制収容所でファン・デン・エックホウトにより結成された。主に印欧人がＰＡＧＩグループに入団した。このグループのメンバーはインドネシア支持派で、インドネシア人として日本が指揮する大東亜共栄圏の建設に参加することを願った。彼らは白地に赤い玉（日本国旗）の下に赤か黄色の線にグループ内での等級により一星、二星あるいは三星を配置したバッチを付けていることで収容所内でその他の抑留者と見分けることがされた。このバッチを着装した様相からＰＡＧＩグループのメンバーに「ボールボーイ」の別名が付けられた。

クシリールで僅かながらも背後で活動していたＰＡＧＩグループは、1943年9月に抑留者の大部分が印欧系であるタンゲランに移され、ここでＰＡＧＩグループのメンバーは指導的機能を満たした。ファン・デン・エックホウトは欧州人収容所リーダーとなった。タンゲランでは、オランダ人と印欧人は分離して収容された。オランダ人はマレー語のみを話すことが許され、定期的に日本国歌を斉唱させられた。その次の収容所、チマヒ４号ではＰＡＧＩグループは最高権威を有していなかった。1944年4月に日本人収容所長の命令によりファン・デン・エックホウトが収容所運営に採用される前までは、欧州人収容所監督は全員、ＰＡＧＩのメンバーでない者だった。日記のある作者はタンゲランにおけるＰＡＧＩグループの支配を身をもって体験した。これに関して、日記の中で次のように述べられている。「将来のためのレッスン、個人的な意味においても。我々はファン・デン・エックホウトは抑圧されたと信じ、この背教者に対し直接強力なプロパガンダを行わなかった。その結果、今、我々は、タンゲラン出身でない人々にこの人間の有害さについて早急に明言できない。それだけに収容所の残りの者が協力を試みる、ヤップにより指名された約80名のグループのリーダーであるこの第二の男を結局、認めるほうが、すべてを無にし、このまま成り行きにまかせるよりましだ」。

ファン・デン・エックホウトは依然として収容所リーダーの地位では劣勢にあった。しかし、ＰＡＧＩグループの存在は抑留者の間に緊張をもたらした。特に「ボールボーイ」のスパイ活動は不安な雰囲気を生じさせる原因となった。1944年9月4日、ファン・デン・エックホウトはＰＡＧＩのメンバー6名とともに釈放された。1945年4月2日、ＰＡＧＩグループの残りのメンバー66名が釈放された。

独自に日本人に協力した人物は J.F.G.ステイン、別名ハインツであった。ハインツは、ＰＡＧＩメンバーでなかったが、タンゲラン収容所内リーダーのひとりであった。1945年5月、ハインツはデ・ヴィルネフ公が去った後、チマヒ４号収容所の責任者となった。やがてハインツは日本軍の指揮に同調した立場を取るようになった。彼は日本人の真の協力者ではなかったが、彼らの規律を、たとえこれが抑留者の利益に反する場合でも厳守したのである。彼は支持者を身辺に置いた。彼の目標は、インドネシア人のみでなく、東インドで生まれたすべての人々も同じ権利を有するインドネシアの独立にあった。

ＰＡＧＩグループの活動とハインツの構想は、印欧系人民をもって勝利をはかる日本の政策にうまい具合に当てはまった。チマヒ４号収容所では、この政策を基調とした他のいくつかの措置がとられた。抑留者グループへは、大東亜共栄圏を支持することを宣言した回答者に解放をほのめかすアンケート用紙がしばしば配られた。解放の約束は幾度か果たされた。1945年1月、結局、日本軍は印欧人と欧州人とを個別の兵舎に収容して双方を分離されることに力を加えた。日本側がチマヒ４号収容所の印欧系抑留者をどの程度味方に引き入れたかは不明である。

日本降伏後の出来事

日本の降伏は1945年8月22日に、チマヒ４号収容所の抑留者たちに正式に通告された。一応、元抑留者となったが、収容所から出ることは許されず、連合軍、この場合は英軍が進駐するまで暫定的に日本の警備下にあった。食糧事情は大幅に改善され、衣料などその他の物資が収容所に届いた。多くの男子は外出禁止を無視し、買い物のためや日帰り、または永久に収容所からこっそり姿を消した。収容所の外の状況は、過激なインドネシア民族主義の青年たちの反オランダ活動のため急速に危険となった。彼らは国に戦前の植民地支配が再来することをあらゆる手段を講じて阻止しようとした。トトック（純血）オランダ人の多くは困難に遭遇し、脅し、増しても最悪な状況にも置かれた。また、占領時に収容所の外で暮らしていた印欧系の人々の一部は、同様に民族主義者たちのテロ活動の的となってしまった。その結果、元抑留者がチマヒ４号収容所を去ることができなかっただけでなく、印欧人もインドネシアの独立闘争が原因で収容所内へ避難した。これまで強制収容所であった建物は以後、インドネシアの過激な民族主義者から守る避難所と変わり、日本人の警備者は、かつての捕虜を保護することになった。1945年10月、最初の英軍がバンドンとチマヒに到着したことにより、インドネシア人の間では不安がますます高まった。収容所は直撃されなかったが、夜にきまって銃砲が飛び交った。1945年11月にインドネシア民族主義者の圧力で食糧ボイコットが始まり、収容所へは野菜、鮮肉、卵や果物の入荷が不順となった。1946年にも不安定な状態が続き、チマヒ４号収容所も何度か襲撃を受けたが、次第に人々の安全な場所への避難が進行していった。1946年3月から4月の間に、チマヒ４号収容所はついに閉鎖を完了した。

出典: 日記

ハウゼル

アールト・ハウゼルは1905年1月18日、ロッテルダムに生まれる。日本との戦争が勃発した際、彼は東部ジャワのジェンベルにあるコーヒー・ゴム農園企業カリ・バジンに管理者として従事。1939年11月2日から、ベルタ・ハウゼル・フライゼン、愛称「ベーアチェ」と婚姻関係にある。1940年9月28日、長男フランス・ヤン出生。1942年8月2日、次男出生、アールト・ヤンと命名。1943年5月までハウゼルは同会社に勤務する。1943年5月7日、ボンドホーソにある現地人学校に収容される。ハウゼルは届いたマレー語の新聞をオランダ語に翻訳する。また彼は収容所の経理をまかなう臨時の会計係としての任務を進んで行う。彼のこの収容所と後に移送されたふたつの収容所でのルームメイトは、ジェンベルにあるコーヒー・ゴム農園企業グヌン・マヤンの管理者、アプ・デ・マイエルである。1943年9月8日にボンドホーソ収容所の抑留者は、タンゲランへ移され、同地の刑務所に１ヶ月間監禁される。このグループはクシリール農園コロニー出身の抑留者グループと同時に刑務所に到着する。ここでも彼は続けて管理の仕事を行い、刑務所に収容されている男子と少年の「ゲストリスト」と彼自ら名付けたものを作成する。1943年10月9日には新たに、近郊の元は少年院であったタナ・チンギ収容所へ移される。この収容所は前項で既述のピーター・ヘンドリック・ファン・デン・エックホウトの指揮下にあった。第２次世界大戦が始まる前夜に大農園企業に創設された守備隊の一種、地方警備隊のジェンベル・パニュワンギー地方からの指揮官30名が1944年1月10日に突然召集され、ケンペイタイ（憲兵隊）により収容所から連行される。その中にはアプ・デ・マイエルも含まれ、ハウゼルは収容所のルームメイトで仲間であった彼と別れることとなる。1944年2月8日最終的に、タンゲラン収容所の抑留者はチマヒ４号収容所へと移送される。後に明らかとなったことは、収容所から連行された地方警備隊指揮官は最初、他にも逮捕者が既に収容されていたジェンベルの刑務所へ移されたことである。刑務所では地下運動組織、特にサボタージュに加担した容疑で虐待を伴う尋問がなされた。この事件は1944年4月、「農園主事件」としてジャカルタで日本軍軍法会議にかけられた。40名の逮捕者が死刑を宣告され、残りの者は懲役刑に科された。アプ・デ・マイエルへは10年の懲役刑の判決が下され、バンドン近郊のスカミスキン刑務所へ送られた。

ハウゼルの日記は、1943年5月にボンドホーソにある収容所に移された最初の日から始まっている。ハウゼルは日記の中で毎回、日本軍捕虜として暮らしてきた日数を書き留める。1945年4月1日から彼は、日記を毎日書くことはやめ、日曜日毎に１週間分をまとめて記す。その変更の理由は述べられていない。恐らく、肉体的にも精神的にも疲れ果てていたことも一部関係すると思われる。ハウゼルは日記を欠かさず綴ることに明確な理由を述べていない。しかし、書くことが発見される危険を犯すだけの価値を持つとしている。

彼の妻と子供たちへの空虚な想いが日記の中心を形成している。特に、捕虜になっている間、夫そして父親としての務めを果たすことができないことに収容所で暮らす期間を無駄な時間と見なしている。しかしながら、彼は、日記の以下の文中で明らかとなるように、抑留生活に対する肯定的な見方もしている。

「ページをめくりざっと読み返して気付いたが、妻の肉体を本気で欲したことは、最近よりも初めのところにたくさんテーマとして出てくる。激しい、すばらしい結婚生活も5月7日をもって断たれてしまった。そのため、恐らくお互いが抱く肉体の欲望は突然、空中に取り残されてしまった。時が経過して、他の感情を抱くようになり、ベーアチェに対する欲望はさらに強くなったが、違う根拠に基づいている。その意味でも、この時こそが私たちの将来の生活にとり、きっと有意義となろう」

ハウゼルは宗教に支えを求めていない。彼を力づけた唯一のことは、「健康」で妻と子供たちのもとへ帰りたいとの願いである。抑留された初期には、ハウゼルの体重は77ｋｇあったが、1945年6月には僅か、57.1ｋｇとなる。

ハウゼルにとりリラックスする一番の方法は喫煙である。あまり必要でない食品はタバコと交換されさえする。彼は自分のパイプが壊れた場合は大惨事と見る。ハウゼルは毎日読書し、チェスをしたり、様々なテーマの講義にも出席する。また、彼は外部雑役を金と食糧が入手できるのに加え、退屈しのぎになるとした。そのため、特定の雑役を求め、保持する努力をする。

ハウゼルは、抑留されて間もなく既に広まっていた近々の解放の噂に、なぜ収容所の仲間たちが夢中になるのか理解できない。彼自身は将来に対し現実的な見方をしている。1943年12月に彼は以下のように記している。

「ここの多くの人々が今、重大局面に達したから、妻と子供たちのもとに帰り、再び、以前の様に仕事に行くとの意見を持つ。私はそう楽観的に見てない。我々が克服せねばならない困難は大きい。我々がいかに心配（思案）をここで持っていても、今のこの相対的な安らぎと比べたら実際はもっと深刻である思う」

解放が現実となるとこの見解が非常に正しいことが分かる。彼の妻と子供たちは、まだ生存し、アンバラワにある強制収容所にいることが明らかとなる。彼のかつてのルームメイト、アプ・デ・マイエルは、スカミスキンで拘留されている間に死亡した。日記は1945年11月で終わっている。ハウゼルは依然、彼の家族と再会してなく、一方、インドネシア民族主義者たちはオランダ人の生活を一層困難なものにしていた。

ヤンセン

日本との戦争が勃発した時、アウグスト・ヤンセンは彼の両親、弟とふたりの姉とともにメダン近郊に暮らしていた。彼らは、欧州に戦争の気配があったため、アウグストが1926年7月7日に出生したオランダから1939年には既に蘭領東インドの親類の元へ離れていた。 日本との開戦の恐れに対しては当時、まだ真剣に注意が払われていない。1942年1月に日本軍の威嚇が深刻化すると、H.ヤンセン・クレーマー夫人は4人の子供たちを連れて「安全な」バタビアへ移る。ボイテンヘウエステン（スマトラも含めた地域）は日本との戦争の際、ことによると占領されるかも知れないが、本島であるジャワは絶対に大丈夫と思われていた。アウグストの父親P.W.ヤンセンはスマトラに残る。日本の占領が現実となると、ヤンセン夫人は長男アウグストを彼の父親が共有者であるN.V.Maatschappij ter Exploitatie van de Verenigde Majanglanden（マヤンランデン連合開発株式会社）の子会社、コーヒー・ゴム農園企業グヌン・マヤンで働かすため、会社が所在するジェンベルへ送り出す。彼は抑留されるまで管理者 A.P.（アプ）デ・マイエルの元で働いていた。

1943年7月、アウグストはボンドホーソにある警察を経て同地の彼の最初の強制収容所となる現地人学校に移される。デ・マイエル氏もハウゼル（上項参照）も同じくこの収容所に抑留される。ハウゼルは1943年7月13日付の日記で、「18人の新入者、その中にアウグスト・ヤンセンあり」と述べている。ハウゼルがアウグストの存在を特別に記した理由は、彼自身がアウグストの父親の会社に属す大農園企業の管理者であったことによる。ハウゼルとデ・マイエルはルームメイトとなり、後者は多少なりともアウグストの面倒をみる。アウグストの抑留期間中継続してハウゼルのいるグループに属し、ハウゼルと同じ様にタンゲランでデ・マイエル氏と別れなければならなくなる。そのため、アウグストは「収容所の父」を失う。

デ・マイエル氏の他、次の人物はアウグストの収容所での生活において重要な役割を演じる。第一に、収容所でのアウグストと同年配の者と友人がある。アウグストはボンドホーソの警察でヤン・ローベンに初めて会う。ボンドホーソの現地人学校でシャーリー・ファン・ヴィンガールデンが仲間に加わる。チマヒ４号収容所でヤンの兄弟であるユストとフランク（あだ名をスピッケル）がグループ（クラブ）に加わる。1944年11月31日、アウグストの13歳の弟ヘルベルトがバタビアの婦女子収容所からチマヒ４号収容所へ移送される。シャーリー・ファン・ヴィンガールデンが他の兵舎に移ったため、グループのメンバーは４人になる。1945年7月22日、ヤンとスピッケルがチチャレンカへ移され、グループは解散し、ヤンセン兄弟は独力で生計を立てていかなければならなくなる。

第二に、カルバン派の宣教師 C.J.フッケンダイクとクリスチャンサイエンス教会[1] の信奉者ヨンクヘール氏が、アウグストの生涯に重要な転換を生じさせる。この変化はアウグスト・ヤンセンが1944年10月9日に母親への報告として書き始めた日記の下記の文中で明確に示される。

[1]クリスチャンサイエンティストはクリスチャンサイエンスの教義の信奉者。キリスト教に基づく精神療

「最愛なる母へ。突然ですが、僕の近況をあなたにお伝えしたいと思います。多分、現在の状況はかなり前からのことですが、実は、僕は今、敬虔なクリスチャンサイエンティストとなりました。強制収容所での最初の時期、僕は病気がちでした。そして、その原因は信仰心に欠けていたことによると、今、わかりました。不運と精神的誤りを通し、だんだんと僕は自分の生活に対する姿勢を変えてきました」

1944年10月16日、フッケンダイクとヨンクヘールはバロス第３収容所へ移されるが、アウグストの信仰心は不動であった。アウグストにとり信仰が助けとなることは、次の日記の文中で明らかとなる。

「クリスチャンサイエンスを良く理解するようになってから、すでに僕の小さな痛みがまるで太陽にあたり雪が溶けるように消えました。収容所に入る前よりも、気分がもっと良いほどです。もちろん、やせましたが、体重はさほど重要でないのです」

1944年12月に、ヘルベルトは赤痢のため入院したが、幸いにも全快する。1945年8月初め、兄弟は姉エリザベートが同じ様に赤痢に罹りバタビアの婦女子収容所（チデン)で死亡したことを知る。アウグストは悲しみ、しかし、天国で姉と再会できると信じる。アウグストは両親の権威のもとに自分を置くことを切望する。なぜなら彼は、独力で生活することにあきあきしていたからである。日本降伏後、兄弟はバタビアへ向い、そこでやせ細った母親と姉ミーンスケに再会する。また、占領時に北部スマトラ各地の収容所に抑留されていた父親ヤンセンも再び家族とともに暮らすことになる。インドネシア民族主義者が蜂起した時、ヤンセン一家は今回、シンガポールへ脱出した。

アウグスト・ヤンセンの日記の原本はその所在が不明となり、出典の断片は、ヤンセン氏が1960年代にコロラド大学にて社会学の博士論文のために英訳した日記を使用した。英文は再びオランダ語に翻訳された。

マイエル

D.H.マイエルは1902年9月10日に生まれる。戦前、彼はパレンバンにある貿易会社であるヤコブソン・ファン・デン・ベルヒ＆Ｃｏ社の事務所に勤務。ウィリー・ファン・デル・フェーン

法としてマサチュセッツ州ボストンのマリー・ベーカー・エディにより 1866 年開設される。

と結婚し、長男ペーター、そして日本軍侵略時にはまだ乳児であった長女マライケがいる。ウィリーは子供たちと先にジャワへ発つ。日本軍がパレンバンに接近すると、マイエルは万一、オランダの降伏がなされた場合を考慮して、主要な戦略・軍事目標を日本の略奪から防御する破壊工作隊に参加する。彼は日本侵略の直後、妻と子供たちの後を追ってジャワへ向かう。

1942年7月、マイエルはバンドンの ’s Lands Opvoedingsgesticht(地方少年院), 略称、Ｌ.Ｏ.Ｇ.収容所に抑留される。この建物は以前約300名から400名の原住民少年を社会の良き一員にするため教育した国立の施設であった。1942年7月以降、この建物には約1500名の抑留者が収容される。この収容所でマイエルは収容所の仲間ひとりとともに1943年2月、収容所図書館の組織を開設する。1944年1月23日、Ｌ.Ｏ.Ｇ.収容所の抑留者は近隣のバンドン第１大隊補給廠へ移される。ここへは、その後も各地の収容所から抑留者が到着する。これらの人々の話しからＬ.Ｏ.Ｇ.収容所の状態は非常にみじめであったことが明らかとなり、マイエルは次の様に記述している。

> 「だが、我々はここで少しはメリットを得るに値する。なぜなら、他の収容所の話しを聞くと、我々は最悪の状況に到ってたようだ。食糧はかなりとぼしかったし、他の収容所では家族からの小包や手紙を定期的に受取ることが許されていた」

マイエルはＬ.Ｏ.Ｇ.収容所の悪い環境は原住民の収容所管理に対する日本人の統制の欠如に原因があるとしている。続いて1944年2月上旬に、チマヒ４号収容所へと移送される。1944年10月あるいは1945年5月に、マイエルはバロス第３収容所へ移され、日本降伏まで同所に留まる。

日記は抑留初期、1942年7月には始まってなく、1942年12月4日に以下の様に記している。

> 「今、我々はいちばん長い間この強制収容所に暮らしてきてこの様子だと、やはり私はこの戦争の間、我々が体験してきたことを記録しておきたい。後で、自由の身となったらできないだろう。なぜなら、その時は社内の仕事がたくさんありすぎるだろうから」

迫る終戦との楽観的な噂は抑留された当初から収容所内に広まっていたということは事実である。その後マイエルは1941年12月までの時期を振り返って見ている。マイエルの日記は毎日でなく、数日毎あるいは１週毎に綴られている。1943年3月から6月まで、日記は空白となっている。マイエルは紙不足だけでなく、加え、情熱の不足にもよると書いている。1944年10月、マイエルは書くことを完全に止めた。少なくともその様子である。今度は情熱不足が原因ではない。彼は次の様に記述している。

「この日記を安全な場所に隠すために今、書くことを止める。なぜなら、これらの紙片を単にかばんの中に入れておくのは、スパイ行為やますます険悪になってきたヤッペンの態度により危くなってきたからだ」

1945年5月1日、欧州とアジアでの展開で示される様に、解放が差し迫っているとして彼は再び緊張する。収容所内にラジオがあった模様で、バロス第３収容所では既に1945年5月7日に欧州での戦争終結が知らされていた。また彼は、妻や子供たちは全員無事であり、バタビアのアデック収容所にいることを知る。

日記の中でマイエルは、まず第一に妻や子供たちの宿命を配慮する。家族とともに分かち合えない現実に、収容所生活を無駄な時間とする一方、次の様な肯定的な見方もしている。

「ともかくもここで様々な事柄について考えることを学んだ。我々は以前、人生をあまりにも軽率に割り当てていた。そのためのチャンスすらなかった」

マイエルが不安とする他のことに、- 当然この不安と家族との拘わりを結び合わせ心配しているが - インドネシア民族主義がある。日記の初めに彼は次のように述べている。

「今後の転換期には、残りの住民にいる不快な人物に支えられた方がましだとも言えるほどに、民族主義者が欧州人に対し攻撃を加えるだろうという恐怖を我々は抱いている。無防備な妻や子供たちに何が起こるかを思うだけでもぞっとする。この思いこそ我々収容所の男たちが持つ一番つらいものなのだ。それだけに、我々がこの点を恐れる必要なしとさえ納得できるのならば、全てを受入れることになろう。今回より良い方向におさまり、国民の良好な性格が保持され、気違いじみ過ぎたことに費する時間を減らすためにもこの転換期が短いよう願うのみだ」

1945年5月、この時点でマイエルは安堵する。その理由は、収容所の外の最悪な状況により、原住民が完全に欧州人を支持するようになったことで、彼はこれを次の文で結んでいる。

「いや、我々が以前とても恐れていたその点について、幸いにももう何も心配することはない」

戦後、蘭領東インドの再建に関して、マイエルは次の点を顕著とみる。

「この戦争後も20年経って再び、我々がこの種の大惨事に遭遇することを避けるために、この地域にこそ膨大な変化がもたらされなければならないことを自覚しないで、自分たちの過去の生活の中に生き続けている人がまだたくさんいる」

しかし、彼はオランダによる支配回復の必要性を断言し、1945年10月1日、以下の文で彼は日記を終了する。

「ジャワを完全に占有し、我々欧州人が再び安全に過ごせ、支配することができるまであとどの位かかるのだろうか？」

スホルテ

二等警視ヤック・スホルテは1912年4月3日に生まれ、1941年12月にメースター・コルネリス(ジャチ・ネガラ)からバンドンへ引っ越したばかりだった。彼は妻ミープ・ブラーケンシーク、別名ミアと１歳半の長女ルキーとともにリオウストラートに住んでいた。1942年8月20日、Ｌ.Ｏ.Ｇ.収容所に抑留される。この収容所からチマヒ４号収容所までマイエルと同じ経路をたどる。スホルテは同所に1945年7月25日まで抑留された後、鉄道敷設のためチチャレンカ収容所へ移される。日本降伏後、スホルテは再びチマヒ４号収容所へ戻される。

スホルテは1942年12月30日にこれまでの日本軍強制収容所での彼の体験報告を記すことを開始する。この日からスホルテは毎日体験を紙上に収める。彼の目標は記録を作成することである。

「ヤップのもとＬ.Ｏ.Ｇ.での我々の抑留期間の純粋な姿を公表することが可能となり、万一、私がこれを成就できない場合は、他の者による継続または出版を望みつつ」

1944年3月、彼は同様な意見を述べている。

「この日記の中で、私の心の中そしてのどの奥にある全ての粗野で非常に意地の悪い表現をできるだけ削除することを読者の皆様にご了解頂きたい。多分、信じ難いことでしょうが、これは危険になりますし、ともかく現状下では生命さえも危ういほどです。私は局面が早急に好転し、この日記がその簡潔さと真実性により世界の人々の関心にお応えし、かつ、生かされていくことを願いま

す」

日記を綴ることが実際に危険を伴っていたことは、マイエルがしばらく記述をやめることに決心した事実からも明白となる。スホルテは1945年7月まで書き続ける。1945年8月23日、彼は「チチャレンカ地獄」に関する報告を日記に添付し、これで彼の体験が終了する。また、1945年9月12日にスホルテが書いた中部ジャワのムンチラン収容所に生存している彼の妻と娘宛の一通の手紙も日記に付けられている。スホルテ自身はこの時まだチマヒ４号収容所にいる。

彼が抑留されていた最初の２ヶ月間は、まだ妻が夫を収容所へ時たま訪問することが許されていた。スホルテもそういう訳で当時、彼の妻と面会した。しかし、1942年9月下旬、この様な面会は禁止された。家族を思うスホルテの不安は増大し、やがて、不正に入手したメモを通じ、妻と娘がスホルテの両親の住むスラバヤへ向けて「脱出」したことを知る。彼は家族が今「安全」であることを神に感謝したのである。スホルテは確かに信心深かったが、抑留の後期には聖職者が十分な食糧、衣料、その他の物品を得るためにその地位を利用していることにひどく失望する。彼はまた、一般的な「オランダ人」にも失望することになる。抑留された初めの頃はまだ、彼は次の様に述べていた。

> 「ここ最初の４ヶ月は、約1500名の男子のいる収容所での忍耐の実例となる。それは我々トトック（純血）が仲間だということが要因と私は思う。印人との混合は、せいぜい陰険な嫌がらせやひどい混乱を生じさせるだけだろう。やはり、我々オランダ人はお互い仲間なのだ」

オランダ人に対するこの見解は、間もなくあまり好意的でなくなり、否定的にさえなっている。特に、彼は純粋なオランダ人が犬を食べたり、皿をなめたりする「粗野な」行為にショックを受ける。しかし、スホルテはまず初めに鋭く批判したことでも、後で彼自身の立場においては言い繕うことが何度もある。同じ調子でスホルテはまず、チマヒ４号収容所でヤップのために働くことを「いまいましい」としながらも、彼が1944年12月に収容所の技術部の仕事を始めた時には次の様に述べている。

> 「収容所内技術部の仕事に従事してからというもの、既にいろいろな作業をこなし、この仕事が気に入っている。ともかく、私には自分のからだを維持するための収入があるからだ。たとえば、パン4分の1切れの特配、そして持ち帰りを許されたくず材は、これを少し細工すれば何セントかで売れるし、その上、日給に15セントだ！ 多くはないけど、あるだけでも得だし、仕事は気分転換となり、これは退屈で生気のない環境にあっては必要なことでもある。現在、防

火技術班の「ハンチョー」班長（リーダー）である。これでお金になれば結構だが。これもしかし、私が心地好く思えないヤップの強制でやっているが、最終的には同胞のためだから、取り敢えずそういう気持ちでやっている」

解放後の生活に関するスホルテの見解では、特に個人生活が対象とされている。そのため、彼は解放後、出世できるように収容所で教習に参加し、異なる経験を積むよう計らう。また彼は、今後の生活、ルキーには弟を、そして過酷な体験をした後の彼とミープとのより良き理解を考える。処罰が非常に強硬であっても、日本人のやり方に真価を認めるスホルテは司法関係の仕事を通じ、ある程度の成果を生むことができよう。彼は、オランダ人の「インテリはクマの皮を撃つ前に売る様なことを貫き通し、そして次の（？）いかなる仕事もおおげさなジェスチャーで引き受け、売ってしまうのである」と全く軽蔑する。

リラックスするためにスホルトは工作をし、娘のために人形を作ることもある。絵も描くが、読書や講義への参加はしない。スポーツも次の文で明らかだが、彼はしない。

「だが、私だって結構楽しんでいる。何も気にせず、一日中、横になるにせよ、座るにせよ尻を落ち着けている。いや、私の頭を悩ますことはないが、仕方がないけど、再び自由の身になった時、妻と子供のために、そして母国と仕事のためにからだを鍛えておかなければならないのでは」

ボスマン

ヘーラルド・ディルク・ボスマンは1898年10月5日に生まれ、蘭印軍降伏の時にはボイテンゾルフの「青少年農業」財団に関係する教師であった。未婚。1942年7月9日、彼はスンダ人の警官に逮捕され、ボイテンゾルフのウルスラ会の修道院に収容される。1942年10月9日、彼はウルスラ会の修道院からボイテンゾルフを少し離れた所にある中国人の古い屋敷を利用したクドンバダック収容所へ移される。当初、約700名の抑留者数はおよそ1200名にまで増加する。1944年2月には更にチマヒ４号収容所へと移送される。1944年10月16日、ボスマンは、恐らく、教育者としての職業柄「指導的人物」に属す理由でバロス第３収容所へ移される。1945年4月7日、バンドンのチクダパトウ収容所へ向けて最後の移送があり、ここにボスマンは降伏まで収容される。

ボスマンは1943年3月6日に日記を書き始める。日記の冒頭で彼は1941年12月8日にさかのぼり報告を記す。1945年7月5日から、日記には再び報告形式が1945年8月25日まで使われている。その理由に、ボスマンが重い病気を患ったことが推定されるが、8月25日以降、1945年11月5日までほとんど毎日記録している。

日記の中で最も重点的に扱われているテーマは宗教である。ボスマンは信仰心に篤

い性格であることは明白である。毎日聖書を読み、自己の修業に努める。加え、牧師との活発な交流を持つ。彼はプロテスタントであるが、ローマカトリック信者たちを高く評価している。クドンバダック収容所では、他の４人の仲間とともに聖書の内容を分析、解説する聖書研究会を結成する。また、毎晩集まり、最新の戦況に関して語り合う4、5人の友好クラブについても記している。恐らく、聖書研究会と友好クラブとは全体的あるいは一部重複すると思われる。聖書のほか、ボスマンは日本兵に取り上げられられない限り、その他の書物も読んだ。加え、講義にしばしば参加し、何度か自分でも行うこともあった。彼は収容所内に友人や知人を多く持つ。中でも、チマヒ４号収容所で初めてその名が出るベンネマとは気が合った。ボスマンは自分が独身であることをかなりの長所と見ている。つまり、収容所内の多くの抑留者と違って彼は妻や子供に対する心配を持つ必要がないからである。

バロス収容所でボスマンは取引を始める。彼は収容所から衣類を集め、これらを自身あるいは仲買人を通して売り、その売り上げから手数料を得る。1945年4月、バロス第３収容所のディーラーたち、つまりボスマンも同じくチクダパトウ収容所へ移される。ベンネマも彼に同行する。チクダパトウでボスマンは1945年7月に飢餓浮腫と診断され、病棟へ移される。ボスマンにとり抑留中に病棟に運ばれたのはこれが初めてでない。クドンバダック収容所で彼は赤痢を患い１ケ月半病棟にいた。ボスマンはバロス収容所では最初、アメーバ赤痢、その後細菌性赤痢に感染する。チクダパトウで彼の容態はますます悪化していく。手足全体が腫れ上がってしまう。彼の容態が危なくなると、オランダ人の医師は、いわゆるバターミルク療法で彼を治療する。大量のバターミルクを飲むことで体内の過剰な水分を除去する腎臓機能を促進させる効果が生まれる。この療法が効き、ボスマンは日本降伏の時にはかなり回復する。そしてバンドンのボロムース病院へ移され次第に回復していく。

ヒール

1901年4月26日アムステルダム生まれのヨハン・ウイルヘルム・ヒールは、1942年3月、スカブミにあるフェーン・東インド社及びフェーン・ジャワ社の代理店を営業。彼は同地に住み、エリザベス・ヘット・ハートと婚姻関係にあり三人の息子と娘がひとりいる。彼は1942年8月13日に抑留され、スカブミの警察学校を経てボイテンゾルフにあるウルスラ会の修道院に移される。同地からチマヒ４号収容所まで、お互いに接触はなかったが、ボスマンと同じ経路をたどる。スホルテと同じくヒールも1945年7月25日にチマヒ４号からチチャレンカへ移され、降伏後再びチマヒに戻される。

日記は1942年9月15日に次の様に始まっている。

「すでに32日間も親切なヤップたちにより閉じ込められていますが、失礼！ つ

まり、私が害を受けないようどこかに収容され、監視され、保護されているということなのです。そして今、この保護期を通じて日記を綴ろうというアイデアが浮かびました。なぜなら、これから先どれ位の期間保護されるかわからないからです」

日記の初めの部分では彼は特定の「ザ」読者を対象として、ともかくこれが誰とあろうと、「あなた様」と敬称で語るが、その後、この表現はなくなる。日記は、彼がバンジュービルの収容所から引き取られ、彼の妻と子供（たち）とともにバタビアのある避難所に収まる1946年1月1日で終了している。

スホルテ、ハウゼル、マイエルとは反対に、ヒールの場合、彼の妻や子供たちとの別離は日記の中で繰り返し語られるテーマとされてない。彼がまだ妻と子供の面会を受けることが許されていた抑留初めの時期には、妻のことや家族と再び一緒に生活する希望を述べているが、その後はこのことを語らない。彼が述べる唯一のことは、1944年9月に得た妻からの手紙についてである。「1943年4月付の妻からの手紙を受けたけど、遅れても届かないよりましだろう」。ヒールはこの文中また日記の他の文面でも自己の感情をあまり表現してない。彼が感情について書く時は、彼自身におけることは語らず、抑留者全般を対象にしている。この点に関して恐らく証明となることは、日記から明らかにされる様に収容所でヒールは詩も書き、朗読も行った事実にあろう。残念なことにこれらの詩は日記内に全く収められていない。多分、ヒールは彼の感情をこれら詩に託し、日記には用件のみを記述したのであろう。ヒールが家族を想う自己の感情の表現にかなり欠ける理由のひとつは、抑留された最初の時期の日記の断片に見られるかもしれない。

「きょうは娘の誕生日だということは忘れてない。成り行きにまかせるべきかな？ そうだ、そうすれば心が和らぐ。だから、まあ何か気晴らしをしよう」

書くこと以外にヒールは、気晴らしをスポーツと見る。彼は体操をし、クドンバダックではマッサージの講座に参加する。彼は大勢の人々、特に若者が何もしないで怠惰であることを率直に悲しむ。

「たくさんの人々、特に若者が、善行を例外として何か始めることに怠惰であることは奇妙で悲しむべく現象である。それで、彼らが再び働く必要のある将来に備えて体力を貯えるため出来るだけ運動を避けている者さえいる。彼らは臭い牛舎に横たわり、眠ることをスポーツとする」

この点ヒールは要するに、運動を出来るだけ避けて体力を貯えるスホルテとは全く反対である。

しかし、1944年前半には、ヒールも情熱の欠如でなく、十分な、質の良い食糧に不足している理由でスポーツを止める。

自分の時間を有意義に活用するため、ヒールは蘭印の将来に関する問題を提起する講義に参加する。ヒールはスホルテと同様に、収容所内の上級官吏に対し疑念を抱き、また、日本軍支配を通して戦前の内務省にある厳格な階級制度に改善がもたらされることを望む。その上彼は、戦後にオランダの権力が回復するとしながらも、解放が長引けば長引くほど、このことに問題が生じるであろうと解釈している。クドンバダックで彼は既に、自作の飲料や食品を売り始め、チマヒ４号収容所でも続けて行う。この方法で、食糧の補充を買うためのいくらかの儲けを得る。彼はスープの他、コーヒーの抽出液も作った。

1945年3月に日記の中で次の様に簡単に記す。

> 「私の里子ルートの誕生日、そこでガド２（ガド・ガド、インドネシアの野菜料理）その後、シロップ付きカチャン・イジョー（小粒グリーンピース）を私たちの間だけでごちそうとする」

これ以上、詳細は何も述べていない。婦女子収容所からチマヒ４号収容所へ移された多くの少年のうちのひとりの面倒を見、その少年に情けをかけていることは明らかである。ヒールが彼の里子に関して最後に述べていることは、1945年7月に彼と同じくこの少年もチチャレンカへ移されたことである。

結論として、ここで扱うこれら日記ではある特定のテーマが中心にあると言える。つまり、既婚の作者においては家族が重要な役割を果たしている。が、ヒールの場合は例外で、彼の家族に対する感情が日記内でほとんど表わされていない。加えて、抑留されたすぐ後で既に、頻繁に流れる早急な時期を予想される解放の噂に関しては、しばしば日記にあげられている。しかし、このことで例外に属する日記はボスマンの日記である。彼は収容所に出回る情報に関して2・3回記している。

日記の中で頻繁に繰り返し扱われるテーマは、収容所内の抑留者間、またトトック（純血オランダ人）と印欧人との問題である。ここで主要な役を演じるのは、収容所にいるＮＳＢ党員とＰＡＧＩグループのメンバーである。また、食糧事情が更に悪化すると、生存競争に駆られ不正がはびこることも一要素となっている。ハウゼルとスホルトは不正に反感を抱いていることを明確に示すが、結局、空腹のあまり小規模ではあるが、自らもこれを行う。ここでもボスマンの日記は例外となる。彼はむしろ抑留者の良い面に焦点を当てている。収容所で友人や知人との出会いが彼の日記では主要な位置を占めている。彼の書き方も恐らく、信仰に対する彼の執着心が影響しているのかもしれない。

最後に、例外なくどの作者も詳しく扱うテーマは食糧である。このテーマは文字通り生命維持にきわめて重要なことであった。作者たちは近くで多くの抑留者が栄養不良症のた

め死んで行くのを目撃した[2]。ボスマン自身は実際に、死の瀬戸際に立ったことがある。日記の作者たちはいずれも各自の方法で懸命に生き残ろうとした。

上述の日記以外に文通による手紙を出典とした。以下に手紙を書いた人物の簡単な説明と内容の一部を記す。

バウス

1890年6月4日生まれのヘルマヌス・バウスは、日本との戦争が勃発するまでは、建築家・建設請負業者としてバンドンに居住。1927年7月11日に生まれた息子ヤンは同地のHogere Burger School（上級市民教育高等学校、略称ＨＢＳ）の生徒であった。1942年7月に父親バウスはＬ.Ｏ.Ｇ.収容所に抑留される。ヤンはその数ヶ月後、彼の母親と妹とともにバンドンのチハピット婦女子収容所に収容される。1943年12月、ヤンは母親と妹から離され、バロス第３収容所へ移される。彼の父親は、1944年2月にチマヒ４号収容所へ移される。1944年3月、父と息子は、双方の収容所から物資を取りに行かされる山岳砲兵隊兵舎にある大きな倉庫で糧秣を収集する際再会する。手紙を密かに交わすことで父親と息子は接触を維持する。また、彼らは糧秣の収集作業中に会うことが時折ある。1944年10月16日、フリーメーソン団員の父親バウスは、日本軍から「指導的人物」と刻印を押され、チマヒ４号収容所からバロス第３収容所へ移される。同時期、バロス第３収容所にいる少年たちは、自分の父親が他の収容所からバロス第３収容所へ入る場合を除いて、バロス第２少年収容所へ移される。こうしてバウス父子はバロス第３収容所で再会する。1945年7月に、ヤンがチチャレンカへ移されることになったため彼らは一時期離れ離れとなる。そして日本降伏後、バロス第３収容所で再会する。

父親と息子が相互に書き送った手紙の中ではいくつかの事柄がテーマとなっている。第一に日常体験した出来事やニュースが語られている。その意味でこれら手紙は一種の日記を形成していると言える。加えて、異種の情報交換がなされる。例えばヤンは1943年12月に母親と妹と別れた時点でのふたりの様子を書いている。また、抑留者の友人や親族に関する情報も、次の1944年4月21日に父親宛にヤンが出した手紙にあるように文通により伝えられた。

> 「紙半分送ってもらてとてもうれしいです。これで僕もましな手紙を書くことができるでしょう。だって紙には本当に困っているからです。パチョル（刻み）作業に適しているか僕たち検診され、それで僕は合格したのです。僕はず

[2]チマヒ 4 号収容所における公式死亡者総数は、抑留者約 1 万人のうち 7 44 名。この数字には軍病院で死亡したチマヒ 4 号収容所の抑留者は含まれていない。同じく、チマヒ 4 号収容所から他に移された 1260

いぶんやせました。チハピット収容所では61ｋｇ以上あったのが、今朝は52ｋｇでした。パウル・ファン・レントは数日前、赤痢病棟へ移されましたが、これでバロスに来て二度目です。僕たち今、トコ（食品店）を通じてフン・クウェー粉のようにいろいろな品を注文することができます。僕も注文します。初め、僕はお金をちょっとけちっていたけど、アルノルド（ディックスタール）おじさんにそんな必要ないだろうと言われたのです。幸いにもこの収容所にまだ本があります。お昼にオーベルマン牧師がいつも僕たちに読んでくださいます。前には、「オランダの栄光」今はセルマ・ラーゲルレーフ作の「ゲスタ・ベルリング」です。僕も青少年図書館のメンバーです。週に一度、さまざまなテーマの講義が開かれます。チハピット収容所について少しお話します。居間に人々は暮らしてました。そして食堂でも。前から後ろへ移動する時、どうしても食堂を通らなければならないので、僕たちは戸棚の後ろに細い通路を作りました。とても変な様子だけど、部屋へはいくらか自由に出入りできるようになりました。食事は十分にありました。米とサゴ（サゴヤシの芯を調理した食品）は現物支給で、お米はママがまだ予備として貯えていました。僕はここでグループの25人と三人の組長と一緒の部屋に寝ます。僕たちの棟のために医者がいて、僕は幸いお世話にならないけど、いつもけがの処置をしてます。きのう、僕たちまたグラ・ジャワ（やし砂糖）を入手しましたが、これはこれまで何回か入りました」

文通はまた、特別に必要な物資をお互いに知らせ合う手段ともなる。その結果、手紙と一緒に衣類やその他の必需品の入った小包が送られた。父親バウスの手紙では彼の抱く心配が前面に表れている。彼は何度もヤンに対し、学校で勉学に励むことと良く食べる必要性を書いている。また、彼はヤンに直ぐにも、将来について真剣に考えるべきことを促す。彼自身は「我々の元の社会は今度多くを学び取ったであろうから、戦争のない新しい世界が築かれよう。そうすれば我々はきっと良き将来を迎えることになろう」と願うのである。

収容所報告書

日記の断片の前にいくつかの項目においては収容所報告書を収めた。この報告書は、1945年12月に英軍当局の要請により編纂されたものである。蘭領東インドは1945年8月15日の日本降伏以後、マウントバッテン総督の指揮下にあった。この収容所報告書は、経済局の元外務長であったディックＦ.ブロックハイス氏により作成された。彼はチマヒ４号収容所で欧州人収容所

名の患者と高齢者の死亡数は含まれていない。

監督庶務長としてその役割を果たした。報告書の冒頭でブロックハイスは次の様に記す。

「以下の報告のデータは、原本が保存されている書類や日誌に基づいている。これらの内容の大部分は、チマヒにある４号収容所から５号収容所（バロス第３収容所）へ記録者が移される1945年5月4日までのものである」

この報告書の編纂にあたり、ブロックハイスはチマヒ４号収容所の元欧州人収容所長Ｃ.Ｈ.Ｖ.デ・ヴィルネフ公、チマヒ・バンドン地区ＲＡＰＷＩ委員会（連合軍戦争捕虜・抑留者復帰委員会）のメンバーであるグレイ少佐とクライトン少佐の協力を得た。この報告書は、チマヒ４号収容所が当時、保護・避難所の名目で使用された1945年12月に所長であったＦ.デ・フリース氏により、同じく確認の署名がされた。1946年1月下旬、バンドンのM.クラーセン副知事からの要請により、同報告書のコピーがジャカルタにある蘭軍情報局長Ｓ.Ｈ.スポール大佐宛に送付された。

この報告書は、「総評」「戦犯」「共犯者とスパイ」の３章からなっている。第１章は収容所での状況の一切合切が示されている。他のふたつの章では抑留期間内に日本人収容所職員および抑留者が犯した行為が記述されている。恐らく、これらの章の内容はかかる人物に必要な裁定に寄与したに違いない。尚、この稿本では主に第１章からの断片を使用した。

移送と収容

収容所報告書

炊事設備及び病人を移転する近接の中央軍病院を含む、第４及び第９歩兵大隊元駐屯場全施設は最高収容人員2500名を対象としていた。この駐屯場に日本占領軍は約１万名の人々を詰め込んだ。居住に利用可能な限られた空間には、更に病院設備一式として診療所、実験室、医療事務室、薬局、医師・看護婦室、加え、十二分な空間が必要となる特に、細菌性赤痢の流行期に対処して病棟を配置しなければならなかった。住空間は更に、収容所事務室、ふたつの教会、図書館、技術部と収容所のその他若干の事業部、トコ（売店）、ワロン（屋台）、野外炊事場（本来からの炊事場は１万名の食事を調理するには狭すぎた）に当てがわざるを得なかった。

事実上、駐屯場の兵舎は衛生条件とコンクリートの床上に起居する基本条件を十分に満たしていた。抑留者数が多量であったため、その内の1000人に到る男子の収容には、既存のビリック（竹で編んだマット）の側壁で仕切ったバラックやその後、日本人監督により徐々に支給されたゲデック（竹のマット）を配したバラックが使用された。非常に冷え込むプランゲル高原の夜や大雨の時にはバラックの中では度々、困難な状況が発生した。各所の班（兵舎）での一人当たりの寝床の広さは、幅60ｃｍ～70ｃｍ、縦約2ｍを上回ることはなかった。僅かな所持品はこの寝床の上あるいはその横の通路に置かねばならず、そのため、食べ物、洗濯物、衣類等は板やひもを利用して簡単に収納された。ベッドやマットレスは与えられなかった。 大隊駐屯場に残っていた寝床用の板を手に入れた者は幸運であった。

1944年9月、日本人監督は高さ20ｃｍの台の上に質の非常に劣った木材を使った木の寝台を製作することを命じた。当初の幅71ｃｍは収容所リーダーの主張により85ｃｍに拡大された。多くの板は簡単に破損したり（または燃料とされた）、ナンキンムシの繁殖する巣（時には、異常発生した）と化したにもかかわらず、この寝台により清潔さが増したであろうことは疑う余地ない。抑留者の多くはマットレスやティカール（ござ）を持参した。婦女子収容所に置き去られた何百ものマットレスは順次支給されていった。ティカールは時折、自費で購入できた。家具はほとんどなかった。僅かにある長椅子あるいは破損した椅子は一般に共同家具となった。

当初から既に電球不足のため不適格であった電気照明は、日本兵により除去されたり、２年以上も使用されてきた15ワットあるいは25ワットの電球が交換されなかったことにより、次第に、兵舎内各所は闇に包まれるほどの状態に悪化した。また、便所の照明も後期にはほとんどなかったために、種々の傷害・事故発生の原因となった。

浴場と便所は簡素だが、衛生的ではあった。しかし、多大な抑留者による利用に対しては全く配慮されていなかった。水は湧き水の貯水池からパイプを通して収容所内へ送られ

ていたが、その水量は１万人の利用には全く不十分であった。にもかかわらず、日本軍部隊が使用する水泳プール等のために度々、水が流出される状況にあった。収容所内、特に北側と西側の若干高所に位置する班や同所にある病院も一日中、水量が僅か若しくは皆無となり、細菌性赤痢が爆発的に発生した際には非常に不都合となったことは明白である。技術的修復は資材がなかったり、入手が不能であったために困難な状況下、非常に単純な方法で実施せざるを得なかった。

日記の断片より

ハウゼル、これ以前はタンゲランのタナ・チンギ収容所に抑留
1944 年 2 月 6 日

出発前、点呼の予行演習。吾、予行に荷造りしたり。この小さな日記帳をこんどはクラムブー（蚊帳）に包もうかな、多分、また検査に通る。午後には日曜日のコーヒーを授かった。明日はプラナカン（混血）班が発つので大混雑。彼らは6時に起床、7時に大きな荷物を引渡さなければならない。最初のグループは午後2時半、歩いて駅へ向かい、そこから5時37分の列車で出発予定。本当かな？ 9ヶ月目の終わり。

ハウゼル
1944 年 2 月 8 日

落着かない一夜だった、全般に。朝、出発前、用地内を片づけるのに忙しい。ここは将来、婦女子収容所となるらしい。豪勢に食事。4 時半、駅まで行進、5 時 10 分前にはもうそこに到着。5 時 37 分、タンゲラン発。5 ヶ月滞在したバタビアでは、婦女子収容所の横を目隠しされた列車で通過。こっそり覗き見ることは許されているが、手を振ってはだめ。非常に感動して涙が浮かんだ。女性たちは元気そうだった。ボイテンゾルフ経由でスカブミを通過。窮屈。一両に 61 名。だが我々、もう結構慣れたもんだ。

ヒール、これ以前はボイテンゾルフのクドンバダック収容所に抑留
1944 年 2 月 8 日

荷造りに大忙し。みんなそわそわと行ったり来たり。若干の缶詰と残りのコーヒーを売った。靴を履き慣らした。中央炊事場は自家製の非常携帯食をトコ（売店）で売りだした。熱湯はも

う切れた。

朝10時に多くの者が集合させられた。収容所長たちは長く待たされた。男たちはお茶を飲んで腕時計を買ってる最中だったから。やっと、我々に知らされたこと：午後5時、737番までの初班が出発。8時半、バラン（荷物）の準備を済ませなければならない。各自は集合の際に通し番号を受けること。白い番号。第２班は黄色である。手荷物は自分で持つこと。行き先は発表なし。

ボスマン、これ以前はボイテンゾルフのクドンバダック収容所に抑留
1944年2月9日・10日

我々は荷造りに数日もらってた。朝7時に、荷造りを開始させられた。マットレス、ござ、トランクは9時にトラックで貨車まで運ばれることになっていた。ふたりの日本兵「オペレッテ」と、「オーパ」の代理のオハラが監視してた。数人の原住民クーリーはトラックに全部を積み込む手伝いを許された。

オペレッテはまたもや、うるさくて厄介だ。意見の不一致が発生。品の良い立派なヤップ、オハラが事を後で無事取りまとめた。自分で買ったバケツなのに、最初、持って行ってはいけないと言われた。でも結局了解されたのだ。その後の日中は我々が自分で持っていかれる物を詰めるのに当てられた。

午後、病人には更にカチャンスープ（ピーナツスープ）が与えられた。道中用に我々はパンの特配を受けた。トコの中国人が意外にも我々全員に袋入りの黒砂糖をくれた。また、カップも持っていく必要があった。なぜなら、途中で飲物が出るらしいからだ。我々は最後に少々、食べることができたのだ。

6時半には我々は出発の用意が完了してなくてはならなかった。これはふたつのグループになって出るそうだ。我々は第１グループに属してた。ボイテンゾルフのクドンバダック収容所で過ごした19ヶ月の間に約18人が死亡したことをも知らされた。6時半に大集団の移動がまさに始まろうとしている。ヤップひとりと現地警察に護衛され、長い列を作り正門を抜け、鉄条網を後にする。そして、ずっとそのままデッサ（村々）を通りケボン・ペジス駅（停車場）まで歩く。ここは大勢の警官が配置されているため、逃亡などは到底不可能である。若干のヤッペンと彼らに任命された知事が注意深く監視している。我々は線路の横でしばらく待たなければならなくて、バラン（荷物）のそばの地面に腰をおろした。やっと、列車が来た。残念ながら、車両は目隠しの覆いがされてる。乗車を許された、が、4等車へだ。そんな昔のムーラ（最低クラス）の最高に見苦しくて格安の車両にだ。オー！ 我々はただの白人なのだ。

列車が9時頃、闇の中を動き出すと、ぎゅう詰めにされ座る。灯かりをつけることは許されてなく、入口付近に一本のろうそくと石油ランプの炎が揺らめいていた。そこに数人の

原住民警官が我々を見張っている。ボイテンゾルフ駅を通過した後、あえて我々は日よけ戸を放ち、窓を開けた。静かな夕げに今、田園風景を見る。サワー（水田）、クラッパー（ココヤシ）、ピサン（バナナ）の木などを。この蒸気機関車はどうも薪がくべられている様子で、そのためかゆっくり走るし、煙が多い。変だが、行き先不明地へだ。いろいろお互い推測し合うが、結局、はっきりしない。列車が突然止まり、すばやく我々は日よけ戸をまた閉めると、そこはスカブミ駅である。ここでお茶が配られ、我々ののどを潤してくれた。また、多くがパンに黒砂糖を付けて食べ、みんなあの善良な中国人にありがたみを感じるのだ。

早朝4時にチマヒに到着する。まだ夜で暗い。列車が駅に停車し、チマヒとの地名を目にする。ヤップが列車から飛び降り、「セムア・トゥルン」（全員、降りろ）と叫ぶ。それで我々も今、目的地がわかったのだ。ここは正しく我が軍の駐屯地だった、その兵舎もある所なのだ。自分のトランクと荷物を持って、ヤップと警察の監視下、列をなしてこの駅から駐屯場へ向かう。日本の命令に従い、夜中に行進する我々の心中は何と奇妙な！

兵舎へ着くと、我々一人一人に収容場所が指定された。もう、すっかりそれら狭い部屋が不快に思える。特に、喜ばしい雰囲気でない。各自がだんだんと自分の居場所に辿り着くと、バランを各自が整頓する。そして5時には何と、お茶が出たのだ。別棟で6人づつ前に並び、お茶をカップかマグでもらうことができるのだ。

我々738名は、三つの班に分割された。我々が来る前ここには、今は他に移送されてしまった同胞の戦争捕虜がいた。今でも何人か残っていて、その者たちがお茶を手配してくれた。日が昇り、朝になると、パンを取りに行く。各自小さなパンの３分の１切れがもらえる！更に、午後１時には樽に入った粥をもらいに行く。「糊」と我々はそれを名付けた。いわゆる、アジア粉なるものが混じっていた。何とか腹を満たしてはくれるしろものだ。午前11時、貨車で輸送された我々の荷物が届いたので、各自、自分のマットレスや他の物を取りに行き、場所に収める。午後6時、夕食の時間である。非常に簡素だ。こんな具合に初日が暮れていく。そして、夕方になり夜となる。

ハウゼル

1944年2月9日

眠れず、疲かれて寒い。5時15分前、チマヒ着。駐屯場へ直行。8時まで我々はお茶を待たされた。金曜日にここに新着した仲間にマランから（クライ、スルューファールト、ファン・デン・ベルフ）ケデリからはウィールセン。スカミスキンとヌガウイからの者。そしてマランからの連中からベーアが既に姉と一緒に最初の便でソロへ行ったらしいことが分かったが。ひどい話だ。とても気になる。食事は悪く少ないし、くたくたで気落ちする。

ヒール

1944年2月10日

我々は収容所から約500メートル離れたケボン・ペジス駅まで歩かされた。一両45名のはずが61名にされた。収容所から駅までの各所に銃を構えた警官が配置されていたが、これは後で車内である餓鬼が何回も撃鉄を起こしていたことから、銃は空砲であったとわかったのだ。

まったく、車内はうだるような暑さ、窓は開けてはだめ。でも、警官のいる場所によっては開いてた。 9時になって初めてボゴールを出発し、4時にバンドンでなく、チマヒに到着。全員元気なく、くたくただった。

早速に、目的地に連れて行かれ、兵舎の中の以前は２人用だった小部屋へ入れられた。でも、何とか眠むれた。仮に分けられたが、最終的な配分は次のグループが来るまで待つ。

ヒール

1944年2月11日

２番目のグループが着き、一部がそのまま収容され、残りは午後になってから。最初のグループの大半が再び他のバラックへ移された。まれに見る大混乱だ。食事にまたパンと粥。　大部屋をある程度掃除したが、我々、再び移される可能性あり。今日、更に 1200 名がヌガウイから来る予定だ。ボゴールからのＮＳＢ党員は彼らの同士より大歓待された。みんな、移動され続け、何ともごちゃごちゃだ。兄も他のバラックにいる。1200名がヌガウイから着いたし、ペカロンガンからのグループも。まるで蜂の巣だ。

ボスマン

1944年2月12日

翌日、他のみんなと同じ様に引越しをさせられる。我々は荷物を手押し車に積み入れ、炊事場近くの棟に移動する。ここは幾つか空き部屋があり、その一つの部屋の床の上にマットレスを置き、他のバラン（荷物）をその横に置いた。まずは、ここに暮らすことになる訳だ。ここが我らの「ホーム」なのだ。さっそく各自は友人や知り合いの近くの場所を選んだ。これが一番だ。

ヒール

1944年2月15日

空軍や大将の記章を付けた、あの気取った連中は、ＮＢＳ党員全員と一緒に個別のバラックへ入れられた。ソロから260名が到着。その中にパー・ファン・デル・スティルもいた。

スホルテ、これ以前はＬ.Ｏ.Ｇ.収容所とバンドンの第１大隊補給廠収容所に抑留。
1944年2月15日

全く、我々は1944年2月14日の夜、荷造りさせられ、その次の日は一日中クーリ―のように働きづめにされたんだ。小さなパンの4分の3切れ（小さくても0.08ギルダー）の配給しか食べずに、炎天下に一日中立っていた。ついに私の番がやって来た。そんな訳で、我々300名は10台のバス輸送によりチマヒ即ち第４歩兵大隊へ向かったのだ。

驚いたことに相当数の欧州女性がまだ外に（収容所の外に自由の身で）いたし、道路や家屋がかなり良く整備されていることが私の注意を引いたが、現地人はこれと言って好転してない模様だし、ヤップ下にあってもさほどの恩恵を受けてない様だ。でも、とてもおかしなことだが、四方を壁に囲まれて一年半も閉じ込められてはいたが、別世界を見ているとは感じずに、むしろほんの一時だけか、全然離れてなかった様な、そしてそのまま日常の生活が続いていた様な気がしたのだ。実に変だ。失った時間を意識することなく、まるであっと言う間に過ぎ去った様なのだ。

チマヒで駐屯場内へ走行中に、我々の好みとする散在する木材、ゴミ、板を見たときには、即座に万歳してしまった。バラン（荷物）はと言えば、待ちに待って、翌晩になって全部が着いたため、最初の夜は石の床の上にじかに寝て、寒さで震えてしまった。ここの食事は更に少なくて、１日１回だけなのだ。だが、何と抑留者の多いことか、（スラバヤ、スカブミ、マゲラン、ボイテンゾルフ、ヌガウイ等々各地から）１万人もいるのだ。合計500人のオランダ人の警察官、それもスラバヤのみ、そして私は、彼らがここに総勢約1万6千人を収容する予定と聞いた。

そんな訳でまた、ヨンカース氏もハーゼロープ氏もここにいる。今朝、ヨープ・モーク（私の親類）とエンチェス（父のことを語った警視長官）を見た。きのうのお昼にはジョクジャカルタから12・3歳とおぼしき少年（子供）を含む700名が到着した。

今朝、あたりを一巡した時に、我々は逃亡の報いに銃殺されたアンボン人とメナド人、7人の原住民兵士（我々の前に収容されていた蘭印軍兵士）の墓を見つけた。一方、同じ場所では、これら逃亡を謀った兵士の妻たち7人が、何もなすすべなく立つ戦争捕虜全員の目前で拷問にかけられて殺されたのである。このことは、事件が発生した場所で、銃弾の跡が残

っているガス室[1] の壁に刻まれている文字から明らかとなった。いまいましいヤップめ、恥じを知れ。 「ここに没するを追悼す」「神の御心とともに」と書いてある。

ハウゼル
1944年2月16日

今夜、中国人約600名が到着し、洗い場を収容場所に指定された。

マイエル、これ以前はＬ.Ｏ.Ｇ.収容所及びバンドンの第１大隊補給廠収容所に抑留
1944 年 2 月 18 日

３日前に突然、我々Ｌ.Ｏ.Ｇ.収容所の元抑留者1500名はチマヒへ移され、驚いたことに、既に6000名がいる収容所に連れて来られたのだ。しかも、今度の収容所にはジャワ島各地から現在合計１万人の男子も収容されているのだ。バンドンとチマヒには合わせて２万人以上の民間男子抑留者がいる。我々が来る前、ここには戦争捕虜が収監されていて、壁に知ってる名前を幾つか見い出した。最初に、ここに到着した抑留者は、残された荷物や食べ物さえも目にしたことからも、今月の初めになされたという捕虜たちの出発は慌ただしかった様子だ。

スホルテ
1944 年 2 月 26 日

居心地はそう悪くもないと言える。又も運が良かった。私は一方をドアで閉める、部屋の端で通路にはカーテン（2つの蚊帳）が吊るされた2部屋続きの小部屋にいる。ここには、古い世代の年配の者だけ8人が収容されている。 そのため、他の部屋より幾分広く、もっとましなのである。Ｌ.Ｏ.Ｇ.、第１大隊補給廠、そしてここチマヒ第４大隊の３ヶ所とも、一応、寝床は確保できてまずまずだ！

[1] 兵士がガスマスクの使用を練習した石造りの建物。

ヒール

1944年2月27日

狭い部屋をできるだけ快適に整える。各所には棚板、収納箱ひとつ、小さな長椅子１脚、何枚かの写真と絵を。

ボスマン

1944年3月21日

食事の後、厩舎に空きがあるか尋ねたら、プロテスタント教会の後ろの小さな建物にある老人棟に出て行った者がいた向い側にある3班へと回された。キュブとラインデルスがいる小部屋の様子を見た。彼らは私がこの部屋に来ることを了承してくれた。組長と班長に書面で承認を得なければならなかったが、ふたりとも異議なしだった。それで、このことを我々の室長に伝えた。

Ａグループの全員は今日、出なければならない。それで大混乱と不平がつのることとなる。我々はここで最後にジャグン（トウモロコシ）、スープ、ロバック（大根の一種）を食べた。 2時に日本軍将校10人がひとりの兵士を伴い炊事場へ来る。全部の窓とよろい戸は閉じておかなければならない。視察が済むとすぐに開けるけど。デ・フリースとフィサーがいる大きい事務室へ行き、カードに私の引越を記入する。そしたらすぐに、４班４５Ｃ組から３班７組に移転する。マットレス、ござ、枕、毛布を丸め、新しい寝床へ持って行った。それから、トランクとカバンも。クギを壁から抜き取った。これは衣服のハンガーだったし、後でまた使う必要があるから。

ボスマン

1944年3月23日

厩舎は一掃される。ここの住人はプロテスタント教会へ行き、厩舎は赤痢患者用となる。

ボスマン

1944年3月25日

狭いひと部屋に3人で暮らしている。面識の深いラーデルとＶ.ワイへもいた。食後、一休みしてから入浴し、着替える。その後、部屋を掃かねばならない。髭を剃る。きょうはスワーボル

ン一家について話をしてくれたプールボリンガのヒルデリング氏に会った。ここの部屋は内側にのみドアがある。つまり兵舎の間の草地のそばにあり、道路側ではない。そのため、ヤップは我々の所へは決して入って来ないのだ。また、ここには井戸があって、水を汲み上げることができるし、石の台がある所で我々は自分の衣服を洗濯することさえできる。

スホルテ

1944年4月7日

昨晩突然、印人の少年、アンボン人、中国人、それに黒人をも含む150名がソロと他の場所から到着した。我々の班（大部屋）には、骨と皮としか言いようもない13歳から17歳までの少年5人が割り当てられた。肋骨が肌からまるっきり突き出してた。少年たちはソロの刑務所に収容され、6ヶ月間も叩かれ、粗暴に虐待され、そして一日に食べ物（ガプレック：乾燥キャッサバの粥）を（文字通り）一握りしかもらえなかったと話した。ある子はここで兄に再会し、大泣きしていた。彼の母親は死亡し、弟も死亡し、もうひとりの弟は虐待されて気が狂ってしまったのだ。

ヒール

1944 年 4 月 11 日

英国人の温水炊事場が廃止され、炊事場職員80人が解雇された。熱湯と粥は全て一ヶ所でまとめて炊かれる。水と粥は一部、この収容所に当初からいる英国人のもとでも炊かれてたのだ。

ボスマン

1944 年 5 月 4 日

それから、入浴する。ここには前の収容所と違ってシャワーはなく、水を入れたタライがある。だから、服を脱いだ後、シラメン（水浴び）の時に使う空缶かそれに似たものを手に入れなければならない。良き時代のようにガユン（手桶）は持ってないのだ。でもオランダ人は結構、精出して切り抜けていると言える。

マイエル

1944年5月29日

この駐屯場に属す将校と下士官の宿舎へ60歳以上の男子を移転することは準備段階にあるが、現在まだ柵の外側にあるということで、今度、この収容所側に引き寄せる予定だそうだ。このようにして、ご老人にはより良い住まいが与えられるのだ。

ボスマン

1944年6月11日

幸いに、この収容所にも水道設備があって、多くの場所に蛇口やパイプが備わっている。我々の狭い兵舎には、井戸がある。雨が降ると、水を溜め、空の時には集めるのに苦労する薪を収納するのに使用する。

ボスマン

1944年8月9日

今朝9時から午後遅くまで、陸海軍兵合わせて約200人が正門付近に集合させられた。ヤップは彼らがここから退散して欲しいのだ。彼らは今、検査されているのだ。翌日、それも午後4時半に再び彼らは集合させられた。この部屋にファン・レーフェルデンとフルスマンとのふたりが新しく加わった。バロス収容所の約200名の陸海軍兵も移される。彼らは検査を受ける。マットレスを持って行くのは禁じられた。最初、食べ物もだめで没収されたが、後で返却された。今日の午後、彼らは我々に別れを告げ、夕刻には列車で不明な目的地へ向かう。今、この部屋は３人だけとなった。8月15日に、ひとり加わる。デ・ヨングで、同じくＢ.Ｐ.M.（バタビア石油会社）にいた人で、私の良き知人であり、とても感じのいい人物だ。

ヒール

1944年8月13日

家族離散生活の二周年記念日。スピット[2] を含む、３人の高官がこの収容所へ来た。彼らは刑

[2] Ｈ.Ｊ.スピットは日本占領前、東インド評議会の副議長。1945年8月、A.W.L.チャルダ・ファン・スタルケンボルフ・スタコウエル総督とＨ.Ｊ.ファン・モーク副総督が不在だったため、その時点に実際、蘭印にいる最高地位にある高官とわかった。

務所に監禁されていたが、あれやこれやとあったあげく釈放された。

ヒール
1944 年 8 月 16 日

戻った高官たちは12班に監禁され、我々との接触は許されなかった。そんなことはしかし、無理だろうに。

ボスマン
1944年8月20日

10時に我々の部屋でコーヒーを作って飲んだ。その後、ファン・ヘルテン牧師のように若い人も何人か住む、我々が「ブロンベーク」[3] と名付けた老人用の棟へ行く。

ボスマン
1944 年 8 月 28 日

我々の兵舎には椅子が少しある。大勢の者がなくて困っており、結局、マットレスの上に座るか横になるしかない。マットレスすら持っていない者は硬い床の上に座っている。そんな人が残念ながら大勢いる。そんな彼らは夜もこの床の上で眠らなければならないのだ。

ヒール
1944年9月8日

全ての警察署長、国民参議会と東インド評議会のメンバー、最高裁判所判事及び知事は明日全員集合させられる。神父はみな、収容所へ引越さねばならない。

ヒール

[3] ブロンベークの名は、戦前に蘭印軍退役軍人が多く住んでいたバンドン北部ブロンベーク地区に由来す

1944年９月９日

召集された者たちは年齢、役職などをきかれた。その男たちは神父の元の住まいに入れられ、収容所内部との接触を禁じられた。

ヒール
1944年9月10日

各組の部屋の仕切りは、寝床を2列に配置したひとつの大部屋とするために引き倒されることになった。シラミがわくであろうに。

ヒール
1944年10月16日

その男性諸君は今日、バロスへ引越した。大きな積み荷が手押し車で運ばれた。手押し車がひっきりなしに往復してた。バロスは樹木が一本もない収容所である。住まいは古いゲデックのバラック（竹で編んだマットの壁が備わるバラック）。少年1000名が少年収容所に到着し、我々の所には600名。ここからバロスへはかっきり1400名が行った。

ここには1500名が新しく加わるので、我々は場所を空けなければならない。古い住人をまとめて、新しい者たちはその者同士が一緒にいられるようにする。ひどいごたごたと不平ぶつぶつ。

ボスマン
1944年10月16日

収容所の100人以上がチマヒの近くにある、陸軍の元駐屯場バロスへ移らねばならない。行政官吏、牧師、宣教師、軍人はそこへ行かされる。多くの警察官も同様に。彼らがいると講義が余りにも多く開かれ、情報の提供がされすぎるという理由で、約１万人がいるこの大収容所から追放されるのだ。私も行かなければならない。しかし、数人の牧師と医師たちはそのまま滞在が許された。10月15日の夕方、Ｂ.スヒュールマン牧師がローマカトリック教会でお別れの礼拝を行う。

る。

我々は忙しく荷造りさせられる。マットレスは持って行ってもよいが、正門まで運ばねばならない。その他に私は持っていく物全部を入れるトランクがひとつある。トランク、収納箱、籠には名前と番号を付けて、収容所事務所付近の一ヶ所に朝早く持っていかねばならない。その後、若い連中が手押し車に積んでバロスへ運ぶ。我々は7時に正門近くの路上に集合させられる。数人のヤップが我々を数え、全てを検査するために歩いて回る。私と同じ様に、多くの者がバックか他に何か所持している。我々の出発ができるまで時間がかかる。やれやれ、やっと、出発。ほぼ8時半。我々はヤップひとりと原住民の警官数人の護衛を伴え新しい収容所へと歩く。10時頃に到着。

ヒール

1944 年 10 月 20 日

バンドンから大勢のユダヤ人とアルメニア人を含む600名が到着。金持ちの人たち。パン５分の１切れの価格が一気に0.55ギルダーにまで上昇したのである。これら新来者で並みはずれのにぎやかさ。

ヒール

1944 年 10 月 23 日

バンドン収容所から来た警察官、フリーメーソン団員、そしてユダヤ人はバロスへ移される。バロスの住環境は確かにもっと悪いが、収容所に野菜畑や大きなウビ栽培場（サツマイモ畑）があるため、食べ物はここより多い。バロスにいる人たちは、ジャハット（犯罪人、悪人）の部類に属し、収容所の外に出ることは禁じられ、全員が小さな赤い三角形を付けねばならない。事実上、これが「指導的人物」、ユダヤ人、そしてフリーメーソン団員だ。

スホルテ

1944 年 10 月 26 日

ヤップが起こした混乱は慌ただしく終了した。配置換えされる者たちはそれぞれの目的地に到達した。その結果、当初、この収容所にほぼ全部の警察が出揃ったのであった。約 800 名。その後、警察署長と主任警部とのほぼ全員、そしてこの収容所の最初の 6 つの班から連れ出された 30 歳以上の警部一部を含むおよそ 240 名が更にバロスへ移された。私は他の者とここに留まるが、実のところうれしく思うのだ。なぜなら、バロスは多数の意見では、特に自由行動と

いう面では期待に反したと言うことだ。知っている人をたくさん見た。何せジャワの警察のほとんど全部がここに集まったのだから。

スホルテ
1944 年 10 月 28 日

突然、 大工に応募した 6 人の男が小さなトランクだけの所持が許され、ヤップの要請で収容所から連行されたが、ともかく目的地不明で２週間は戻らないと言われてたが、彼らはまだ帰ってない。どこへ、そしてなぜ？

スホルテ
1944 年 11 月 10 日

バンドンでさしあたり空にした大隊補給廠に 60 人の将校が配置されたことと、約 1 万人いるこの収容所全体が整理され、他の場所に移される予定との噂が再び流れた。だが、20 歳から 30 歳の間の相当な数の若い男子が看護人として召集され、この収容所から連れ出されたが、どこへか？ 誰も知らない。当時、連れ去られた元Ｌ.Ｏ.Ｇ.抑留者のオースターバーン（収容所内トコの管理人）とフィサーのふたりに関しては、その後依然音沙汰なし。海運事件に関与して寝ているところを逮捕された政府海運の船長であるホッケは、バンチュー（バンドン）にある刑務所から 70 日後に釈放され、ここへ戻されたが、断食させられたり、殴打された以外、大した苦労はしなかった。

ヤップは、１万人の彼らの「コレクション」から外見上、任意に選んだ 20 人に自由を返還するとの派手な「宣伝行為」を行った。その者たちが、バンドンの年金保険局前へ輸送されると、依然、自由の身にある何百という印人に待ち受けられ、その中には知らせを受け、釈放された家族もいた（トラック運転手が後で語ったこと）。つまり、本当に自由となったのだ。一体どうなっているのだろう。ヤップはこれでどうするつもりなのか。米国が好意と賛美を示すことを願い、多分、新聞にオランダ人何百人を釈放の大げさな記事とか。その男たちの解放を心から喜んではいるが、彼らの大部分は既に年老いた者たちであったこともここに付け加えておかねばならない。

スホルテ
1944 年 11 月 21 日

11 月 20 日に時計修理工である 4 人が収容所から連行された。でもどこへ、そしてなぜ？　不明！ 例の 6 人の大工たちに関してあれから何も耳にしてない。

ヒール
1944 年 11 月 25 日

400 名の少年が到着。その 200 名が母親の元から。11 歳の子供が大勢いる。駅で荷物を下ろすのを手伝った。まあ、なんてひどいことだろう。母親も本当に悲しい思いがしたに違いない。子供たちは一応こぎれいにはしているが、いくぶん青白い顔をしている。中には、女性がシラミに相当悩まされたであろう我らがいたあのクドンバダック収容所から来た子がいる。そこには 1100 名の女性と子供が収容されてた。[4]

ハウゼル
1944 年 11 月 26 日

きのう、少年収容所から 13 歳と 14 歳までの少年 400 名が到着。食事は悪かった。それは見ただけでわかる。アウグスト（ヤンセン）は弟とおとなたちに再会。いまいましい黄色野郎ども！

ヒール
1944 年 12 月 2 日

およそ 1000 名の身障者と病人が出発。たくさんの看護人と医師を伴う第 1 班には赤十字社の輸送車を利用、毛布と食糧が支給され、ヤップお偉方は大わらわ。

ヒール
1944 年 12 月 3 日

23 名のインドネシア人、その多くがアンボン系が釈放される。

[4] ボイテンゾルフのクドンバダック収容所から民間人男子抑留者が 1944 年 2 月に移送された後、1944 年 3 月から 10 月の間に 1000 名以上の女性と子供が日本軍によりこのクドンバダック収容所に収容された。これは特にテガル、ペカロンガン、ボイテンゾルフのコタ・パリス収容所から移された女性たちであった。

ハウゼル
1944 年 12 月 4 日

出発する身障者（ランベルト・ファン・デル・スタットを含む）400 名の荷物を午後、貨車に積み込む。彼らは明日、バンドンガンへ発つ予定。

ハウゼル
1944 年 12 月 6 日

けさ 5 時半に 150 人の病人が輸送された。

ヤンセン
1944 年 12 月 13 日

感激にむせる日々を過ごしておりましたため、しばらくご無沙汰致しました。まず、弟のヘルベルトが僕の元に来て既に２週間となり、とても楽しいです。僕たちは今、兵舎の組に 5 人で入ってますが、居場所は十分すぎるほどあります。ヘルベルトはあなたについてたくさん話してくれました。

ヒール
1944 年 12 月 18 日

少年収容所から 60 人の少年が来て、ここには今、60 人の幸せな父親たちがいる。我々の組に 12 人の少年が加わった。ふたつの大きな子供部屋が設置され、私はそのために角部屋を譲らねばならない。

スホルテ
1945 年 1 月 7 日

1945 年 1 月 5 日、突然ヤップが、全ての印人はトトック（純血）から分離し、この収容所の 4 班、5 班、6 班に収容すべくを命じたため、それらの班の一部が明け渡された。短時間で全てを終了させなくてはならないので、当然、大混乱。我々には理解しがたく、ヤップは変なこと

をすると思った。突然、純血と混血を区別するのは何のためだろう。これで我々の間に不和の種を播くとでもするのだろうか。何れにせよ、理由を色々考えても意味なかった。単に命令通りに決行されたからだ。我々の組はそのため大きく変化したが、私は別に不利と思わないし、急に、質のより良い人間と一緒で一段と身ぎれいになった。何がその原因なのかわからないけど、ともかく心地良くさせる。

スホルテ

1945 年 1 月 21 日

1945 年 1 月 21 日に我々の組には、「板の桟敷」が（材木が燃料用に盗まれたり、品切れのため一応、最後に）与えられる。これは個別の板が組の部屋に一直線につながった寝台である。取付け作業中は、多くの者が自分のために最上で一番きれいな物を選り分け、自分勝手になりルームメートが残り物（あまり物）を余儀なくされることも考えないような、浮かれ騒ぎをきまって引き起こす。私は技術部の大工としてここの取付けを手伝ったので、この件に関しては、十分に観察することができた。これまで取付けが既にされた大部屋（これについては既に記したが）の２ヶ月間の体験では、「ナンキンムシの飼育場」に化したとのことだ。これが事実なら、今後、明らかにされよう。

実際、至る所に害虫がはびこっている。一応は多くの者にとり少なからずも改善になると思う。なぜならば、床から離れて寝ることになるので一段と暖かいし、健康的だ。それに以前のような良い雰囲気をこれで特に失うことがなかった。少なくとも私自身に言わせれば。

スホルテ

1945 年 3 月 25 日

８ヶ月前、突然、連れ去られた 6 人が今また、突如、「刑務所」からひどく痩せこけて戻った来た。ひとりは死亡し、その他の者は、オースターバーン、スネル、フィサーである。彼らはあまりひどい目に会わなかったが、スネルが語るところによると、最初の日にいくつか質問を受けたが、その後ここに来るまでの８ヶ月間には一切困らされたことはなかったらしい。　丸で、彼らは死から甦ったかの様だ。

ヒール

1945 年 4 月 1 日

ボールボーイは全員釈放されたが、これはまた良い兆候とされるのだろうか？

スホルテ

1945 年 4 月 6 日

ほとんど同時に、ヤップは金製品やバランを扱う「ディーラー」の様な不快な人物や好ましからざる人物を主とした 300 人に対し、各自が荷物をまとめ、移動につくべきことを指示した。でもどこへ？ これが最も疑問な点。ヤップにとり好ましからざる人物として、その半数を警察官が占め、活発に商売を始めた「デ・R」も同行した。これは我々にとり運の良いことだ。ここで何でも屋として知られ、私が食べるのにどうしても必要であった 1 ギルダーをも、財産を貯め込んでいるくせに、きっぱりと断ったバンドンの映画館王「ブスター」も同行した。これがパパの親密な関係にあるひとりだったのだろうか。何れにせよ、彼はまさに「クマヨラン」[5] から来たごとくギターを抱えて去ったのだ。これら 300 人に代わりバロスから 400 人が到着。これは又もヤップが毎年作る「カクテル」のための「ミックス」と推定される。数日後には、「バンチュ」刑務所から 12 人新しくここに加わり、彼らは箱入りタバコ（本物！）を何個か蒔き散らし、それを老いた者も若い者も狂った獣のように取り捲ったのだ。吐き気がするよ。まったく！ 落ちぶれたもんだ。

スホルテ

1945 年 4 月 19 日

32 人のジャハッツ（収容所長デ・ヴィルネフと他）と技術者 100 人、合わせて 132 人がこの収容所から（バロスへと）送られ、その代わり、少年収容所から 200 人が戻った。ヤップは変化を好むようだが、ここは好転してないし、目下もひどい収容所であると私は思う。

[5] クマヨランはジャカルタ/バタビアの空港。1940 年代には「金持ち」のみが飛行機を利用した。

ヤンセン
1945 年 5 月 13 日

このところ、死亡者が続出しています。40 人を乗せる患者輸送の際、7 つの棺も手配されましたが、この輸送が出る前、既に 4 人が死んでしまいました。

ハウゼル
1945 年 5 月 14 日～20 日

キーフト老人が亡くなった。老人たちの他の場所への輸送も。これは欧州人看護婦がいるメースター・コルネリス病院へ運ばれたことが明らかとなった。

スホルテ
1945 年 6 月

さまざまな変更がこの収容所で再び実施された。そのため、より良い統制が行われるように、およそ 11 人の少年がひとつの班にまとめられた。ここでは内部スケジュール表があり、配属は合言葉や動物の名前等を使用してボーイスカウト精神で決定される。

スホルテ
1945 年 7 月 8 日

徴用された技術者 48 名が追い出された。どこへ？ そして、8 人の印系の男たちが理由なしに釈放された。一体、何のためだろうか？

収容所組織 ー 欧州人並びに日本人収容所幹部

収容所報告書

日本側管理・監督

当初、４号収容所は日本の民事行政部（バタビア法務部抑留本部）による最高監督下にあって、チマヒでは兵役不合格となったナカムラ下士官が管理全般を、又 1944 年 3 月上旬には配置換えされたインドネシア人の刑務所職員スゴノが特に収容所内部局管理を務めた。

1944 年 4 月 1 日、収容所は軍の管理下、つまり、バタビアにはジャワ強制収容所の総司令官（軍抑留所長）、チマヒにある全収容所を管轄する司令官（本所長）、そしてチマヒ４号強制収容所は２人編成の日本人監督、すなわち、多くの場合、警察官かつ管理人である収容所長（分遣所長）が軍人（兵士）に補佐されることになった。狭義での同管理を手中に収めていた人物は以下の通りである。

１－　1944 年 4 月 7 日 ～ 1944 年 11 月 9 日：カネミツ兵士、朝鮮人
２－　1944 年 4 月 22 日 ～ 1944 年 5 月 11 日：フリシマ伍長、日本人
３－　1944 年 5 月 11 日 ～ 1944 年 11 月 24 日：ヒラサワ巡査部長、日本人
４－　1944 年 11 月 9 日 ～ 1945 年 6 月：スヤマ兵士、朝鮮人
５－　1944 年 1 月 6 日 ～ 1945 年 9 月：サガミ巡査部長、日本人
６－　1944 年 6 月 ～ 1945 年 9 月：ヤマガミ伍長、朝鮮人
７－　1944 年 8 月 20 日 ～ 1945 年 9 月：スネガワ軍曹、日本人

巡査部長であるヒラサワとサガミ（彼らは「管理人」と「サムライの刀」の記章を付けていた）収容所長らは、名目上、全般的な管理を担当していたが、実際には、彼らが「半軍人」であるとして公然と軽蔑の態度を示した兵士のカネミツとスヤマにより牛耳られていた。彼らは本来の行政的性格の任務を利用して、収容所の監督を完全に手中に収めるために収容所内部の事柄に干渉した。

収容所の諸規則の遵守という問題に触れる場合、地位の程度に関係なく全ての日本人へは、西洋の概念では不条理とされても、所謂「ケイレイ」敬礼という慣例的な敬意を表わすことが重視されたことをここに言及せねばならない。見張りの兵士であろうと、視察の大佐であろうと、日本人が収容所を訪れた際に行われた「ケイレイ」の仕方が悪かったり、十分でないとの苦情が出されると、かかる非行者は処罰を受ける結果となった。日本の占領者はこの敬意を表わす完成度により、秩序と規律の遵守及び占領者に対する尊敬の念を計かりたかった

模様である。

内部管理

収容所の内部統制は、所謂「自治会」の形態をとることにより、日本人所長の指示のもと抑留者自身に委ねられた。初期には、この自治体制は完全に個別の見解により成り立っていた。つまり、以前の収容所からの移送グループである所謂旅団の到着次第、これらのリーダーにより収容所評議会が形成された。収容所内の管理上の単位、すなわち班に 11、1944 年 6 月以後は 12 に分割されたことにより、この収容所評議会は、その数に該当する班長で構成されていたため、多少なりとも新しい収容所全体におけるグループの利益を代表することができた。その後直ちに、このメンバー数の増大で、収容所評議会の代表組織における敏速な処理作業を保証できないことが明らかとなり、1944 年 2 月中旬には既に、評議会の主要構成を所長にＣ.Ｈ.Ｖ.デ・ヴィルネフ公、及びその下には、収容所運営全般を監督する副所長にＤ.Ｆ.ブロックハイス氏が評議会により選ばれ、日本側の管理・監督のためともなる収容所部局の 5 人のリーダーによる委員会が形成された。

この班長・グループ代表者への権限の分散主義を基盤とした構造内に、日本人収容所長の命令により、Ｐ.H.ファン・デン・エックホウトが起用さるべく、1944 年 4 月 5 日に基本的修正がなされた。オランダ人とインドネシア人（原文のまま）との各代表者としての収容所長デ・ヴィルネフ公と上記のファン・デン・エックホウトに加えて、印欧人、英国人及び米国人グループ、そして中国人の代表者から委員会が構成されるよう修正を行い、又ファン・デン・エックホウトを両者に対し任命される副所長のひとりとして収容所運営に盛り込むよう命じられた。委員会の 5 人の各メンバーには、幾つかの収容所部局における監督権が与えられ、ブロックハイス氏が庶務長として委員会に加わった。

委員会、つまり狭義での収容所監督は、一連の内部事情に対し分散主義の有効性が固守されてきたことから、ファン・デン・エックホウトの妨害にもかかわらず、収容所評議会、つまり委員会及び班長を維持することに決定した。このことは、以後なされた収容所運営に関する修正の際も更に継続された。収容所運営におけるこの修正命令の直後、抑留者の関心となる教育、図書館等々に対する多数の措置の実施は、日本軍の助力者にあるファン・デン・エックホウトが同席し、日本人監督の禁止に同調するために妨害を働いたが、結局、先の収容所運営陣により開始され、日本人監督は、収容所一般規定「ジャワ・軍抑留所の抑留者に対する内部問題の現行規定よりの主要事項」と題した文書を差し出した。しかし、この規定は一度も受け入れられなかった。

1944 年 6 月 13 日、ファン・デン・エックホウトは、チマヒ所長日本軍カサハラ中尉との密談後、彼自身を収容所長として任命させることで収容所監督を手中に収め、収容所部局

の主要な監督をＰＡＧＩグループ、ハインツ・グループ、そしてＮＳＢ党員からの人物に与えることを試みた。この計画は失敗したにもかかわらず、若干の新しい部長が任命されたことにより、収容所管理におけるファン・デン・エックホウトの影響は増大すらしたが、1944 年 7 月 19 日、日本軍監督により新しく訓令が出された時には、ファン・デン・エックホウトはさほど成功を収めることはなかった。

「ジャワ・軍抑留所第２分所の内部問題に関する諸規則」として出されたこの訓令によると、自治会は全ての班の上に立つ「ソーハンチョー」総班長の監督のもとの「ハンチョー」班長 12 名、及び全部局の「イインチョー」委員長の監督のもとの部局の「イイン」委員 14 名で構成されている。従って、これは以前あった所長の機能が廃止され、監督がふたりとなったことを意味した。実際には、デ・ヴィルネフ公が抑留者及びチマヒの日本人収容所監督により完全に認められた収容所リーダー及び責任者としてかかる役割を果たした。

1945 年 5 月 4 日、ハインツの扇動によるとも推定されうるが、収容所長デ・ヴィルネフ公、ブロックハイス氏を含む 35 名の収容所幹部がチマヒにある 5 号（バロス第３）収容所へ移された。同じ日に、ハインツは班長の決定に反対して自ら働きかけ、日本軍の所長より総班長、従い、収容所リーダーに任命された。ハインツがあった委員長としての地位には、かねてから彼と緊密な協力関係にあった年長のデ・フリース氏が就いた。1945 年 8 月の降伏まで、収容所の運営は日本軍の管理体制にますます強力に傾きこれに従属したため、抑留者の関心だけに的を絞ったが故に、日本側の諸規定や日本人監督においてすら、何度も紛争を起こしたデ・ヴィルネフ公の監督下の運営法とは正反対であった。

収容所監督は 1944 年 2 月下旬に、日本人監督の承認のもと採用した班内の監視員を同じ屋根の下に置いた私警察である中央収容所監視 (C.K.W.)を介して平安と秩序の維持を推進した。 Ｅ.Ｌ.ラーバン氏の指揮する中央収容所監視の任務は、行われた犯罪行為の調査（独自な懲戒規定の違反条項）、警備と監視、雑役従事者の就業時間の（記録）統制、後には密輸品の統制にまで拡張された。中央収容所監視員による任務、特に、警備と統制の遂行においては日本人監督の援助はほとんどなかったが、何回かの盗難事件発生の際、調査を実施するよう日本人所長から依頼され、かかる調査を西洋のやり方で実行することができたため喜んで受け入れられ、全般的には、中央収容所監視員はその効率的な行動により日本人監督による信頼をも享受した。

1944 年 3 月 21 日、ジャワ・軍抑留所所長ナカダ・マサユキ司令官が 15 分間の車での視察のため収容所を訪れた時、抑留者は表に出ることはは許されず、ドアや窓を閉じさせられた。細菌性赤痢が初めて流行し、1944 年 3 月と 4 月の死亡者数が異常に上昇したため、バタビアの日本軍衛生隊の隊長が 5 月 23 日に訪れた時には、収容所長だけでなく、収容所の医療部長もその大佐と言葉を交わすことはできなかった。

アナミ中佐がバンドンとチマヒの抑留所本所長に着任してから彼は、1944 年 10 月上旬以降約 10 回、そのうち夜中に 2 回にわたり 4 号収容所を定まった日時に訪れたが、収容所

監督に個人的に話す機会を与えることは一度もなかった。かかる要請は全て日本人収容所長により拒否され、視察中にこれを試みる場合には、厳罰に科すと脅かした。

日記の断片より

ヒール

1944 年 2 月 14 日

そのヤップが収容所幹部全員を呼び出し、訓示し、一般的なオルマット（敬意）等を要求した。彼は殴らない。だが、それが許されることの実例として、ふたりの者に何回か平手打ちを食わせて見せた。刺し殺すことも許されていた。だから、彼は剣を抜いたのだ。

ヒール

1944 年 2 月 20 日

収容所一般規定：デ・ヴィルネフとコック長のもと炊事委員会が任命される。我々はベラス（米）100 グラム、20 歳迄の若者は 30 グラム上乗せして受ける権利がある。一般雑役におけるリーダーも指名され、そして収容所警察、一般スポーツのリーダー、娯楽と教育のリーダー、電気工事・建物の保全・水道、つまり技術部もリーダーが指名された。動物全部を収容所から退治すること。浴場の全部のドアは不謹慎を防止するため取り外すこと。なぜか、専用の向かい側の便所を利用せず、ここで用事を済ませる者がいる。一年前に予防接種を受けた者は、再度、行うこと。炊事場にある食物のあまりは班毎に分けること。ここには 73 名の医師がおり、そのうち 50 名が活動している。しかし、医薬品は届かず。

ヒール

1944 年 2 月 22 日

収容所は約 1200 名毎の 8 班に分けられた。汚れを防ぐために便所監視が置かれた。特に、夜間は最悪。

ハウゼル
1944年2月24日

今日突然、全てが封鎖され、見張りもつけられた。トランク等の検査。この小さな日記帳を隠すための（３度目）チャンスあり。武器、フラッシュ、書類の捜査であったようだ。

ボスマン
1944年2月24日

9時半から12時半まで家宅捜査と視察。我々は表に並ばされた。ヤップと現地警察が我々の兵舎を捜査した。ヤップ監督のもと現地人警官が我々を監視する。特に、兵舎にハンマー、ペンチ、ハサミなどの道具を保持する者は要注意。大量に没収された。私の場合は、折りたたみナイフだった。

ヒール
1944年2月24日

警察が職業警察署長のもと設置された。その33%がプロの人々で形成されている。

スホルテ
1944年2月26日

ここの暮らしはまるで死の様な静けさ、人影もない。なぜなら、我々はあらゆる規則や時間制限なるもので部屋、狭い小部屋へ、特に、最近の雨がちないやな天気では余計我々を寝床に縛り付け、そうだ、監禁されたのだ。そうこうしていると、今度は点呼あり、食事に行き、その後また何時から何時までは在室が義務付けられている。そしたらば...

ハウゼル
1944年2月27日

お昼に号令。2時15分前から3時まで続く。まあ、数えてみる：左から右、そして逆も同様。

ヒール
1944年2月28日

ヤップとのより良いコミュニケーションのため通訳が採用された。

ヒール
1944年2月29日

また、全てが登録された。名前、住所、配偶者の名前、生年月日、職業、在職中の住所。

マイエル
1944年3月1日

今日、収容所の民間ヤップによる管理が軍当局に移る。これで変化がもたらされるのか、それとも特別な意味があるのかまったくのところ大きな疑問である。いずれにしても、収容所内全部の人数を確認するため何度か「点呼」が掛けられるだろう。が、うまくいかないと、広場に一、二時間もかかっての整列となるのだ。

ヒール
1944年3月1日

班は番号が付け直されて、今は1から１０班まである。我々は事実、いくらか多目の米をもらえる。更に、我々にもまた番号が付け直された。

ヒール
1944年3月2日

夜中にはふたりが交代で部屋の前で見張りをしなければならない。10回を2度叩くと、全部内部に入れること。10回を3度は終了。10回を4度は全てを外に。2缶の砂を組の前に置いとおくこと。それに、水はバケツ2杯そして消火器2本も。

ハウゼル

1944 年 3 月 3 日

本日、軍の管理に移される（9520 名）。5 時半起床。6 時に粥。7 時 15 分集合。タンゲランからなじみの登録カードに 6884 番を付けて、さんざん位置をあちこちにずらされて。8 時半に競馬場へ向けて行進。その場にカードを渡し、12 時に兵舎に戻る。腹はすき、栄養不良で疲れきって。でも幾分は気晴らしになる。途中の警備は厳しく、棍棒を振り、野蛮な声を発するケイボーダン（警防団）の連中を除き、原住民のもの静けさが目立った。

ボスマン

1944 年 3 月 4 日

8 時：粥。9 時：雑役。我々のグループは約 15 名で浴場と便所を掃除しなければならない。この作業終了後は、兵舎へ戻る。聖書を取り出し、詩編４６を読む。その後は、洗濯にかかりっきり。1 時：昼食。米 1 人前 200g そしてクテラ（キャッサバ）とサユール（野菜）少々。そして、針仕事。6 時：再び、米を少し食べる。7 時半には、静かな場所でお聖別。牧師はマタイ伝１０を読む。１日の終わり、そして灯火管制の終わり。

ヒール

1944 年 3 月 6 日

監督は食糧問題について医師との会議を開いた。我々が摂取するカロリーはまだ半分足りない。日本語で書いた嘆願書が提出された。訓示で収容所長は考慮することを伝えた。食料品の入荷が不順。毎日がミーティング。ヤッペンは各自が互いに異なる命令を提示するため迷惑となる。それ以上、少しの協力もなし。

ヒール

1944 年 3 月 7 日

規則を読んだ。我々は感謝の気持ちをもって頭を下げなければならない。部屋を飾ることは禁止。全てを忠実、真剣に行うこと。自制心を養うこと。抑留を軽視しないこと。他に電灯を設置しないこと。集会を開かないこと。記録を付けないこと。スケッチを描くことは禁止。面会は当分延期。手持ちの 10 ギルダー以上の金銭は預け入れること。利息は収容所厚生に利用。

報酬を受けることによる雑役。要するに、全てに至ってナンセンス。警官の収容所内立入り禁止。現地人民兵も大変だ。そこでは相当な殴打がなされている。

ボスマン
1944 年 3 月 7 日

8 時に点呼があった。つまり、通常より 2 時間も早く。理由はもちろん発表なし。今後は、11 時 10 分前にも点呼がありそうだ。

ヒール
1944 年 3 月 15 日

デ・ヴィルネフはヤップの前で腕章を取り外したらしい。ヤップから和解が出されたかも。いやな仕事だ、収容所長なんて。毎日、混乱と打ち合い。

ヒール
1944 年 3 月 20 日

明日の司令官の視察の際は、全員（防火要員は除き）が室内に留まり、窓とドアをきっちりと閉めておかなければならない。どこも整理整頓し、洗濯物を干してはだめだし、特に部屋に吊るさないように。火を焚いてもだめ。司令官が入って来たら、適時、全員おじぎすること。前回の（視察）ヤップはトコ（店）はどこかと尋ねた。「ありません」の答えを受けて彼は、やはり食事が不足していることを認め、かないそうもない約束をした。やれやれ、それで我々のリーダーはバラン（物資）を買うために基金を設けようと思うのだ。差し当たり、この計画は不評にある。この司令官が来た時には、我々の嘆願書が副官より手渡された。誰一人として、彼に直接話し掛けることは許されなかった。何台かの車で収容所に立ち寄り、一個所だけを視察。どこを訪れるかは既に決まっていたのだ。20 分で全て終了。

ハウゼル
1944 年 3 月 21 日

今日、本所長による訪問。部屋は特別に整理整頓。10 時前に全て、準備完了していることが必

要。視察は 11 時頃を予定とされているから。その後、これが 12 時に延ばされ、結局、2 時となった。昼食はトウモロコシだけ。視察のあとにスープ。2 時 15 分前に、全ての窓とドアを閉め、全住人は室内に静粛待機。2 時 15 分にどこかで何台かの車の列が通過し、これで視察の終了と伝えられた。ばかげた話だ。

スホルテ

1944 年 3 月 22 日

昨日、1944 年 3 月 21 日に我々はお偉方日本軍司令官の訪問を受ける予定であった。視察が指定された兵舎は開放してなければならず、一方、収容所のその他の兵舎はドアも窓も全部、ともかく全部きっちりと閉じておかなければならないし、全員室内に留まっていなければだめ。我々は「影」の部分に属した。なんとも、これじゃまるで生き埋めにされたみたいだ。それも真昼間にさ。それでも視察かね？ ばかばかしい！

最近、収容所内に収容所監視が正式に置かれ、炊事場には警察がいる。ＣＫＫ（中央収容所事務所）が言うことでは、彼らは我々の利益を擁護するそうだが、実際には、彼らの人間（つまり我々）に今まで経験した以上の負担と不愉快さをもたらしている。こんなにたくさんの雑役が与えられるのは初めてだ。次々に任務の命令が出る。

雑役をせよ！ という命令ばかりだ。それでも、通常の社会では良いかもしれないが、彼らには強制と罰を計る権利が結果として生じるのだ。だが、今、我らの敵ヤップを前にして、その彼らのために我々は全員が同じあるという、裏返しの効果を持っている。これは我らの意志に反して、敵が利益となることをするようなものだ。Ｌ.Ｏ.Ｇ.収容所でもこのことはされなかったし、それでも結構うまく行ったのだ。これはたくさんの連中がただ自分が好かれ、「任務」を得る為に、全てを漏らし、密告者「スパイ」を演じさせるはめになるだけだ。何枚かの細い竹板のことで私を告発した衒学者M「氏」の事実からもこのことは明らかだ。いや、こんなことはＬ.Ｏ.Ｇ.だって経験したことはまったくなかった。そのためここの生活は、諸規則、命令、禁止条項などというものでほとんど耐え難いものとなってしまった。その代わりのものは何にもない。その反対のものすらなくて、娯楽なし、心の安らぎもなし、強制されて動くのみ。 なし、なし、なし... まるで生き埋めだ。

ヒール

1944 年 3 月 23 日

夜、火を焚いてはだめ。トイレに行く時、夜中でも登録番号札を持っていくこと。ますます気

狂いじみてきた。

ヒール
1944年3月25日

ヤップは我々が自費で物資を注文するのを許可した。非常に大量の注文で、監督の見解：全てを均等に分担。各自支払い可能な額を提示すること。これには大きな非難を浴びる。注文に関する別提案：各自がその者のために買い、一部を売ってもうける。持たない者にこれを譲ること。新提案：収容所にトコ。ムー、何と言うたわごと！

ボスマン
1944年3月29日～4月7日

印欧人かつ著名なＮＳＢ党員のファン・デン・エックホウトはみんなから嫌われ、軽蔑された。収容所監督が正門近くに集合した時に彼の姿はなかった。ヤップは理由を尋ねた。彼を収容所運営に入れ込む努力がされた。班長たちとの会議が開かれた。結局、ヤップが幹部全員を解雇して、自分で他の者を起用するかもしれないとの不安から、彼を意に反して受け入れることに決定された。彼の担当任務は：雑役及び所内の監督。

ヒール
1944年4月1日

抑留者への訓令：

> 「ジャワ強制収容所は現今、配置替えされ、司令官である本官は、ここに当施設の統制を行うこととする。皆の者を保護する意向のもと、またこれに対処する為にも、皆の者の行動の自由を制限せねばならない。それゆえ、皆の者が平和な時代と異なる日常生活を送るべきことは避けられない。このことは、戦時情勢と皆の者の祖国の「現状」を斟酌するならば、容易に理解できよう。本官は人道的統制に準じ、皆の者の習わしと習慣とを考慮して、事に対処する予定である。本官の主張が過去の信条と異なるにせよ、皆の者に対しては細部にわたり公平な扱いをするよう最善の努力をするつもりである。本官は断固として、反乱を起こす者、違反する者、本官の権威に逆らう秘密計画を行う者は容赦なく罰することとする。皆の者は解放の用

意をせず、不注意な行動を控え、現状を踏まえたうえで、諸規定を厳守し、本官側の命令に従い、精神と身体の健康を図るべく日常の生活を心がけるべし。皆の者が幾分なりともなじんだ暁には、今後とも幸なる日々を過ごせることと願う」

署名：ジャワ・軍抑留所司令官ナカダ・マサユキ

ヒール
1944年4月5日

およそ 20 名を引き連れたお偉方の訪問で、ＣＫＫ（中央収容所事務所）の面々15 名が準備に付く。洗濯物は全て取り込むこと。サッカー場は 1 時になって掃除すること。さもないと食事なし。しかしながら、これはもってこいの措置だ。なぜなら、フィールドは非常にきたないからだ。タンゲランで抑留者を馴らしたＮＳＢ党首ファン・デン・エックホウトはヤップから副所長に任命された。非常に反逆的。炊事場職員と収容所長以外の幹部全員が抗議のため辞任する提案あり。これは実行されず。ということは、組織を乱して働き、ボールボーイの利となることをするわけか。ヤップに対し抗議が行われたが、成果なし。夜遅く、気分がいくらか落ち着いた。

ヒール
1944年4月6日

収容所全体の要請のもと、抗議の姿勢を維持することをヤップに伝えたＫＬ（収容所監督）は、変化が生じるかいなか様子をみる。収容所監督側の収容所委員会へは英国人ひとりと中国人ひとりが加わった。

ハウゼル
1944年4月6日

将来のためのレッスン、個人的な意味においても。我々はファン・デン・エックホウトは抑圧されると信じ、この背教者に対し直接強力なプロパガンダを行わなかった。その結果、今、我々は、タンゲラン出身でない人々にこの人間の有害さについて早急に明言できない。それだけに収容所の残りの者が協力を試みる、ヤップにより指名された約 80 名のグループのリーダーであるこの第二の男を結局、認めるほうが、すべてを無にし、このまま成り行きにまかせる

よりましだ。多くの者たちは腹が満たされなくなることを恐れる。要するに、これは我々が近頃常に確信することになった、抵抗力が最小な戦術と同じだ。

ボスマン
1944 年 4 月 12 日

本日、収容所長（ヤップ）が替わる。前の日本人所長は盗みを働いたとの噂だ。つまり、食費に払われたひとりに付き 1 日分 0.25 ギルダーからを。ほかにも盗みが。

ボスマン
1944 年 4 月 22 日

その後、日本軍将校たちの視察あり。我々はこの男たちを前に気を付けをすること。トランクはマットレスの枕元に置くこと。浴用のサンダルは外に出すこと等々。組長が呼び出され、新しい日本人の収容所長の紹介を受ける。聞くところによると、彼は多い死亡件数等のために来た。

ハウゼル
1944 年 4 月 22 日

新しい日本人所長は、頭を小窓側にして寝るよう我々に命じた。ということは、1 人当たりタイル 2 枚半（つまり 50cm）の幅内で寝なければならない。お辞儀をする際、我々は一斉に「ケイレイ」と言うこと。重要事項。

ヒール
1944 年 4 月 22 日

再度、お偉方の訪問。洗濯物をまたまた取り込む。5 分で全てが終了。そのために幹部全員が一日中、神経を尖らせてたんだ。

ボスマン
1944年4月27日

果実が配給されている。これも我らのオランダ人収容所監督の上等な配慮による。特に、所長のデ・ヴィルネフ公には感謝を述べる。彼は我々のために多くのことを成し遂げるすべを心得ていて、かなり頻繁に殴られている。リーダーとして敵と接触することはオランダ人にとり困難な任務であろうが、彼はまさに海の乞食党、要するに、大胆な人物である。

ヒール
1944年5月4日

警察はヤッペンに替わりつつある。ある警官が言ったそうだ。バンヤック・カバール・バイク・ブーワ・オラン・ベランダ （オランダ人には良いニュースがたくさん）。

ハウゼル
1944年5月9日

9時から 5時まで在室禁止令が出た後は、病人は除き、18歳から 60歳の者は皆、外でぶらついている。

ヒール
1944年6月7日

K.W.即ち収容所監視が組織される。日中と夜中の班を置くことが意図される。

ボスマン
1944年6月11日

起床後、着替え、粥を食べることで始まる。炊事場から数人で次々に運ばれる粥の入った大きな樽が兵舎の外のいたる所にある。相当な力持ちでないとこれはかなわんぞ。何せ、この樽は結構重いのだから。多くの者は衰弱し、栄養不良のため到底できやしないのだ。ブリキの（刑務所の）皿かその種のものを手に、長い列して立つのだ。分配は次々にされ、時々、専門の分

配員がいる。食後はおしゃべり少し。粥の運び屋は樽を洗って、炊事場へ戻さなければならない。全員は各自の皿を洗わされる。

ハウゼル
1944年6月14日

我々には今日、連絡準備とかで、住所や配偶者を記入するために各自の登録カードが返された。何を書いたらいいのやら？ はっきりとは何も分からない。

ヒール
1944年6月17日

表での喫煙は全面禁止。組内は十分に整頓されてなく、掛けた衣服が多すぎる。生水は飲んではならない。そのくせ、少し前に電熱器を取り上げた。アーア、まったくばかばかしい！　10時には全員入室してなければならない。これに違反するとおなじみの方法で罰せられるのだ。

ボスマン
1944年6月23日

夕方7時の点呼の際には、我々は外に整列する必要がなくなり、室内に留まれる。その代わり、室長が我々を数えるのだ。

ボスマン
1944年7月1日

本日をもって、新しくヘーゼル氏が組長となった。彼には好感が持てそうだ。

ボスマン
1944年8月1日～15日

この時間には新しい収容所長が来る。彼は時折、我々の中から何人かを2列に並ばせ、お互い

を殴打させるのだ。

ヒール
1944 年 8 月 5 日

変な質問等を載せたドイツ語、英語、マレー語のリストが置かれている：「神についてどう思いますか？」「戦争に勝つと思う者は？」「戦後のアジアについてどう思いますか？」

ヒール
1944 年 8 月 11 日

非敵対国の者は全員集合し、42 の質問に答えを記入せねばならなかった。

スホルテ
1944 年 8 月 12 日

ここ 3 週間というものは、我々は何の「餌」ももらえなく、赤痢に施こすすべなく、あたりに振り回わる「大きな鎌」が大勢の人々をまるでネズミのように死に至らせた「あの」最初の 2 ヶ月の状況に逆戻りしてしまった。このことは、一時は去り、また戻り、そして一応措置を講じた様子であった「当時の」日本人所長に原因がある。これ以上、飢えに耐え切れない。全員がだ。買う（密輸品、ヤミ品）ことができる者でさえ、それで日常生活の必要が全然満たされない。然るに現在、もらう食べ物：朝食に小さいパンの 3 分の 1 切れのみ。その後、数口のコーヒーだけで、スープもない昼食まで持ち堪えなければならない。夕食に米 180 グラムとごく少量のスープ。いかなる結果をお望みなのか、また無数の死者と普通の餓死？ 人殺しだ、まったく！

ボスマン
1944 年 8 月 15 日

我らの収容所長デ・ヴィルネフ公は食事が少ないと日本人に苦情を申し出た。ヤップは、敵の本部、ともかくもお偉方がいるとされるバンドンへ電話した。そしたら、何と次の日はいくらか食糧が届いたが、あまり大して意味なし。

ヒール

1944年8月15日

デ・ヴィルネフと他のリーダーがチマヒ駐屯地配置２周年記念祭にヤップから招待された。これは辞退され、付け加えて「収容所は飢餓に苦しんでいるので、行きません」と。ヤップは知らん素振りして問い合わせ、電話で食糧をさらに注文した。そのため、この招待の受け入れを余儀なくされた。30名が出席し、バーミ、水、ピサン（バナナ）1本、マンゴ2個を食べた。最高の見せ場は、彼らも1人につき2ギルダーを各自が払わなければならなかったことだ。多くの人々はこのことで収容所監督を責めたが、各自が収容所監督の立場になって考えて判断してみたらいいのだ。

マイエル

1944年8月16日

昨日は日本の記念日とかで、約 20 名の収容所幹部がヤッペンとの食事に「招待」された。彼らはご飯一杯を持参しなければならず、1 人につき 2 ギルダー。その代わり、バーミ少々とくだものが特別に出て、これでヤップは1欧州人に付き 1.50 ギルダーもうけたことになろう！何人かは行くことを辞退したが、多くは率直に出席した。当初、収容所が飢えに苦しんでいることを理由に辞退した我らの収容所長も、ヤッペンの中のひとりが 5 トンの野菜を電話注文した後は（当然、無に帰すが）行かざるを得なかった。全体的に、幹部の品格に欠ける振る舞いである。

スホルテ

1944年8月15日

本日は日本の記念日で、日本人所長は我らが収容所リーダー（デ・ヴィルネフ）と何人ものハンチョー（班長）をチマヒでの祝宴に招待した（収容所の全員が飢えに苦しんでいるのにだ）。最初、「我らの」人々（一部）は辞退したが、ヤップが収容所へましな食事を「口先だけで」約束したため、彼らも宴会の費用（1 人当たり 2 ギルダー）を払わされて（もちろん、ごまかし）、食いつき、我々をここでひもじい思いにとり残したのだ。

スホルテ

1944年8月20日

我らが収容所監督と収容所警察は「無能」の境地にある。多くが権力や規則には基づいていない。その訳は、彼ら自ら、多くの点で日常の不正行為に参加しているからだ。彼らはそもそも、「カナリー・ピッテン」（観葉果実樹の実）を棒で掻き集めた故、「パガー」（柵）に接近した罪で、ある老人を老人棟（12班）から連れ出し、勇ましくも一週間も監視付きの独房に入れた強気な連中だ。これはまったく、けしからんことなのだ！

ヒール

1944年8月26日

お偉方の訪問あり。これら紳士には食事に関して苦情が述べられた。その答えは、早急に　8千本のパパイヤの木を植えることだった。憎たらしい奴め！

ヒール

1944年10月2日

またまた新たに、個人業（広範囲）、公務員、教師、技師、医師、学生別に完全に分類されたリストを提出しなければならない。ヤッペンはリストがお好き？ それとも、ただ我々を忙しくさせようとしているだけかな？

スホルテ

1944年10月4日

およそ1ヶ月前、ヤップは知事や司法官のような数人の政府の高官たちを個別に収容（隔離）し、登録の更新を始めた。その目的は我々にはわからないけど、特に、官僚たちは順番にされ、変な質問をされたそうだ。何のために？

ヒール

1944年11月4日

現在、金製品は全部を登録すべきとされた。僕はしないぞ。言ったらもう戻らないからさ。

ハウゼル

1944年11月12日

また日曜日。従者をつれたヤギ髭をたくわえた将軍（？）の大視察団（アリババと 40 人の盗賊）。

ヒール

1944年11月14日

新しい所長も同じく、規則を侵害した場合を除いては殴らないと自分で言うような人物だ。ムー！ スピーチがだんだんうまくなる。

ヒール

1944年11月28日

灰皿を腰のベルトに付けてない者以外、路上での喫煙は禁止。ヤップが我々の胃の具合を十分心配してくれたらよかったのに。

ヒール

1944年11月29日

ヤップはどんな些細なことにも厳しい対策を考え出す。防火要員もさらに厳重に行わねばならない。便所に座ってる人数まできちんと知らねばならないのだ。そのために、棒きれシステムが導入された。出る者は棒きれをどかし、その反対の者は棒きれを元に戻すのだ。

ハウゼル

1944 年 12 月 13 日

お偉方の訪問は、収容所の一部を車で視察レース。

スホルテ

1944 年 12 月 25 日

赤痢の発生件数がはなはだしく増加した。組が一続きになって伝染病棟へ移る。また、死亡者数も日増しに伸びている。ここの寄宿室に 62 歳の年長のフレーデンブルフが入った。突然、持ち堪えられないほど悪かった。組長Ｚとトコの仕入れ係Ｈは既に、彼を収容させるために全力を尽くしてきたが成果なかった。そこで、この私も手はずを整えるべく動き出し、まずは望ましい目標を達成したのに、労力を感謝する暖かいことばや励ましのことばの代わりに、私がうまく対処しなかったし、成果は達成される予定であったと、（そうです。でもいつ、いかにして？）おしかりを受けたのだ。本当は、ＨとＺの両氏は邪魔され、先を行かれ、骨折り損をしたと感じたのだ。

ハウゼル

1944 年 12 月 28 日

お偉方の訪問、視察に関係して大混乱が生じた。病院雑役のため集合、結局、実施されなかった。噂では視察＝書類等の点検。この日記帳を隠した。私にとりとても貴重なもの。

ヒール

1945 年 1 月 10 日

我々は朝と夕刻の点呼の際、外に整列させられる。午前中はオルマットの練習、午後は体操が平行して行われる。幸い、それほど大した事ではないが、外での整列にはどうにもうんざりさせられる。

ハウゼル
1945年2月17日

ＬＢＤ（警棒団）輸送部リーダーに任命さる。

ハウゼル
1945年3月12日

お偉方の視察に関連して班内清掃雑役。まさしく11時には、走り抜けたのだ。

ヒール
1945年3月22日

ＫＷ（収容所監視）は、今は、ＫＰ（収容所警察）という。ヤップはこのWを見たがらない。ウィルヘルミーナ女王（Koningin Wilhelmina）の頭文字のごとき。

スホルテ
1945年5月25日

再び、病人と不能者の輸送が出た。更に、ほかならぬ我らが収容所長デ・ヴィルネフとブロックハイスを含む何名かのジャハッツ（犯罪人、悪人）が去った。そして、ヤップにそそのかされ、まさに元陸軍軍曹ハインツのみが収容所長となれたのだ。収容所管理自体は、他の候補者で先手を打つつもりだったということはショックだ。結末は決まっているようなものだ。まったく！

スホルテ
1945年5月27日

しかしながら、ある連中は腐敗した状況にありながら、たらふく食うすべを知っていて、そういう風なのは、まさしく私がここに名をあげるＨと我らの元組長、現在は班長であるＺのような一般に幹部にある。実際、目にして知っている。例えば、大晦日の晩に焼いたガチョウを班長の帽子に入れてテーブルの上に出現させるとか（アヒルのかごから）、ピーアソンの偽名で

はがきにわいせつなことを書いてＺが悪用、代表者Ｊ（バタビアの大会社）の名前でユダヤ人組に陰謀を企てること。証人がたくさんいることだが、当時、食事分配係と共謀して我々の組で食べ物を盗んだ、そして今また、元警察官が申し出たにもかかわらず、いろはの字も知らないごく普通の植民者を収容所班監視長にする卑劣な企てをした。しかし、組長Ｚは私を好いてなく（必ず、彼をしっかり見張っているから）、いろいろばかげた、私がこれに関して更に言い争いたくないような言い訳をしてこの問題を簡単に片付けた。こんな他人を利用するような高級官僚の海運局長とは。Ｈは彼自身、まるで無価値であることから、他人のはしごを登ったのだ。多くの者が同意見。名前とあだなを上げてもいい。要するに、何もかも。

我々が最も緊急に必要とするような米国の赤十字社からの衣服を見つけたが、カーキ色の服をせしめる ＨとＺを含める幹部にしてやられた。服を十分に持ち、着古しなんか一番少ないくせに。ここでも全員同意見。からだに一枚とも言えない布（まさに一片の布はし）をまとう我々の中にいる貧相なピータース老人には、亡くなった誰かの繕いのあるきたならしい古いパンツのぼろをつかませた。

好ましからざる人物、つまりＯＥと呼ばれる（窃盗、汚染、けんかによる）罪人用の特別な組がここに設けられる。こんな風にして、部外者がお互いを評価するため、元の社会生活にあるよりもっと腐敗した統治が自国の人間のためになされていく。例えば、組長または、Ｚ班長が憎んでいる者は、手続きとか誰かの反対のあるなしに関係なく、すぐさま懲罰組に詰め込まれ、一生そのスタンプが付きまとうことになるのだ。これではまったく、同胞が行う専制政治だ。

ヒール

1945 年 6 月 7 日

新しい収容所リーダーのハインツは子供たちを一緒にする計画だ。なぜ？ ほとんどどの子も誰かが面倒を見ているということで多くの者がこのことに反対している。

ヒール

1945 年 6 月 30 日

私はある組長からだまし取られた。金を借りといて、支払いの約束に従わない。収容所警察に通告したけど、どうにも仕方がないらしい。それでは彼らは一体何をするのだろう？ 外でタバコをくわえた者を監視するだけで、おいしいエサにありつこうとする。電熱器のことで収容所警察に捕まった者は、頭を丸坊主に剃られ、懲罰組に入れられる。サギ行為はどうも認めら

れているらしい。

日本人による抑留者の扱い

収容所報告書

日本人が決定した連帯責任制に帰結する処罰として、まず第１にトコの閉鎖がある。食料品の無料配給の中止を同時に意味するトコの閉鎖は、多数の収容所住人を死に到らしめ、全員の健康状態にかなりの悪影響を及ぼした。日本人所長は再三の警告後に、初めてこの非常に厳しい処罰に入ったのであるということは否定できない。このトコ閉鎖のきっかけは主に、外部雑役をする抑留者による、特に、兵補との衣類を主要に扱った取引行為がますます盛んになされたことによる。

第２の処罰は、横浜正金銀行にある預金の不払いであった。1944 年 7 月と 8 月、1945 年 1 月、4 月、6 月にはこの金の支払いがされなかった。

日本人が非常にまれに適用した刑罰に食事制限がある。1944 年 11 月 9 日に、同室のひとりが商いをしたためにその組の全員が食事を一週間、米と塩のみとする刑に科された。収容所及び元砲兵隊駐屯場の中央事務所で日本人が個人に対し適用した刑罰は、日本人の残忍かつ手の込んだ工夫がなされたとも言えるさまざまの形態を呈していた。砂糖水をからだに塗り込んだあと木に吊るす水療法、電気拷問、吊るし振り、ぬらした乾燥牛の陰茎や鋭い竹の棒でのムチ打ちなど、収容所の多くの同胞が日本人に処せられた体罰により肉体的にも精神的に多大な被害を受けた。米と塩だけで独房に監禁されることは、暴行され、拷問のあとには時には息抜きともなった。だが、こうして最大なる専断裁量がなされていった。

逃亡の試みは 4 件発生した。即ち、これは 1944 年 3 月 6 日に 3 人組により、1944 年 5 月 31 日に単独、1944 年 11 月 20 日に 2 人組により、1945 年 3 月 29 日に 2 人組によるものであった。1944 年 11 月 20 日の逃亡者は留置されず、その他の者には、厳しい体罰が科された。

日記の断片より

ヒール

1944 年 2 月 18 日

男たち全員は 2 時から 6 時まで雑役、戻ると身体検査。大量の品物が現れ、かなり多くの者がひどく殴打された。馬鹿な奴等だ。１時間位も雨の中に立たされ、多くが裸でだ。

スホルテ
1944年2月20日

そう言えば私も今朝、ひとりの中国人がものすごく太い棍棒でヤップに（文字通り）半死半生になるほど叩かれたのを見た。道路を背にして洗濯物を干していた最中だったので、そのヤップが来るのに気づかず、気を付けの姿勢もままならなかったのである。その直後に、ある欧州人がこの棍棒で地べたに打ちのめされた。その理由は（なし、何の理由もなくてだ）... 我々は民間人の捕虜なのでは？

マイエル
1944年2月22日

小ちゃな手のヤンは毎日をどなりちらしてる。これが収容所内を毎日ぶらつくヤップだ。そして誰かを殴打したり、腕時計を奪うチャンスを狙っている。中には、理由なしにひどく虐待された者もいる。

ヒール
1944年2月22日

ヤップは、彼に気付くのが遅すぎたことを理由に原住民兵士の脳天を打った。こんな調子で、あちらこちらで我々の誰かが張り倒される。

ヒール
1944年3月2日

あのすばらしき殴り屋ヤップが副所長に留まる。彼は戦争神経症に病んでいるそうだ。だから、殴りほうだい。ことばを替えれば、この小僧はそんな具合だから仕方ないんだ。

ヒール
1944年3月4日

ケンペイタイ（憲兵隊）から逃げてきたＬ．Ｏ．Ｇ．収容所よりの男数人が来た。彼らは婦女

子収容所と関係を持っていた。そしてケンペイタイにとことん飢えさせられた。1日米 50 グラム。骸骨のごとし。

マイエル
1944年3月7日

ますますここは恐ろしくなってきた。些細なことでもみんな殴られる。昨晩は、班長と組長全員に同席する我らの通訳が1時間以上も打ったり蹴られたり、ひどく苦しめられた。それを見ていた我々の仲間の数人は卒倒してしまったのだ！

スホルテ
1944年3月7日

昨晩、1944年3月 6日、また6人が逃亡した。その内の3人は、これまたL.O.G.収容所出身の者、その名を「ファン・ワイク」「サロモンス」「エイザーマン」。彼らはすぐに外で捕まってしまった。

スホルテ
1944年3月8日

お昼に病棟のファン・デン・ベルヒを見舞った。彼は相変わらず落ち着いていてたくましい。そんな彼はそっと私に腕を見せてくれた。「全くメチャクチャ」。からだ中、全然感覚がなく、どこもマヒし、バラバラに骨折していた。かわいそうに、何とむごいことか。残酷きわまる行為だ。彼の話を聞いてたら、如何に人間が同じ人間をこれほど冷血で、故意に苦しめ、暴行するのかまったく理解できなくなる。彼が被らなければならなかったことを言葉では表わせない。気を失うまでさんざん叩き殴ぐられ、バケツの水をかけられては正気に戻ると、乱暴が繰り返えされたのだ。

ヒール

1944 年 3 月 8 日

全部で 2 万 5 千冊の書籍が手渡された。検印のためという話だ。ボールボーイは彼らの本を渡さなかったので全員が殴られた。彼らは意見した。「なぜ？ 我々はニッポン（日本人）と同じ」その言葉にまたまた殴られた。ヤップは、私の考えでは、これを侮辱と見たようだ。

ハウゼル

1944 年 3 月 12 日

何ごとにおいても我々を容赦しないという非常に明確な意図が存在する。それだけに強硬に殴打する。一種の「サディスト」監視。

ヒール

1944 年 3 月 12 日

あるヤップが誰かの時計を欲しがった。だが、かみさんのプレゼントだからできないと返事された。ヤップはそのかみさんの所へ行こうとした。しかし、男が「その必要はないですよ」と言ったら、ヤップは刀を抜き取り、しばらく振り回した。思案の末、時計は 100 ギルダーの領収書を渡たされ、ヤップに譲られた。だがこれまで 6 個の缶詰でその支払いをした。　　卑怯者！

マイエル

1944 年 3 月 25 日

...依然としてほとんど毎日誰か亡くなる。その都度、ヤップの所長は喪章を持って悔みに現れるが、何の役にも立ちやしないんだ。食事の改善には何もしないし、その他の時には姿を全然見せない。なぜなら、彼のふたりの部下の殴り屋ヤンともうひとりの兵士に収容所でテロ活動をさせ、人々を無謀に打ちまくり、時計を強引に買い占め、それで彼らは外で大金を儲けているらしい。

ヒール
1944年3月27日

チミンディではパガー（柵）を通して5キロの黒砂糖を買った者が捕まった。彼は我らの同胞の命令でムチ打ちにされ、警官たちも打たれ、罰として彼らのベルトでもやられた。　デ・ヴィルネフもこの件でひどく叩かれた。こんなことはヤップでなくちゃできない。まったく、こんな考え方では。その犯人の金は没収された。

ヒール
1944年4月19日

組長全員が呼び出された。彼らは二列に並ばされ、前にいる相手とムチで打ち合いを強いられた。後でその理由が明らかになったが、要するに、最近の登録の際、各自が自筆で行わなかったためだ。ヤップも殴りに加わった。

ヒール
1944年4月20日

今度またあのヤップが殴ったら報告することになった。彼はもうしてはいけないのだ。あるヤップが組長の殴り合いの件で謝罪した。そんな事、信じられん！

ハウゼル
1944年5月29日

外部雑役を近郊住宅にて。リーダーはまたヤップにやられた。連帯責任は強制収容所では典型的な措置とされる。未だに、わなに陥り、正当性を口実にこれを受け入れる者がいる。

ヒール
1944年6月4日

ヤップに捕らえられたギャンブラーの一団は、ボードを前に収容所内を歩かされた。そこにはこう書いてあった：イニ・オラン・モリン・ウーワン・カールツー（この者は金のためにトラ

ンプをする）。ヤップが先頭を行く。

ヒール
1944 年 6 月 14 日

チミンディでの検査で密輸が発覚した。ふたりの男が杭に繋がれ、強打された。ここのヤップが車で現場に到着し、車を降りるとすぐさま激しく殴りに加わった。

ヒール
1944 年 6 月 16 日

手紙を密かに送達したプルカラ（事件）でトコが危うくなる。ふたりの犯人は、今日、後ろ手に吊るされ、殴打された。

ハウゼル
1944 年 6 月 17 日

材木を駅から荷車に下ろす雑役をした。ジャワ人兵士のひとりは、根性を見せる必要があるとして、私と同じ犠牲者の他のふたりとを理由もなく殴った。この人間のくずが直後に跡形もなく、まるで彼の受けるべき処罰からは逃れられるだろうという様な勇ましい方法で雑踏の中に消え失せてしまったのは残念だ。さもなければ、相当な勘定を返済させることにもなったのに。無謀な権勢欲により両手首を骨折。

ボスマン
1944 年 6 月 29 日

そのヤップはたびたびコントロールのため収容所を歩いてる。我らのオランダ人収容所長がひどく殴られたばかりだ。彼は頭を怪我してベッドで医師に治療してもらっている。他の者はお辞儀するのが遅かったためにメッタ打ちにされた。このことは彼が自分の 5 歩前方にいる時にしなけりゃだめなんだ。時々、彼がとてもむっとしているのが分かる。なぜなら、彼は日本の戦況の悪いニュースを聞いたからだ。それで我々に報復を仕掛けるのだ。

ボスマン
1944 年 7 月 6 日

ヤップがまた我々の数人を虐待した。ある中国人はヤップにお辞儀をしなかった故、そして我が収容所長デ・ヴィルネフはオランダ人収容所幹部が毎朝、中央収容所事務所前で閲兵式を行うよう要求されたため。所長と他の何人かがこれを拒否したら、特に彼がひどく殴打されたのである。

ヒール
1944 年 8 月 19 日

ＫＬ （収容所監督）がまた殴られた。どこもみみずばれだらけで、唇も腫らしてた。理由は不明だが、相反する命令が出されたことと対処結果に関係する。

ボスマン
1944 年 9 月 4 日

数人の若い連中が日本人と取引を行った。彼らはヤップに腕時計、眼鏡、衣類を売った。どうやら彼らはヤップをだましたらしい。何人かがケンペイタイ（日本軍憲兵隊）へ連れて行かれ、ひどく殴られた。ある者は、背中には出血、そして鮮やかなみみずばれをして戻った。また、何人かが禁固刑に科された。収容所全体の処罰として、トコ（店）が 10 日間閉鎖される。ということで、我々はその期間何も買うことができず、支給される少量の食糧でやっていかねばならない。

ヒール
1944 年 9 月 5 日

今夜、パガー（柵）越しに求めようと大勢がつかまった。少年 20 人が捕らえられた。彼らはかなりひどくムチで打たれた。

スホルテ

1944年9月7日

収容所全体が再びみじめな状況にいるが、なぜ？ またまたＬ.Ｏ.Ｇ.出身の者による。何事か？ それが刑罰であったのか？ そうだ、同時に若干の醜い現実が漏れたが、（人が言うことには）数人の「ボールボーイ」（ご周知の、タンゲランで無作法を振る舞い、本物の原住民のふりをし、彼らの血を争った者たち）が密告したらしい。しかし、打撃となる点は、罪を認めることにもあり、我々は日本人を決して受け入れないし、特に、その性質や刑量を測定することはできないけれど、ヤップがいつもまったく間違っているわけではない。今こそ、1万人いるこの収容所内に秩序ときまりがなければならない。このことを我々は実現することを試み、そして、彼らが我々の敵であることを念頭に置かねばならない。

まず初めは、9班側の壁越しに最近、盛んに密輸がされることが漏れた。もちろん、Ｌ.Ｏ.Ｇ.出の一部がであり、主に、米や肉等のような食品をだ。これが密告された理由は、得やもうけをねたむ者が、ナシィ・ゴレン一皿が彼が到底払えない値の2ギルダーで売られ、勝手に、さらに高い値すら付けられることに我慢できなかったためであった。これには、「ボレグラーフ」とヘンク・ヤンセン、また彼らのルームメイト、向かい側の小部屋の住人たちで、後で（捜査中の物資隠匿で）「ルシエン」も捕まったのだ。この食事問題は、「レストラン“スカ・マンピア（歓待）”へ。2ギルダーでたらふく食えるぞ！」なる標語のもと収容所じゅうで評判となった。結局、このもうけ主義はただでは済まされなくなるであろう。なぜなら、どんどん叩かれているからである。ひどいもんだ、まったく。

そして、２番目には、我々の組のスカブミ出身のあのファン・ローイ。我々がグヌン・ボホン[6]（「偽りの山」と呼ぶ方が最適だ）で得た「密輸」の機会を利用し、名目上は病院雑役とかの手紙を添えて、それを彼のおくさんに届てもらおうと付近にいる印人の婦人に託したことも密告されたらしく、ヤップはこの件にとても「熱心」であった。これが調べ上げられ、ファン・ローイは寝ているところをケンペイタイ（憲兵隊）に逮捕され、責任の追及と乱暴がされた。だが、非常に卑劣なのは、この事件に関係した女性たちも連行され、ものすごい乱暴を受けたことだ。ファン・ローイは未だに戻ってない。

そして、もうひとつ問題が進行中である。ここではヤップが（今回は）偽物の腕時計でだまされのである。それは千ギルダーの値が付けられたミド（人気ブランド）の文字盤があったが、時計が故障し、修理に出したところ発見された。こりゃ、一大事だよ。「ヤップをかつぐは要注意。お礼は望むなかれ」と、ことわざに言われるごとく。ヤップも早速、行動を開始し、収容所で時計を売る者たち全員を次々に連行しては、監視所で「メチャクチャ」に殴った。時計の物々交換人で元スイス領事館員のストッカーに関しては、肉と骨がバラバラにな

[6] 抑留者が農作業に駆り出されたバンドン近郊の地域。

るほどに殴られたらしい。本当に、つらいだろうけど、だますような事はしてはならなかったんだし、特に、ヤップとはだ（戦時下の我らが敵）。加えて、おそろしい利益と大金を得ながら、それを自己のためだけに利用すれば営業リスクとなるのだ。エゴイスト！

ヤップが収容所内に直接適用した刑罰は？ 生半可の措置ではない。トコの 10 日間の閉鎖だ。何も入らない。食品の特配なし、卵なし、一片のパンもなし、なし、なし。それで、みんなハラペコ。普通なら小銭で何か買い足すことができただけに、ひもじい思いも積もる。まるで兵糧攻めだ！ 更に、密輸が行われた壁沿いでの特別警備の終夜任務も相当な犠牲を意味する。こうして、「ブズーク」（悪人）の罪業が収容所全体の負担となる。これが結果かつ欠点だ。

マイエル

1944 年 9 月 16 日

本日、トコは、数人の連中が食べ物を買うために脱走し、その後、収容所で販売されたことが 10 日前に発覚して収容所全体の罰として 10 日間の閉鎖がされた後に再び開店した。これらの連中はひどい暴行を受けた後、10 日から 20 日の禁固刑に科された。腹が立つことには、我々の同胞のうちの何人かが密告したことで、この事件が明るみにされ、収容所全体が苦しまねばならなかったことであり、それだけにヤッペンのやり方も適用されたし。

スホルテ

1944 年 9 月 16 日

昨日、また誰かが残虐な扱いを受けた。我々の所にいるあの監獄システムの「ハルテフェルト」は、彼がヤップ（ナカムラ）の平手打ちをかわしたということで半「殺し」に叩きのめされた。専断行為の終末はいつ来るのだろうか？ 日本人監督はその後、殴打や折檻（？）の際の回避や反抗は抵抗のゆえになされるものとしてヤップは理解すると発表した。

私がいつもヤップをののしるのは、この日記の記述にもあるようにそれなりの理由と原因があるが、私に率直であるならば、（大きな声では言ってはならないが）良い面もかなりある。ヤップはまず簡潔で効果的に行動し、それだけに度々、強硬過ぎ（過剰）また冷酷過ぎる。それもほとんどの場合、理由があり目標を失うことがない。これはいまいましきドイツ方式であるが、即座に作用し効果的である。また強硬ではあっても、しばしば、解決をもたらし、時には（少々だが）真似もできえる。とういのは我々はいつもおりこうさんをしてはいられないからこそ、詐欺、怠惰、みだらさ、不道徳さで大分汚れているからである。不快だが、

ここでもまた私に率直であるのだ。単に、ヤップは盗難や詐欺には我慢できないんだ。これはここで度々起こる不必要で理由のないことなのだ！ これにも彼は厳罰、たいてい（残虐な）乱暴を科すのだ。

勤勉や労働意欲に対しては、彼は「おまけ」または特典により価値を認める。このことは、約 7 平方メートルの土地を 5 人で掘り起こす作業の際に私自身体験したが、その時我々が一生懸命働いてたら、ヤップは感心している様子だった。「ハンチョー」（リーダー）の私が重労働したことに対し何か特別に食べ物をくれるか尋ねると（飢餓期であった）、ヤップは聞き入れてくれ、彼は十分にあり、また働きがあまり良くなかった者から取り上げた貯えから一人につき 2、3 個のロントン（バナナの葉で包んだご飯）を分けてくれた。そう多くはなかったけど、特配に慣れてない我々の腹を結構満たしてくれたし、こういうことは大歓迎。

ウビ畑の班長（メースタース）がその日、彼の誕生日であることをヤップに話したら、ヤップは彼に何が欲しいか聞いた。その問いに脂ののったおんどりを彼に与え、その他の者にはグラ・ジャワ(ヤシ砂糖)をごちそうした。「ナンチ・マラン・サヤ・ダタン・マーカン・サマ・カムー」（今晩、あなたと一緒に平らげに行きます）と心から告げた。しかし、彼は来なかったし、この脂ののったおんどりはメースタースのものとなった。

いや、まったく残念だけどいろいろな点で（日常のやむなき状況から）悪用され、うそがつかれ、欺かれている。それなら、ヤップが怒り狂い、やめさせる故に暴れて、殴ってどなり散らすのは驚き（？）なのか。殴ることはどうも日本の習慣で、自国の習わしとされている様だ。「郷に入っては郷に従え」と我々は思うべきかな。我々はしばしば原因と理由を彼に押し付けている。「ことの責任をとれ」、しかしながら、付け加えなければならぬのは、専断行為がはびこり、理由がなくても殴られてることだ！

ボスマン
1944 年 9 月 23 日

我々は更に、我らのひとりが正門のそばで残酷なやり方で乱暴されてるのを目撃した。彼は拳で打たれ、叩かれ、蹴られた。登録番号札を身につけていなかっただけでだ。我がオランダ人収容所幹部たち大勢が立ち合わねばならなかった。

ボスマン
1944 年 9 月 29 日

原っぱで化学についてのポスチュムス牧師による講義がヤップに妨害される。彼は 8 人から暴

行され、独房へ行かされる。彼は医者を呼ばなければならないほどにひどく虐待された。我々は彼がその後、ふたりの者に支えられて便所へ行くのを見た。ヤップが収容所の檻に飼ってるニワトリやウサギを盗んだどろぼうが数人いる。どろぼうの何人かはマレー語で違反の事項が記されたボール紙を背中に付けて収容所内を歩かされた。

ヤンセン
1944 年 11 月 20 日

昨日、仕事中におしゃべりしたことでヤップからあまり親切でない待遇を受けました。僕たちのうちの 3 人が万歳の姿勢で 30 分立たされました。そして、何回も殴られた上、仕事に戻されたのです。

ヒール
1944 年 11 月 20 日

収容所にあるヤップのグダン（倉庫）から短剣（短い刀）２本と衣服が盗まれた。これに関連して、収容所監督へのヤップのスピーチは次の様である。「お前たちは一体何が欲しいんだ。自分たちの監督や警察を置いてるのに盗むなぞ」。物件は発見されねばならない。

ヒール
1944 年 11 月 21 日

服どろぼうが捕まった。その内の 3 人が半日、手を上手に吊り下げられた。ひどい。無残な姿だ。両腕があまりにも長く伸ばされていたため、膝をまげ直立し爪先でバランスを取るのが精いっぱいであった。主犯は偶然にもそこらじゅうで盗みを働くどうしようもない奴だ。

スホルテ
1944 年 11 月 21 日

本日、ヤップの収容所内グダン（倉庫）での小さな盗難事件に関連して、（確かに有罪だが、刑量がひどく大きすぎる）ある若い男（かの“デ・ウェールト”）が表現しようにないほど粗暴に打たれ叩かれ虐待された。それは、書いたり、話したりしてわかるものではない。実際に、

それを目にしなければ。収容所の全員が見る中、限度を超えるほど両腕を後ろにされ吊るされ、朝 9 時から午後 5 時まで縛り付けにされ、両腕は黒くなって死んだ。その間、彼はバケツにいっぱい入った水で水攻めの拷問に 7 回も耐えなければならず、叫びは声とならほどに傷口を強打された。いやだ、嫌悪と恐怖でむかつきで、目をそむけざるを得なくなる。それは見るに耐えないものだった。（見るだけで吐き気がする。自分で耐え抜かねばならぬ若僧の方がもっとひどいんだ）。彼が死にそうだと、あたりではささやかれ、（縛られた）両手が死んでいるから降ろさねばならないと。しかし、翌朝に、医者も近づくのが許されなかった場所に血だらけのまま放置されていた彼が依然、生存していたため、新たに、そのうめきや叫び声が骨の髄まで浸透するほどメッタ打ちされ暴行が加えられた。これでも人間だろうか？ 収容所のみんなが全く無力であって、間に入ることも、刑を軽くさせることもできなかった時の正当性とは何か？ 又、神の前には？ まるで獣だ！

2 週間前に収容所から逃亡した 3 人は最近捕らえられ、ケンペイタイ（憲兵隊）のもとにある。彼らの運命はどうなるのだろう？ 特に、これが初めての試みでないことや評判がもともと悪かったことが明らかにされてるから。彼らは、かのヒレ、ヘールハイゼン、フルーンである。

ヒール

1945 年 1 月 13 日

穀物雑役者は再三、盗まぬよう注意された。今日、帰舎する際、全員に身体検査が行われた。ふたりが米を所持していたのが発見された。３人が収容所内に逃げた。点呼そして収容所の全員が 1 時間 15 分も立たされた後に、犯人が現れた。彼らはひどく叩かれた。トコは処罰として丸 1 ヶ月閉鎖される。ひもじくなる。

スホルテ

1945 年 1 月 28 日

1945 年 1 月 28 日に、ある印人の男が 6 班 3 組で「ハラキリ」の要領で腹を切って自殺を図った。手術をされ、以後、生命はとりとめたが、ヤップは恐らく彼の「やり方」に侮辱されたと感じたのか、日本人所長はキオツケ（気を付け）とケイレイ（敬礼）の練習を 1 週間罰として全員に科した。ばかばかしい！

スホルテ

1945 年 2 月 6 日

ヤップは明らかに制裁の名人である。私が今日、「グヌン・ボホン」について聞いたことによると、軽い違反を犯した数人の男たちはお互い同士を叩き、殴らされた。それも生半可にではなく、と言うことだ。ひどい出血をしながらもだ。文字道りの強迫なのだ。そうだよ、やっぱり。ヤップは良く知っている。

ヒール

1945 年 2 月 16 日

ヤッペンはいくらか落ち着いている。あまり叩かなくなった。意味ないプリンタ（命令）もない。本当に、異常なほどの静けさだ。時季到来と望むのみ。

スホルテ

1945 年 5 月 27 日

例の男たちの間で密輸が未だに行われており、その都度、ひどく殴られている。奴等は気を失って連れ出されるほどであり、ひとりは鼻の骨が折れ、顔全体をメチャメチャにされた。それでも彼らには反省の態度がない。しかも、密輸が再度、試みられて行く。トコがまた閉鎖され、収容所での支給最高額が 0.10 ギルダー、雑役にはこれを少し上回る額となった。このことは飢えと死刑を意味することにもなる。彼らは我々を最後まて衰弱させるのだ。そして、ドイツが既に 5 月 7 日に降伏せざるを得なかったこが知らされた。ここでは何時、終局が訪れるのだろう？

密輸が繰り返し行われた結果として、炊事場も閉鎖され、我々は絶望的な状況にあるのに、更に 1 日何も食事がもらえなかった。加えて、我々は所持する嗜好品全部をヤップに引き渡さねばならなかし、水道も止められた。こんなひどい仕打ちは初めてだ。丸 1 日だ。３年の抑留期間に一度だけ半日ということはあったが。

あのプルカラ（事件）は収容所内を押し捲る大勢のヤップにより調査され、イゲミ（新所長）は興奮が高まり屋根に向けてリボルバーを放った。その中でも特に９班と８班（中国人側）を。全雑役が中止され、インドネシア人は金を稼ぐ必要があったとその際言った。ウビ（サツマイモ）の代金 10 セントを差し引いて、1 日にばかげた額の 3 セントだ。ここはひどい有り様で、みんなは引き渡すのはいまいましいと何でもかんでも溝に捨てた。コーヒーや紅茶まで溝に流れた。もったいない！ でも、そこらじゅうで分配されたため、今までになくた

らふくごちそうになった。終わりの始めみたいだった。しかし、次の日は、密輸の続行は「死刑」に科すとの脅かしのもと、各雑役が再開され、雑役者は短いズボンをはき、上半身裸で出動しなければならなかった。

ヒール

1945 年 5 月 29 日

事件の多い一日。朝早く、炊事場の火元が全部止められた。噂：「一日中食事なし」大急ぎで木炭火を密かに利用してコーンプリンを作った。早々にもこの噂は現実となった。取引に対する罰。それで早速、コーヒーの販売を始めた。なぜなら、ここで火を焚くことはまだ禁止されていなかったのだ。これをするのは我々だけだったと言ってもよかろう。結果：ものすごい殺到ぶり。7 時から 10 時まで一気に 320 リットルのコーヒーを売った。煮出す時間がないほどだった。

出し抜けに噂が流れた：「火を焚くことはならぬ」その間に、もう一缶スープを作って、包んで中に入れた。全ての食料品を引き渡すべく緊急命令。ヤッペンが検査をして回る。各自が予備品を埋めるのに大忙し。他の者は幾月も前から蓄えていた非常品である物資を売ったり分け合った。大混乱。

中国人の所でヤッペンが空に向けて銃を発し、荷車一杯の食料品を運び出させた。ヤップが知らない所で子供たちにより再び盗まれたパンが引き渡された。12 時に全員待機。収容所にあるサトウキビをＣＤＫ（中央配給所）に引き渡し。その間に籠が大量に略奪された。11 時に、組内でひそかにスープと私が持ってる最後のコーヒーを売った。一時の静寂。多くの者は出発と思い、各自の荷物をまとめ始めた。

新たな指令：「薪を引き渡すこと」しばらくして、再び指令：「塩、コーヒー、木材の全部を引き渡すこと」収容所じゅうが興奮してた。私はコーヒー2 パックをそれに従うために渡し、非常品を全部埋めた。25 ギルダーで買ったばかりの薪を引き渡した。葬式の実施が禁止された。新たな命令：「全ての炉床を解体すること。オーブン、缶などの調理具全部を引き渡すこと」いいかげんにしろ！ 全部ヤップのもとに積まれた。食品はメチャクチャになった。水に浸した豆をシロップを付けて生で食べ始めたが、一口以上はいけない。雑役は何もなし。ヤップがまた見回る。それにもかかわらず、今晩、いくらか食べ物をもらった。善人。全員による署名が必要であった。取引行為には死刑を科す。雑役者は上半身裸で収容所を出なければならないと、晩になっても読み上げられた。

ハウゼル

1945 年 5 月 29 日

収容所は原住民兵補の有罪行為により混乱に陥る。要するに、食事なし、手持ちの食料品全部の引き渡し、定期の家宅捜査、しかし、ファン・デル・Ｋと僕の予備品のインゲン、トウモロコシ粉、塩を天井に隠した。いくらかの紅茶とロンボック（唐辛子）を引き渡した。

スホルテ

1945 年 6 月

密輸に死刑が科されるとの脅かしにもかかわらず、あの「エンゲルス」は兵補と悪事を働こうと 12 班（老人棟）でチャンスを狙った。その結果、彼は収容所全体を危険に陥らせた。彼は我らが収容所監視により捕らえられ、摩訶不思議、「何とヤップは機敏となったものか？」。彼は殴られ、3 日間の禁固刑と食事なしを経験後に現れた。死刑に関係していたのに何事も起こらず、その直後（数日後）に兵補とともに米の袋が 3 回も連続してぶち投げられたことはまったく大人げない。閉鎖されてたトコが再開した。没収されたバラン（物資）が返えされた。そして、犯人は軽い処罰による坊主頭で釈放された。

ヒール

1945 年 6 月 7 日

最新ニュース：横浜が重撃された。連合軍は 200 リットルの灯油入りの爆弾を 1 機に付き 4 個搭載し、投下した。500 機のＢ２９とＢ５２が日本の上空に飛んだ。皇居が損害を被った。爆撃と同時にトコの閉鎖が行われた。おかしいぞ！ 報復か？

収容所経済と食糧事情

収容所報告書

1944 年 2 月初旬、日本当局は抑留者 1 人 1 日につき 0,25 ギルダーを食費に割当てると定めた。うち 0,16 ギルダーから、日本軍貯蔵品（補給部）からの糧秣（米、粉、トウモロコシ、砂糖、塩）及び 0,015 ギルダーは日本軍の管理費の決済に当てられた一方、残額 0,09 ギルダーからは、日本管理下に措かれている現地人や中国人業者が納入した薪、肉、野菜、果物などの諸費用が支払われた。赤字及び黒字分は翌月に精算された。

収容所ではこの金額から 1 人 1 日当たり、粉 200g（実質 170/180ｇ）、ブラス（精米）100g（実質約 180g の米）、最低限の砂糖、果物、野菜、肉を用意し、この中から、朝食 400cc の粥、昼食 300cc の粥と野菜が少し入った 200～300cc のスープ、夕食 185g の米と 200cc のスープ（野菜少々と時折肉の細切れ）が支給された。1944 年 5 月に、抑留者たちが自発的に非常に簡単な方法で比類のないパン窯を完成させた後は、毎日の献立は 400cc の粥、5 分の 1 切れのパン（140g）と 200cc のスープ、180g の米とスープとなった。

1944 年 5 月 7 日より、肉の配給は最低限に減らされ、ほぼ 1 週間に 2 度、モツが夕食のスープに混ざった。数ヶ月にわたり野菜や果物さえも支給されず、ウビ（サツマイモ）が献立に加えられた。

果物及び砂糖については、抑留者は大部分を自己購入で入手する必要があった。炊事場は、1944 年 4 月から中国人監督の下で主に中国人抑留者が働き、日本側が供給した僅かな食糧に、前記の 1 人 1 日 0,09 ギルダーの費用で業者を通しての購入分と、さらにトコ配給からの自己購入分を加える事によって、常に美味しい食事を提供し、卓越した任務を行なった。

物価の上昇によって、この 0,09 ギルダー割当分からの支給は次第に少なくなってきた。書面や口頭での要求や抗議が何度も繰り返されたが、日本側は 7 月初頭になってはじめて、日本軍糧秣分以外の食費の値上げに応じた。これにより 1 人 1 日 0,09 ギルダーから 0,20 ギルダーとなったが、現実には物価上昇のため食糧の十分な増加には至らなかった。

収容所監督は 4 号収容所の開設時からすでに、出来るだけ自己購入の食糧によって、販売または無料配給物によって、収容所内における切実な食糧不足に対処することに努めていた。

日本側の諸規則では、抑留者はこの時期各自 10 ギルダー以上の所持は禁止されていたが、一般的には十分な資金源を持っていた。その大部分は、特に最終年に活発になった金製品、腕時計、衣類の取引によって入手したものである。日本監督上層部に厳しく阻止されていたこの取引による収入以外に、数百人の抑留者は不規則ではあるが横浜正金銀行の口座の中から月々10 ギルダーを、また 0,15 ギルダーの報酬を受け取っていた。通常月々5 万～8 万ギルダ

ーに上ったトコ及び無料配給の売上の数字では、収容所での補充食糧やタバコなどの嗜好品に当てられた費用総額の正確な姿は把握できないであろう。補充食糧や嗜好品に当てられた金額は、トコが日本の命令で閉鎖しておらず、また次第に厳しくなっていった外部での取引きに対する処罰がまだ大規模に行われていなかった時期には、1カ月で10万ギルダーを優に超過していたことは明白である。

熱帯地方に住む西欧人には、1日 2500cal が必要だと云われている。そのうち軽い労働1時間当り 75cal 増、重労働1時間当り 300cal 増になる。エネルギー補給がこの数字以下になると身体維持が困難になり、労働によるエネルギー消耗のため次第に健康が損なわれていく。その上、身体には1人1日平均65gという一定量のタンパク質の摂取が必要である。前述の統計では、4号収容所での抑留生活16ヶ月の期間中に日本側は、平均1人1日1224cal及び36gのタンパク質を供給していたことが示されているが、1944年9月には食糧供給 1000cal という最低値であった。それ以降、数値は1人1日 1100cal を上下していた。タンパク質も、同様に1944年9月の25gを最低値とし、それ以降10ヶ月は32gを前後していた。

トコ及び配給を通じての合法的な方法で、抑留者は 1 日平均 526cal の栄養摂取ができたが、トコ閉鎖によってこれが不可能となった。

長期にわたる収容所生活と、ほんの一握りの者が僅かばかりの生活必需品を持ち込むことができただけで、送付も完全に不可能であったため、大部分の抑留者はごく僅かの衣服しか所持していなかった。衣類の不足を日本人監督に納得させるために行われた1944年6月1日の調査では、抑留者のそれぞれ（概算で）30％がシャツ、26％がズボン、31％が下着のシャツ、27％がパンツ、20％が靴、20％が毛布、37％がマットレスというように使用できる衣類をほとんど或いは全く所持していなかったことを明白にした。再三の要求と抗議にもかかわらず、日本人監督はこの切実な不足分を効率的に解消する対策を講じることもなかった。外部雑役者と炊事係、技術雑役班に限られ、現地人兵士用であったため非常に小さなサイズしかなかった蘭印軍の緑色の上着が偶発的に支給された。また２度にわたり、婦女子収容所で集められた男性衣類数百枚が抑留者の間で分配されたが、ともあれ定期的な支給は全く無いに等しい状況であった。

1944年8月19日に、ローマ法王から靴109足を受け取った。また1945年5月に受け取った２度目の国際赤十字社の救援物資から、74足の靴、約300枚の米軍ズボンとシャツが配給された。ヤッペンは、衣類や洗面用具、寝具を調達しないのと同様に（浴用石鹸や洗濯石鹸の不足はかなり深刻だった）、食器類を補充することもなかった。

約 2000 人を対象とした炊事場の設備は完全に不十分で、負担がかかり過ぎたためかなり消耗していた。技術班は自由に使える非常に僅かな素材で、修理したり新しく木材で作ったりして出来る限りの対処に努めた。およそ 100 の組への食糧配給（その上病院と食餌療法用）は、飯ごうや分配用具に特別な条件が課されてくる、特に後者の分配用具に関しては、飢えた抑留者が鋭い関心の目を注ぐため、非常に周到に分け前を計る関係で、様々な大きさに精

密さが課された。これらの素材は臨時に作る必要があったが、我々の技術班はここで大いにその技量を発揮したのである。

1944 年 6 月 3 日、日本収容所監督は数週間前にバンドンから届いた米国赤十字社の救援物資の分配を始めた。その数日前には、米国赤十字社からの貴重な医療物資は収容所医療部に手渡されていた。最初の国際赤十字社救援物資は、289 個の小包が入っており、各小包は４箱詰めで箱ごとに高品質の各種食料品 24 缶、その他タバコ 10 箱が入っていた。

1945 年 3 月 17 日、米国と英国の赤十字社からの救援物資を合同した 2 度目の小包が日本軍中央管理事務所に届けられ、チマヒの 3 ヶ所の収容所分として梱包された食品 4 箱詰めの 850 個の小包があった。加えて米国赤十字社から雑貨と薬品が入った 9 箱が、そして英国赤十字社からは食料品、雑貨、薬品が入った 468 個の小包が届いていた。要求と返答が再三繰り返された後、日本人監督は 1945 年 5 月中旬にようやく分配に移った。

オランダ政府は、1945 年 1 月 19 日、４号収容所のオランダ人抑留者のために、6 万 6000 ギルダー余りを送金する旨を指令し、その中からオランダ人は各自 8，40 ギルダーを受け取った。これより少し前、英国人は英国政府からの振り込みにより各自約 75 ギルダーを受け取っている。

外部雑役が有利であったことは決して見逃せない。全体的に、外部雑役は不利な点より利点が多かったとみなされる。収容所の柵外で、空の下でのそれほど激しくない労働による健康保持、補充食の購入を可能にする報酬、日課になること、そして収容所社会では重要な意味のある補充食を自分自身や収容所仲間のために入手すること、すなわち日本人雑役監督の仲介でー彼らはそれによって大金を儲けていたのだがー日本人や兵補たちと、多くが不合法な方法によって衣服や高級品を取引きする可能性が大いにあったことである。月数万ギルダー分の食糧がこの方法で運び込まれた。しかし、この取引は同時に発覚の危険性をはらむもので、外部雑役での密かな手紙の仲介の他に、禁止されたこの取引こそ収容所内で繰り返される処罰の原因となるものであった。

日記の断片より

ボスマン

1944 年 2 月 12 日、23 日

ここの食料は粗悪、最小限。何ほどかのパン、時に米、時にクテラ（キッサバの根）が支給される。夜の 8 時には空腹で睡眠。食事の時には長い列に並び、順番がきたら自分の分け前が貰える。朝は特にみじめな有り様だ。7 時頃、前もって 2 人交替でお茶の入った大きな飯ごうを温水設備のあるところまで取りに行かなければならない。それから食事だ、貰えるとすれば。

ここではずっとあのむかむかするような粥、糊か泥みたいなやつだ。しかし、みんな空腹なのでまるでごちそうであるかのようにむさぼり食う。

ハウゼル

1944 年 2 月 18 日

今日の食事はやけに時間通りだった。8 時に朝の塩入りタピオカ粥（吐き気がする）、12 時にべたべたの生焼けパン。収容所配給品（タバコ、コーヒー、砂糖）にまつわる噂が具体的になってきた。実現すればよいのだが。今日の午後ウィム・ムルダーとルミーをして遊んだ。ここでは日がたつのがかなり早い、まだ人と話す機会が十分あるのだ。昨日もらったセーターを器用に直したので、頭が入るようになった。今日はいくらか衣類の分配があった。たぶんどこかの土地で家を去らねばならなかった婦人たちからのものだろう。

ヒール

1944 年 2 月 18 日

米と野菜はかなり粗末だ。組では分配への不平がつのっている。数百人のためのドラム缶を分配するのは難しい。今は 20 人のグループのために分配する。

スホルテ

1944 年 2 月 20 日

それから私は昨日ヤップのために強制雑役をやらされた。35 歳未満の者だけだ。しかし、もう二度とはご免だ。くたくたになるほど働いたのに何の特配ももらえなかったからだ。そうでなくても我々がここで貰える食事は僅かなものだ。絶望的に少ない。未だかつてないほど少ないのだ。事態はますます悪化し、今やまさに最低だ。すなわち朝は砂糖抜きのガプレック粥（乾燥したキャサバの粥）。12 時には何も付かぬパン一切れだけ。そして夕食には、一日交替で米と野菜か、または乾燥した固いクテラ（キャサバの根）と僅かの野菜だ。だが雀の涙ほどの量で、これで丸 1 日生きてゆかねばならぬのだ。我々のみるところ先はますます暗く、ただ早急な事態の好転を望むばかりだ。さもなくば･･･。

ハウゼル
1944年2月21日

2月の配給に、4分の 1kg のコーヒーに 0,13 ギルダー、半分のルンプンタバコ（巻きタバコ）0,15 ギルダー、3kg のグラ・ジャワ（ヤシ砂糖）に 0,42 ギルダー、1kg のピーナツバター0,75 ギルダー、一個 0,44 ギルダーのパン 5 個を注文した。これが支給されれば、3 日ごとに 2 個のパンが余る。もしこの収容所の管理や状況が今のままならば、もう少し我慢できる。

マイエル
1944年2月22日

昨晩、カスビの塊茎（キャサバの塊根）を食べて 3 人の男たちが病気になった、これは米と交替に 1 日おきに唯一の食事として出されるものである（あとの日の食事 2 回は粗末なサゴ粥 1 皿とパン半分が貰える）。他に衰弱して寝たきりの者が数人、そして多くは（私も含め）目眩に悩まされている。不十分な食事に対し正式な苦情がなされた。どんな結果をもたらすか見守ろう。

ヒール
1944年3月4日

バラン（物資）が届く。木靴、練歯磨、石鹸、黒砂糖、カウン（ヤシ葉のタバコ）、コーヒー、バター。2 月分はまだ渡されていないし、注文分の 4 分の 1 もない。新しい規則は 1 日に 2 度の米とスープ、1 度はパン。有り難い、粥はもうない。

ハウゼル
1944年3月5日

タバコの配給。非常に悪質。灯油の味のする新しい粥。12 時には 200g のサンバルだけのご飯。6 時にはカチャン（ピーナツ）とケデレスープ（大豆スープ）。尋常でない空腹感。新しい日本軍の監督が我々に約束したものとは正反対だ。

ヒール

1944 年 3 月 7 日

配給が音も無く止まった。トコが設立されるようだ。貰う予定の 0,09 ギルダーでは諦めた方がいい。誰でも横浜正金銀行に振り込むことができる。ハ、ハ、ハ。各自 10 ギルダーは所持していいらしい。

マイエル

1944 年 3 月 8 日

昨日、ワロン（屋台）で食べようとして脱走した 3 人の印欧系の少年が捕まった。我々は今、正式に 1 日米 100g、カスビ（キャサバ）100g、ケデレ（大豆）100g に加え僅かの野菜スープ、それから時々細切れ肉、テンペ（発酵豆腐）かタウ（豆腐）が貰える。飢餓配給だ。特に、実際もう 1 年近く栄養失調の我々Ｌ．Ｏ．Ｇ．出身者にとっては！

スホルテ

1944 年 3 月 9 日

収容所内をうろつく犬が瞬く間に姿を消す。隠れもせずに犬を追い立て捕まえる者がおり、我々に、少なくとも二流の者、意志の弱い者に「犬は食われる」のだ。食事を分配した後は、まるでまだ何かが残っているかのように樽の中をこそぎ落とそうとする、そして琺瑯まできれいになめるので、皿は洗う必要がない。実際、空腹は深刻になってきた。我々の胃はもはやぐうぐう鳴るなどの程度ではなく、1 日中、空腹のためキリキリと痛む。状況は以前より悪い。地方少年院で体験したよりさらに悪いのだ。これ以上長く続くべきではない。さもなくば、腹が減って大きな喧嘩騒ぎが起る。これ以上押さえ切れない、明日にでも起るかもしれない。

スホルテ

1944 年 3 月 9 日

それからトコが閉鎖された、事前に知らされることもなく我々の 2,70 ギルダー（食券）も没収されて。補充食が欲しければ 1 日 0,10 ギルダーで働くか、もしくは他のトコ（もちろん我々が注文したバラン（物資）を）から現金で、しかも倍の金を出して手に入れる必要がある。誰がまだ金を持っているというのだ？ほんの一握りの者だけだ！

ヒール
1944 年 3 月 10 日

中国人の納入業者が中央収容所事務所になぜもう注文が無いのかを尋ねた。収容所用に 9000 ギルダーはまだ手つかずに持っていたのだ。ちょうどヤップがやって来てその中国人は殴られた。つまり金は没収されたのだ。注文は中止された。

ヒール
1944 年 3 月 11 日

試験的にパンが焼かれ、成功。タピオカとケデレ（大豆）のパンだ。窯が別に取り付けられた。最大限 5000 個分容量を増やしたがっている。

ハウゼル
1944 年 3 月 11 日

とても疲れやすい。7 時半タピオカ粥の朝食の後、2 時に飯と少しばかりのサユール（野菜）の昼食が続く。3 時にはまた同じ粥だ。6 時半頃、約 150g のケデレ豆（小粒の大豆）、そして 7 時にカップ 1 杯の野菜スープ。空腹そして目眩。

ヒール
1944 年 3 月 13 日

今日、ここで最初のパン 200 個が焼かれた。米粉が 2%、ケデレ（大豆）が 20%、タピオカが 78%だ。最初は病院が貰う。

スホルテ
1944 年 3 月 15 日

トコはもう開かない。しかし、ヤップの配給から突如 3 本で 1 ギルダーの葉巻やグラ・ジャワ（ヤシ砂糖）が貰える。全く理解しがたい！それにしても「闇市場」は忌まわしい。アヒルの玉子に 0,50 ギルダー、1 ポンド余りのベーコンにちょっと 9 ギルダーとか要求する。そう、途

方も無い。何もかもが売られ、誰もがそれに参加しているのだ、昔高い地位だった行政官までも。

衣類はもう持っていない。飲食は、ブリキの皿やバター缶クウェーカーやイワシ缶などの前は食品が入っていた缶でする。スプーンは竹で作られ、便所の「チェボック」（ゆすぎ瓶）に約 0,50 ギルダー支払う。ハ、ハ。今日、後になって分かったことだが、彼らがここで売ったベーコンは日本軍の炊事場から盗まれたものだった。あの残忍なやつらの手から奪ったのだ。勇気あるじゃないか。それを聞いたとき、大笑いした。できるだけ盗んでやるのだ。だが彼らは 2 日後に 6 人の若者を捕まえ「ズタズタに」（棒で）打ち据えた。しかし取引は進み、どこから来るのか分からないが、飢えと金への貪欲さはどうすることもできず、そのためには何だってやらなくてはならないのだ。

食事も貧しい。なぜなら 180 g の米にスプーン 1 杯のスープ（昼食）、150 g のカチャン（ピーナツ）と小さなコップ 1 杯のスープ（夕食）それだけなのだ。だから 1 日中何もない、果物もお茶用の水さえないのだ。ああそうだ、朝食はまだ暗いうち（夜だ）に砂糖無しのまずい粥がコップに半分。哀れだぞ。そのうちに死んでしまう。不思議でもないことだが、何か自分たちで分配する必要があるもの、例えば「ロバック」（大根の一種）が手に入ったときには、皆そのまわりを取り囲み、一番の正直者を小屋（独房）から指名し、その後それは大概わずかな量だが、精密に分けられる。それでも手でなおも計ろうとすることもある。あるものが他より大きいと大変な事になる。ハ、ハ。図体の大きいやつ、貧しいやつ、地位も名声もあるようなやつだって、子どものように、貪欲さとエゴイズムが混じった目で見つめている。おぼれる者は藁をもつかむ、飢えとは奇妙な感覚だ！

ハウゼル
1944 年 3 月 16 日

チミンディのゾネフーヴェの労賃（ケチャップ、クッキー、デデメール（糠））が分配された。大金持ちになったようだ。

ボスマン
1944 年 3 月 24 日

食事の後、フォーホルがデ・バスに私が借りた針のことで文句を言った。デ・バスは、私に告げ、私はすぐに針を返した。収容所では針も貴重なものなのだ。入手困難で、皆にとって必要欠くべからずのものだ。

ヒール
1944 年 3 月 27 日

粉不足のため製パンがまた停止した。最近、食事が良くなった。朝食トウモロコシ 200ｇ、昼食トウモロコシ 200ｇと約 200cc のスープ、夕食米 200ｇとスープ 200g、サンバル 100g。時折余分にウビ（サツマイモ）1 切れ、ロバック（大根の一種）、もしくはピサン（バナナ）1 本。

ヒール
1944 年 3 月 29 日

炊事場では現在 90 人の中国人が働いている。多くの泥棒などが解雇されたかわりに、中国人の料理人だ。欧州人の失敗だな。今日の食事はとても美味しかった。脂っこいベーコンスープに美味しいサンバル。解雇された者が道具を持ち出し、煙突を塞いでしまった、潔くない。

ヒール
1944 年 4 月 4 日

たくさん食べられるようにまたチミンディに行った。特配にパン 1 個もらう。コーヒー1 杯、それからカチャン（ピーナツ）を盗んだ。予想以上の日。

ヒール
1944 年 4 月 7 日

やっとバラン（物資）が届いた。デンデン（乾燥肉）、塩魚、タバコ、カウン（ヤシ葉のタバコ）。注文外のものだ。少なすぎるのでクジ引きされる。

ヒール
1944 年 4 月 9 日

炊事場は改築、拡張などの必要がある。5000 ギルダーの費用がかかってもよい。その金でもっとましな食事が欲しい、しかしまあ、整った炊事場も必要だ。一度トウモロコシをケデレ（大

豆）に、または、半盛りの米をトウモロコシ 1 盛りかケデレに交換する。この方がずっと滋養がある。

ハウゼル
1944 年 4 月 13 日

またいくつかのレシピを借用。料理本についてのシャックルトンの話に似ている、彼らがオリファント島で滞在中、飢えていた時に毎晩料理の本からレシピを 1 つずつ読み上げるのだ。この収容所でもあちこちで食事のことが大部分の話題になり、レシピやパン焼き窯などのことを集め、語り、批評するのである。

スホルテ
1944 年 4 月 13 日

昨日、同時に 6 人が埋葬され、ヤップが死亡続出の理由を調査した。そして医学的にみて、大部分が栄養失調つまり餓死だったことが明白になった。これにはヤップも少々打撃だったようで、食事の改善を約束した。願ったりだ。今ある食糧と内緒で持ち込まれるものの値段は様々で、とてつもなく高いものもある。例えば、オートミール粥 1 缶分の白砂糖は 5 ギルダー、0,01 ギルダーのグラ・ジャワ（ヤシ砂糖）一片は 0,50 ギルダー、石鹸 1 つが 1,25 ギルダー、0,30 ギルダーのルンペンタバコ（巻きタバコ）が 2,50 ギルダーから 8 ギルダーする。衣類の値段も安くはない。下着のシャツは 7,50 ギルダーと 8 ギルダー、カーキ色の長ズボンが 14 ギルダーなどなど。外部でも衣類はもう作られていないようだ。我が豊穣なる蘭領東インドも再びこの様な貧困に陥ったのか、中でも欧州人が一番貧しい。

ヒール
1944 年 4 月 14 日

クテラ（キャサバの根）の欠片や野菜くずなどを探し求めて、多くの者が廃棄場をあさり、埋められた廃棄物をまた掘り返している。こんなことをしていたら、赤痢が蔓延する恐れがある。病人が使っていた古いティカール（ござ）やマットレスがその中にあるのだから、なおいっそうだ。これは今、禁止されていることだ。しかしゴミ箱はあらされ続けている。

ヒール
1944 年 4 月 17 日

ハ、ハ。あのトコ。全部注文は取り消されたが、新たに 1 人砂糖 3kg、ピサン 2kg まで追加注文することができる。残額から注文分が差し引かれる。砂糖、タバコ、カウン（ヤシ葉のタバコ）が入荷した。

ボスマン
1944 年 4 月 22 日

8 時にまた粥を貰った。ちょうどグラ・ジャワ（ヤシ砂糖）の小分配があったばかりなので、粥にふりかけることができた。12 時に、石鹸 1 つの配給がある。無料だ！

ヒール
1944 年 4 月 29 日

中国民間人から物資が入荷。デンデン（乾燥肉）、ピサン・サル（干しバナナ）、ベーコン、クッキー、アメ玉、お茶、コーヒー、砂糖、チーズ、バター、歯ブラシ、パスタ、ジャムなど。ベーコンとソーセージはサンバルと交換するため炊事場に運ばれる。

ボスマン
1944 年 5 月 1 日

兵舎と他の場所の間に、多くの者が菜園を作った。そこで、バイエム（ホウレンソウ）、ロンボック（唐辛子）、テロン・ジャグン（トウモロコシの一種）、トマトを栽培する。炊事場や予備炊事場での調理がだめなら、これらの野菜は自分で火を焚いて料理しなければならない。収容所では、ブダイン教授の指導のもと、何人かの協力者で薬草も栽培されている。これで薬が作られる。木から葉っぱをつみ取り、それを湯がいて食べている印欧人さえいる！

ハウゼル

1944 年 5 月 1 日

ユリアナ慈善行事[7]で、我々4 人が、250gのお茶 1 袋、ジェルック（柑橘類）2 つ、いくらかの葉巻とクッキーを引き当てた。こういう事を正当だと思わない者が大勢いる。確かに規則自体は正しくない。9000 人以上の人がいる収容所でハチミツ 50 瓶、コーヒーキャンディが 34 缶などで、何を始めるのか。こんなことは給与者が考えなければいけないことなのに、こういう時は、くじ引きをしなければならないのだ。そうなると、運の良い者と悪い者がでてくるのは当然だ。チーズ 8 分の 1、ソーセージ 1 切れと例えばケチャップ 2 瓶を 125 人の組で分けなきゃいけないとなると、まったくうまくいくはずがない。昨日の食事はとても美味かったし、十分だった。3 時半から 5 時まで夜警をした。お茶を 1,50 ギルダーで売ってタバコを買うだろう。

ヒール

1944 年 5 月 6 日

収容所に豚が来るそうだ。ここで飼育するそうだ。40 頭の動物が来ることになっている。肉は今のところ入荷しない。今日のスープはまずかった。肉の代わりになる品物を試みる。

ヒール

1944 年 5 月 7 日

サッカー場は今や、鶏、豚、ウサギを飼育しなければならない。家畜小屋を建て、その材料に 450 ギルダーを支払う必要がある。この動物は贈呈されたものだ。鶏は現在 2,50 ギルダーする。これから、さらに菜園とウビ（サツマイモ）畑を作らないといけない。家畜小屋建設に、我々の組から 1 日 5 人供出する必要がある。

スホルテ

1944 年 5 月 12 日

我々の収容所一万人に突然関心が払われているのがここ 2，3 日めだつ。なぜなら果物、グラ・ジャワ（ヤシ砂糖）、白砂糖、それから突然また肉というように特配食糧が入荷し、同時

[7] このユリアナ慈善行事はユリアナ王女誕生日を祝い 1944 年 4 月 30 日に行われた。

に食事が少々改善されたようで、朝食パン 1 切れ、または粥（糊）、昼食スープと米と時々ほんの少しの（さじ 1 杯）サンバル、夕食再びパン 1 切れ。改善されたのだろうか、深い理由があるのだろうか？

スホルテ
1944 年 5 月 15 日

食事に関してだが、なにがしかを手に入れるため、私は何でも取引し、また悪どい商売もする。それで時々、定期的にトコのための資金を得る。こんなふうにして、この前は壊れた椅子を燃料用に 1,25 ギルダーで売った。笑ってしまう。しかし、生き延びるために少しの金でも手に入れなければならないというのは、また悲しいことだ。そう、そう、必需品である砂糖やケチャップなどをトコで買うために、国際赤十字社からのコンビーフ缶を 5 ギルダーで売ってしまった。そう、貧困は深刻だ。服はボロボロになって体にひっかかっているし、私はもう履き物さえも持っていない。木靴を履くといつも傷ができて、なかなか治らないし、後に大きな傷跡が残る。でも、木靴ももう持っていない。だから最近では大抵の者がしているようにいつも裸足で歩き回っている。食事はいろんな缶を使ってする。長いこと使い、すでに錆びてボロボロになったものだが、飲むのも缶からだ。

ハウゼル
1944 年 5 月 18 日

米国赤十字社からの小包について噂されている。120 箱の食糧と 20 箱の薬、2 箱の靴が来るとか。米国代表者はその受領書（まだ小包は受け取ってもいない）を 1943 年 11 月 29 日と誤魔化さなければならない。それから、没収された我々の預金から金が配られるとの噂もある。

ハウゼル
1944 年 5 月 22 日

雨模様の朝だった。0,50 ギルダーでグラ・ケラッパ（ココヤシ砂糖）の大きい塊 2 個を買い、いっぺんに食べ尽くしてしまった。それから、最後の現金 0,50 ギルダーを同じやり方で使ってしまったので、今持っているのは配給用にまわされた金だけだ。洗濯物を石鹸水につけて、それから繕いをした。不吉なすり切れができてきた。くじで、配給からの一個が 0,035 ギルダーのパン半分を引いた。

ハウゼル
1944年5月23日

腕時計が18ギルダーで売れた（20ギルダーから仲介料10%差し引き）。これでまた今夜のタバコを買う。ここ最近はタバコなしで巻きジャグン（トウモロコシ）の葉を吸っていた。

ヒール
1944年5月26日

この収容所では、現在灯油缶が 10 ギルダー、バター缶は 5 ギルダーで、水売りはこの値段を支払う。ロンボック（唐辛子）と玉ねぎが入荷。しかし、タバコは大量不足。他は次第に多くの物資が入荷するようになった、特に砂糖が増加している。

ハウゼル
1944年5月31日

あちこちで調理されているため、木材の需要が高い。「静かに願います。礼拝中」という掲示板や便所用の病人の椅子、いわゆる便器、それから木靴さえも安全とは言えないようだ。

マイエル
1944年6月1日

ここ数日、さいわい食べ物がまた少し余計に入って収容所のトコで売られている。それで私たちは数ヶ月ぶりにまた白砂糖を入手し、その上クウェー・ケラパ（ココナッツクッキー）やクウェー・マンクック（米粉クッキー）、クウェー・ボルー（卵ケーキ）等々の細々とした食べ物から、最後には無類のグラ・ジャワ（ヤシ砂糖）も手に入った。これは、抑留者にとっての「慰め」なのだ。飢えるとどうやら人間はえらく甘党になるようだ。というのは顎鬚、口髭を生やした誇り高き大の男共が、こうした甘味品に夢中になっているからだ。それは我々の食餌の十分な足しになるような物ではないが、暫くは胃を満たすし、実はそれだけでもめでたいことなのだ！我々のグループのウィルツとウィドュワーが菓子類を我々の組の一部に分配するので、我々の居場所は時々まさに菓子屋かワロン（屋台）そのものとなる。ワロンで売られている物が「不潔」だという観念は今や永久におさらばだ。以前には、何か訳の分らない伝染病に罹るに違いないという恐怖感を抱いていたが、なんと馬鹿げたことだったろう！

ハウゼル

1944 年 6 月 2 日

いずれにせよ昨夜のプディングはうまかった。そしてまた腹一杯で床についた。食糧事情はここ 3 週間の間にかなり改善された。個人的な現金購入だけでなく配給食糧が多くなったことによって夜中に空腹で目が覚めることも無くなり、また目眩もおこらなくなった。

ヒール

1944 年 6 月 3 日

国際赤十字社の木箱 290 個が届いた。すべてダンボール箱にきちんと梱包されていて、その中に 135 品目入っている。1 箱を 9 人で分ける。辺りは興奮状態で、皆はこの有り難い気分転換に子供のようにはしゃいでいる。分配の法則はあちこち様々である。我々のクラブは皆でいっしょに分けて食べる、毎日 1 缶だ。今日分配されたものは、チョコレートと干しブドウ。干しブドウは正確に数えられた。

ボスマン

1944 年 6 月 3 日

国際赤十字社から大量に物資が送られてきた。いつ送られたかは不明。二年たってから小包が分配されることもある。最悪なのは患者が死んでから届く薬品だ。物資はこの土曜日以降に分配されるらしい。今日も少し配られた。物資はダンボールの箱に入っており、1 箱を 8 人で分配。米国人は各自 1 箱全部を貰う。敵が最も恐れていることだ。彼らは貰いたがらず、それを他の者と分ける。我々も分配する。またたくさん盗まれた様である。まずヤップに、それから現地警察に、最後に我々のうちのだれかによって。我々は二人で 1 缶のコーンビーフを分ける、バター1 缶は皆で、それから 1 人につきコーヒー1 缶、粉ミルク 1 缶、チーズとジャム、タバコ 1 箱をもらう。タバコは 1 ギルダーで売る。ある品物はくじ引きされる。私はコーヒーをもう 1 缶貰う、これは仲間のキュブに売る。コーヒーは 2 人分なので、各自 0,50 ギルダーいただくことになる。

ハウゼル

1944年6月4日

米国赤十字社の物資の分配は常になく歓迎された。小包は良質な物資の構成で、きちんと包装されており、何と我々の楽しみができたことだろう。各自 20 本入り 4 箱のチェスターフィールド、またはキャメルのタバコを貰う。その他 4 人につき、バター1 缶、ブイヨン粒を 5 袋、非常携帯食 1 袋、石鹸 1 個、細断したハムエッグ 1 切れ、コーンビーフ 1 缶、豚肉の塩漬け 1 缶、豚肉の細切れ 1 缶、ローズ・ミル・パテ（豚レバー）1 缶、ブドウジャム 1 缶、キャラメル（粉から抽出したキャラメル）1 缶。我々はバターから取りかかった。

スホルテ

1944年6月4日

今日、ようやく米国赤十字社からの贈り物を貰った。収容所社会全体がとても緊張していた。私はついている。トランプで（最後の 2 人）勝ち残ったからで、いいものが当たった。コーンビーフ 1 つ、「ハムエッグ」1 缶、タバコ 1 パック、ブイヨン 1 袋で、全部で約 9 ギルダーの価値（収容所内）がある。たぶん私はもうすぐこの中の何かを売って金を手に入れるだろう。他の者は、トコで生活必需品を手に入れるため、「お湯」を沸かしカップ 1 杯 0,01 ギルダーで売って金を稼いでいるのだ。食事は最近また改善された。米にウビ（サツマイモ）が加わり、トコからチャベ（コショウ）、果物、砂糖、グラ・ジャワ（ヤシ砂糖）、クッキーなどが入手できるようになったからだ。

マイエル

1944年6月8日

4 日の日曜日は、盛大なお祝いだった。米国赤十字社の物資が分配されたのだ！　本来なら物資は 1 人 1 箱なのだが、ここでは 8 人か 9 人で分配しなければならなかったが、しかしそれでも我々はみな喜んだ。こんな特別な事は、我々にはほとんど無かったからだ。缶にきれいに入った粉ミルク、バター、カカオなどを見るだけでも感激だ。まして、西洋の味を再び賞味できるのだから、なにをかいわんやである。

ボスマン

1944 年 6 月 11 日

いくつかの兵舎で、お湯を沸かすために電線を引いて電気器具を備え付けた。ヤップはこのようなことは望んでいないので、秘密を保つ必要がある。目立たないよう、電線を壁と同じように白く塗った。これで兵舎の中で簡単にお湯が沸かせる。

ボスマン

1944 年 6 月 22 日

1 時には小さなパン 1 切れと 1 杯のコーヒーのみ貰える。毎朝、いくつかのパンが届く。パン 1 個を 5 人で分配しなければならない。これは、バタビア石油会社技術部のチェプケマが常に正確にできるよう取り計らう。彼は、分けるのに 1cm に区切られた定規を使う。彼は器用で、ナイフや旋盤や湯沸かし電熱器のための電線など、いろんな道具を作った。

ヤップが今日、電熱器の使用を禁止した。密告者、NSB 党員のやつかヤップの取り巻き連中が手を回したのだ。ヤップが兵舎の中に入ってきて、電熱器が隠されている正確な場所をすぐに見つけた。持ち主はヤップに容赦なく打ち据えられて、打ち身と外傷を負った。今や電熱器は全部取り払われなくてはならない。室長が責任を問われる。だから、我々は電線も取り除き、電熱器はもう使わない。残念だ、今ではコーヒーを入れたり粥やプディング（大豆粉の）を作るために、外の焚き火でお湯を沸かす必要がある。さいわい火はまだ焚いてもよかった。

ボスマン

1944 年 6 月 25 日

電熱器がなくなったので、今朝はお湯のためにカップ（ある人は本物のカップ、ほとんどは鉛のカップ）を持ってアルン・アルン（中庭）に行く。そこには水道の蛇口があり、時々お湯もある。火にかけられている大きな釜があった。失望、お湯がない。火の周りにはたくさんの人がいる、それをあちこちで見かける。朝まだ暗いければ、独特の感傷的な感情を呼び起こす。

ボスマン
1944年6月27日

それから洗濯というイヤな仕事が私を待ち受けている。フォーレンカンプから缶を借りて、蛇口から水を汲み、仕事にとりかかる。夕方には裁縫の仕事がある。近くの朋輩、ジョクャの高校の先生だったブールウィンケルからズボンを貰う。古いパンツ/ペンデック（短い）に、古い布きれを当てる。枕が破れているので、縫い合わさなければいけない。

ヒール
1944年6月27日

グループがひとつココナッツ油と石鹸を製造している。ココナッツ不足のため、非常に不規則的に働いている。ベーコン1切れを貰ったので大豆粉を使ってパンケーキを焼く。すばらしいご馳走だ。

ボスマン
1944年6月28日

白砂糖が入荷した。分配しなければならない。簡単な秤を作った、これで皆自分の分け前をもらう。各自300gだ。

ボスマン
1944年7月4日

今朝、ブールウィンケルに会った。彼は私に白い長ズボンをくれる。もうほんの僅かの衣類しか持っていないし、それもほとんどすり切れているのでとても有り難い。多くの者がそうだ。衣類がなくて上半身裸でうろついている。ある者は路上から直接ヤップに連行されたから、その時身に付けていたものしか持っていない。ほとんどすり切れてしまった衣服は、いろんな色の布きれが継ぎ当てしてある。しかしまだまずまずの格好をしている者もいる。

ハウゼル
1944 年 7 月 5 日

服の修繕で忙しい、シャツの襟だ。衣類が底をつき始める。

スホルテ
1944 年 7 月 5 日

最近、食事が本当に改善された。私も次第に健康になり気分が良くなる。というのも、この 1 ヶ月で思いがけなく少し太ったのだ（28 日間で約 1.5kg）。この食生活でだ。不思議、驚きだと言えよう！

ボスマン
1944 年 7 月 6 日

7 月 4 日に注文をした。注文が整えられる。室長に提出しなければいけなかった。室長はそれを収容所執行部に伝える。中国人 1 人と印欧人数人が注文物資を荷馬車で運んできた。まだ金を所持している者は買うことができたし、持たざる者は見るだけ。数日後に注文物資が到着した、今日もだ。タバコ、黒砂糖、ケチャップなど。私の浴用のサンダルがこわれた。革と釘を入手してみよう。探して修繕することがたびたびある。

ハウゼル
1944 年 7 月 12 日

野菜供給が突如増加、我々の設備不足の炊事場では扱いきれない。昨日、1 人 1 株のサウィ（白菜）をもらう。今日、それでサラダを作ったが、あまり味が無い。

ヒール
1944 年 7 月 15 日

3 度煮詰められた骨で煮汁を作る、骨はまず細かく刻まれる、そして何か調味料を入れて味付けする。こんなこと、前は絶対やらなかった。骨は炊事場で一回煮詰められたもので、一部は

二回目に煮詰められて豚用、そのあと 3 回目煮詰められて我々が貰う。骨を貰うのに順番待ちしろ。多くは奇妙に腫れた顔をしている。炭水化物過剰とたんぱく質不足のせいだ。

スホルテ

1944 年 7 月 22 日

アリ・ドンク（収容所仲間）の奥さん（オランダ）の誕生日だったため、今日は特別な日だった。そう、哀れなやつ、当分奥さんとは再会することはない、少なくともここ数年は。ともあれ、彼は何か祝いたかったし、それは大成功に終わった。彼は一日中料理にあけくれ、我々が食卓についた時、（本来）何もないところから彼が演出したものを見て驚いた。改善にもかかわらず、収容所は半ば飢えて、何もないというのに。

彼は小屋中をきちんとした食堂に仕立て上げた。ベッドは壊され、それで長い食卓が作られた。その上には花（ここの野原から最後の花を私が摘んできた）、そこに 20 人が同時に座った（つまり 4 人部屋の中に）。そして、盛りつけが始まった。暗くなる前に全部を終えなければならなかったからだ。灯りはほとんどなかった、夜中ここは空襲の危険があったため、小さな灯りしかなかった。まず最初は、ウビ（サツマイモ）と野菜、ベーコンの脂（最近では収容所価格で買うことができる）で作った皿に 1 杯半のイモ料理。まだ温かくてとても美味しい。

これでもう満腹になった時（慣れてないものは消化できないのだ）、彼は油（ココナッツ）で炒めたロンボック（唐辛子）と玉ねぎ入りの本物のナシィ・ゴレンを持ってきた。思わず喜びの歓声があがった。皆、昼食用の米を供出しなければいけなかったにせよ、我々はそれを利子付きで返してもらったのだ、大変驚いた。この部屋の前を通りかかる誰もが唖然としてつばを飲み込みながら物欲しそうに見ていく、ここでは見ることもないような演出と量なのだ。アリは言った、そう、手段さえ知っていれば･･･そして、多少の不正は許される、収容所の中にいる一番偉い者さえも嫌がってはいないのだ。ともあれ、腹ごなしのために、次に本物（チェスターフィールド）のタバコ。米国救援物資のやつだ。それから急いで後を続けなければならず（夜になる前に）、1 人 1 枚半のパンケーキが続く。ココナッツ油で焼いてあって美味しい。

これら油っこい料理でむかむかしていたのだが、それでも何がなんでも食べてしまう。そして、「大事な事を一つ言い残したが」巨大なパンプディング。病棟の巨大な洗濯桶で作られたもので、あるやり方で用意された（発酵した）ピーサンが入っていたために、本当にラムの味がした。そう、我々はここで熟練料理人とさえなったのだ、私もフン・クウェーメールで美味しいプディングだって作れるのだから。たそがれの中、プディングがブリキ皿にひっくり返されたとき、我々は絶対につぶれてしまうかと思ったが、プディングは素晴らしく固ま

っており、バンザイの歓声が起った。プディングはとても美味しく、それからすこし話しつづけた後、夜になる前に取り壊してしまうため、そしてこの精力的な労働日の後に必要な睡眠のためのベッドを組み立てるために我々は出ていった。

すべての点で食事は大成功で、我々は満足しきって、自分のテンパッ（寝場所）に戻った。忘れられない日でもあった。そう、この収容所で本来何も持たず、何ももらえず、非常に少ない食糧のことを考えるとこれは過度の贅沢だった。私は少し欧州に思いを馳せた。そこは、たぶんこの戦時下、すべてが豊穣なこの国にいる我々よりもおそらくさらにひどい状況なのだ。神よ、世界中に早く平和と繁栄を与え給え。

ボスマン

1944 年 8 月 1〜15 日

5 人の小さな部屋で、我々は定期的に週 2 日フン・クウェープディングを作る。各自何かを供出する。黒砂糖、フン・クウェーメール、医者が患者に与えるビタミンたっぷりの栄養飲料。我々のうちの 1 人、バタビア石油会社にいたチェプケマがたいてい作るのだが、彼はとても器用に作る。デ・ワールからよくパンを買う。彼は、解放されたあかつきに 30 ギルダーを返済するという約束で、或るフォスから 10 ギルダー借りた。私も彼に金を貸したが、そのうち 10 ギルダーを返してもらった。2 ギルダーまた余分に貸したので、彼は今私に 5 ギルダーの借りがある。

ヒール

1944 年 8 月 2 日

誰かが知らずに危険なケチュブンの葉[8]を食べて失神した。胃の洗浄が間に合って助かった。ふぅ、空腹だものなあ。多くの者がゴミ箱の周りをうろつき、ゴミを掘り起こす。犬を食べるのも常識である。

スホルテ

1944 年 8 月 20 日

完全に救いがなく絶望的な状態だ、今や野菜もどんな形であれ支給されない。入荷するのは生

[8] ケチュブン、ラテン名ダチュラは 1〜2m の高さの植物で、各位に毒を持つ。

の熟してない青臭いパパイヤだけだ。これを料理しないまま刻んで熱いお湯に中にほおりこんで、それが配られるのだ。これを我々は野菜として、同時に「スープ」として受け入れなければならない。煮た、ぐちょぐちょに煮た、熟してないパパイヤ。他に何も、何もない。朝、ほんの少しの粥、パン 1 切れ（極めて小さい）、昼と夜には一口分の米（185ｇ）。これで生きろというのか？　野菜もない、肉もない、どうみても栄養がない。病棟がまた満員なのも不思議ではない！

ヒール
1944 年 8 月 24 日

やっと一度ベーコン 500ｇ、バター500 ｇが買える。なんという味覚。それから誰かからビーフステーキ 1 切れを貰った。手段さえ知っていればだ。それは夜中に囲いの外に出るやつが買ったものである。

ヒール
1944 年 9 月 3 日

約 100 台の様々な型の欧州のベッドが届いた。ソーセージが 40kg 入荷、100ｇ0,75 ギルダーだ。瞬く間に売れた。それから白砂糖が 5 トン。最初の水牛 5 頭が屠殺された。3 頭は他の収容所分、2 頭が我々の収容所、5 頭分のモツは我々の収容所のものだ。

ハウゼル
1944 年 9 月 6 日

財政面が楽になるよう取引を始めた。スルューファールトのシーツを売って 2,50 ギルダーを稼いだ。成功する見込みはあまりない、私には「商売」の才能はない。配給者が外部と接触していたらしく配給が戒めとして停止された。

ヒール

1944年9月16日

食糧をもっと増やすよう要求してヤップに迫る、答えは、もっと祈れだった。万歳！トコが再び開いた。入荷したバラン（物資）は、玉子、クウェー・マンクック（米粉ケーキ）、ロントン（バナナの葉で包んだご飯）。ロントンはとても安価で、250g で 0,10 ギルダーだ。それから小さな袋に入った氷砂糖が一山。これは兵隊の非常食だという。

スホルテ

1944年9月23日

身に纏う衣服はもう何もない、全部ぼろきれ、布きれになってしまった。札つきの困窮だ、我々はほとんど皆「パリのぼろきれ回収業者」のように歩き回っている。

ハウゼル

1944年9月26日

米事情が少し改善される。4日に1度ぐらいは300gの焚いた飯をもらう、他の日は200gだ。日曜日には650gのナシィ・ティム（お粥）。この規則が継続することを願う。

スホルテ

1944年10月17日

後から分かったことだが、トコが当分閉鎖されたままだという。しかし、ベーコンのような品物はまだ貰える。しかし、驚くなかれ、100ｇが 2 ギルダー以上もするのだ。高いぞ。金の無い者は、なにがしか所持している（どうやって手に入れるのだ？）他の者がおいしそうに食べているときに、それを眺めていなければならない。こいつはこたえる！

ヒール

1944年10月21日

空腹な者幾人かがパパイヤの幹を削って煮て食べるのを見た。イースト不足のために 2 日間パ

ンがなく、その日は 2 度粥を食べた。多くの者たちにとってはとても食べられたものではない、泥の池だ。

ヒール
1944 年 10 月 22 日

5 分の 1 切れのパンをすでに 2 度売った。その代わりに配給のロントン（バナナの葉で包んだご飯）をいくつか買う。またかなり痩せてきた、雑役のない者、密かな収入のない者は皆そうだ。野菜の畝をいくつか作った。収容所からほとんど野菜は貰えない。私の畝はうまくいっているが、75%を収容所に渡さなければならない。しかし、ここでは不正をすれば何とかなる。

ヒール
1944 年 10 月 23 日

金を手に入れるため、今日、初めて商売をし、スープと酢漬けの豚の脳を売った。まあまあの稼ぎだった。

スホルテ
1944 年 10 月 26 日

多少の金銭を手に入れるため、まだ持っていたもの、服、腕時計から毛布に至るまで売らねばならなかった。これで、必需品の砂糖などをトコで自費購入するのだ。しかし、この悲惨なおかしな状況が、我々の中の「豚ども」によってひどく乱用されている。そいつらは自らを「商人」と称して、かなりの稼ぎになる我々の結婚指輪をかぎつけ、我々から妻子の名前や思い出を取り上げようとしているのだ。そう、盗みとも言える、金で買えるものでも弁償できるものでもないのだから。悲惨さ、惨めさ、病気のため為さざるを得ない。驚くべき有り様だ！

スホルテ
1944 年 10 月 26 日

ここではバラン（物資）は不安なほど恐ろしく高値だ。100 g のコーヒーに（不足のため）2,50 ギルダーを、ベーコン 1 切れ（1 オンス以下）に 2,50 ギルダーを要求する。本当にばかげ

ている！チミンディで 0,10 ギルダーのパンが、ここではパンのない日には 1,25 ギルダー、1,75 ギルダーで売られる。狂っている。売る者も買う者も狂っているのではないか！

スホルテ

1944 年 11 月 10 日

パンを焼くためのイーストがもうなく、ヤップがイーストを購入しないということが収容所中に知れるところとなった。イーストをつくるために小便が集められた。考えてもみろ、昔を思えば誰がこんなことを思いつき、考慮し、まして実際やろうとしたか。そう、戦争というのは奇妙な手段を強要するものだ。この前の世界戦争ではドイツの塹壕でネズミを食べたことを思い出す。

ハウゼル

1944 年 11 月 15 日

入れ歯が売れた、しかし両方の奥歯は残っている。ウィム・ムルダーによって正味 33 ギルダーで。今月 10 ギルダーが支払われなくも、とりあえずは助かる。

スホルテ

1944 年 11 月 21 日

ある雑役では、かなり密かな取引と闇商売が行われている。前にもすでに書いたが、腕時計、ペン、それから特に衣服が取引されており、中でもチミンディⅡ[9]では、大金の儲けがあり、僅かな時間に数百ギルダー（数千ギルダーの者さえいる）を懐に入れている者もいる。前大戦の戦争大尽[10]時代のようだ。そうやって我々のなかのひとり、巡査部長のデ・ラウターも金を手に入れている。皆最初はこきおろしていたが、後になって考えてみると、それは、かなりの危険を伴っているものなのだ。バラン（物資）やお金をヤップに取られることもあるし、ヤップから受ける素晴らしい処罰も忘れちゃいけない。

---

[9] チミンディⅡとチミンディⅠはチマヒからの多くの抑留者が強制雑役した場所である。これらの場所は同時に異なったの任務を行った。

[10] 戦争大尽。オランダでは第 1 次世界大戦（1914～1918）の闇取引を指し、闇商人らは欠乏食糧などの生活必需品などでボロ儲けをした。

ハウゼル

1944年12月18日

また日曜日。やっと10ギルダーが支払われた。まだ横浜正金銀行に163ギルダーある。

ハウゼル

1944年12月25日

クリスマス第 1 日。雑役は休み。クリスマスの献立は、7 時にスープ 400cc、10 時半に少し甘いコーヒー250cc、11 時半にパン 4 分の 1 切れ。1 時にラードの少し入った豆のスープとレストランの 0,25 ギルダーのラード入りミーフンスープに病院からのロントン（バナナの葉で包んだご飯）が加わる。6 時に 300g のご飯（ロントン 2 つ）、50cc サンバル、2g のカチャン（ピーナツ）、150cc の蒸したバービ（蒸した豚肉）と 250cc の野菜スープ（すなわちお湯で煮た野菜）。十分にうまく料理されていて、満腹。

ヤンセン

1944年12月28日

それから、2、3 日前に 8,50 ギルダー（横浜正金銀行からの給付金）を便所に落としてしまい、腕時計を売る羽目になってしまった。僕が時計の上に転んだので、時計は壊れていました。収容所では修理できません。オランダ人収容所所長に 25 ギルダー貰いました。非常に残念ですがしかたありません。ここではお金が無くては生きていけないのです。

ヒール

1945年1月1日

5000ギルダーが特配食にとっておかれた。献立は完璧だった。おいしいナシィ・ゴレンと豆スープ。皆満足した。ここ最近、ほんの少しのニュースもない。新年が来た。

ハウゼル
1945 年 1 月 3 日

ひどい空腹だ。パン 10 分の 1 切れを 0,20 ギルダーで売り、労賃 0,15 ギルダーと合わせて一つ 0,12 ギルダーのロントン（バナナの葉で包んだご飯）を 3 つ買う。つまり 1 日 0,01 ギルダーを追加することで何とか食べ物にありつける。

ハウゼル
1945 年 1 月 11 日

昨日の夜、災難が起こった。私のパイプがこわれたのだ。修理できるかもしれないが、できなかったらどうすればいいんだ！

ハウゼル
1945 年 1 月 12 日

チミンディⅡの闇取引の処罰として、トコが 2 月 10 日まで閉鎖となる。

ヒール
1945 年 1 月 16 日

食糧事情が非常に悪い。野菜はほとんど入荷なし。ロバックスープ（大根のスープ）など、完璧に不味い。皆、飢えで腹を鳴らしている。スープ売りは結構儲けている。残念ながら多く者がそれを悪用している。

スホルテ
1945 年 1 月 20 日

この収容所の英国人がヤップから突然 75 ギルダー贈与され、月々10 ギルダーの分割で給付される。そして、ちょうどその次の週、「オランダ政府」代表から「オランダ人」（思いがけない承認）に約 8,40 ギルダー給付される。他の国の者にその残金を利用させようという我々の意見はヤップに却下された（1945 年 1 月 19 日）。2 年半の惨めな生活の後、この特別な状況は

誰のおかげだと思えばいいのだろう？ヤップはずっと我々を誤魔化して給付を差し止めていたのだろうか？

ヒール
1945 年 1 月 25 日

飢餓状態から、トコ開店時間予定繰り上げが願い出された。ヤップによれば、食糧増の要求はばかげたことなのだ。政府が決めた割当なのだから。

ヒール
1945 年 1 月 28 日

我々の小さな菜園が取り上げられ、今や班のために、つまり収容所のために 5 人で働くようになった。収穫の 25％をもらう。

ヤンセン
1945 年 1 月 28 日

国際赤十字社から各自 8,50 ギルダーを貰いました。我々5 人のグループはとてもつましくしています。もちろんヘルベルトは少し余計に貰えます。僕は最後の金が無くなるまで書き留めます。僕たちがけちだなんて思わないで下さい、ただ節約しているだけです。僕はタバコなど売ることによって、まだなにがしかのお金を稼いでいます。これでおよそ 30％の儲けがあります。でも食料は、特に砂糖はほとんど自分用にとっておきます。

ヒール
1945 年 2 月 12 日

トコがまた注文できるようになった。注文が 3 万 5000、男たちとトコによってさらに 3 万 5000。

ハウゼル

1945 年 2 月 16 日

昨夜、素晴らしい 2 回目の分配があった、もっぱら米だ。1 日中食事が話題にされる。他のことを考えたり、その考えから抜け出すのが困難でさえある。多くの者が、最後に結局負けてしまうのではないかと恐れてふさぎ込み不安におののいている。死亡者が多い。醜い傷と食糧不足による他の兆候、ほぼ例外はいない。

ハウゼル

1945 年 2 月 24 日

腹一杯でよく休養する。グヌン・ボホンから食糧をたくさん持ち込めて、クトゥパッ（ちまきご飯）2 つとロントン（バナナの葉で包んだご飯）2 つを買う。金が見る見るうちになくなってしまう。

スホルテ

1945 年 3 月 5 日

空腹にかられたこと、特に病後には自衛本能から、そして最終的に「指輪が戻るより、指輪なしでも夫が家に帰ってきた方がいい（妻にとって）」という皆の口に上る意見に心を動かされて、私は結婚指輪をこの指からはずすことにした。まだ決心はついていないが、45 ギルダーとはとてもそそられる。神よ、私を許し給え（私はこの指輪をし教会で結婚した）、指輪がなくなったら、それはもう仕方が無い！ミアは私を責めないだろう、そう願う。なぜなら同じ立場なら（特に子供のことを考えて）、私は絶対彼女を許するだろうから。それに、私は、ひどく痩せてしまった古い仲間のピーターセを食べさせてやることもできるのだ。とはいっても、私は「為すべきか、為さざるべきか」と幾夜も思案にあけくれた。万一指輪が売れずに戻ってきたときには、残念がらずにもう売ったりしない、そう思って決心した（5 日後にだ）！我慢に我慢を重ねた後、そのニュースが届いた。45 ギルダーで指輪が売れた！（諸経費が引かれた後）43 ギルダーが私に手元に残った。

スホルテ

1945 年 3 月 17 日

不正、そう、私も食糧を入手するためにあらゆるやり方で商いをする。ここでは、皆自分のことは自分でやる、誰も助けてくれはしない、必要ならば他人を押しのけてでもという規則がまかり通っているのだ。誰もが皆しているのだから。

ヒール

1945 年 3 月 17 日

雑貨やタバコなどが買えるワロン（屋台）が収容所に設けられた。男たちは注文をすぐ忘れるのでとても便利だ。盛況である。すでに数日間、熱湯を売った、売れ行き上々だ。正規の釜炊班には木材がない。私は 300cc を 0,02 ギルダーで売っている。

スホルテ

1945 年 3 月 18 日

この日曜日は、国際赤十字社の小包が届いたので（3 年間で 2 度目）、なんだか特別の日だった。静まり返った深夜に、小包を駅から取ってこなければならなかった。なぜだ？ともあれ見通しは明るい。しかし何を貰えるのか？また待つのみだ！

スホルテ

1945 年 3 月 25 日

衣類が心もとなくなってきた。最近では、ある人が収容所や組の中をパンツ 1 枚で歩いているのさえ見かける。他のやつら（髭のある）は思いがけなく仕立て屋になって、古い蚊帳や化粧着などから超実用的な服を作り出している。

私は長いことボロ服を着ているが、日曜日用としてだけ、かなりきちんとした白の揃えの服を持っている。つぎは当てられているが、しかし、きれいでこざっぱりとしている。こんな状況では、私がまだきちんとして見える、と褒められた。いい気分、勇気づけられる。

ハウゼル
1945 年 3 月 31 日

東京からの認可があって、国際赤十字社の小包が分配される。

ヒール
1945 年 4 月 13 日

スープと豆で最高の売上、今日は 63 ギルダーだ。上々である。かなりの金が補充食糧用に残る。みんな食べろよ、払っただけの価値があるものをお客さんはみんな手に入れているのだから。

ヒール
1945 年 4 月 14 日

ルーリンク雑役班で衣類取引のことでまた喧嘩騒ぎ。トコ閉鎖と脅される、すべての注文が取り消された。

ヒール
1945 年 4 月 15 日

トコが本当に閉鎖された。今朝、ヤップが水牛、野菜、ウビ（サツマイモ）を返送してしまう、野蛮人め。そのうち報いをうけるだろう。

ヒール
1945 年 4 月 16 日

皆、空腹のためにうめいている。ウビ（サツマイモ）分配も止まってしまったので、400cc の水粥、パン大きめの 1 切れ、米 200g とスープ。1 日分の量にしては多くない。死人は竹の棺に入れられて永眠場所に行く。私は休む、今や世界にはこの悲惨だけではなくもっと大変な悲惨もある。だがこんなことはあってはならない。ヒキガエル、カタツムリ、トカゲが大きく取引されている。

スホルテ

1945 年 4 月 19 日

食事は下降線をたどるばかりで、トコが闇取引事件のため何度目かにしてまた閉鎖。これは、バラン（物資）の配給がもうないということで、さらに悲惨だ。死亡者の目録が増加、昨日は 1 日で同時に 10 人が名簿を読み上げられた。この収容所のみで平均 1 日 6 人だ。

ヤンセン

1945 年 4 月 23 日

ここ数日、カタツムリやヒキガエルを食べています。ヒキガエルは申し分のない食糧で、栄養豊富です。皮と 3 つの排出管ー2 つは頭に、1 つは尾にあるーだけに毒があります。僕たちはヒキガエルスープも売ります、そうでもしなければ配給の豆スープが購入できません。でも今では配給も数日間無しです、だからヒキガエルスープを自分たちで食べます。兵補たちによって特に衣類の密かな取引が多く為されています。

ヒール

1945 年 4 月 27 日

さらに多くの砂糖と豆が入荷。持たざる者のための新しい規則ができた。これらの人は、豆 1 杯 0,10 ギルダー、それから追加注文で、制限なしに 1 杯 0,50 ギルダー、この方法によると 3 杯分で一杯平均が 0,35 ギルダーだ。腹にたまるものだし、同時に貧しい者たちが安く食べ物を手に入れる。昔の値段は 0,30 ギルダーで、この方法で 0,18 ギルダーが基金から寄与される。興奮した雰囲気、豆と砂糖の雰囲気だ。

スホルテ

1945 年 5 月 1 日

密かな取引のことが話題になる。蒸気の、否電気のバト・ジャジャ雑役でのことで、いい儲けになるのだ。ヤップにガタガタ言われる危険はもちろんあるが、しかし、1 日で稼ぐ額は想像を絶する。こうやって、私は、雨合羽、カーキズボン、ブラウスの 3 品の生地で 1 日に 100 ギルダーの純益をあげる機会があった。もちろん、収容所で「たらふく食べる」ためのものだ。理解できないだろうが、外のごく普通のクロモ（一般人）やほとんどすべての現地人が身震い

するほどの銀行券の束ーいや一山とも言えるーを持って歩いているのだ。金は価値がない、全然ない。現地人がそれをどこから手に入れたのか、それから我々の粗末な、古い、不潔な衣類が外部ではどうしてあんな価値があるのか、まったく理解できない。外にはもう何もないのだろうか？　私のシャツが 40 ギルダーだったのだ。本当か？我らの昔の愛する蘭領東インドはどうなったのだ？

ヒール
1945 年 5 月 9 日

今日、米国の小包が分けられた。タバコ 1 箱、石鹸 3 分の 1 個、チョコレート 3 分の 1 枚、チューインガム 2 個、角砂糖 14 個。若者たちには、タバコの代わりにチョコレート。

ヒール
1945 年 5 月 15 日

部署のリーダーの間で、4000 枚の衣類が分配される。これも国際赤十字社からの物だ。素晴らしい品物だ。

ヒール
1945 年 5 月 17 日

外部で様々な品物を売ってくる男たちによって、金が収容所内になだれ込んでくる。売るものを何も持ってないやつだけがすごく悲惨だ。雑役を通じて、外で多くの者が自分の持ち物を売っている。足許を見られて、実際の価値以下の金しか手に入らない。砂糖がまたたくさん入ってきた。109 トンがあちこちに非常用として貯蔵された。ルートが今日、400 g の米を持ってきた。靴の中から米、それから白砂糖 1kg が入った袋が足の間から出てきた。彼はあひるのようによちよち歩いた。こうして皆ヤップを欺こうとしている。

スホルテ
1945 年 6 月

もう何ヶ月も、約半年の間石鹸を見ていない、ヤップからはもう支給されない。洗濯は、ただ

単にゆすぐだけを意味する。臭わなければ、そして少し清潔ならばいいのだ。

スホルテ

1945 年 6 月

埋め合わせとして 1 日約 500g のウビ（サツマイモ）が支給されているから（如何せん金は支払う、最近ここでは、最終的にほとんど自分で食事に金を出している）最近では食事がかなり改善された（突然）。このウビを交換したり売買したりすることで、可能性が広がり、私は（少なくとも私自身）、夜に「本物の」空腹に悩まされることがなくなった。前は、180g の米と少しの野菜水だけで、怒り狂いそうだったのだ。

ヒール

1945 年 6 月 9 日

何人かの者は服を多く持ち過ぎているとヤップから思われ、一部を供出させられた。1 人につきシャツ 3 枚、ズボン 3 枚、上着 1 枚、雨合羽（笑わせないでくれ）1 枚、パンツ 3 枚、寝間着 2 枚、帽子 1 個、靴 2 足、カバン 1 個、マットレス 1 枚、シーツ 1 枚、ハンカチ 3 枚、靴下 3 足、タオル 3 枚、セーター1 枚を所持してもいい。誰がこんなに持っているというのだ。私が持っているのは、シャツ 2 枚、ズボン 2 枚、パンツ 1 枚、擦り切れた靴 1 足、カバン 1 個、マットレス 1 枚、ハンカチ 5 枚、半分のタオル、ひどい継ぎ当てセーター1 枚で、これで全ての用を足す。それから空缶いくつかと、がらくた。乞食に施すほどの量もない、ほとんど皆そうだ。

ハウゼル

1945 年 6 月 9 日

また 1 週間が過ぎた。飢餓週間だ。我々の 1 日の献立は、朝食 400cc の粥（大部分がガプレック）（乾燥キャサバ）。12 時に 160g の丸パンと 6 時に 200g の米と 200cc の水に入った野菜。闇市場では丸パン 1 個が 3 ギルダーにまで値上がりした。

ヤンセン

1945 年 7 月 22 日

ヘルベルトと僕はとても快調です。ヘルベルトは 1200 g 太ったし、僕も元気です。先週、生活費を稼ぐために、僕たちはおよそ 20 ギルダーを儲けました。ボホンで買える食糧－大抵は魚－を売って稼ぎました。1kg の魚を 21 ギルダーで売る事ができます。一種の塩漬けの魚で、親指くらいの長さです。これを 1 匹 0,16 ギルダーで売って、10 ギルダーの儲けを得ました。

就労状況

収容所報告書

内部及び外部の雑役を合わせ、これら諸々の雑役が収容所内部組織に及ぼした多大な影響は、一般雑役リーダーＪ.Ｊ.N.M.ファン・モル氏監督のもと、特別に「労働部」を設置する誘因となり、同氏はこの多忙かつ全く有り難くない役目を抑留全期にわたり勤めた。

医療部、食糧部、青少年厚生、経理部、班内諸部局の運営に及ぼす雑役問題の様々な事柄に対処するため、1944 年 5 月 25 日に、上記の利害を代表する「一般雑役委員会」が新たに設置され、同委員会は基本的問題に関する情報を収容所監督に提供した一方、班内諸部局と中央収容所諸部局、及び一般雑役事務所間の連結を形成した。

収容所内部組織ではその構成全体において抑留者の協力が要求された。4 号強制収容所は、1 万人の住人を有する町として権力が分散された班及び組の部局に加え、中央一般収容所監督により統制された全面的な内部組織を築き上げる必要があった。対処を要した事項は、食糧の準備並びに配給、病人と青少年厚生、水道設備、電気と建物、道路と下水溝の清掃、農園、娯楽と教育、事務と統計にあった。（重労働を除き）これら内部の雑役には、重労働となる外部雑役に従事できない抑留者が当てられた。

収容所内の作業者総数は 1800～2200 名の間でばらつきがあった。日本人監督は 492 名（炊事場と病院）の就労者のみに 1 日当たり 0.15 ギルダーの報酬を与えた。そのため、収容所監督は報酬の変動システムを導入し、各内部作業者が就労時間と仕事の内容に合わせた手当/報酬を受給できるようにした。

外部雑役は定期的に繰返される作業と突発的な作業に区分され、管理は一般雑役リーダーの監督のもと行われた。通常、これらの雑役従事者は、現金（1 日当たり 0.15 ギルダー）、あるいは食糧（140 グラムのパンの 10 分の 1 切れまたは 5 分の 1 切れ）、あるいは現金と食糧との両方による報酬を日本人から得ていた。緊急命令により 25 名から 300 名の作業員が召集された突発的な雑役（多くが掃除や糧秣収集）の場合には、日本人による干渉が一番多く発生したため、これを軽減する目的で早急な就労が可能な作業者の待機組を導入した。このシステムのお陰で日本人による暴行が大分避けられた。

ほぼ定期的な雑役には、糧秣収集、柵の設置と修理、建物の清掃があり、また農作業、技術的雑役、事務作業、そしてかなり実施された半軍事的な道路工事や土砂の移動作業もあった。後者の雑役は抑留者の感情を最も混乱させた。

農場関係の雑役（チミンディ、グヌン・ボホン、草刈り作業）は取引の機会や補充食を得る理由で非常に人気があった。同時に収容所にとっては、これらの雑役によりウビ（サツマイモ）や野菜などの農作物が収容所内の需要に対応すべく定期的に持ち込まれたことで長

所となった。

雑役に従事した抑留者の総数内には大きな変動が含まれるが、以下に平均値として示した。

内部雑役	2100 人
定期外部雑役	1950 人
臨時外部雑役	800 人
（小計）	4850 人
61 歳以上　350 人	
病人・在室病人	1200 人
就労不能者	800 人
（小計）	2350 人
合計	7200 人
鉄道敷設作業	2000 人
合計	9200 人
平均人員	9455 人

日記の断片より

ボスマン

1944 年 2 月 12 日～23 日

そして自分で衣服を洗濯しなければならない。そのために我々のバラックの前の広場に物干し用ロープが架けられている。そこで洗濯物は日光で乾わくから、洗濯は日常茶飯事のこととして簡単にやれる。また、我らの居場所を掃いて、バケツの水を使ってモップで磨く掃除を交代でさせられる。マットレスは毎朝丸め上げること。そうすればもっと場所が増える。そして、時々トランクや身の回り品を外気にさらし大掃除をする。オランダ人のきれい好きは特にここで目を見張るに値する。こんな風にここの暮らしは過ごされる。ヤップは兵舎の前をふたりで夜通し交代で監視することに決めた。いやな話である。しかし、ここでも我々は従わざるを得ないのだ！

ヒール

1944年2月16日

外部雑役者はヤップにもらったタバコをたくさん持って帰舎した。その外にも、米やテンペ（発酵豆腐）の特配を受けた。作業終了後、ヤップは連中を良い労働者と悪い労働者に分け、悪い方を一列に並べ良い方に向かってお辞儀をさせ、トゥリマ・カシ（ありがとうございます）と言わせ、全員がふくらはぎを一回棒で打たれた。彼らは何かしらかすめる物がある向かい側の倉庫で仕事し、多くがズボン一丁で行き、完全着装で戻る。盗んだ蘭印軍服。

ハウゼル
1944年2月26日

きつい雑役をするため、原住民兵士がいる反対側の兵舎へ行った。最初に、竹パガー（竹垣）を設置させられたが、途中で中止となった。その後、「デ・ネーダーランド」[11]などの食器を取り出し、磨いた。

ハウゼル
1944年2月28日

本日、3時からＬＢＤ（警防団）の訓練開始。組毎にふたりで 2 時間の監視。ファン・デル・カイルとともに明朝7時から9時まで監視する。

ハウゼル
1944年3月4日

外部雑役を指命された。7時に粥。8時 15 分前整列。9時 15 分前 500 名がチマヒの町中を行進。町は死んだように静かで、店やワロン（屋台）は空だった。バンドン方向に５km を農場「ゾネフーヴェ」へ向かって歩いた。そこで農作業に従事。眺め良し。壁の外に身を置く爽快さ。あまり成果なく、12 時半に 1 時間かけて帰途に付く。ロンボック（唐辛子）を密かに持ち込んだが身体検査に通る。

ハウゼル

[11] 「デ・ネーダーランド」は、1940 年 5 月まで 2 週間毎にオランダ本国と蘭領東インド間に運航した元「ネーダーランド」汽船会社を示す。

1944年3月6日

ゾネフーヴェ雑役に常任となる。9時にパチョル（鋤）を荷車に載せ行進。何ともひどい準備体制。10時から12時まで就労。お茶。1時に米とスープ。2時まで休憩。2時から3時15分まで就労。お茶。3時半から4時まで就労。どしゃ降りの雨。5時行進。6時帰舎。寒く、食事は少量。

スホルテ
1944年3月9日

飢えは深刻となる！ ヤップは恐らく彼らのために働くことを我々に強制する。かくして、35歳以下の若い労働力が、こことバンドンとの中間に位置するチマヒから８km のチミンディにある農場での作業のため召集された。そこで１日 10 セントを稼ぐと言われたが、実際は一文も貰ってない。その上、我々と全く同じ食事が与えられ、持ち帰りも禁止されおり、平手打ちすら食らうのだ。

ハウゼル
1944年3月13日

ウィム・ムルダーと 12 時から 1 時まで夜警番。午前中、きつい雑役（ゴミ穴掘り）、栄養不良で疲れきり、成果もあまりなし。

ボスマン
1944年3月14日

今日、室長が私に指示した雑役あり。7 時半に兵舎の前で待った。相当長く待たされた。我々は体勢を整えておく必要があった。背中に日光を当てようとした。やっと、我々は軍病院へ向かい、病人の引越のために担架を収容所へ運ばされた。

ヒール
1944年3月17日

おもしろ半分にチミンディへ行く。8 時集合。9 時出発。30 分外で待ち、３km を歩いて 10 時半到着。チマヒはまるで活気がない所。トコはみんな閉まっていた。印人の女の子を大勢見かけた。本通りはひどくでこぼこで、穴を石ころと土で埋めてあった。作業は植付けとパチョル（掘り返し・鋤かけ）等を 12 時まで。10 分間休憩。1 時に収容所の弁当を食べる。 チミンディの住人は山盛りの飯。2 時作業再開。4 時お茶。5 時半終了。6 時半にくたくたになって帰舎。１日当たり 0.10 ギルダーの人夫労働。しかし、結構ぶらぶらできる。あそこのパガー（柵）越しに 1 個 0.05 ギルダーのアヒルの卵をいくつか買った。高いけどあるだけでもまし。そして黒砂糖のかけらも何片か。

ヒール
1944 年 3 月 19 日

常任の者 6 人は向かいにある軍の炊事場で働いている。そして、ちょんぼしたり買ったりした豚肉をたびたび持ち帰り、1 キロ当たり 5 ギルダーで売る。彼らはあそこでは好きなだけ食べれるとのこと。

ボスマン
1944 年 3 月 20 日

今日の私は予備作業員。7 時半に中央収容所事務所まで行かなければならず、他の者が来るまでそこで待たされる。私はジャワ人の植民化について話を始める。我々はそのまま待機させられる。午後 2 時に我々はウビ調理場に薪を積む必要があるのだ。

ボスマン
1944 年 3 月 24 日

今朝、粥の代わりにパンを半分もう。9 時には炊事場の雑役がある。我々はテーブルを囲んで座る。包丁がないので、私は指でインゲン豆を取り出さねばならないのだ。この小作業は 12 時まで続く。

ハウゼル
1944 年 4 月 19 日

手術された目を見てもらうために診療所へ行く。一切苦にならないが、きつい雑役に不合格にされるには好都合な口実とも思える。雑役リーダーとちょっと口喧嘩したことからも、この雑役を止めたた方がいいかもしれない。「不能」でないと診断されたマヤンランデン[12]出身者は私ひとりだった。目の調子は正常だし、雑役従事に不合格とは、これで目的達成。

ボスマン

1944 年 4 月 27 日

グループで今朝、浴場の雑役を受け持った。浴場を掃除し、ごしごしこすって洗い流した。そして水が入ったマンデバック（桶）も空にしてから洗わなければならない。どこも清潔にしておかないと、病気に感染する恐れがさらに広がる。衰弱し、かつ栄養不良のからだではこんな仕事をするのがせいぜいだ。

スホルテ

1944 年 4 月 30 日

ヤップはここの人たちに「アンディール」空港での労働を強制したため、最初、抗議もされたが、すぐにも志願者により台無しにされた。今日、ここの連中を乗せたトラックがカーブで横転事故を起こし、10 人が負傷し、ひとりが重傷を負ったが、アリ・ドンクは幸いにも大した怪我もせずに済んだ。

ボスマン

1944 年 5 月 1 日

何人もが今は床屋になったので、格安にみんなの髪を刈ってくれる。バリカンを持っている者もいれば、ハサミだけ持つ者もいる。また、ヒゲを剃ってくれる者もいくらかいるのだ。

ヒール

1944 年 5 月 7 日

[12] マヤンランデンは、東部ジャワのジェンベル近郊グヌン・マヤンに所在するコーヒー・ゴム農園企業の総称。チマヒ 4 号収容所の抑留者の多くが戦前、同地に居住した。

正式にアンディールでの労働に対し抗議された。しかし、かなり多くの者が食糧の特配を期待して出向きたがる。

ボスマン
1944 年 5 月 9 日

ヤップは我々に 9 時から 12 時そして 2 時から 5 時まで外で働くことを望んでいる。彼らは、何もしない我々が気に食わないようだが、仕事は全然ないのだ。

マイエル
1944 年 5 月 10 日

雑役の回数が増す一方だ。一番ひどいのは、ここ数日前から収容所の者たちおよそ 600 名がアンディール空港近辺の道路拡張工事に駆り出されていることだ。1 日 0.15 ギルダー支給されるはずだけど、これは大抵、作業中の食べ物の特配という形で出され、必ず巻き上げられるのだ。その上、この空港は純然たる軍事施設なので、民間人抑留者に強制は（戦争捕虜も同じく）許されないし、この仕事は栄養不良の我々には到底無理なのである。

私はきのう 1 日中そこに係わったが、自然の中に身を置き、美しい山々を邪魔されず見ることができて気持ち良かった。欧州人 600 人がヤップと現地人監視のもと原住民の労務者のごとく道路工事をする姿を見るのは辛かった。我々の収容所監督はこの労働に抗議したが、いつも通りの生半可さに終わり、このことはどうも致し方ないようだ。

ヒール
1944 年 5 月 14 日

アンディール労働への人気が高まっている。ここで高く売れる砂糖やロンボック（唐辛子）を現地でたくさん買うことができるのだ。

ボスマン
1944 年 5 月 20 日

パンは我々の中から指名された者あるいは自分から名のり出た者により、多数の班に相当するよう少量づつ厳密に分けられる。そして抑留する職員（時には本物のパン屋）や志願者が炊事

場近くの収容所軍製パン所で焼く。我々からの調理師や炊事場職員も含め、この仕事は全て特配食べ物でその報酬が与えられるので大変人気がある。中々腕のいい中国人たちも作るが、オランダ人ほど上手に取り仕切れない。ヤップは毎朝 10 斤の焼き立てのパンが彼らのために確保されていることを条件に製パン作業を認めた。

ハウゼル
1944 年 5 月 23 日

今日は部屋の雑きんがけの当番。これは毎日順番で行われる。ある日は部屋のタイルの見える所だけとか、次の日はトランクやマットレスの下もとか。だから、外見上はきれいなのだ。

ハウゼル
1944 年 5 月 25 日

厳しい雑役を指示され、端の家屋 - 多分ここは 60 歳以上の者を対象としている - の敷地を片づけた。その後、米国赤十字社の木箱（約 400 個、傷病戦争捕虜 4 人に付き 1 個）をトラックに積み、軍用グーダン（倉庫）へ運んだ。

マイエル
1944 年 5 月 25 日

ヤッペン用のチマヒの収容所で使う記録、カードシステム等のタイプ班で 1 週間働く。これで 1 日当たり 0.15 ギルダー稼いだし、収容所の外にある事務所で仕事をしてたのでちょくちょく何か買う機会があった。

一番体重が少なかった時の 48.8kg から今は 51kg になった。僅かなもので早く回復できるのが幾らか慰め！

現在は、10 日間を毎日 4 時間、炊事場で野菜の皮むきをやっていて、これで 1 日 0.05 ギルダー稼ぐ。そんな訳で、今はタマネギ、ロバック（大根の一種）、ワルー・シャム（タイかぼちゃ）等を処理するのがとても上手になった。

ボスマン
1944 年 6 月 4 日

4 人でアルン・アルン（中庭）で雑役を行うこと： デ・ワールドと私、ファン・サイエンとファン・レーフェルデン。 1 日おきに毎回 9 時から 12 時と 2 時から 5 時まで。ここに後で何か植えるための土作業。時々、何もすることがない。路上の雑役。

ボスマン
1944 年 6 月 16 日

昼食後、我々の兵舎内の物全部を日光のさす原っぱへ持ち出さねばならない。部屋中掃除しなければならないからだ。壁から天井裏までごしごしときれいにする必要がある。埃やごみ、クモの巣は除くこと。マットレスは表で点検しなければならない。ナンキンムシがはびこっているからだ。でも、盗まれることがあるから、誰かそばにいないといけない。1 時頃に掃除が済み、全部をまた部屋に入れた。きれいになった部屋は気持ちが良いものだ。

ハウゼル
1944 年 6 月 23 日

予備の雑役のため待機。だが、直ぐにも召集あり。ニッポン駐屯地の塹壕掘りで、路面を掘り起こさねばならない。

ハウゼル
1944 年 6 月 25 日

日曜の 11 時から 12 時までスコーテルと一緒に夜警番をした。待機の作業者として正門にいると、木材の雑役を指示された。駅で 4 両の貨車にある茶の木を 2 回もバロス近くの材木置場へ。くたくただ。最後のアメリカ製コンビーフを平らげた。

ハウゼル
1944 年 7 月 10 日

ヤップ駐屯地の避難所用の芝を運ぶという不本意な戦時作業を再びさせられた。

ハウゼル

1944 年 7 月 13 日

きのうのお昼に向こう側の日本軍兵営における技術部の作業で手榴弾の爆発により２人の死者と４人の重傷者を出した。無資格者たちの例の遊び事による。

ハウゼル

1944 年 7 月 19 日

印象深き雑役：我々は婦女子収容所へ連れて行かれ、ちょうど明け渡しが済んだところを、13 歳と 14 歳の少年を除いて、女性たちをバンドンの一地区へ。バラン（荷物）の積み込みを指示された。ミシンはすぐにも脇に置かなければならなかった。その後、バンドン地区からの 13 歳と 14 歳の少年たち 300～400 名が監督なしに到着。我々のヤップ警備兵のひとりは、1941 年 12 月 8 日[13]以降、我々の監督の下にあった日本人に対する扱いが非常に悪かったことをこれで又我々に指摘させようと思っているようだ。とても打ちひしがれた気分だ。急遽明け渡しの収容所と若い新入の住人たちを思うと何とも慰めようもない。

ハウゼル

1944 年 7 月 22 日

今朝は駅での雑役。12 両に積まれたクレベからの製パン用小麦粉を下ろした。我々4 人で 3 トンの小麦粉を運搬して、4 人にそれぞれ大カップでコーヒー、4 人に 7.5 セントづつ支給されたのだから我々は高くないのだが、おまけに足に大きい傷もついた。

マイエル

1944 年 7 月 25 日

昨日は強制労働を演じた。今回はここの水泳設備の掃除。竹板を持ったひとりの日本人と数人の原住民兵士の監視のもと、150 名の欧州人がプールの底を磨く姿を見るのは全くつまらなか

[13] 蘭領東インドでの日本占領軍当局は、かつて連合軍がその領土内に民間の日本人を抑留した事実を強調することにより東南アジアにいる民間欧州人の収容を正当化した。

った。

ボスマン
1944 年 8 月 21 日

今日の雑役に 600 名が必要だ。7 時半に粥を食べる。この雑役には私もいた。8 時には監視長へ行かなければならなかった。ヤップによるコントロールでみんなで一緒に立たされることに 10 時までかかった。それから、ひとりの日本人と数人の原住民警官の護衛のもと外に出る。駅へ行き、そこで防空壕を作らされる。地面に大きな穴を掘り、石で防空壕を建設するのだ。他の者は違う場所へ行く。12 時半に我々は収容所へ戻る。

ハウゼル
1944 年 9 月 5 日

洗濯した。数ヶ月前には、きれいに洗った服を着て帰宅し、ベーアに良く手入れされた自分の姿を見せたいと時たま思った。今までこれができないでいる。

ヒール
1944 年 9 月 10 日

新しい雑役。つまり売春宿雑役。作業員はあそこで大工仕事、煉瓦積み、塹壕掘りなどあらゆる保全作業をしなければならない。ある班の者たちは兵補の所でナンキンムシを探させられた。ご立派！

マイエル
1944 年 9 月 10 日

先週、チミンディ（農場）、グダン・ボホン（ウビ畑の耕作）、病院（防空塚の設置）で常勤の外部雑役を何回かした。その際は 1 日中、クーリーやタニー（百姓）のように働くけど、食べ物の特配があるからそのためには何でもやるのさ。重労働も十分こなすことができて、心持ち勇気づけられた。

ハウゼル

1944年9月28日

大雨の午前中、木材の雑役を行った。12 両分の積み下ろしがパン 10 分の 1 切れ。それも長男の誕生日にだ。このみじめな生活がいつまで続くのだろうか？ いつになったらまたみんなで一緒に暮らせるのだろうか？ かわいそうなベーアチェ！

ハウゼル

1944年9月29日

午前中にやっと先週の洗濯をした。雑役に出ずっぱりだったから。午後は竹材を運ぶ。厳しいけどパン 10 分の 1 切れだ。

ボスマン

1944年9月23日

起床後、着替えして食事に行くと、午前中 8 時半から 12 時半まで待機する必要があると聞かされる。それで私は収容所事務所近くにある、ヤップが作らせた小さい建物へ行く。外側には竹が配してあり、正方形で、中には単純な長椅子が置かれていた。中央にテーブルがあった。50 人位分の座席があった。マレー語の本を一冊持って行った。待機グループの者の中に福音伝道師のファン・デ・ボーベンカンプ、又、修道士になった時にウィンフリード（＝平和獲得者）という名前となったローマカトリック信者の教師に会った。そして、カトリックの教育誌を取り出し、その中でドイツ占領下にベルギーの司教が敢えて行ったことに関する記事を読んだ。偉業だ。知り合いとなごやかに語り合った。私の兵舎へこっそり行った。中国人用の図書館へも行った。どこでもお茶が出た。待機組がいる建物でもお茶をもらった。数人の男が大きな飯ごうに入れて持って来た。やっと 12 時半となり、兵舎に戻ることができた。

ハウゼル

1944年9月30日

午前中、駅での雑役。重労働。13 両分の小麦粉と木材を積み下ろした。

ボスマン

1944年10月2日〜15日

この頃、雑役がたくさんある。グヌン・ボホン、そしてチミンディへは毎日大勢が行く。その際、食べ物の特配があるし、金ももらえる。未だ丈夫な者、特に大勢の若い者たちはそこへ行く。私は普通、待機組だが、ここでもほぼ毎日仕事がある。時には道路の掃き掃除をしたり、時には収容所内の草を刈ったりして。

ヒール

1944年10月4日

雑役就労年齢が15歳から50歳までと拡張された。検診では軽、中、重の雑役別に適応するかが見られる。

ハウゼル

1944年10月10日

フォルリンガ（ＮＩＲＯＭ・蘭印ラジオ放送局-スラバヤ）とともに2時から3時まで夜警番。空襲警報。ポスチュマ（肋骨の捻挫）の代わりにグヌン・ボホンのウビの雑役へ行く。結構きつい作業。溝をパチョル（鋤で耕す）、ことのほか満腹に食べた。オンチョム（豆腐料理）2皿を0.20ギルダー、ケトゥパツ（ちまきご飯）6個を0.20ギルダーに加え、収容所のオンチョム。私の分の10分の1切れ、5分の1切れ、3分の1切れのパンをそれぞれ0.15ギルダー、0.30ギルダー、0.50ギルダーで売ったことにより、0.45ギルダー儲けた。

ハウゼル

1944年10月11日

グヌン・ボホンの疲れでぐっすり眠った。今日もそこへ行く。短所は帰舎した後、暗くなる前までのせわしさ（食事、入浴、髭剃り等）にある。

ハイゼル
1944年10月16日

通称チミンディII雑役に召集された。多分、防衛作業だ。

ヒール
1944年10月30日

班菜園の昼間の見張り番になった。その代わりにスープ用の野菜をもらったし、折れた枝や落ち葉を回収することが許された。

ヤンセン
1944年11月4日

僕の報告がまたまた2日遅れてしまいました。しかしながら、敢えてお伝えさせて頂きます。僕たちは朝早く7時15分前に起床します。それから粥を食べます。7時半に僕たちは70名で非常に規律正しくして班の事務所に集まります。8時には500名が正門前に気を付けの姿勢で立ち、僕たちの長であるヤップを待ちます。8時半に作業場へ歩いて行きます。そこでは、耕したり、パチョル（鋤で掘り起こす）したり、ウビ（サツマイモ）を植付けたり、土を移して養魚池や道を作ったりします。僕は鋤を使ってウビを植付けるために苗床を作ります。仕事は午後5時までで、3回の休憩時間があります。特配のパンを10分の1切れとあと3分の1切れもらいます。また、お米を少し買うことも、1日当たり0.15ギルダー稼ぐこともできるのです。

ハウゼル
1944年11月17日

金曜日。チミンディIIの非番の日。早く起きて、たくさん洗濯をする。髪を刈り、髭を剃り、爪を切りいろいろと手入れに忙しいけど、他の日にはこれをする時間がない。一定の雑役を持ってると時間が経つのが早いし、思い悩む時間なんてない。食べ物の特配もあるし、からだの調子も良くなってると感じてる。

ハウゼル

1944 年 11 月 30 日

チミンディ II の最終日。ということは、失業。早く何か他のものが実施されることを望む。

スホルテ

1944 年 12 月 15 日

約 3 週間前から大工さんをしていて、器用さと働きぶりにより既に 2 回も昇格された。まずは収容所を囲むビリックの柵（編んだ竹の柵）を改修するパガー班のハンチョー（リーダー）になった。それがきっかけでその後大工仕事を頼まれた。ブツール（本当に！）、部屋に寝台を作るためにだ。そう、ヤップは 2 年経ってやっと我々が冷たく湿気の多い床から離れる必要ありと認め、それで我々に木の寝台を作らせるのだ。だが、これ本当に我々用かな？

ハウゼル

1944 年 12 月 18 日

病院の雑役。再び、手術室前の防空塚作りで 1 日当たり 0.15 ギルダーとパン 10 分の 1 切れもらい、加えて 1 個に付き 0.12 ギルダーのロントン（バナナの葉で包んだご飯）を 2 個買う。馴れてないので疲れた。

スホルテ

1945 年 1 月 20 日

収容所内技術部の仕事に従事してからというもの、既にいろいろな作業をこなし、この仕事が気に入っている。ともかく、私には自分のからだを維持するための収入があるからだ。たとえば、パン 4 分の 1 切れの特配、そして持ち帰りを許されたくず材は、これを細工すれば何セントかで売れるし、その上、日給に 15 セントだ！ 多くはないけれど、あるだけでも得だし、仕

事は気分転換となり、これは退屈で生気のない環境にあっては必要なことでもある。

現在、防火技術班の「ハンチョー」班長（リーダー）である。これでお金になれば結構だが。これもしかし、私が心地好く思えないヤップの強制でやっているが、最終的には同胞のためだから、取り敢えずそういう気持ちでやっている。昨夜、私は 4 時から 5 時半まで組の防火監視として 1 週間毎（1 時間半）に回ってくる当番だった。寒くてかたがた震えた（それも東インドでだ）。雨が降り始め、風が吹き出した時はひどかった。毛布にくるまっていたけどどうにもならなかった。我々の血液は 3 年も栄養不良が続き、すっかり「水」と化してしまったのだ。

ハウゼル

1945 年 2 月 2 日

フォッキンガから譲り受けて再び半日を病院の雑役。多分、この雑役は本日で終了するらしい。小さなグループひとつで継続されるが、ここに私が押し入るのは無理だろう。物乞いすることは苦手だ。つまりは、新しい仕事が指示されるまで飢えに苦しむことになろう。

ハウゼル

1945 年 2 月 25 日

空襲警報訓練（処理班リーダー）を勤めた。この仕事をできるだけ早く辞めたい。

スホルテ

1945 年 3 月 18 日

1945 年 3 月 18 日にはまた、私は他の大部分の要員とともに技術部の任務を解雇されるという悪いニュースもあった。現在いる 170 名のうち 20 名だけが留まることとなった。しかしながら、私が一時的に受けた便宜さを失うことはあっても、その日の機嫌が良かったこともあって、さほど打ちひしがれはしなかった。だが、終わりは終わり。これからは仕方ないがもっと良好なものを期待しつつも再び普通の雑役に付こう。

ハウゼル

1945 年 3 月 18 日

また日曜日に「エキストラ・ニッポン雑役」に配属され、夜 4 時 15 分前に集合。無料のコーヒーとパンが支給される。暗闇の中を駅で赤十字社の救援物資を下ろし、兵補の兵営へ運んだ。敏速に行う重労働である積み下ろし班に属した。しかし、思いがけない朗報だ。これがいつ配布され、どんな衣類や物資が我々の手元に渡るか非常に興味ある。

スホルテ
1945 年 4 月 6 日

ヤップの命令で収容所の大勢の雑役者を動員して、病院（軍病院）が 4 月 6 日を以って突然明渡された。全部、本当に何もかも以前の婦女子収容所であり元少年収容所のバロスへ移された。家具、寝具一式、病人と看護人、医師、手術患者までもが。大変な混乱状態だった。病人の輸送中に、運び屋が疲労のため倒れてしまい数人が担架から落ちてしまった。重病人のひとりが移動中の担架で死亡した。

新しい宿はひどい混乱を呈しており、路上に物が散乱し、その上を様々な珍奇な格好、それも主にぼろ服をまとった者たちが歩き回ってた。丸で乞食村みたいだ。これが蘭印で繁栄を遂げたことのある欧州人たちとは到底想像がつかない。今後どうなることやら？ 病院用の場所もなく、悲しい、とても悲しい様相だ。

スホルテ
1945 年 4 月 19 日

更に、我々の日本人所長は脳天をつかれたのである。なぜなら彼はあの手この手とほとんど全員を雑役に喚起したのである。そのため 12 歳や 14 歳の少年から 60 歳以上の年寄りまでが路上を重い丸太を肩に走り回るのである。そんな調子で彼は昨日、かなりの数の病人が移され、老人が既に退けられた収容所の総勢約 7000 名より 4500 名も駆り出した。

スホルテ
1945 年 5 月 27 日

この間は、45 人で 2200 俵の米袋を取りに行く雑役をし、4 時間内に 2 回運び、2 回積み上げた。疲れ果てたけれど、驚いたことに初めてヤップから我々荷役者には 3 キロのウビ（サツマイモ）のごちそうによる労に見合った報酬が与えられた。

ハウゼル

1945 年 6 月 17 日〜23 日

「競馬場」にて芝土で戦車の偽物を作る手伝いをした。つまり戦時作業。

ヒール

1945 年 7 月 3 日

一度だけ 7 時半から 6 時半までグヌン・ボホンへ行った。厳しい一日だった。代金と引換えにロントン（バナナの葉で包んだご飯）の小さいのを 5 個と 250 グラムのウビ（サツマイモ）をもらった。強烈な日の下で 1 日中働くには、補充の食べ物が少な過ぎる。出発の時、道のりの大部分を急ぎ足で行かねばならず、ボロをまとった欧州人が飯ごうをガラガラとさせて通って行くのだ。多くの人は収容所に残る。この仕事はさほど厳しいわけでもないが、これもその人の考え方次第だ。

健康状態と医療事情

収容所報告書

1944 年 2 月中に、チマヒ 4 号収容所内の抑留者が約 1 万名に達した時点では、病人の入院や看護についてはまったく関心が払われていなかった模様である。第 4 及び第 9 歩兵大隊の駐屯場跡に収容されたおかげで、抑留者たちにとって衛生事情はそれほど悪くはなく、また前にいた強制収容所と比較するとかなりの面で良好といえた。しかし駐屯場であった当時は、病人はただちにチマヒ近隣の中央軍病院に運び込まれていたため、患者の入院や看護に要する特別な設備はなかった。

抑留者たちは、日本側からの援助を受けることなく、自らの手で臨時に医者や看護人のいる収容所病院を作らなければならなかった。たいてい夜に到着する旅団は、そのつどの移送で経験した過度の疲労と長期にわたる旅程、そして非道きわまる対処が原因で、緊急の入院を要する多くの病人たちを連れともなっていた。約 1 万名の抑留者を収容所に満載する際、日本側は、場所の確保に関して、衰弱しきった抑留者 1 万名のための収容所病院には相当な場所が必要であるということをまったく考慮していなかった。そのため、抑留者は自ら全てを準備する必要があった。数ヶ月中に収容所住人は、特に兵舎をすべて明け渡すことが必要な細菌性赤痢発生期間は、病気の同胞のためにたびたび自分の寝床を明け渡す必要があった。

最も困難な状況下で、非常に短期間に医療組織を設置し強化した医療部の、その優れた活動は大きな称賛に値する。日本の占領者からの治療薬の支給が無い一方、医療器具一式もまったく揃っていなかったため、医療部は、以前にいた収容所から密かに持ってきた微々たる薬の蓄えを使用する必要があった。医療部の度重なる要請にもかかわらず、日本側は定期的に提出される必要薬のリストにもほとんど注意を払っていなかった。彼らが時折支給する薬の量は、家庭の常備薬にも達しなかった。

1944 年 5 月になってはじめて、1943 年 11 月に発送された国際赤十字社からの救援物資が届いたことによって、1945 年 5 月の第 2 次国際赤十字社救援物資が届くまで持ちこたえるのに充分ではなかったが、かなりの安堵感をもたらした。第 3 次国際赤十字社からの医薬品の到着は、1945 年 8 月 18 日であった。医薬品の不足が原因で、数多くの死者が出たことは疑問の余地がない。

４号収容所に集められた抑留者たちの中には、バタビアの医学大学校の教授たち、また政府機関で活躍した経験豊かな専門医が多くいたのは、幸いな状況をもたらした。医療と治療の組織的な事柄で持ち上がる数え切れない問題点は、彼らが非常に専門的に解決した。特に彼らの能力が存分に発揮できたのは、バンドン及びチマヒで収監されている病人の手術や専門医療処置が必要になったため、日本側が 1944 年 3 月にチマヒの中央軍病院の再組織を行な

おうとした時であった。彼らはここではさらに、収容所病院の重病患者を移転させることも計画していたが、中央軍病院に入院可能な数よりも病人の数があまりにも多すぎたため、この計画は一部分しか達成しなかった。

抑留者に必要となる手術の執行や眼・耳鼻咽喉・肺疾患などの専門医療処置が可能なプレアンガ高原唯一の病院である中央軍病院のスタッフは、卓越した任務を成し遂げた。

４号収容所における健康状態は悪化をたどっていたとみられる。1944 年 3 月、1944 年 12 月から 1945 年 1 月にかけて、そして 1945 年 5 月には供給される粗悪な食糧のせいでほとんど回復せず、その為赤痢が何度も繰り返して発生し、収容所住人の抵抗力に大きな悪影響を及ぼした。細菌性赤痢に加えて、大部分の抑留者の死亡原因とされる飢餓浮腫の増加による疾患は、抵抗力の低下と必要最低限の食糧の完全な不足が要因とみなされる。

４号収容所の治療部に関しては以下に述べる通りである。チマヒ中央軍病院の再組織後、強化された 4 号収容所の厚生部の基盤は、医長の監督の下、3 名の歯科医、4 名のマッサージ師、ふたりの包帯製作係、そして眼鏡製造者ひとりのほかに、20 名の班担当医及び看護人と雑役担当者が働いている班担当医師部と診療所により形成されており、全員で 46 名であった。病院は、4 室の大部屋（特別細菌性赤痢患者用の旧厩舎 2 つを含む）、3 部屋づつ仕切られた小屋 10 戸、また衰弱者と身体障害者のための別棟、そして重症の細菌性赤痢患者のために完全隔離された小屋 2 戸で成立っていた。収容能力は 300～350 名で、それは必要なベッド数にはほど足りなかったので、兵舎の病人の多くは常に入院待ちの状態であった。病院は、4 名の医師と 135 名の看護人、ほか 77 名の職員構成である。

薬品部は、調剤所・薬草園・発酵所・電子分解実験室を持ち、48 名で構成されていた。実験部、消毒部を含む衛生部、青少年厚生部、事務部もこれらの組織内において欠くことの出来ない部門であった。

日本当局との連絡も維持し、その多大な管理能力と疲れ知らずの献身でこの収容所にすばらしい厚生部をもたらした J.W.ウォルフ博士が、全医療部の毎日の監督を受け持っていた。5 名の医師からなる医療協議会は、収容所監督に最も重要な医学問題に関する知識の提供をし、また協議会の会長ウォルフ博士とともに、医療関連部局全般にわたっての監督を行った。

医療部の職員数は 400 名近くから 320 名と変化があった。入院した患者以外に、約 350 名のベッド数依存グループがおり、部屋にいる病人の数は 1 日 800 名から 1100 名に達した。診療所には 1 日 600 名から 900 名の患者が訪れた。調剤所では 1 ヶ月 1 万から 1 万 4 千の処方箋が調合され、その主要な部分は収容所内の薬草園で作られた薬品で占められていた。調剤所はまた 1 ヶ月に 6000 から 9000 本分の栄養飲料、また発酵所で製造された 3 万 5 千から 4 万 5 千本の発酵飲料を供給していた。薬草園の作業場で加工されたものは 1 ヶ月ごとに 1500 から 2000 リットルの栄養飲料となり、供給された。歯科医は一日平均 65 名の患者を治療した。

実験室では通常毎日 40 から 60 件の検査が実施された。細菌性赤痢が爆発的に発生した時期には、この検査件数の増加が顕著であった。赤痢の検査のほかに、たびたび栄養障害も

確認され、また同様に収容所住人の血液検査もほぼ定期的に行われていた。

医療部は青少年の健康状態に特別な関心を払った。20 歳までの 1700 名以上の青少年に対しては、青少年厚生部の下で定期的に検査が行われていた。毎月 250 名以上の青少年が総合検査を受け、そして 1100 名の体重が計られた。交代制で毎日 200 名以上の青少年に食糧を余分に与えた。そのために作成される食糧リストは体重測定の結果と青少年の検査により定期的な修正が必要であった。

医療部は定期的に成人男性・作業就業者・その他約 500 名の体重管理をしていた。それに加え、平均体重の管理として毎月 3 兵舎の住人の体重測定を行うと同時に、医師のアドバイスにより成人男性の体重測定が毎日行われた。

食糧部との共同でこの他にも 10 日ごとに収容所食糧を分析した。内蔵・栄養の障害が多く、食餌療法が必要であった。内科教授の指導と毎日の監督、及び収容所食糧部の指導の下、専門食餌炊事場が開設された。医療部が検査した平均身長 175 cm、平均年齢 45 歳の成人男性の体重は、抑留生活中に 67 kg から 59,4 kg に減少していた。平均年齢 18 歳の青少年は 58,8 から 48,9 kg に、また定期的に検査を受けていた平均身長 174 cm、平均年齢 34 歳の収容所内外で常に特配食糧を享受していた作業就業者 450 名の体重減少は、63,9 kg から 55,5 kg に及んだ。この体重減少はまた、身長 1,61－1,70 m、1,71－1,80 m、1,81－1,91 m の人はそれぞれ 12 から 21％、13 から 25％、22 から 30％まで低下しているという比率でも証明されている。

収容所内での死亡者の数だけでは、食糧の完全不足の影響があるため正確な姿の把握はできない。日本人医師によってまだ移送可能だとみなされた収容所内の重病患者たちは、1944 年 12 月と 1945 年 5 月に 6 回の移送（総計 911 名）でジャワ中部やバタビアに送られている。それにもかかわらず 4 号収容所での抑留者の中で、50 歳以下の 133 名を含み総計 738 名が死亡している。どんなに控えめに見積もっても、最悪状況の下で移送された病人のうちの 40％が死亡したとして、4 号収容所で合計 1102 名が死亡していることになるだろう。すなわち 9455 名の収容所の 1 年平均死亡率は千分率で 116 以下にはなり得ないということである。

日本人は死者に敬意を表するとみなされているが、ここで死亡した抑留者たちについて云えばそれはほとんど示されていない。 日本側は非常に几帳面にすべてのひつぎに花輪を捧げていた。死者の数が少なかった最初の 2 ヶ月間は、日本の収容所監督は常に葬儀に参列し、（この時期から死者が一日に数人に増え、すこしづつではあるがまったく怠るようになった）最低限の敬意は払っていた。しかし死者をくるむ布は全く支給されなかった。最初粗悪な木材で作成された棺は、最後の半年ではビリック（竹で編んだマット）で作られたため、埋葬のおり屍が重過ぎることがたびたびあったようだ。墓の手入れに関して、日本側は何の関心も払っていない。10 名の遺族又は友人、そして一人の聖職者が収容所から 2,5 km 離れたレウイ・ガジャの欧州人墓地まで棺に伴うことは許されていたが、そこでは、できるだけすばやく葬儀を終わらせなければならず、休むことは殆どできなかった。参列した軍監督下の兵補（時々は日本人）は、死者への敬意を示す態度はめったになかった。

日記の断片より

ヒール

1944 年 2 月 27 日

我々の組のすぐ前に、ものすごい悪臭のゴミの山があって衛生状態は未だに悪い。このゴミは自治体が持っていくのだが、捨てられる量の比ではない。蝿の害もものすごいものだ。蝿叩きの効果も無し。

ヒール

1944 年 3 月 1 日

一部屋から 13 人の男たちが運び出された、多分赤痢だ。その他にもあちこちで何人か。 まだすぐに動揺するほどではない。

マイエル

1944 年 3 月 1 日

この 2 日間で 3 人のＬ.O.G.抑留者が死亡した。以前Ｌ.O.G.にいた者はみんな 2 回におよぶ移動で余力を使い果たしている。我々は目に見えて衰弱していく。

ヒール

1944 年 3 月 2 日

チマヒ大病院が開設されるようだ。これは非常に良い傾向だ。

スホルテ

1944 年 3 月 3 日

現在すでに食事の量が一人一日米 100 g（夜）、カチャン・カデレ（大豆）が 100 g（昼）、粥 100 g（朝）に減った。何程かの野菜と時々肉を、そして何十日間に一度の果物（もしあればだが）一切れが神のお恵みで得られるすべてだ。そうだ！そうだ！トコは閉鎖された。だから

もう補充食もない。

影響はとどまることがない、特に我々Ｌ.Ｏ.Ｇ.にいた者には！毎日二人かそれ以上の死者がでる。そう、抵抗力がなくなり、もし現実に病気になったら（特に老人たち）一巻の終わり、死が待ち伏せている。絶望的だ。いつまで続くのか。私自身にも 1 年半たった今、影響が出始めた。血は薄く、脂肪と蛋白質の欠如によって活力の素になる良い血液と血球の不足によって、これまでなったことの無いような寒気や冷え切った足が終日続く、そのあとは、一定の姿勢でいると突然腕と脚が腐敗する、まるで弱って死んだように。これが長びいてついには「歩け」なかったり「見え」なかったり、「これ」を克服した人でも約 7 ヶ月はぐずつくという数々の悲惨さの要因となる恐るべき脚気や目の病気に、私も罹るのかと思うと恐ろしい。この期間がこの病気の「転換期」のようだ。こんな状態の中で、夜中には息苦しくなったりしても、毛布を頭が全部隠れてしまうまで引き上げてしまうほどの寒気がした。この暑い国にいるのに。何日か前またＬ.Ｏ.Ｇ.にいた者が亡くなった。あのムーレナースグラフだったか？ その後また他の二人。今は強烈にすさまじい勢いで続出する。

ヒール

1944 年 3 月 6 日

墓地はここから 5 km。死者は 12 人の男達の手で運び去られた。日本人が墓地で冥福を祈った。

スホルテ

1944 年 3 月 9 日

Ｌ.Ｏ.Ｇ.の古いルームメートで、リオウストラートの隣人のソンメルが、足の負傷、それにも増してお椀の熱湯で火傷するという惨事によって入院した。ここには薬も支援品もないので、中央軍病院（かつての軍病院）に運ばれる。彼は重症糖尿病でもあったから、鉛のように重い気分で見送る。神のお恵みを、彼はいい奴だ！ヤップが我々のために軍病院を開設したことはまだ幸運だ。だがそこに薬や医療機器があるかどうかは疑がわしい。それとも重症患者をすぐに送り届けるは、重病人あるいは死亡者の数を目立たなくするためなのか。

ボスマン

1944 年 3 月 11 日

宣教師イーケンが仕切りの後ろ側の部屋で病人のための薬をつくっているのを、たびたびみか

ける。 我々のルームメートのハーゲが死んだ。4 時に埋葬。墓地には（出席できる限り）家族と友人が何人か付き添える。他の人も欧州人墓地に埋葬された。

ヒール
1944 年 3 月 15 日

117 名の病人が病院に運ばれた。病院にはまだたくさんの薬があるらしい。感染者と高齢者の痛ましい行進。

スホルテ
1944 年 3 月 15 日

昨晩便所で二度下痢、私もまた最近流行している赤痢に罹ったのかと不安になる。だが今朝は回復。たぶん昨日（密かに）得た米入りチキンスープと油煎餅のせいだったのだろう。うん、最近はどんなことにも抵抗できない。まったくやりきれない。ほんのすこしの洗濯なのに今朝は疲労困憊。神よ、病気から守り給え。

ヒール
1944 年 3 月 18 日

4 人が死んだ。急激に増えている。

ヒール
1944 年 3 月 22 日

赤痢患者のためにいくつか部屋が明け渡された。病気が蔓延している。 炊事係は特配食糧をもらえないし泥棒が多すぎる。便所の扉が、感染する危険を防ぐために抜き取られた。

ヒール
1944 年 3 月 23 日

軍病院への奉仕者が募られた。一団は荷物を詰め、用意ができる。禁止命令がでて、取り止め

になる。また我々の班の患者が 2 人運び出された。教会が必要にせまられ緊急病棟になる。満杯だ。

マイエル
1944 年 3 月 25 日

赤痢の蔓延はまたひどいようだ、患者は少なくとも日ごとに 25 人増え、病院の場所不足で一部は部屋で臥せていなければならない。幸い、この病気の本性は深刻すぎることはないようだ。しかしほぼ毎日一人の死者がある。

ハウゼル
1944 年 3 月 27 日

61,3 kg だから 2 ヶ月に約 1,1 kg 減っている。他のほとんどの人と比較すると少ないものだ。健康的な食事。

スホルテ
1944 年 3 月 29 日
胃腸病が急に流行してますます死亡者の数が増えている。収容所全体が胃腸病患者で一杯だ。気がかりなのは赤痢の増加である。結局流行しそうだ。各病室では数件の事態が起こり、人々は本気で不安になりはじめている。私はこれらの事態は疲労衰弱からくるとみている。それは食糧事情が大きな理由で、胃腸が絶えず変化する補給食糧を消化できず、特に（固い）皮つきのジャグン（トウモロコシ）は消化できない。欧州人はそんな食べ方はしたことがないのだ。絶望的だ！！またＬ.Ｏ.Ｇ.にいた者たちが犠牲になって去っていく。すでに生け贄が出たこれらの病害が、早急に減少し我々の前から立ち去ることを願おう。先週はこの収容所からまた 6 人が我々のもとから永久に去った、駆けるがごとくだ！

スホルテ
1944 年 3 月 31 日

昨日の朝突然、短期間ではあったが重症の赤痢で、情け深くてエネルギッシュな我々の組長モンゼースが当年 38 歳にして亡くなった。みんなに好かれた気持ちの良い、もの静かな男で、

若い奥さんと小さな子供 3 人が残った。我々にとって大きな打撃だ、そしていつ自分の番が回ってくるのかわからなくて不安に陥る。食糧は手のひらにのるほどの量も重さもないほど僅かで大部屋 12（我々の隣）では、すでに 68 人（大部屋の 3 分の 1）が病院に運び去られ、その間には、担架が行ったりきたりして、多くの人が運び込まれ、そして大部屋は重病人やあまり重症でない者とで身動きがとれない。絶望的になる。人はお互い同士会話もしない、門外漢は大部屋にも入れない（以前は 226 人の大部屋）、雰囲気はすごく陰鬱でみんな黙り込んでいる、実のところ収容所全体の生気が無くなり、ほとんど誰も日中は外にでない。人は寝台とはもはや呼べないテンパット（寝床）に横たわって待つのみ、何をそしてなぜ？人がどんどんやせ衰えていくのが見える。何も残らない、昔は頑丈な男達が骨と皮だけになってしまった。

ヒール

1944 年 4 月 4 日

兵舎の 5 号班で 45 人病気。 病人の数は最初週 13 人からはじまってすでに良くなっている者もいるが 57－150－201－257－203－306 と合計 1087 人の病人がでた。赤痢で死んだ者の数は今までで 18 人。まだ赤痢の徴候がある 1000 人くらいの人間がいると予想される。

スホルテ

1944 年 4 月 7 日

今日、12 人の病人を大病院に運搬する手伝いの奉仕をした。みんな赤痢だ。バタビアで有名な、かなりひどい状態のライケフォルセル司祭の担架を運んだ。40％のチャンスも与えられない（後に死亡の報告あり）。かつては栄誉を持って愛された人が、今はまるで残骸のように下に横たわっている。 あとほかにもＬ.Ｏ.Ｇ.にいた者として見覚えのある 3 人の老人、彼らはすでに死人のような顔付きをしていた。どのような顔付きかを見るのはまったく恐ろしいぐらいだ、ほんとにひどい。彼らこそ当時Ｌ.Ｏ.Ｇ.で 14 号室のウィンケラーと 28 号室のボスマンとして、健康な男達だった。これが続いてはならない。そうなれば 3 ヶ月、いや多分もっと前にＬ.Ｏ.Ｇ.にいた者たちは完全に根絶してしまう。ああ、いつになったら解放されるのか？ もう抵抗力もない！運搬中（5～10 m ごとに休憩したが）に失神するかと思った。まったく元気がない、すべて消耗した。私はいつも運動し、頑健だと思っていたのが、今は体力が全部抜け落ちて、余力も残っていない。この 2 年間病気になったことが無いにもかかわらずだ。ヤップはレモンを絞り出すように我々をゆっくりと絞りつくす。もう死んでしまう。

ボスマン
1944 年 4 月 9 日

絶えず死んでいく人がいる、時には日に 4 人。病院でも我々の気がつかないところで死んでいる。だから知っているよりずっと多くの死者がいる。多くは病気だ、みんな痩せて衰弱している。今日はボイテンゾルフのボス氏が埋葬される。

ボスマン
1944 年 4 月 10 日

今日はカンカン照りだ。だからマットレスを外にだす。いつもたくさんのナンキンムシがいるので、絶えず必要なことである。迷惑を蒙る他の人たちのことも考える必要がある。

ヒール
1944 年 4 月 11 日

8 人が亡くなった、ここで 4 人、病院で 4 人。病院のは噂だけだが。ほとんどが高齢者、そして多くはバンドンのＬ.Ｏ.Ｇ.にいた者たち。かれらはあそこで苛酷な目にあったのだ。

スホルテ
1944 年 4 月 12 日

ヒソルフとコーパーの埋葬は、一緒に運び出されたのだが、その行列は婦女子収容所を通って行き（毎日のように夫のいる収容所の棺が通っていくのをみて彼女らの無垢な心にどんなことが浮かぶのであろう）、墓地では我々のうちの一人が墓の数を数えた。ここチマヒの 2 つの収容所からの死者のみ、そしてここに囚われている期間、すなわち 2 ヶ月間だけの数が 100 以上に及んでいる。すでに記録したようにＬ.Ｏ.Ｇ.にいた者が、非常に多くこの数に含まれる。

マイエル
1944 年 4 月 12 日

今日は体重を測ってもらった。ちょうど 50 kg（パレンバンで戦争前には 74 kg だった！）。

ヒール

1944 年 4 月 22 日

部屋は一日 2 回雑巾がけしなければならない、さらに木靴で歩いてはいけない。すべては感染の危険を防ぐためだ。本当だ、便所に入ったり出たりで靴や木靴にたくさんの泥がついて中に入ってくる。今はかなり清潔になっている。

ボスマン

1944 年 4 月 26 日

ファン・デ・ホーベルが葬られる。デ・クレルク牧師が教会の横の芝生で詩篇 23 とローマ人からの手紙 8 を朗読して葬儀をとりおこなう。とても良かった。収容所の門までは多くの人たちが葬列に加わってもよい。私も一緒に行く。墓地に行くのは 11 人のみだ。デ・クレルク牧師とあと 10 人。

ボスマン

1944 年 4 月 27 日

この収容所はひどい飢餓状態だ。多くが飢餓浮腫。脚気（特に高齢者）で歩行さえできない。彼らは惨めな状態で小部屋か仕切りの中で臥せている。細菌性赤痢の蔓延。ある者は夜中に 9 回便所に駆け込まなければならない。感染の危険によって、彼らは他の兵舎すなわち厩舎に隔離される。他の者、最も重症の患者は、すこしはましな看護ができる向かい側の軍病院に行く。そこで何人死亡するのか、我々にはわからない。

スホルテ

1944 年 4 月 29 日

前にも日記に書いたかもしれないが、収容所全体ナンキンムシで溢れている（L.O.G.でもそうだったが）。男達がどのように、しばしばカバンやかごや棚やマットレスの継ぎ目などにいるナンキンムシを退治するのかを眺めるのは愉快なことである。夜中に噛み付かれて目を覚ます（そう、ほぼ 1 年半害を受けなかったが、今では私もだ）、そして捉えることが出来て押しつぶしたら、またすごい悪臭だ。

ボスマン
1944年5月10日

ルームメートのラインデルスは病人食がもらえる、それを炊事場まで取りに行く必要がある。彼は胃の病気だ。みなオランダ人で、ファン・リールスム医師やフェルフェーン医師、フェルハーゲン医師、プルフト医師のような派遣医師のうちの一人が処方した病人食である。彼らは我々のためにすばらしい仕事をする。収容所自治会は彼らに、ちょっとましな食べ物と、時には某かの給金を支払っている。

ヒール
1944年5月13日

ここ3週間新たな赤痢患者、各週97－92－83人。3ヶ月で101人死亡した。

ハウゼル
1944年5月15日

本日ニッポンからの訓示。 午後 3 時半以降に生水を飲むのは多くの死亡者が出る原因となる（熱湯供給無し）。長く横たわっているのは死亡原因となる（我々にはすることも読む物も無い）。この収容所において死んではもうならない！ここの病院の患者は軍病院に移される（3ヶ月で約9000人中110人死亡）。

ボスマン
1944年5月21日

オランダ人の収容所監督の仲介で、ほとんど毎日果物がもらえる。ウビ（サツマイモ）も補給される。収容所内の病人や死亡者の数がいくらか減ってきた。細菌性赤痢の流行は止まった。

ヒール
1944年5月24日

米国製の、たくさんの赤痢や肺炎などに効く薬品がはいったオバットゥ（薬）を 2 函入手。も

う何日も 240 g のウビ（サツマイモ）の特配。20 歳以下の若者には特配の粥。彼らの体重減少はすさまじい。

スホルテ
1944 年 6 月 4 日

薬品が入手し死亡者数も減少。回復への助けにはなるが、例えば外傷に対しての効果はあまりない。なぜなら外傷の主な要因は我々が摂取する蛋白質や肉などの栄養素にあるからだ。

ヒール
1944 年 6 月 7 日

赤痢はこの 3 週間で 56－44－28 件。死者の合計 110 人、そのうち 79 人が赤痢。

ボスマン
1944 年 6 月 16 日

夕食の後、向かいの病棟に行く。頭と背中にできた瘤を取ってもらいに。手術台に横たわる必要がある。ヴェイネン医師とファン・レーント医師が執刀。鋭いメスで切るのは痛いことだ。看護人も手伝う。ようやく瘤を切断した時、医者が「真っ赤な太陽だ」とさけぶ。大きな包帯が私の頭に巻かれ、背中には絆創膏。終わってうれしい。こんな時だから無料でできたのだ。

ボスマン
1944 年 7 月 7 日、7 月 31 日

この時期はシラミ検査がある。何人かの医師が必要だとする、なぜなら点検しないとここは不潔だからだ。幾人かは不潔な捕虜収容所からここに来て、そこでもらってきている。他の人は清潔でない。ここには様々な人がいる。オランダ人は一般に非常に清潔で、それをこの収容所でも示しているが、これにも例外はある。特に印欧人はそんなにきれい好きではない。コロモジラミ、ケジラミが病気の原因になるし、それは予防しなければならない。我々の組は日曜の朝がシラミ検査だ。そのあとの火曜日に衣服と毛布を差し出し熱湯で煮つめる。医師が当の日曜日の朝部屋にやって来て、衣服を点検した。その時には上半身裸になることが必要だ。これ

で発疹チフスが予防できると願う。

ハウゼル
1944年7月14日

現在食事が改善され、かなりつらい作業も難なくこなせる。前は一日中疲労困憊していた。今は風呂のあとすぐに元気回復。肉体的にきつい作業ができ、他の人たちのように何らかの病気があるため拒絶されることがないのは喜ばしいことだ。

マイエル
1944年8月31日

この収容所には現在すでに600名以上、飢餓浮腫が何らかの形（脚気、斑点など）ででている男達がいる。残りのうち約三分の一はせつ腫と外傷だ。作業中簡単に蒙る小さな傷でさえ回復困難だ。全部脂肪分やビタミンの不足している少量の食事のせいだ。これがまだ長く続くようなら、もうすぐ雨期にはいる時期には、また多くの苦難が待ちうけていることだろう。

ハウゼル
1944年10月8日

赤痢と飢餓浮腫の深刻な増加があった。

スホルテ
1944年11月21日

収容所では最近また厳しく死亡件数が日ごとに増えている。季節に関係するようだ。悪名高い雨期で赤痢がまた最盛期を誇り、ほとんどの場合50歳と60歳の人たちが罹る。ここ9ヶ月で569名の死亡者がでたと発表される、驚くばかりの数字だ。そのうち427名がＬ.Ｏ.Ｇ.にいた人たちだ。安らかな眠りを！！

スホルテ

1944 年 12 月 5 日

現在棺はビリック（竹で編んだマット）で作成される、それは向かい側のルーリンク技術班で自分達の手によって作られるのだ。板切れは高すぎるのか？恥ずべきことだ。

ハウゼル

1944 年 12 月 16 日

腹痛だ、何でもないことを願う。細菌性赤痢が猛烈な勢いで発生している。

スホルテ

1945 年 1 月 1 日

ここにいる幾人かの歯科医はもはや治療することが不可能だ。素材、充填剤などもなし。麻酔薬さえないし、抜歯が避けられない場合は、口に大きなスパナや締め具を入れ、口が閉まらないほどの荒療治がおこなわれる。ひどいことではないか！

スホルテ

1945 年 1 月 28 日

日ごとに死者の数が増加し、今では若い人たちまでもが死んでいく。昨日は 8 人が亡くなった。収容所監督が（人々をこれ以上意気消沈させないように）死亡者数を公表しないと決定したとは。そうだ。すさまじい、どれくらいの期間続くのか？木材や板切れの蓄えもなく板切れに簡素な黒い煤を塗った簡素な棺さえもなく、屍はかつてのＬ.Ｏ.Ｇ.であったようにティカール（ござ）でくるまれる。なんてひどい、すべてが豊富なこの国で！我々の植民地で。

ハウゼル

1945 年 1 月 31 日

半日病院勤めで疲れて帰る。すでに 6 週間続けざまで働いているので疲れを感じはじめている。風呂場で石鹸が私の肋骨の間で音を立てている。

ヒール

1945 年 2 月 8 日

本日までに入院した病気患者の数 5355 名、一日平均 14 名、平均病床日数 15 日半。1945 年 2 月 5 日、患者数 332 名のうち赤痢患者 182 名。死亡者合計 134 名、内赤痢 72 名。

ハウゼル

1945 年 2 月 10 日

足の傷のため作業を控え、診療所に行く。すでに良くなってきている。診療所で気を失いそうになる。きっと飢えと診療所の空気が組み合わさったせいだ。

ハウゼル

1945 年 2 月 19 日

体重 59,1 kg、だから去年の 1 月 29 日から 3,3 kg 減少。ほとんどの者と比較すればどうということも無い。足の湿疹が増長。

ハウゼル

1945 年 3 月 2 日

昨晩は何の邪魔も無く眠れた。今朝エプソム塩服用。効果なし。班の医師フェルハーゲンは軽い細菌性赤痢と診断、ありえないことではない。いずれにしろ体調はよくない。

スホルテ

1945 年 3 月 5 日

現在、大部屋では夜中にネズミの害がひどい。ネズミも飢えて、そこら中にでてくる。睡眠中でも身体の上を歩いている。ここでは正真正銘の害になる。奴等はダイアモンドと渾名を持つ男が紐につるした僕らのチャベ（唐辛子）を貪り食った、ははは。

2 月の末ひどい胃痛で一週間病気した。そして下痢、8 日間のうち 6 日何も食べなかった。それで幽霊のようになって、まるで雑巾のようにみすぼらしくなってしまった。

あとで赤痢よりも危険な病気だったと聞いた。いや、高齢者たちが一度病床に伏すといかに落胆するのかを実感する。

たくさんの男達もすでに独特な異常を見出し、病的になりはじめている。老いたルームメートも今一日中寝るだけで、目が覚めると発表されるであろうことを尋ね、それは何の事実でもなく、夢に見ているだけか、あるいは妄想のなかでみたものだったりする。そうだ老衰のせいなのか。隣の小部屋 3 号では 84 人中 21 人が赤痢で臥せっており、入院は可能でさえない。平均 7〜8 人が門から墓地に運び出されていくのは、不思議なことではない。 そう、あそこではすでに 1000 人以上埋葬されている。ここチマヒで収監されている 1 万人ぐらいからだ。1 年で 10 人に一人ということだ。すさまじい！

ハウゼル

1945 年 3 月 19 日

体重測定、57,6 kg。今月は 1,5 kg 減少。

スホルテ

1945 年 3 月 25 日

人々は収容所生活が長くなればなるほど怠慢になっていく。風呂にほとんど入らなくなっている（3 ヶ月あるいはもっと長期間に一度）、そしてまた薄汚い奴とも出会う。健康状態がひどくなるうちに、長い間清潔に保っていた末に、突然やってくるのだ。特に長い間会わなかった人の衰えが激しいのに驚く。

ハウゼル

1945 年 5 月 26 日

体重 60,1 kg、1,4 kg 増える。

ヒール

1945 年 6 月 2 日

ナンキンムシとシラミの害が猛烈に増加。ナンキンムシは防除不可能。シラミはなんとかなる。

これは痒くて絶えられない、一匹で夜眠れなくなる。みんな皮膚が破れるほど掻きむしる。背中に細長い血の線が入っている気持ちの悪い透きとおった虫だ。僕にもいる、探し出せればこと足りる。

ヒール
1945 年 6 月 6 日

伝染病棟からの病人移送に同行した。生きているより死んでいるような人たちだ。会話は禁止。ヤップも同行。運搬人は病院のなかでは、すぐ別に立つ必要がある。接触は禁止。大部分の人は知り合いをみつけてしゃべっている。病院ではハンセン病で孤立した 5 人の女性がいた。

ヒール
1945 年 6 月 8 日

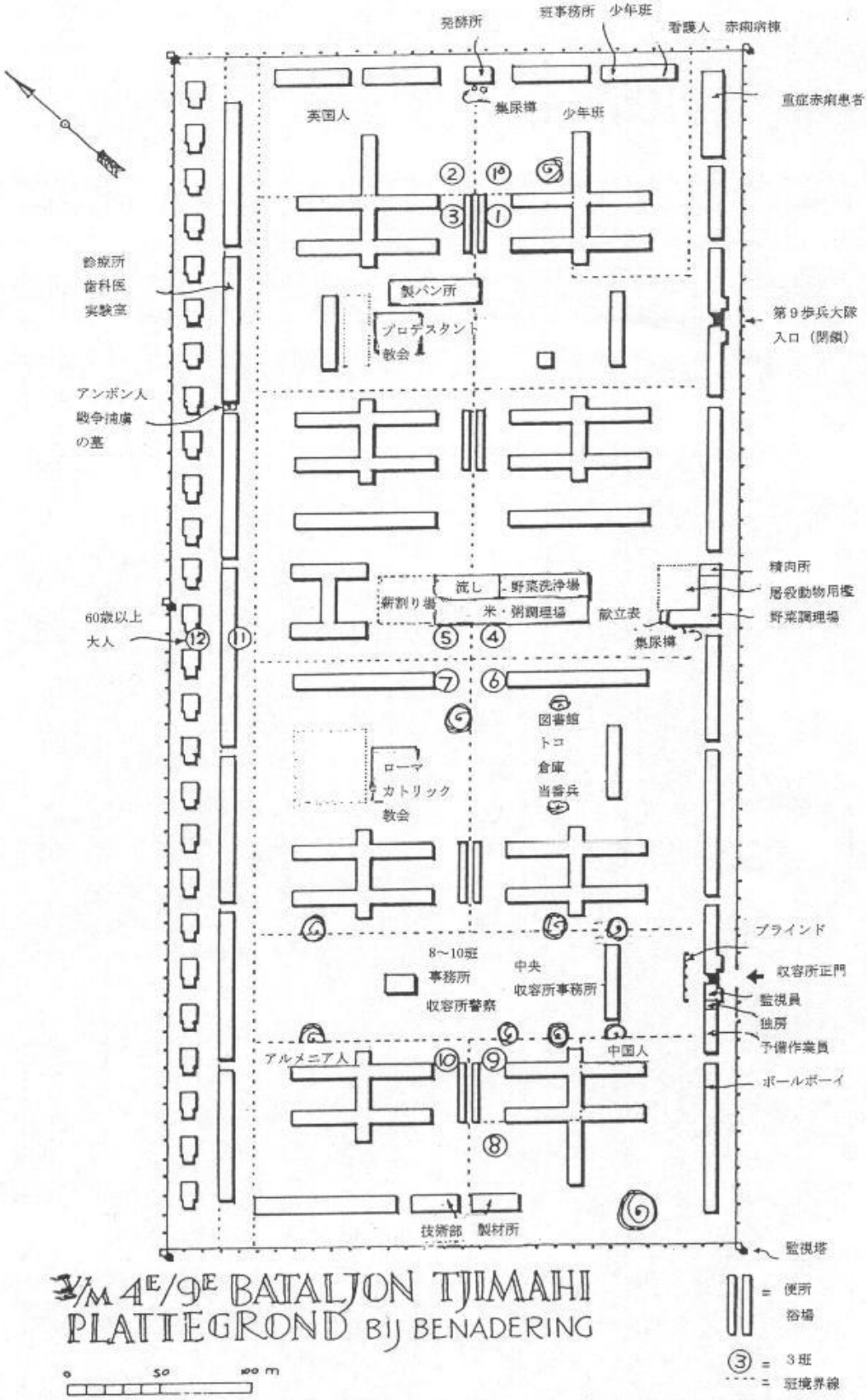
60 人の患者を病院に運搬する手伝いをする。ここの病院は下士官用宿舎からなっている。清潔そうだ。少年収容所のちょうど向かい側にある。

ハウゼル
1945 年 6 月 21 日

体重 57,1 kg（3 kg 減少）。この飢えでは驚きもしない。

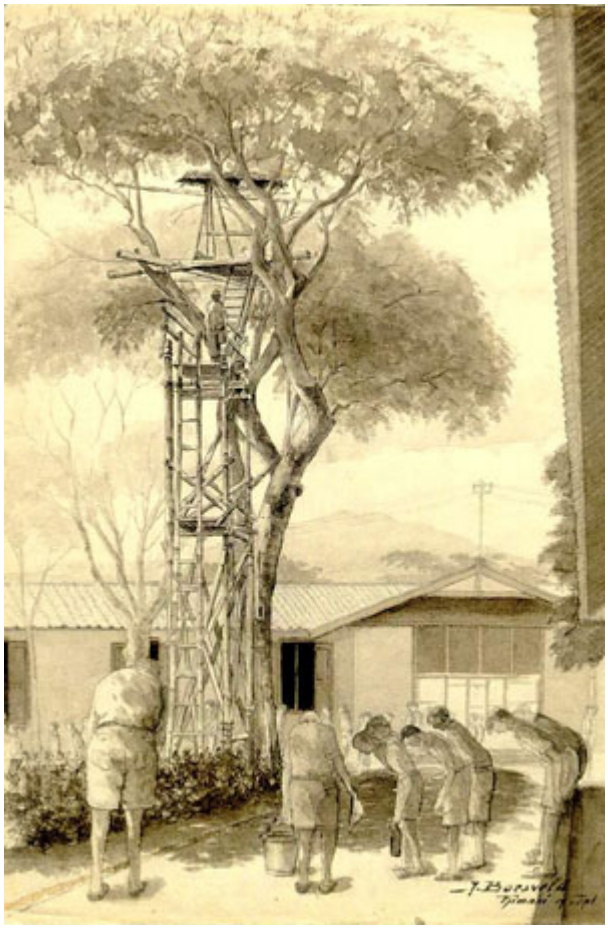
ハウゼル
1945 年 6 月 30 日

胃腸の具合が悪くずっと 1 週間病気みたいだった。すごく弱ったと感じる。ウビ（サツマイモ）をなるべくパン（1 つ 500 g）に交換する。自分の胃はもはやウビ（サツマイモ）を消化しないようだ。幸い班のフェルハーゲン医師が 3,50 ギルダーでカチャン・イジョ（小粒のグリンピース）の 10 皿をゆずってくれた。私の衰弱が目立ったと判断したからだ。ボビーの非常に鋭い観察力に感謝。効果が出ます様に。ここを出来るだけ健康な状態で出たいから。



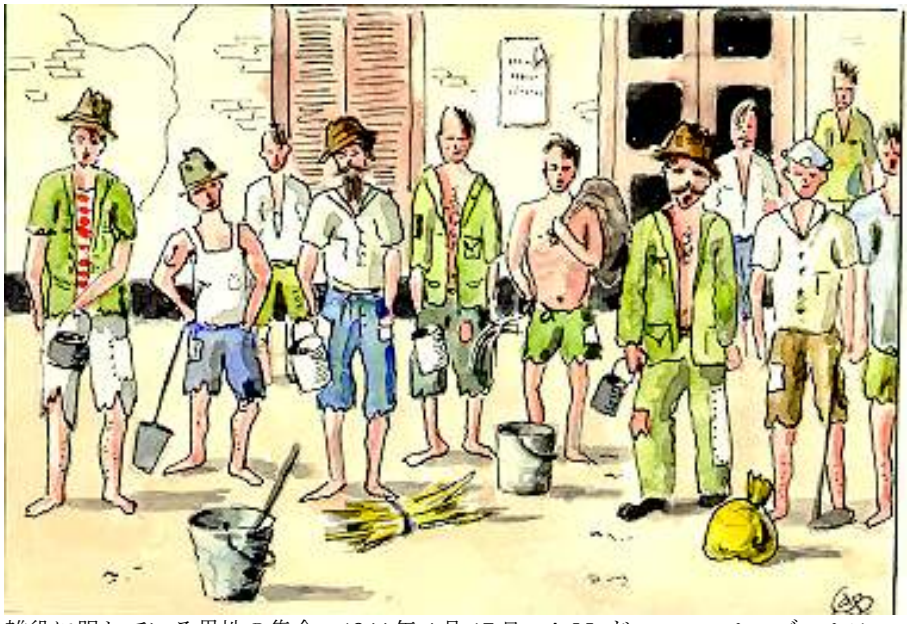
チマヒ４号収容所（第4・第９歩兵大隊）見取図

チマヒ収容所４の地図、できないと思う、でもできる。(リデルケルク 1997)。



日本軍見張り塔　J.ブースフェルト。

チマヒ４における将校部屋にて。（回廊の後ろ）。この人物は浮腫と赤痢を併せ持つ。(死亡)。足の位置を高くするため、アタッシュケースのうえに乗せている。 J・ブスフェルト（NIOD IC IB 023)。



雑役に服している男性の集合。1944 年 4 月 17 日　A.J.L.ドゥ　ヘール　ブールス。

バレバレ（寝具の木枠）から無数の南京虫を除く。

教育・娯楽・宗教関係

収容所報告書

日本人監督は抑留者たちの娯楽に対して何の注意を払わなかったどころか、逆にこのことをできる限り阻害しようとした。多くの人々は既に 2 年以上も抑留し、大いなる失望を伴っていたにせよ「噂」をかなり頼りにして暮らしており、また同様に多くの人々が精神的、身体的にも病み、また抵抗力の不足によって、長期間にわたり過密な兵舎でマットレスの上で過ごすことを余儀なくされた状況にある収容所社会では、娯楽はどのような形態であれ、退屈で気の滅入る環境から逃れるためのきわめて重要な拠り所であった。その為の最善な方法は読書であった。

4 号収容所では幸いにも、かなりの学術書を含む約 7000 冊が元戦争捕虜収容所の図書館に所蔵されており、抑留者たちが持参した数百冊もの書籍を合わせ、収容所社会にとって最も大きな価値を持っていた。

読書は検印の必要など特別許可を条件とする日本側の規定に関連し、2 度に及び全書籍（1 度目は戦争捕虜図書館の閉鎖などによる）を供出が挙行させられたが、もちろん大規模に回避する動きに出た。収容所監督からの再三の要請により、2 度とも、書籍は数週間後、時には 1 ヶ月以上して規定の検印がされること無く返却された。

1944 年 12 月 12 日、全書籍を 7 つに分類し、日本中央管理事務所（山岳砲兵隊）に移転することが命じられた。一度移転された書籍は永久に収容所から消失することになろうとの推測から（実際に起こった）、この命令は所持する大部分の書籍を各班に分散させるという徹底したやり方でサボタージュされた。一部複写本を含む 700 冊以上の書籍が提出されたが、特に日本側の取り締まりは無かった。

音楽を奏でることは 1 週間に 2 度、午後 12 時から 9 時までのみ許可されていたが、音楽による娯楽は定期的に催された。プロの音楽家が多く抑留されていたので、軽演奏会は定期的に行われ（大会場が無かったため、利用された教会では 500 名余りの場所が提供され、班ごとに鑑賞した）、また有名なバイオリン奏者サイモン・ゴールドベルグやカトリック聖歌隊による荘厳な演奏会も特別に催された。

演劇やショーはこれに要する小道具の不足、及び日本側がこの支給を拒否したため、ほとんど実施されなかった。

日本側の諸規定では集会を持つ事は禁止されていたが、日曜日の 10 時から午前中にかけて礼拝や説教の無い宗教的集まりがあった。抑留者たちが宗教上の教えを多く必要としたことを確証した収容所監督は、初期から日本側の説教の禁止命令を巧みに回避し、その判断が正しかったことは、すべての宗派の教会が満席になる事によって示された。日曜日や祝日のみならず、週日にも事前の対策に従って定期的に礼拝や夕方の祈祷が行われた。日本側は幾度か

説教禁止における違反を発見したが、厳重な処罰までには至らなかった。クリスマスや復活祭のようなキリスト教の祭日の礼拝も禁止命令を全く無視して、全面的に行われていた。

日本側の監督は、教育禁止令の維持に関してはより厳重に取り締まっていた。最高10名、後に5名まで認められた集会を通して、なごやかな集りという性格を持ってはいたが、教育を施行する可能性が残されていた。しかし、これは収容所社会の一部を構成し、1942年から 1943 年の期間に断続的にしか教育を享受できなかった数多い若者たちに、多少とも組織された基本的な教育を施すためには、満足できる解決法とはならなかった。

４号収容所には約 1700 名の 20 歳以下の若者がおり、そのうち約 600 名が 10 歳から14歳までの若者であった。収容所監督は、学校教育の何年もの致命的な中断を最大限改善するだけでなく、また青少年の日常を有効的に使うこと及びそれによって青少年の安易な不良化を防ぐよう、また同性愛の危険が一部にある困難な青少年問題に満足する解決策を見出すため、数多くの必要措置を講じていた。

収容所監督は、青少年のための必要措置はこれらが日本側の規則を破るものであろうと、両親及び青少年自身に対しての義務として厳格さをもって接する必要があると考えていた。軽い雑役、特に菜園での雑役に就かせることによって、定期的な身体検査と特配食糧支給によって、また衛生管理と年配者との交流によって、青少年の身体的成長には特別の配慮が為された。厳しく選考された青少年リーダーの指導の下、少年用別兵舎に集められ、若者たちの自主学習に特別な関心を注いだことによって監督が容易となった。居住を集中したことでも青少年の精神衛生への配慮により組織的に取り組むことができた。広範囲の教育者がいたおかげで、教科書や筆記道具がかなり制限されていたとはいえ、6 年間の初等教育と 5 年間の上級市民教育中等学校の学習計画を決めることによって定期的な講義が為され、例えば 34 枚の上級市民教育中等学校の卒業証書が授与されるという好ましい結果をもたらした。夜には青少年のために専門家たちが様々な講義や朗読を行った。宗教教育にも同様に多大な配慮が注がれた。特に 16 歳以上の青少年を差し出すことを必要とする日本側からのますます増えてくる雑役従事者の要請によって、結局身体検査後の 16 歳以上の青少年が雑役に就かされたことが、教育実施を困難にする原因の一つであった。しかしまた日本側に状況を密告するファン・デン・エックハウトの起用（1944年5月 28日など）や、ＰＡＧＩグループのスパイ行為（1944年9月28日ポットハールによるものなど、その為すさまじい拷問が収容所であった）など、基本的には教育禁止という日本側の介入によって教育実施は何度も阻害された。本来の教育を授ける保障、そして教育禁止令の廃止を求める収容所監督の要請は、日本人監督によって拒否され続けたのである。

日記の断片より

ボスマン
1944 年 3 月 8 日

書籍は全部、収容所図書館の書籍も、もう一度検閲されねばならなかった。それで全書籍が提出させられた。今回聖書と祈祷書は提出しなかった。

マイエル
1944 年 3 月 8 日

今日全部の小説、専門書を提出しなければならない！唯一の気晴らしだったのに、いまは一日中退屈で何もする事が無いのだ！

ボスマン
1944 年 3 月 19 日

受難 5 週の日曜日。今日はバタビアのイエズス会司教の書記であるドースマン神父の「野外説教」があった。私のようなプロテスタント信者も数人興味深く聴く。デ・ブラウン牧師がキレネのシモンについて説教する。満足感を得た。それから前には親戚の民間会社で働いていた宣教師のキューヘニウスの病気見舞いに行く。彼は内臓に腫瘍が出来ている。行政官たち、他の友人たち、牧師たち、宣教師たち、たくさんの見舞い客だ。それから兵舎に戻り、マットレスの上で説教を思い起こす。食事の後、マットレスを通気する。3 時にお茶を飲み、少し散歩。あと夜にも 8 時半に収容所のプロテスタント教会で宣教師コーネマンによる礼拝がある。我々は満ち足りて聴講する。

ボスマン
1944 年 3 月 21 日

8 時半に J .フェルカイル牧師の聖書との交流に関する講義があった。教会は超満員。とても素晴らしかった。

ボスマン
1944 年 3 月 26 日

我々の班の牧師はルルマン牧師である。兵舎にはいつ集いがあるのか伝える長老たちがいる。多くの者はする事が何も無い。聖金曜日には聖餐会があるらしい。晩餐会への参加は班の長老に申し込むことができる。ルルマン牧師が聖書と教理問答の講義をする。

ハウゼル
1944 年 3 月 26 日

日曜日。今日は洗濯をした、それからはいつもの倦怠、怠情、そして退屈。

マイエル
1944 年 3 月 28 日

小説と専門書無しでも、ゆっくりではあるが常の日課をつくった。毎朝 1 時間か 2 時間菜園で雑役、一週間に 3 回朝織物講習、毎朝半時間ウィーリンガ牧師の聖書講読、彼は文学の中や家庭劇などにとても好ましく追加し解釈してくれ（実際昔は聖書を知る事など義務ではないなどといかにひねくれていたことか）、そしてあきれた事に例えばギリシャ神話の詳細なども知ることになったのだ。午後は休憩して、そのあとはおしゃべりやブリッジ、トランプの一人遊びなどで一日の大半を過ごす。

ヒール
1944 年 4 月 2 日

6 名の受堅と 3 名の洗礼が行われる教会にいってきた。素晴らしい礼拝であった。スポーツはもうもうしない。このような貧素な食糧では身体にとって過酷である。日曜なので砂糖入りのお茶を貰った。

スホルテ

1944 年 4 月 3 日

今日 32 歳になった。小部屋では僅かだがあるだけのもので祝ってくれた。ファン・オッシュからコーヒーを一口貰った。これが私の誕生日のすべてだ。

マイエル

1944 年 4 月 9 日

復活祭第一日目。興味深い近代的な説教を聴講した。そのあとこの祭日のために特別にとっておいた最後のコーヒーを皆で飲んだ。たいてい我々は日曜の朝、8 人一緒に 1 時間ほどなごやかな会話をして過ごす。それで普段の週日とは違うのだと自覚する。

スホルテ

1944 年 4 月 12 日

ここの生活は以前にも私は書いたと思うが、生気がない。書籍は取られ、授業は禁止、集会禁止、音楽を奏でるのもだめ、などなど。常に雑役やヤップ（我々にさらに激しい鞭を与えるだけ）の到来に驚くだけで、待機の時間や時間通りの入室と、食事の時間厳守、まだまだある。それで人は余暇の時間（収容所全体）ほとんど静かに、テンパット（寝床）に座ったり寝たりするだけ。必要ならば一日中、なにも話す事が無いかのように、沈黙し無意味に座って虚空を見つめるのみ。我々はすでにこういう状態にまでなっている。

ハウゼル

1944 年 4 月 17 日

昨晩、他の 15 名とフェルカイル牧師の「ドストエフスキーと人間」についての談話を聴講した。非常に優れた話し手だ、主題をみごとに朗読し、ロシアの大作家にたいする自分の考えをとても明確にした。多くの抑留者の中にまたとてもたくさんの優れた人材が入っているのはこの収容所の利点である。

ハウゼル

1944年4月20日

フェルカイル牧師の教会史に関する充実した談話。それはローマ国内でのキリスト教会の進展と闘争をローマ国教（日本の神教と比較をしながら）と合わせて、代々の皇帝たちの異なる立場や、長老、助祭、司祭、枢機教、法王に至るまでの教皇組織の発展を取り扱った。

2時間目はG牧師の「精神分析」、「イド」「自我」「超自我」に関する談話である。後者は法をつかさどる力である。二番目は、「イド」「リビドー」「父親」コンプレックス、「エディプス」コンプレックス或いは交差コンプレックスを管理する意識力である。自立心達成のための教育に関連してつながりを解放、破壊する事。

ボスマン

1944年4月23日

集会用に我々はジョクヤからの人たちが携えてきた小さなオルガンを持っていた。今朝は我々の牧師の J.A.C.ルルマンだ。２コリントのテキスト１、18－22まで、素晴らしい説教。復活祭に関連した静かで優れた素材だった。たくさんの観衆がいた。後でもう一度友人のフッケンダイクまで行って針を借りた。1時食事、トウモロコシとスープ。それからパパイア一片と卵半分。食事の後少し散歩。6時にまた食事。礼拝終了後、印欧人の牧師であるファン・ハーセン氏が、ヨハネ20を説教した。弟子の中にトマスがいた時、いない時のキリスト出現だ。9時半空襲警報。灯りが消えるので急いで教会をでる。

ボスマン

1944年4月27日

気持ちのよい仲間で友人、しかし仕事にはしり込みをしていたファン・デ・フーヘルの死から私はまだ立ち直れないでいる。彼はよく礼拝中無頓着に罵言をはいていたが、施しをすれば許されるかと死の床で牧師に罪の許しを乞うたのだ。それについて牧師がローマ８の結びの朗読で答えた。

ハウゼル

1944年4月28日

今日は英会話の授業（ハリレイ氏、競り市の職員のローズ、テイラー、ニーマイエル）、ハリレー氏は口にパイプをくわえて話すので全く成功とはいえない。ほとんどがゴムの木の再定植に関しての会話、次回はメモでもしよう。

ボスマン

1944年4月29日

起床、着衣そして食事の後、テンノウ、日本の天皇誕生日だと気がつく。収容所を歩いていたら若者たちが多く働いているチミンディではお祝いのテントを建てていると聞く。親族や友人の一団は我々の収容所所長と一緒に墓で慰霊するため、本当に僅かの数だが今日は墓地まで行く事が出来る。幾人かは整列の時に罰として我々の収容所監督から引き戻され、墓地には行けない。我々の収容所でもヤップは飾りのついたお祝いのテントを持っていた。我々は笑いながら飾り付けを取り去った。

スホルテ

1944年4月30日

ユリアナ王女の誕生日[14]、天皇陛下誕生日に続く。ヤップが収容所外部に住んでいる女性や中国人から集めた小包や贈り物が我々に貰えるとのことだ。分配は今日まで待つことになっていた、今日こそ我々の確かな祝日なので、ヤップの意味した天皇陛下のための祝日ではない。何が貰えるであろうか楽しみであった（肉類は炊事場でスープに調理された）、そして我々は 3 月 25 日の失望にもかかわらず良好な報告や噂が続いている事に関連して、早い解決への希望に満ちているのだ。それにこの日は我々から誰も奪う事ができないオラニエ王国を支持する陽気な雰囲気をももたらした。

[14] ユリアナ王女、1909年4月30日出生、この日35歳を迎えた。

ボスマン
1944年5月3日

起床、食事の後、私は書籍雑役がある。書籍のための保管場所が2ヶ所あり、今回1ヶ所の保管場所から収容所事務所へ移転させなければならない。我々は長い列を作って本を手渡していく。私は何冊かポケットや僅かな衣服の中に入れる。そして私の兵舎に行くよう見せかけて巧妙に隠しておく。あとで他の人のためになったり、本の持ち主に戻す事ができるのだ。それから日記やメモを書く白紙の紙も見つける、なぜなら紙はもう無いのだ。自分で捜し求めなければならない。

ボスマン
1944年5月5日

私は一時間休む。それから我々はお茶を飲む。私はまた聖書を少し読む。聖書はここでは特に多くの者たちにとって勇気と慰めをあたえる書物である。常には読む暇の無かった者も今は聖書を読む。

ボスマン
1944年5月7日

今日は日曜日、たとえ収容所にあっても私の意識では、やはり普段の労働日とは異なる日である。起床して食事を済ませると9時15分に行きスヒュールマン牧師の説教を聴く。ここにはプロテスタント教会の建物が一つとローマ・カトリック教会の建物が一つあって、時々お互いに交替するのだ。平和時にはありえない事である。

カトリック信者はまた毎朝早く決まってプロテスタント教会の前で早朝ミサを行っている。参加しているのは小人数のグループだとはいえ、その信心の篤さには感嘆させられる。両方の教会には小さなオルガンが1台づつあって、何人かの仲間が弾いており、時には私も弾く。プロテスタントの合唱団が週日に練習していて、よく信者合同の聖歌合唱を支えている。それからプロテスタントにもカトリックにもいくつかの聖書研究会がある。さらにペンテコステ派ともう一派の人たちさえ戸外で集会を開いているが、時にはよる教会に集っている事もある。もちろん何千という人々はそれぞれ別のやり方で日曜日を過ごしているが、彼らには、真の日曜日はないのだ。

ヒール
1944年5月10日

プロの音楽家による演奏会を聴講した、ことのほか素晴らしい。会場後方の聴衆は残念ながらうるさく騒がしかった。

ボスマン
1944年5月17日

教会の建物でほとんど毎晩講義がある。時には芝生の上で小さなグループが。そういうふうに5月15日ザウデマ牧師はオランダ使徒信条の事柄の講義をした。講習も為されている。ポスチュムス教授は例えば化学を教えている。

ヒール
1944年5月28日

聖霊降臨祭一日目。何のお祭り気分も無い。たくさんの礼拝、だが聖書の講義だけ、なぜなら説教は禁止されているのだ。両方の教会の建物が使用されている。学校が開かれるはずだった。でもヤップは本当に禁止している。

ハウゼル
1944年5月28日

聖霊降臨祭日曜日、他には何も無い。ただまた捕虜社会での忌まわしい、いわゆる祝日の一つだ。抑留されてまた386日が経過。

マイエル
1944年5月29日

さいわいまた小説が解禁された。それから1週間に2度音楽の演奏も許可された。いくつかの優れた演奏会の聴講を望んでいる、なぜならこの収容所には例えばバイオリン奏者サイモン・ゴールドベルグのような第一級の音楽家がいるのだから。

スホルテ
1944年6月3日

今日は娘のルキーへ 1943年 4月 9日から作りはじめた人形の本当に最後の仕上げをした。人形に服を着せた、最初はミアに作らせようとおもっていたのだが。人形はことのほかうまくでき、とっても立派でかわいく出来上がった。これはもし家に帰ればパパのルキーへの自慢仕事である。しかし私は早急に家に帰れるという望みをしだいに失いつつある。

ボスマン
1944年6月4日

野外での集会は日本人によって禁止された。目下教会でのみ可能。叙階の夕べがプロテスタント教会であった。

ヒール
1944年6月4日

ゴールドベルグを聴いた。彼はヘンデルの音楽とメンデルスゾーンの協奏曲をピアノ伴奏で演奏した。感慨無量だ。何という才能、何て素晴らしく、全てを忘るほど優れている。1時間の悦楽、未知の響き、印象深い。

ヒール
1944年6月11日

設立された図書館は好調だ。わずか専門書のみ返却された。

ボスマン
1944年7月1日

ヤップが礼拝やそこで聖歌を歌う事を禁じたと聞く。プロテスタントとローマ・カトリック別々の祈祷会だけが許可された。そこでは神父あるいは牧師は自分の言葉を伝えてはいけないのだ。

ボスマン

1944 年 7 月 7 日から 31 日

土曜日の夜、ヨンクホフ牧師がまだ病気なら、私が彼の代わりに我々のグループにビルダーダイク[15]に関する講義を行う。

マイエル

1944 年 7 月 19 日

最近数週間また憂鬱な気分だ。外部ではすべてが期待よりも緩慢で、現在約 2 年の収容所生活はすべてを困難なものにする。特に精神的な頑張りを維持するために、我々はいろいろな夜に、「小部屋」の中で 10 人から 12 人くらいの男たちが集い講義をしている。ガイザー牧師の心理学、ウィリンガ牧師の哲学、ヒッデング牧師のリベラルクリスチャンなどのように。その上私は今週実際 3 人の仲間とラテン語の授業をはじめた。私は他の言語にその言い回しや単語を理解するためなどにとても役立つラテン語を習っていなかったのを常に残念だと思っていたのだ。長続きすることを願う、昔のように並んだ単語や格変化を暗記するのは容易ではない。

ハウゼル

1944 年 7 月 21 日

昨晩はフェルヴェイの「大東亜における商取引の動向」に関する 2 度目の講義があった。夜の最初の講義はエルアウト（商業銀行）の「経済統制」、奇妙で困難な単語の行列だ。注意緩慢。

ヒール

1944 年 8 月 5 日

小さなイレーネ皇女の誕生日[16]。特配でおいしいヤキソバを貰った。多くの者がオレンジ色のものを付けて歩いている。この日その他は静かであった。

---

[15] ウィレム・ビルダーダイク（1756－1831）はオランダの有名な詩人及び学者だった。

[16] イレーネ皇女、ユリアナ王女とベルナード皇太子の二人目の息女で 1939 年 8 月 5 日誕生。

ボスマン

1944 年 8 月 9 日

日曜、まだ祈祷を行うことのみが許されている。J.フェルカイル牧師は気にもかけずに説教をしている。ファン・ヒールデン牧師も約 5 分説教をし、そのあと何かを読み、また説教というふうに即興ですることを知っている。Ｓ.U.ザウデマ牧師はまるで本を読んでいるかのように説教をする。ヤップは確実にオランダ語は分らないのだ！幾人かの牧師はスタレンバーグ牧師のように、収容所でもまだ法衣を持っている。

スホルテ

1944 年 8 月 10 日

昨日、有名なアコーデオン奏者のデ・リヨンがここの二番アルン（広場）にある教会の建物で音楽会を 8 人のアシスタントと一緒に披露した。欠陥だらけの素材で彼は空前の成果を引き出し、かつてないほどの絶好調であった。彼のように奏でることのできるのは見事な指先の器用さだ！会場満杯の激しい拍手がまたその報酬である。「スイング」だった。

ヒール

1944 年 8 月 7 日

欧州人がごみ箱をあさってキャベツの芯や野菜の茎やウビの皮を探しているのは醜い有り様である。

ボスマン

1944 年 8 月 28 日

休息した後、私がマレー語の講習を受けている言語学者のH.ファン・デ・フェイン牧師のところへ行く。収容所ではオランダ語だけが話されるが、私はマレー語も衰退しないようにと望んでいた。彼はとても優れた講習をするし、気持ちのよい人間である。また私は幾冊かのマレー語の本を持っていて、それを読んでいる。

ヒール

1944年8月31日

女王生誕の祝日。多くの組でスピーチが為され我々の女王のために万歳が三唱される。彼方此方の組に小旗、そして王室一家の肖像画。これが女王の亡命中最後の誕生日だったはずだ。我々は皆でそれを確信している。

スホルテ

1944年10月4日

手術のせいで昨日は具合が悪かったにもかかわらず、ファン・オッシュの部屋で、彼がデ・ラウターのためにその太った体にバスタオルを巻いてフラダンスを披露したのに腹を抱えて笑ってしまった。ここでも楽しいひとときが経験できる、例えばみんなでオランダや蘭領東インドの情景や習慣への思いを深めるときなど。これが暗澹とした状況の下での生活の明るい面である。

スホルテ

1944年10月4日

ここでしている全部の雑役にもかかわらず、私は上級市民教育中等学校5年と同等の免状を得るため授業を受けはじめた。残念ながらＬ.Ｏ.Ｇ.出身者としての私に今になって機会が与えられたのだ、さもなければたぶんもっと前に取れていただろう。今問題なのはこの戦況下で十分な時間が残っているかどうかである。いずれにしてもこれは有効なよい時間つぶしになるし、私の職業上必要となれば昇進への推薦やとりなしになり得る。

ヤンセン

1944年10月9日

最愛なる母へ。突然ですが、僕の近況をあなたにお伝えしたいと思います。多分こういう状況がとても長いということと、現在僕は敬虔なクリスチャンサイエンティスト[17]となったのが主

[17] クリスチャンサイエンティストはクリスチャンサイエンスの教典の信奉者。キリスト教に基づく精神療法としてマサチューセッツ州ボストンのマリー・ベーカー・エディにより1866年開設される。

な理由で、ヨンクヘールさんの講義を取っています。

強制収容所での最初の時期、僕は病気がちでしたが、その原因は信仰心に欠けていたからだと今はっきりわかります。不幸な時期と精神的誤りを通し、だんだんと僕は自分の生活に対する姿勢を変えてきました。

スホルテ

1944 年 10 月 20 日

私の講義もまた中止になってしまった、なぜなら重要な教師たち全員が連れ去られてしまった[18]からだ。これでチャンスがまた私の人生から通り過ぎ、台無しになってしまった。

スホルテ

1944 年 11 月 8 日

さて音楽の事についてだが、このあいだの音楽会は少し前に 15 人ちょっとの完全なるバンドと一緒にデ・リオンが演奏会場（教会）に現われ最高のナンバーを演奏した。それは或るエディ・ファッテナーというロシア人でバンドンにあるホテル「ホーマン」の第一級ドラミストの伴奏でコミカルな身振りを交えて、素晴らしい音色で演奏され我々に感激の涙を誘った。この「バンド」は必ず後世大成功だったと思い出されるだろう！我々は過去の素晴らしい時代を懐かしんだ。

ハウゼル

1944 年 12 月 3 日

また日曜日。自分に食堂の 0,10 ギルダーのビーフンスープ 250cc をおごる。部屋で待機していたが呼び出しは無い。フランスのジャン・デ・ラ・ブレールの「Mon oncle et mon curé」のあとでウェルズの「The Undying Fire」を読む。傑作だ。

---

[18] 教師たちもまた指導的人物とみなされ 1944 年 10 月からバロス収容所近隣の収容所などの独房に移され日本降伏まで抑留された。

スホルテ

1944年12月5日

今年は我々のセント・ニコラースのお祝いも10班、5組では、手品以外若者たちにとって何も無かった。この日は死んだように活気なく過ぎ去る。ヤップからは音楽を奏でる事さえ許可されなかった。

ヒール

1944年12月25日

すばらしいクリスマス第一日目だった、興奮した気分だ。たくさんの食事、これが主な興奮の原因ではあるのだが。一日前からクリスマスの献立表に関してうんざりするほど会話がなされる。献立は 7 時半粥、11 時コーヒー、12 時パン、1 時ベーコン入り豆スープ、5 時米 300g、50cc のサンバル、100cc 蒸し豚、250cc スープ。確かに十分でおいしかった。収容所の大半は自己購入分も手配した。多くがきちんとした服装をして歩いている。教会でキリスト降誕劇をみた。最後にみんなで「聖夜」を歌った。いつ解放がくるのか。望みは僅かで、なげやりな気分だ。神よ、なんという生活なのだろう、睡眠、食事、仕事、シラミ探しなどなど。

スホルテ

1944年12月25日

クリスマスは月曜日に当たったので私も含め雑役する人たちは全部「ヤスミ」（休み）だ。
朝のうち教会に行ってきた。K牧師の我々が召される天国の喜び（この状況にもかかわらず存在する善）についての説教。私は戻ってから静かに故郷を考え感傷的になった。教会はきれいにグリーンで飾り付けられ紙で形が切り抜かれて、ヤップが中に持ち込んだ本当のクリスマスツリーさえあった。なんという驚きだ！そう、ヤップは去年よりも我々に多くを施した。

スホルテ

1945年1月1日

とにかくこの日も何の物音も気晴らしも歌も無く静かで退屈な日であった。ただ我々10班5組では午後の時間静かで唯一のクラシックの管弦楽を演奏するのが許された。これはヤップから特別申請許可がおりたもので、全収容所内では全く異例のことだったようだ。

スホルテ

1945 年 3 月 17 日

例えば日曜日には組でしばしばなごやかな時間もある。隅々でブリッジをしたり、時には笑いを押し殺したりしながらのささやきやおしゃべり。そういうとき我々は「心配」に被いをかけ現実を忘れる事ができるのだ！

スホルテ

1945 年 4 月 1 日

また復活祭だ。良い日がむかえられた（4 月 1 日は致命的な日であるにもかかわらず）、朝は教会に行った。ケールス牧師が優れた説教をし、汚らしい不正者や、他のものと同様地位の高い行政官や低い行政官にも叱責を与えた。食事は素晴らしく（この状況下で）、午後にはユダヤが復活祭を祝った我々の隣の会場で演奏した「デ・リオン」の音楽も加わった。

スホルテ

1945 年 4 月 6 日

今回の私の誕生日は全く何事もなく過ぎ去った。私にとっては静かな日であったことだけ。幾人か、思い出してくれた人は祝ってくれた。やはり全くは忘れられていない事がわかり少し気分がよくなった。

ヒール

1945 年 4 月 25 日

私の誕生日はこの状況では良いほうだ。砂糖一片とバロスの兄弟から石鹸 2 個を贈り物としてもらった。我々3 名は一人当り 300 g の豆を非常食糧から貰ったのに驚き、夜はスープと 1250 cc のウビ（サツマイモ）のごちゃ煮。ようやく満腹するほどの食事にありつけた。21 日の新聞によると、ロシア軍はまだベルリンから 2 km の距離を保っているが、スターリンは 5 月 1 日にはベルリンにお祝いの行列を行うであろうとのことだ。もしこれが私のこの収容所での最後の誕生日でないとすれば…。

ヒール

1945 年 6 月 17 日

組で 5 時から 7 時までハンガリーの管弦器演奏があった。すこし詩を朗読した。楽しい午後であった。演奏家たちへの報酬は一人当り 2 個の丸パンとコーヒー一杯である。

道徳・社会・政治意識

日記の断片より

スホルテ

1944 年 2 月 16 日

亡き人々に思いを寄せよう。このことを我々のモットーに。我々の番が訪れる時のためにも。総計された数字が出た暁にはその他何を耳にしよう。恐怖、悲惨さ、ただ嫌悪感のみ。でも、再び日の光が差し込むこともあろう。早急にこれを望む！ しかしながら、去ったものはもう戻らない！ だからこそ思いを寄せよう！

ハウゼル

1944 年 3 月 2 日

収容所内に立ちのぼる全く不可解な噂話しに多くの者は際限なく楽観的な見方をする。正常な人間のすることかどうか私は疑う。また多くが今後の再建に関しても簡単に考えていることも。

ハウゼル

1944 年 4 月 4 日

昨晩は他の 6 人とともに、国民参議会議員林野庁長官ＩＫＰ（蘭印カトリック党）のズワルト氏と戦後の経済情勢予想に関して話し合いをした。米国の憲章[19]と政治経済の変更に関連付け、その他、農業における全ての事柄のために農業委員会を設置することが語られた。

結構、頭の運動にはなるけど、私の考えではあまり意味ないことだ。つまり、来たる変化についての意見は実らないのだ。なぜなら U.S.A.によるか、ソ連それとも多少なりとも英国の支配によりなされるのかこの変化の性質が我々のうちの誰にも保証されていないのだ。英米の政策の影響で上等に成熟したリンゴである我々の蘭印を手元から転がしてしまった今、変わりない同じリンゴを再び手に入れられるとはほとんど考えられない。

スホルテ

[19]ハウゼルはここでは恐らく 1941 年 8 月 14 日、米国大統領F.D.ルースベルトと英国首相Sir W.チャーチルが出した共同声明である太西洋憲章を指していると思われる。この憲章の内容の一部で、両政治家は各国

1944年4月13日

私の手術の件ではやはり向こうのあの大きい軍病院へ行かなければならない。もう申込はしてあるし、ヤップのビザを待つのみ。どうなることやら？「降伏」が訪れる前に元気になれたらなあ！手が使えるようになって、良い職の話が素通りしないためにも、そして私の両親の老後や家族の健やかな生活をはかることができるようにするためにも。神よ、お助け下さい。

ハウゼル
1944年4月25日

今日、スルューファールトの所で他の何人かと一緒に朝の井戸端会議をした。色々な人の刑務所で経験した失望感や愉快な体験に関連した噂話をした。また、この悲惨な状態が終了した後、米国の指揮のもとなされると予想される経済的変動についても話した。意見はばらばらだったが、私はどちらかと言うと英国はその交戦にまつわるヘマな行為から見てもここであまり大きな役割を演じないとするスネレン（税務検査官）の意見に傾いた。「ボイス・オブ・ニッポン」のビルマについての記事を丸っきり間違っているとは思えないし、イタリアに関しても局所で非常に非効率的なお話が広まっている。

ヒール
1944年4月30日

すばらしい日だった。忙しかった。プレゼントを配ったらみんなとても喜んでいた。みんなに何らかのプレゼントが用意されていた。オラニエ晩餐会も最高だった。100 グラムの米の特配、大量のスープにオレンジ色のサンバルたくさん。格別なうまさだった。再び、なごやかさが訪れた。

ハウゼル
1944年5月7日

深夜の登録にもかかわらず、早朝に目が覚めた。5 時半だった。ちょうど1年前の同じ時間に私の思いがいった。当時この時間に妻とふたりの息子のもとから離された時を。一体1年、ま

民が各自の政治形態を選択することの権利を明らかに承認した。

たそれ以上長くかかろうとは誰が予想できただろうか。無造作に３ヶ月、長くても半年と予想していたが、この期間も何と早く過ぎ去ったことか。

全くこの１年を浪費し、精神的にも色々な面で向上し得なかった。１年も妻がこの最高に困難な時期をひとりで切り抜け、もちろん彼女にはそれができると確証しているが、加えて、私が成長を目にすることができない子供たちの面倒も見なければならないという責任がある。　事態が早急に好転し、妻に対する私の果たすべき義務として子供たちの教育に打ち込み、夫婦連帯した役割が再びなされることを願うのみ。

世界の出来事において幸いにも我々家族は何の役目を果たしていない。しかし、そこに我々の考えや理想をさらに引き出すことは、時にはうまく行くと思えるが、時にはまるで失敗に終わる課題となるのだ。

マイエル

1944 年 5 月 10 日

今日、ペーターが 5 歳になった。この末っ子の顔がむしょうに見たい。2 年近くも経過して、どんなにか大きくなっただろう？ 幼くとも人間としていかに成長していくかがうかがえるだろう。このような時勢にあってもウィリーがこの日を特別に費やしてくれてることを望む。

ハウゼル

1944 年 5 月 16 日

材木置場から材木を運搬するきつい雑役をした。その際、婦女子収容所の側、そして二重のパガー（柵）を通り、子供たちが笑ったり、歌ったりする声を聞いた時から、ベーアチェ、フランス・ヤン、アールト・ヤンもこのように収容されているかと思い、気が沈んでしまった。

ヒール

1944 年 5 月 20 日

十分な配給品と食事がまずまずであるお陰で収容所内の雰囲気は良好な状態が維持されている。

ヒール
1944年6月12日

若者の多くが収容所内でろくなことにならないでいる。仕方がない。何せ、教育禁止なのだから本当に困ったものだ。

ヒール
1944年6月17日

またまた味気ない土曜の夕べを過ごした。いつになったら家族と再会できるかとの思いにあきあきしてきた。ヤッペンは我々が一生ここに居るように扱うし、通訳の仕事をするために日本語を習う希望者を募ってる。それでも我々は今月、このお月様に希望を託す。

マイエル
1944年7月3日

収容所内の雰囲気が非常に高潮している。西欧での侵略で戦争も最終の段階にきたと今、確信できるのだ。また、これが圧倒的かつ短期な経過をたどり、続いてアジアでも早急に結局が訪れるであろうと私は予想している。今度こそ、我々が正しいことが認められることを願いつつ。

ハウゼル
1944年7月11日

この時期は私と妻、そして他のみんなにとっても同じにように良い面もあると私は確信する。牧師とその同類の者だけが即刻この社会的逸脱を評価することになろう。

マイエル
1944年7月19日

昨日、マライケが3歳になった。そこで私はフン・クウェーのプリンとコーヒー、それに米国赤十字社の救援物資にあった特別に取って置いた乾燥香辛料入りの袋を使っておいしいスープ

を作ってみんなで祝った。だがこんな日には特別に子どもの成長した姿が恋しくなり、彼女がこの状況に今後長く悪影響を及ぼされなければと思ってしまう。

マイエル
1944 年 7 月 21 日

いや、婦女子収容所内の状況は我々が普通思うほど決して良くない。毎日このことで気を病むのもあまり意味がなくても、時折、この事を考えに入れ、後で、解放された暁には家族に関しても不快な驚きを経験することがかなり多いだろうが、それもこの目で直接ふれることが直ちに実現されればと願う。多くの者はこの点、事なかれ主義的に振る舞っている。

ハウゼル
1944 年 7 月 23 日

日曜日そしてベーアチェの誕生日。捕虜となって 2 度目である。去年は 1939 年の日曜日と同じようにこの日を再び一緒に過ごせると信じていた。可哀相な妻よ。この 1 年並々ならぬ苦労をしただろうに。こんな気持ちにぴったり当てはまるアラン・ポーの詩の一節から：

For the moon never beams
without bringing me dreams
of the beautiful Annabel Lee；

And the stars never rise
but I see the bright eyes
of the beautiful Annabel Lee;

And so all the night tide,
I lie down by the side
of my darling, my darling, my life and my bride.

スホルテ

1944 年 7 月 30 日

日曜日そして娘の誕生日。4 歳になった。ああ、愛しいな。一日中家のことと妻と娘のことに思いを巡らした。もう 2 年も会ってない。パパの大好きなかわいこちゃん、どうしてる？　防火要員の当番のため朝早くから目が覚めていた。顔を洗って原っぱへ行って花を摘み、家族一緒の写真の前に飾ろう。

ハウゼル

1944 年 8 月 11 日

昨晩、長期の中断の後にマンスフェルト博士[20] の蘭印の将来についての講義が継続された。格別に面白かった。

スホルテ

1944 年 8 月 20 日

今日がちょうどその日だ。私が抑留されて今日で丸 2 年になる。人生の貴重な 2 年を台無しにされた。無残にも！ 最近ちょくちょく「外」へ出る。駐屯場の外での雑役にだ。栄養状態が悪いにもかかわらず気分がいくらか晴れる。なぜならば、全てがまるで死に化したような様子だけれども外界の何かを目にすることができるし、いくらかでも体験できるのだ。小さな自然に触れることも他の人間（いるのは原住民だけだが）にも会えるし、ともかくも、何かに忙しくできることは一番だ。そう、これで時間も変わる。さもないと一日をどう過ごすか皆目見当が付かないくてうんざりするだけ。

マイエル

1944 年 8 月 21 日

今日でちょうど 2 年抑留。何と貴重な時が過ぎ去ってしまったことか。この間に子供たちの成長を体験できなかったのは、何とも取り返しのつかないことだ。

[20] W.M.F.マンスフェルト博士（1891 年生まれ。1945 年に行方不明）は、1939 年以来、祖国クラブ代表として国民参議会のメンバーにあった。

ハウゼル
1944年8月24日

昨晩はマンスフェルトの講義の続き、印人大衆（解放なしで）の昇格を達成するための任務について。

マイエル
1944年10月2日

戦争の拠点は太平洋へ移されるようだし、我々は早急に大きなことが起こるのを期待している。一般的にみんなの気分は上々である。我々の多くは結末がはっきりするまで、ことによると更に相当苦しい体験をするはめになるかも知れないということを意識してないが、結果は疑いなくとも我々もそれぞれの者に置かれた状況をその際認める必要がある。

ヤンセン
1944年10月27日

僕はまだ相変わらず食べ物に依存しています。それも特に、上等な食べ物にです。時には、この事柄が一番大切な様にも見受けられますが、実際はそうでないのです。一番重要なことは精神的にバランスを保つことです。しかし、これは度々、僕にとってとても困難となります。でも、だんだんこの調和を維持できるようになってきました。

スホルテ
1944年11月1日

こんな収容所では汚れもするさ！ 若者がまさにそうだし、こそこそとしていて、まったく駄目になっている。我らの若者たちに十分な教育が行われていない。各種教師の怠慢と過剰な恐怖感が一部原因となっている。しかし、主因はヤップが我々の社会をめちゃめちゃに壊そうとする「教育禁止令」にある。やってみろ！ しかしながら、しつけもあまりされていない。そんな具合で、我々の横にある小部屋（ひとつの組が小分けされた通称馬房）のＡ.Ａ.の者を含む若い連中は、良い気質を持ってはいるが、教育上はまるで駄目だ。 一日中、下品なののしりや意地悪いことば、汚くて野蛮なことばや表現を口にし、聞いてる方は耳鳴りや吐き気がするほどだ。これが我らの若い連中だが、必要な（収容所での）指導やしつけに欠けている。こ

うして若者は堕落して行き、その姿に E. M. レマルクの「帰りゆく道」や「西部戦線異状なし」等に書かれてあるように前の戦争にあった様な歴史の繰り返しを体験することになる。これが我々の新社会を形成する者たちなのであろうか？ 彼らは我々が築き上げて行くことに必要な支柱となるのだろうか？ 自己の向上意欲、良好に維持していく独自性がこれら若者にはないし、そのためには未経験で若すぎる。これでは悪者が善者に勝ち誇ることとなる。神様、お救い下さい！ この恐ろしきことがあまり長く続かないように。

ハウゼル
1944 年 11 月 9 日

大勢の者が落ち込んでいる。なぜに？ 調和のとれた人間があまりにも少ないのは奇妙なことだ。

ヒール
1944 年 11 月 16 日

最近、斬新なことがあまり起こらない。そのため気分がまたまた非常に滅入る。

ヤンセン
1944 年 11 月 25 日

現在、僕が精神療法[21]を良く理解するようになってから、すでに僕の小さな痛みがまるで太陽にあたり雪が溶けるように消えました。強制収容所に入る前よりも、気分がもっと良いほどです。もちろん、やせたましたが、体重はさほど重要でないのです。

ハウゼル
1944 年 12 月 1 日

[21] ヤンセンが信仰するクリスチャンサイエンスの教義を意味する。

非番の日。特別念入りに洗濯した。ロンボック（唐辛子）の儲けが 0.10 ギルダー。0.40 ギルダーで 100 グラム取った。退屈さから腹がすき、疲れぎみ。早くまた定期の雑役が与えことを願う。

スホルテ

1944 年 12 月 31 日

12 月 28 日にはお偉方の収容所内視察があったが、２日後にまたあり、これもともかく無事終了して、大晦日と新年を祝う若干の特典がヤップより我々に与えられた。最初、あたりを整頓する雑役をさせるため、「棒」を使って若者たち数人が集められた。ハッ・ハッ・ハッ！　炊事場は全力を尽くし、手持ちの物が少ないにもかかわらず、すばらしい出来栄えを披露した。

これ以下にも記すが、我々は大晦日と新年の特別献立を授かったのだ。でも、総合ではあまりかんばしくなかったが、何せ大世帯（１万人）なんだからどうにも仕様がないだろう。しかしながら、このアイデア自体がうれしかった。でもその雰囲気は全然なかった。みんな疲れに疲れきった様子で、胸苦しい雰囲気の中にいた。もうこれで３年目だ。そして今後どういうことになるやら？今朝早く、家族の写真の前に飾る花を取ってきた。クリスマスの時と同じように。

大晦日の献立：砂糖入りコーヒー400cc の特配。パン 4 分の 1 切れ。サンバル・マニース。オーリボルと砂糖入りコーヒー。新年の献立：普通の粥 400cc。パン 4 分の 1 切れ。砂糖入りコーヒー400cc。インゲン豆スープ。砂糖入りコーヒー。ナシィ・ゴレンスペシャル 360 グラム。サンバル。トマトケチャップ。スープ。砂糖入り紅茶。

新年のために取って置きの１人分 360 グラムのそれでなくても少量なナシィ・ゴレンスペシャルをヤップは兵補に（我々が食べる物を）賞味させるとかで直前に 60 グラムづつ奪い取った。このことはもちろん全員の気分を害したが、正直言って、味は抜群であったし、後になってもよだれがたれたほどだった。何とかつて我々はいい暮らしをしていたことか！ でもすでに言ったように雰囲気に盛り上がりがなかった。どの食堂も静まり返っていて、ほとんど暗闇の中でまるで死んだようだった。音楽も演奏してはならなかった。我々のいた食堂だけは、密かにランプの暗幕を取り外したため、もっと明るく感じた。しかし、形勢を見極めるために各組の部屋を覗いたが死んだように静まり返っていた。そんな具合で我々も新年 1945 年の平安を（家に戻る以外は何も考えずに！）祈ったのだ。

ハウゼル

1945 年 2 月 19 日

ベーアチェのもとに無事帰りたい「意志」を持ち、よくも我慢できたと思っている。だから、避けられない運命に身に委ねることが肝心だ。

ヤンセン
1945 年 3 月 5 日

ここでは時間がとても早く過ぎ、3 ヶ月以内にあなたの元に戻れると信じております。あなたもきっとお忙しくなることと思いますが、僕たちも同じです。ここにある物資の価格が非常に上昇しており、通貨の価値がほとんどありません。しかし、窮地に陥ったことは 1 度もなかったのでさほど心配していません。おかしい話ですが、ここの僕は外にいた時以上に満足しているのです。

ハウゼル
1945 年 3 月 20 日

気分が滅入る。明るいニュースはほとんどない。大方の者の健康状態は悪い。

ヒール
1945 年 4 月 7 日

とげとげしい雰囲気。生活は単調そのもの。灰色の兵舎。灰色の便所。色彩なき環境。ボロをまとう人々。痩せこけた身体。

ヤンセン
1945 年 5 月 20 日

ヘルベルトと僕とはとても気が合います。でも、僕たちは家に戻り、またあなたのご指導のもとに過ごしたいと願っております。食糧を買うためのお金に心配することがなくなれば本当に楽になることでしょう。僕たちがこれまでともかくも自立してやってきたこと、そして神様の御加護を信じることは大切と思います。

スホルテ

1945年5月27日

我々の時代が訪れるのを待つ。「もがいて打ち勝つ」とゼーラントが記した。 「オランダは蘇るだろう」とオランダが言った。そして、我々の間に問題が生じる：いつ？ 雑役は耐え難いものとなった。食事は最低でそのほかは何も手に入らない、小銭すらだ。どの方向に行かされるのか？ 死者の増加、それ故、自由の光が眺められるのは僅かな者だけ。でも頑張れ！ そうだ、みんな頑張るんだ。この混乱から逃れる時がきっと来る。その時まで！

ヤンセン

1945年6月17日

何事も起こりませんでした。すばらしい噂話だけです。これが信じられれば、明日、僕たちは帰還することになります。でも、突然、変わることだってあります。しかし、直ぐにも家に帰れるのは確実です。チョコプリンを僕の誕生日用に作って下さいね。じゃ、また後で！

人間関係と性意識

収容所報告書

自らの政治的立場によって共同体の外に属していたいくつかのグループを除外すると、収容所内に統一性が僅かしかなかったのは残念なことである。31 の異国籍を持つ収容所構成からして初めから好ましくない状況にあったといえるであろう。特に空腹感、そして食糧の闇取引による利益追求が、多くの無責任な者たちをして反社会的な行為にまで駆り立てた要因であった。

日記の断片より

ヒール
1944 年 2 月 10 日

もうすでに他の収容所から 5000 名の男たちがここに集合している。 また大きな一団であるＮＳＢ党員も非常に気味の悪いタイプで、ヤッペンのように様々なバッジを着装している。彼ら一行はタンゲランの収容所の親分達であったのだろう、そこではすごい盗みをしていたはずだ。完全なる我々の敵だ。

ハウゼル
1944 年 2 月 26 日

この状況の下で、人はどのように泥棒になるのか驚愕する。ナイフがすごく欲しかった、がそのチャンスが無く、それでコンパスを盗む。

スホルテ
1944 年 3 月 9 日

厚顔で腰抜け、そして醜いエゴイストのオランダ人は恐怖だ。この 1 年半あまりのつきあいから、この日記のはじめに書いたような考え方は、かなり間違いだったようだ。今だから彼らの本質がはっきりわかる。そう皆は「それは例外だよ」と云うだろう。善いことが例外的な事柄

で、ほとんどのことは悪いことでと言う意味では「そうだ、例外だ」と私は云う。ここでオランダ人を名指したのは悪かった、もしかして人間という方が良いかもしれない。なぜならどこの収容所でもこのような虐待された世界では同じだろうから。人間すなわちエゴイスト。どんな形でもいいから迅速な救いが来ることを願う。ここの収容所には板切れに赤い丸と星印を入れた（約 100 名の）日本の標章を着装して集っているグループがいる。彼らはブランダ・インドたちで、現地人の水準と見解に密着し、トトック嫌い（純血欧州人嫌い）で、仲間の間ではマレー語を話している。彼らは我々から裏切り者と呼ばれ、政治色を明示して別の倉庫に住んでいる NSB 党員と同様に、個別の兵舎に住んでいる。ニッポン（日本）側にすすんで奉仕しているにもかかわらず、我々と同様に、いや我々以上に懲らしめられている。ははは。敵だって裏切り行為は評価しないぞ。

ハウゼル
1944 年 3 月 14 日

今日は良い気分ではない。食糧不足のせいか、あるいは 5 日間配給品の残り物の割り振りでおこった仲間同士のケンカのせいだろう。共同ということを今我々はもっと学ぶ必要があるようだ。監督は収容所の基盤は民主主義と約束したが、ここでの結果は明瞭だ。実に戦時下の民主主義である。

ハウゼル
1944 年 3 月 28 日

共同体精神の見本、カウン（ヤシ葉タバコ）一箱 0,01 ギルダーを 0,20 ギルダーで売ったり、カチャン・イジョ一箱 0,12 ギルダーを 3 ギルダーで、レンペン（タバコ一巻き）0,50 ギルダーを 3 ギルダーで、前は 10 個 0,04 ギルダーのグラ・ジャワ（ヤシ砂糖）を一粒 0,40 ギルダーでなどというぐあいだ。我々は未熟な民主主義者なのだろう。予備基金への寄付は、多くのヤミの現金があるにしてもみんな統一である。いまでは 5 本の紙巻タバコ、ブルー・ジレット 1 箱を 2,50 ギルダーで売るかタバコに交換しようとしている。

スホルテ
1944 年 3 月 29 日

かつてこの日記の始めに女性について、また女性に対する我々の感情について書いたことがあ

るが、それは今ではまったく消え去ったようだ。感情は心の中で死に絶え、もはや欲望もないし、性に関する思考さえも無くなってしまった。もちろん女性達を心配する気持ちはあるが、たとえ時々雑役中に道で魅力的な女性を見ても、何の「欲望」も覚えなくなった。心を動かすこともないのだ。少なくとも今のところ。またもし外に出られたら早く元に戻ることを願おう。信じられない。

ヒール

1944年3月31日

我々のルームメートの一人はひどく短気だ、今朝も汚いカップに入れた古い紅茶を捨てたことで繰り返し言い争いがあった。紅茶は彼のものでもないし、彼は何も持っていないのでいつも我々といっしょに食べるのだ。まったく節度の無い、面倒臭がりの人である。

ヒール

1944年4月5日

重大な盗みではなかったが、（選りすぐった言い方をすれば）保存食を不注意に扱ったということで前の炊事係に失敗があったことが公表された。いずれにしても食事はすっかり改善された。

ハウゼル

1944年4月10日

貪欲さの顕著な見本を経験した。一人の雑役者が軍のグーダン（倉庫）から缶入りのケールキャベツとジャガイモを盗み、鉄の欠片で缶に穴を空け、見物人たちが食べようとするのを避けるため切り傷も気にせず指で中味の大部分を引き出した。

ひどい不理尽がこの収容所にはびこっている。なぜなら一部は、倍額でも注文できるほど金を持っていてすぐになにか食糧を確保出来る一方、他の者は消費するだけか、不正直・非合法なやり方で現金を得た有産階級の気前の良さに依存しているからである。

スホルテ

1944年4月12日

現在ヤップによってジャワ収容所と名付けられたこの収容所では、収容所グループとＬ.Ｏ.Ｇ.出身者との間に同情心と共感が起こったことから、他の収容所グループを犠牲にしてもこのわずかの食事の中から、Ｌ.Ｏ.Ｇ出身者たちに余分の食事を与え、丈夫にしようという意見がささやかれている。人道的な考えだ、だがほとんど死滅の道をたどっている我々をこんな空腹キャンペーンでもって救うことがまだ可能なのだろうか、でも意思は素晴らしい。まだ人道的なの感情があるのだ。それはもはや死に絶えていたかと思っていた。

スホルテ

1944年4月15日

向かい側のヤップのために、何程かの特配を稼ぎ、いずれにしてもそれで贅沢な、より多くの食事を得ようとするお決まりの雑役班がここで働いている。そこでは結局こっぴどい値段で大きな闇取引が行われている。この「仕事」を得るためにもちろん友達のツテや卑劣なやり方が横行し、そこでは例えば、お金でその仕事のチャンスを売買したり、あるいは悪徳商人たちの為に腕時計を高い儲けをとって売りに出すような、不正と最も不公平な取引方法がはびこっている。これらの仕事のハンチョー（監督）として、かつてのバンドンの自動車ディーラーで個人的にも知っている最も公平か正直な欧州人の一人ではないあの「Ｓ」がその役目を果たしている。

マイエル

1944年4月16日

炊事場は近頃ほとんど、やはりここで収監されている中国人約500人のうちの1グループで仕切られている。彼らは食事をとてもおいしく作り、中味も改善されている。それでまた同胞がかつてどれくらい炊事場から盗み出してしていたのか、また統制や連帯への感情に関して、いかに物悲しい印象を残したのかを再確認。

ヒール

1944 年 4 月 16 日

誰かがコーヒー500 g を 1,25 ギルダーで買った。あとでそれは乾燥させて粉にしたコーヒーの出がらしだとわかった。これが収容所の仲間同士でおこったことである。

スホルテ

1944 年 5 月 23 日

すでに 1944 年 5 月末だというのに、まだ解決はない。生活は全く変化無し。すべてが単調で死んだようだ。日中はただ食事を待つのみ、夜になると暗くなっていくのがうれしい。そうすれば横たわり何もかも忘れて長い夜を過ごす。音楽は許されている。何度かやってみたが、それでも満足感は得られない。おかしい。死者の数が（特に赤痢による）がかなり減少している。しかしまだ毎日のように死亡する。そこでは看護人の姿をかたどった強欲な肉食獣たちが前もって人の死を（すでにもっと前からかもしれないが）その衣服や、あれば持ち物全部を盗むための用意をして待っている。恥ずべきことだ。これが我が同胞欧州人なのだ！（いやらしい）

マイエル

1944 年 6 月 8 日

興味深い出来事があった。それは約 80 名のグループがこの米国赤十字救援物資を享受することを拒否したのだ。これは印欧人で、欧州人より現地人の血が濃く、強い反オランダ人意識をもち、自らをインドネシア人と命名し、ヤッペンと同調している連中だ。日本の国旗とその等級によって一星、二星あるいは三星を配置したバッジを着装した様相から我々は彼らを「ボールボーイ」と呼んでいる。しかし幾人かのメンバーの政治意識は堅固たるものではなかったようだ。なぜなら彼らの監督がこの赤十字救援物資を受けることを拒否したことから、幾人かはグループから離れ、収容所内の普通の人たちの仲間入りをしたのだ。

ハウゼル

1944 年 6 月 12 日

小部屋の中の雰囲気は、特にポスチュマとラメルス、そしてポスチュマとファン・デルカイルの間でとりわけ悪い。ポスチュマは間違いなく口うるさいし、ファン・デル・カイルも然り、

そしてラマルスは短気である。私の任務は平穏を保ち、円滑に操縦していくことである。

ボスマン
1944 年 6 月 24 日

夜、7 時半に友人のベンネマと一緒に教会に行き、オルガンを弾く。時々彼はオルガンに合わせて歌う。ほかには彼とすこし散歩したりする。気を許して付き合っている。

ハウゼル
1944 年 7 月 10 日

ファン・デル・カイルとラメルスが小部屋でケンカ。ほとんどの人間は大目に見たり、寛容であろうともしない。結局現在一番若い私に平穏を保つ役割りが廻って来た。

スホルテ
1944 年 7 月 13 日

いまは女性と一緒に生活したり、性交したいと云う欲求や考えが無くなってしまった。体調がよいにもかかわらずもう何ヶ月も前から勃起の悩みすらない。あとでインポテンツになるかも知れないという心配もしない。否、すべて栄養度の問題だ。完璧に影響する。少なくとも私にとっては、幾分悪い気分や不機嫌になるという予想とは反対に、この生活が私を刺激したり、なだめたり、そして掻き立てたりする。特別な欲望や気まぐれは空中に分解し、私をなだめてくれるほどの効果である。

ヒール
1944 年 8 月 3 日

肉汁売りは古い骨からうすいエキスを取って、決して味付けせず、塩さえ入れずに、300 cc を 0,05 ギルダーで売る。湯水のごとくの金儲けをする。汚い詐欺である。たくさんの骨を得るために骨を取ってくるのに替え玉を使う。

スホルテ

1944年8月8日

すぐ近くのグヌン・ボホンでウビ雑役に従事している（約400名）特別グループがある。今朝井戸の側でヤップの見張りから解放された何人かの男達（5人といわれているが）はちょっとだけ現地人の娘を捕まえ、性交するために（それはほんの短い間であっただろうが）村までいくチャンスがあるとみた。それはもちろん男達にとってまたとない機会（すぐにまたできることではない）で、何もない惨めな2年間の捕虜収容所生活でほとんど起り得ない異例なことだが、そのための処罰と後悔が即座に待機している。

何日かたってここで治療を要する淋病に罹っているようだ、噂話は収容所中に瞬く間に広がっていく。みんな知っている。どうしてあの男達が頭脳を使わなかったか。何という人格なのか。

ヒール

1944年8月10日

12人の若者が女性から病気を移されたと云われている。女性をこの収容所に密かに連れ込んだとのことだ。愚かな奴等である。

スホルテ

1944年8月11日

収容所にいる「聖職者」が我々よりもましな、最良の待遇を得ているのはおかしなことだ。あの人たちこそ自己を犠牲にして慰めを与える人たちなのではないのか？前にも牧師について日記に書いたが、司祭もまた「福利」をすごく気にしている。ここジャワ収容所10班のI組には、かなりの金を持っているから福利状況が他の抑留者たちより格段にすぐれているし、最も良い部屋を二つうまく確保した（フランシスコ派托鉢修道会）（托鉢修道会だから非常に慎ましく生活しているはずなのだが）何人かの神父や司祭たちがいる。そして、最良の衣服（普通民間人の服装）をいろんな種類持っている。何の不足も無く、何でも買い足すことができるし、なにかしたかのように見え、健康な男達みんな（8人分に充分な仕事を与える代表の一人以外は）が一緒にしなければならない収容所の雑役を、自在に売ったりするなど役得を満喫している。牧師たちの素晴らしい説教すらないならばどこに正義があるのだろうか？ここでは、（文字通り）みんなが凄く汚い、ひどい不正をし、私自身の信条をも裏返し、変わっていくのに気をもみ始めるほどだ。何も興味のないような振りをするのもまた不利なほうに導かれる一方、

反対したり、反発したりなんかすると自分自身に振り返ってきて、「一人」だけ肘をくらって踏みにじられる。口をつぐむか、自分も同調するのが唯一生き残れることを意味し、（いずれにしろ）利点になるようだ。私もまたこれを学び、できるのだろうか？

ヒール
1944 年 9 月 1 日

雑役就業者からたくさんのラウィ（ミニ唐辛子）が入り、一本 0,01 ギルダーで売りに出た、後に供給が多すぎて 10 本で 0,01 ギルダーになる。オンチョムは仕入れ値が 0,09 ギルダーで売り値は 0,50 ギルダーだ。雑役者達は取引を上手くやることを知っている。75％以上の人間が暴利をむさぼっている。

スホルテ
1944 年 9 月 7 日

「グヌン・ボホン」（文字どおりの意味では偽りの山）は、名前だけでなく「売春行為」もやっているらしい。なぜなら、幾人かの男達（36 人以上らしいが）が別名グヌン・ボホン病という魅力的な名前を持つ病気を移された、現地人女性の代わりに、他の幾人かは今回二人の欧州女性（一人は印欧、一人はトトック（純血））とあえて行ったようだ。しかしここでは金に関してのことなのだが、この男達は卑怯にも、多分困難な状況にあるこの女性達に、お金を支払わなかったので、彼女たちはこの苦情をヤップに申し出たのだ。ただこの哀れな女性達の意図でもなく望んだ結果でもないことだったのだが、彼らは双方を、だから彼女たちもなのだが、手厳しく扱い叩きのめした。罪のあとで悔恨、そして処罰は痛々しい。

ハウゼル
1944 年 9 月 14 日

昨晩スルューファールトからクトウパッ（ちまきご飯）をもらった。彼はとても気前の良い人だ。

ヒール

1944年9月19日

雑役従事者に彼らが収容所内に持ち込んだ食べ物を正当な価格で売ってくれる様、要請した。もちろんそれは起り得なかったが。みんな、出来るだけ多く儲けようとする。

マイエル
1944年9月30日

ボールボーイのスパイ活動や日本側への収容所情報密告によって、そのうちの一人は収容所所長によって我々の収容所自治会に配置された者なのだが、約9名の男たちが小さな違反をしたため凄くひどいやり方で虐待され、当分牢屋に閉じ込められている。ヤッペンの加虐性、それとも同胞の密告、どちらがよりひどいことなのかわからない。これは半分あるいは4分の1欧州の血を持つ人間ことである。

ヒール
1944年9月30日

教育者の小さなグループが見つけられ、処罰をうける。だから聴講する者、講演する者みんなが再び注意するようになる。

スホルテ
1944年10月26日

新入者がものすごく汚い習慣を持ち込んだ。班員 1000 人が身体を洗ったり入浴したりする風呂場の桶に 真夜中にこっそりと大きな「糞をした」者がいる。なんて汚い奴だ。こういう方法で同好者に願望を知らせる何人かのホモか言い換えればゲイの、もしかしたら好色な悦楽だったのか。憶測では新入でこの班の一部に入ったユダヤ人、アルメニア人や外国人などの部隊だと思われている。いろんな人間が（この中に）いるものだ。どこに人間同士の「文明」があるのだろう？

ヒール

1944年11月6日

私が野菜を収穫しているのを見て、盗んでいたと思った人がいた。彼を卑劣漢と呼んだので彼から告発され、みんなの前で謝罪しなければならなかった。謝罪した。野菜の収穫はそのまま続く。嫉妬だったのかも知れない。

スホルテ
1944年11月8日

抑留生活の間でかなり顕著になったことがある。それは多くの（大衆の）印欧人さえ（すでに）トトック（純血）が入浴しない事を常にけなしていたのに、水がたくさんあるのに自分も入浴しない。機会があるにもかかわらずケペッ（不潔な）ままでいて、絶対、あるいはほとんど入浴しないで身体を汚く不潔にしている。私も状況と（健康状態？）で常に自慢できるとはいえないけれど。しかしいつもきれい好きを自慢しトトックをけなしていた印欧人が風呂に入らないとは！考えもしなかった。ずっとここ蘭領東インドで生活を過ごし、このはでな違いしか知らなかったのに、ガッカリだ。そしてこのような誤解に驚くばかりだ!！

ヤンセン
1944年11月9日

裏で人を批判したり、悪口を言ったりするのは良くありませんよ、と年配の元ＫＮＩＬの兵士に言ったことから、昨晩彼と凄い口論をした。後から彼はこっそり自分は間違ってみていたと僕に話しかけた。ここで人と旨くやっていくのは難しい。自由な時勢の場合と人は違う。しかしみんなと協調して生活するのは一種の挑戦ではある。しかしほとんど旨く行かないのだけれど。

スホルテ
1944年11月10日

この収容所の仕事は全部友人や決まった者の手にわたっている。このことは既成の事実だし、前からそして将来も無くならないだろう。この汚いやり方は絶対になくならない様だし、ごく「普通」の男はその実際の価値で判断されないのである。残念なことだ!世界はなんて醜悪で不正に満ちているのか。ある仕事にはまったく不向きな奴が仕事をもらったり。例えば 60 歳

以上の年配の老いぼれ男は、規則では禁止されているのだが糧を、収容所の監視員になりその夜の任務の時には眠りこけながら糧を得ているのだが？？、一方では飢えて止む終えず、糧を得るためにたくさんの能力とエネルギーをもって身体を張って働こうとしている男達もいるのだ。

スホルテ

1944 年 12 月 25 日

ヤップは盗みをする奴には凄く厳しいようだ。デ・ウイードの事件の後をまったく聞いてない以来、我々の収容所自治会委員は何度も繰り返しおこった盗みをヤップに伝えた。学歴も低くはないあのデン・エクスターという元ボールボーイが 29 枚の洋服を盗んだことが後でわかった。ヤップは熾烈で激しい体罰を下した。ものすごくひどく打たれる一方、彼は手を背中にまわし足は土に触れずに外灯のアーチに吊り下げられ、半日そのまま吊り下がっていた。チミンディの闇取引きで法外な値段で売るために、不幸な何も持っていない収容所仲間から衣料を盗んだり、タンゲランでヤップから権力を得て我々オランダ人に悪事を行ったりした、こんな欧州人嫌いの奴には誰も同情しないし、彼が受けた罰がみんなにとってまだ充分でなかったとしても、それは正義で過失にたいする処罰であると感じることができた。

スホルテ

1945 年 1 月 7 日

思考はほとんどない、考えることも出来ない、そうほどんどぼんやりとして考察力もない、ただ一つある思いは食べること、食事のことばかり。食事、もっと多い量とおいしい食事への渇望があるのみ。空腹、飢えた状態のままだ。満たされない、まったく（量も質も）十分でない。その上何でもベーコンさえ全部食べ尽くし、何も人に残したり分けたりしないで、ただ人に苦しみを与えているだけの奴が隣にいるとタンタロスの苦しみを味わわなければならない。なぜならそれは空腹をほとんど耐え難いものにするからだ。

ハウゼル

1945 年 1 月 7 日

本当に部屋を変わりたいものだ。ここの雰囲気は耐え難い、ファン・デ・カイルは自慢屋で小市民的だし、ポスチュマはぼやき老人だし、ラメルスは神経症患者だ。なんて素晴らしい奴等

だ。いつこんな混沌状態に終わりがくるのだろう。

スホルテ
1945 年 1 月 20 日

この収容所約 1 万人で、オランダ人と異国人との割合は約 8000 人対 2000 人だと目に見えて明確な状況である。これは異国人一人に対して 4 人のオランダ人ということである。これはここバンドンとチマヒの 2 つの収容所にいる人間の平均比率だといえるだろう。こんなにたくさんの異国人がここ蘭領東インドで共食していたとは思ってもみなかった。異国人についてちょっとおもしろい共存の見本がある。先週 10 班 6 組（約 120 名）全員が蜂起し、内乱になり、120 名全員が突然長年にわたる確執でお互い同士喧嘩になった。暴力沙汰になりまったく仲介できず、最後は頭が血だらけ、包帯だらけである。はは、単に家族劇と確執である。これが我々の異国人なのだ（主にアルメニア人）！

ハウゼル
1945 年 1 月 24 日

このように人は人間を知り始める。協力というのは囚われの身のオランダ人が知らないものだ。ほとんど度肝を抜くような見本がみられる。

スホルテ
1945 年 1 月 25 日

人は惨めになると正直でなくなり、身近にあるもので盗めるものは何でも盗んでしまう。最初は野菜や薪だったのが、今では衣類、他人に何の役にも立たない眼鏡にまで及んでいる。そうだ、ちょっとの間水道のところにおいてある石鹸まで、容器入でも無しでも盗んでいるのだ。

スホルテ
1945 年 4 月 19 日

最近私がした雑役なのだが、他人に仕事をさせて自分はぐずぐず人の仕事を眺めるだけの人がいるほど耐え難いものはない。一人目立ってそんなことをする奴がいたので喧嘩になった。な

ぜなら彼はその上自分がやったかのように私が仕事を終えた跡に立っていたからだ。後で英国人だったと分った。働くには「紳士」すぎる英国人の下で、父がいつも喘ぎ、あくせく働いていたことを突然考えた。他の人に血の汗をかかせ、自分は「大支配人」を演じている、しかし、わたしだって知っている。その時彼に真実をはっきり告げたので打たれた犬のように尻尾を足にはさんで逃げて行った。英国が占領されるところだったのは不思議なことではない。

ヤンセン
1945 年 4 月 22 日

仕事は良くなった。ただし権力を得て、それで自分の頭が飛びぬけていると思っている同胞で収容所監督が幾人かいることを除けば。まして彼らは我々から本を取り上げる。

ヒール
1945 年 5 月 14 日

班の監督から配給品の砂糖籠を燃やしたことで説教を受けた。確かに、しかしそれで今毎日約 1000 人が 0,05 ギルダーで熱いコーヒーを飲める。羨望だけだ。自分で働くのを嫌がっているだけだ。

ヒール
1945 年 6 月 21 日

この収容所においては、不正はごく普通だ、みんな地位の高い人も低い人もどこかで不正をしているのだ。飢えによって人間は様々な方法で生存維持をはかる。無私の心は喪失だ。

スホルテ
1945 年 7 月 15 日

最も市民的で、文化レベルが高い、「紳士（？）」たちの組の一つである我々の組は、もう早くもバラバラになって、今では言わば悪人（下層階級）とここでその教養を失ってしまった若者たちの集団である。彼らはまた明るく冗談を言ったりも出来て、夜には心配事も忘れて歌っていたりする。

収容所外部との接触

収容所報告書

口頭および書面による外部との接触行為が発覚した場合には、罰則適用があるにもかかわらず、バンドン婦女子収容所内外の親族に生存の証を与えること、及びトコから補充食を入手するための資金の不足が、特に手紙を密かにやり取りすることによって接触を維持することの主要な動機であったことは明白である。

何百人もの外部雑役者は、毎日監視の下、外に出て、たびたびそこで高い報酬と引き換えに接触の仲介を引き受けたのである。また墓地で出会うことでも接触をはかり、一方バンドンの収容所からの病人が手術のため入院するチマヒ中央軍病院でも同様に、接触の機会を持つことが可能であった。

手紙の密かなやり取りが発覚した場合は、まず始めに日本人収容所所長慣例の不機嫌な態度を受けた後、日本軍中央管理事務所によって接触を試みることがどのような重大な結果になるか（特に彼ら自身が憲兵隊の干渉を怖れることもあり）を示す「判決」によって捕らえられた。処罰はきわめて厳しく、日ごとの体罰を伴う 2〜6 週間の禁固で、前もって拷問により外部の仲介者に自白を強要させることが多かった。日本側が 1944 年 2 月から 1945 年 8 月末までの期間内で、1944 年 1 月 21 日、1945 年 2 月 12 日、1945 年 5 月 29 日のわずか 3 度しか葉書を書くことを許可しなかったのは人間性侵害の問題である。もちろん政治、軍事、経済事情を記すことは禁じられ、また収容所での待遇に関しての不都合な報告は禁止されていた。最初 2 度の葉書は、日本の収容所監督が指定した 12 の文章の中から（最高 3 文）選ぶ必要があったが、各々10 語及び 20 語（ジャワ宛てはマレー語で）は自由に書くことが許された。最後の 1945 年 5 月 29 日には、抑留者に 50 語自由に書くことを許可した。

手紙は上に挙げた期間中同様に僅か 3 度のみ受け取ることが出来た。葉書は到着までに 2 ヶ月から 4 ヶ月かかった。日本側の検閲官の抹消さえなければ、4 号収容所の多くの者は数ヶ月経てからではあったが家族の死亡通知を聞き知ることができた。外国の赤十字社郵便物は（東京経由）非常に不定期ではあるが、計 9 回受け取っている。これらの郵便物は 1940 年から 1942 年 3 月の消印のものであった。

郵便為替の送信は要請を繰り返したにもかかわらず、許可されることはなかった。為替は何度かは収容所の外部で受け取られ、横浜正金銀行の口座に入金された。

外部との接触はマレー、中国、日本の新聞を（トコの品物の包装紙に使うか朝鮮人兵に高い報酬を払って持ち込ませる）密かに入手することによって為された一方、最後の時期には、周到なる注意深さをもって、そして「消息筋」として選ばれた 5 名のみ、自作の無線受信機によって、外国のニュースを聞く事が出来た。1945 年 4 月 8 日、26 人の収容所幹部が報

酬として、10 語外国に向けて電報を打つことを認めた（この電報は 1945 年 10 月に受信された）一方、1945 年 7 月にはオランダ人・英国人・オーストラリア人・米国人各々一人づつが、短い検閲済みの言葉を無線で外国に話しかけることが許可された。

日本人監督は 1944 年 5 月 22 日以降、長い中断期間を置きながらも、印刷物「ボイス・オブ・ニッポン」を収容所内の講読書として与えていた。すなわち 1944 年 2 月 21 日から 1944 年 12 月 4 日までに合計 29 部発刊された、戦況・ＡＸＩＳ（枢軸国）の状況・連合国の情報を日本側独自の方法によって抑留者に伝える英文の週刊新聞を受け取っている。

日記の断片より

ヒール

1944 年 2 月 12 日

この収容所にはまだ 82 人の戦争捕虜がいる。我々の多くはそこで草取りをしなければならず、彼ら紳士たちがパンにチーズをはさんで食べているのを見た。彼らはアンボンが陥落したと話した。その他マデオンが爆撃され、ラバウルが陥落して 30 万のヤッペンが捕虜になったと云った。

ハウゼル

1944 年 2 月 19 日

9 日あたりからドイツ事情に関する重要な噂が続いている。信じがたい。私は純然たる空想かヒステリーとみている。

スホルテ

1944 年 2 月 26 日

いつになったら終戦になるのだろう？新聞には素晴らしい記事が載っている。ドイツは陥落し（降伏か?）、太平洋戦線はバリーミンダナオ（フィリピン）まで後退。味方はもうそこまで来ているのか、バリ？すぐ傍だ。いつ？

マイエル
1944 年 3 月 1 日

前の週にはまた多くの噂があった。ドイツが 2 月 9 日か 19 日に降伏したとのことだ。皆は経験によって噂にはかなり冷静になっている。あとから全く事実でなかったと聞いても、すぐに立ち直り、また同じくらい興奮して次の噂を期待するのだ！

スホルテ
1944 年 3 月 1 日

1944 年 2 月 29 日よりこの収容所及び全チマヒに不意に空襲警報訓練についての指示が出た。今度は何か意味があるのか、それとも来年のクリスマスは家だろうという私のいわゆるおどけた意見が正しいのか？ そうすると 1945 年のクリスマスになるだろう！わからない、望みはしないが。いやいずれにせよ早ければもうけもんだ！

ヒール
1944 年 3 月 4 日

収容所の規則に関して多くの噂が出回る。監督は「噂を信じるべからず、重要事項は我々が全て報告する」と掲示板に正した。

ボスマン
1944 年 3 月 15 日

戦争に関するもっぱらよい知らせを聞く。北部マラッカの戦闘、ボルネオ、セレベス、サバンがヤップによって爆撃される。西欧 17 ヶ所で上陸。

マイエル
1944 年 3 月 16 日

まわりの空気に、説明するのは困難だが何か不安なものがある。多くの者が迅速な進展を待ち望んでいる。現地人の歩哨は 15 日付けで解雇され、現在は毎晩泥酔しほとんど我々のことな

ど顧みないヤップ 5 名だけが我々の警備に当たっている。だが欧州人として外出は不可能だ。都市部の警備は正常だろうし、食傷ぎみの現地人の中には 2.50 ギルダーの報酬で欧州人を売り渡すまだ多くの密偵がいるのだ。

バウス
1944 年 3 月 31 日

H.バウスより息子に宛てた手紙

近いうちにまた出会えると願っていたが、4 月の外部雑役班は全部予約済みだ。5 月に、たぶんケイスの誕生日に望もう。ケイスはどうしている？オランダの兄さんの事を考えることはあるか？私は毎日考えている。彼はもう 21 歳だ。友達のウィムからの手紙は受け取ったか？バラン（荷物）を渡したり、持ってくるのはくれぐれも慎重にするように。私自身もいろんな物品が不足している。薫煙するもの、パイプタバコ、練歯磨、毛糸の靴下、白と黒の縫糸、そしてお金。勉強はどうだい？最善を尽くせ。ワースドルプさんは息子さんと会った。私もいつかおまえの手紙が欲しい。一度試みてみてくれ。私の収容所番号は 8760 番で 10 班、13 組、26 号室だ。ケラーおじさんとダイクストラおじさんに、それからダーケさん、ポルダーファールトさん、マイエルさん、グレイブさん、ランデルさん、ベーアさん、ライナー・フォルマーさん、父さんの知り合いみんなに宜しくと伝えてくれ。今のところ移動はなさそうだ。若い人たちにとってはバロス収容所のほうがここよりましだ。ここでは本が無くてみんな寂しい思いをしている。

バウス
1944 年 4 月 9 日

H.バウスより息子に宛てた手紙

復活祭だ。キリストの復活と再生のお祭りだ。我々にとっても再生とこの悲惨な落ち込んだ状況から解放されるお祝いになるように。我々の元の社会はいろいろ学びとったであろうから、戦争の無い新しい世界が築かれよう。そうすれば我々はきっと良き将来を迎えることになろう。そのために皆で、老いも若きも共に忍耐を持って、しかし古い腐った部分は徹底的に取り除く努力をせねばぬだろう。このカオスの後には、必ずより良い世界になると私は確信しているが、そのためには社会的にも精神的にも一生懸命努力する必要がある。他の大国ではもうすでに始まっていると思う。米国や英国、ロシア、中国などの大国では資本や物資に関してはすでに相

互同意している。すべての地域の再建を支援し、すべての人にその人に適応した生活を与えるため出来る限りの不公平な状況を排除するだろう。そうだヤン、すでにそうあったらいいのだが。

将来何になりたいか考えたことがあるか？このような都市や工場すべてが大崩壊した後には、たくさん建築することが必要となるだろう。アルノルド・デックスタールおじさんの製図の仕事に興味があるかい？彼は私にいくつか設計したと書いてきた。何か考えて、それを紙に表現するのは興味深いと思わないか？建築と建設業の世界とは将来性があるよ。この事について一度考えを聞かせてくれ。もしおまえが上級市民教育中等学校 5 年の卒業試験に合格し、その後オランダの技術専門大学校にいくつもりなら、アルノルド・デックスタールに技術専門大学校の勉強についてどう思うか聞けばいいと思う。素晴らしいと思うよ。上司は私がここでしばらく建設業のために残るのを望んでいるし、私も健康であればそうしたいと思っている。私はママの望みもそうあることを願っている。ここは今朝とても静かだ。多くの人は教会に行っていて、私は部屋の裏手の中庭にあるとても静かな場所にいる。ここには 1 万人いるから静寂はあまり望めないのはわかるだろう。手紙を書いたり仕上げたりする時間はなかった。何度も邪魔が入る。でも今おまえへの手紙は書き上げるよ。ここで今我々は大きな石造り兵舎の 2 人用の部屋に 4 人で住んでいる。偶然今回はオフェリンガ氏と一緒だ。その他にはハンスカンプ氏、スキンメル氏だ。さっきノル・ コティーと一緒にワースドルプ、ヤン・リール、ドハーンスや他の人たちの所に行ってきた。

収容所では楽天的な噂が押し寄せている。みんな戦争はこれ以上長引かないと云っている、今月で終わるだろうか？そう願おう。ノルおじさんが、ディンおばさんの部屋は誰が一緒なのか、また他に誰がいるのか尋ねている。一度書いてきてくれるか？ちょうどヒソルフが赤痢で亡くなったという知らせが入った。全く悲惨だ。彼は 60 歳のまだ頑強な男だったのに。死亡者の 40%がＬ.Ｏ.Ｇ.出身者だ。もう紙が無くなった。紙は節約しなくては。

追伸：たった今、建築家のコーパーさんが亡くなったと知らされた。技師のスネル氏は重病だ。ハンスカンプ氏の息子さんは現在バロスの病院にいる。ハンスカンプさんの息子さんを知っているかい？

スホルテ

1944 年 4 月 9 日

噂は相変わらず、ここ 2 年重要性を失う事が無い。まだ確実に我々の周りでは毎日多くの噂がささやかれ、一方では無頓着を装いながらも実際には心底噂を聞きたがり、せめての心、小躍りして喜こんだり（冷静な考えをもっているにもかかわらず）、他方では失望をまた味わった

り特に嫌な噂が流れる。これが 2 年続いていて、我々はまだ懲りていないのだ！狂ったようにまた飛びつく。噂は確かに確認出来ないから、誰が異議を唱えられよう？何が今事実なのだ？シンガポールが連合軍の手中、スマトラ 5 ヶ所で連合軍上陸、ジャワさえも噂になっている。また以前のようだ。米軍がすでにパダランまで来ているだって！我々の分別はどこにあるのだ？しかし人はまた云う「もし来るとすれば、毎日でも起こり得ることだよ」そして彼らがまた正しいことになるわけだ。

ボスマン
1944 年 4 月 13 日

ドイツが降伏し、占領国から撤去という噂が流れている。ハワイ島で日本（ノムラ）と敵国間で会合があるらしい。我々にとって有利に展開したとのことだ。日本軍は東亜圏の占領地から早急、そして穏やかに撤去、ということは同意があったのだ。心から願おう、なぜならこの収容所での生活環境はかなり困難になってきているのだから。

ハウゼル
1944 年 4 月 15 日

また読むようにと 2 部の「ボイス・オブ・ニッポン」を貰った。やはりこの間の噂は本当だったようだ。

バウス
1944 年 4 月 16 日

H.バウスより息子に宛てた手紙

先週日曜日と金曜日のおまえからの手紙受け取った。すぐに返事を書いてくれて、また私の手紙を楽しみにしてもらってうれしい。うまく保管してまた読んでみてくれ、そうすれば他の質問にも答えることができる。幸いケラーさんが良くなってきている。ワースドルプおじさんが前にケラーさんがとっても悪いという話しをしたのだが。靴下と石鹸は必要ないよ。自分で使いなさい。

3 年生を無事及第して良かった、4 年も引き続いてしっかり勉強するように。学問は誰にも決して取り挙げる事ができないものだ。広い競技場のパチョレ（鍬で掘り起こす）は大

変な仕事だ。十分な食事がもらえればよい日課なのだが、ここの貧しい食事だけでは安静にしている必要がある。うん、この時点では将来何を望んでいるのか、何をしたいのかを云うのはとても難しいことだ。それはとてもよく分る。だから学問だけはしっかりして、良い書物を読んで、見聞をすべて善い事に前向きに働かせ、悪い事は無視してしまおう。

チハピットの家の略図を送ってくれたのはありがたい。それで家のなかの様子がわかる。ノル・コッテーおじさんもディンおばさんとアイスフォーヘル夫人が一緒に住んでいるのを聞いて喜んでいる。この夫人はホーヘスコール通りにある我が家にも来たことがある。知り合いが一緒になれて楽しいことだろう。でもいろいろ知らない名前もあるが。ベルクハウト？ブットナー？コック？ボスマン？そうだ、家中満杯だ！みんなが元気で、みんなと元気に再会できることを願っていよう。

ここでの生活のことを語ってみよう。今週は病気や死亡者ばかりであまり良いことはなかった。先週書いたスネル氏はついに亡くなられた。多くの病人が大病院に行く。炊事場は中国人の手中にはいって、食事をとても美味しく作ってくれる。ただ量は僅かだ。飢えて痩せていく。今ではもう 70kg もない。昔は 95 から 100kg あった。だからかなり痩せている、だが幸い私は健康だ。先週地方少年院で測ったら 75kg 余りだったから、1 ヶ月で 2kg 以上減った。ノルおじさんは 63kg だ。彼もとても痩せている、弱っているが健康だ。ハルストラ氏は 47kg、少ないだろう。彼はそれほど重くなったことはないけれど今はまるで幽霊のようだ。ヤン・リールは大きくて幅も広く、頑丈だ。彼も大丈夫。まだ炊事場で働いていて、食事の配給を管理している。みんなが割り当て分を得ることが大切なのだ。彼は中国人と一緒にうまくやっている。1 年半Ｌ.Ｏ.Ｇ.で一緒だった友人のフックストラは息子さんのヤンとこの 21 日に逢うことになっていたが、病気のため中止になった。こんど 5 月の 3 日を予定している。ヤン・フックストラを知っているか？彼は教鞭をとっている、前にはガス会社で働いていた人だ。彼に宜しく伝えて、私が父親のフックストラさんと毎日話していることを伝えて欲しい。家からフェイデイの便箋を持ってきていて、まだ僅かしか使っていない。だから半分送るので使ってくれ。まるでおまえのために保管していたみたいだ。トランクの下に入っていて、今までとても節約して使っていたのだ。緊急の場合だけ、何人かに紙を分けてやったが、人目にはさらせない。すぐに無くなってしまう。友達のウィムの小包ではなんという誤解だ！彼のためにおまえが何か持ってきたと聞いたと思っていたのだ。

スホルテ

1944 年 4 月 20 日

最も熱狂的な噂（過去には無い）が流れている。平和にようやく到達、ドイツが屈服し、日本が賢明なる降伏を選択、我々は今月の 25 日に解放、そしてまた連合軍の占領部隊が到着、な

どなど。この中のどれが事実になるのだろう。どうか静かな終焉を意味しますように、お恵みを！

バウス
1944年5月7日

H.バウスより息子に宛てた手紙

5月 5日の金曜午後、糧秣収集での出会いは、なんと素晴らしいことだった。これでまた何週間か過ごすことができる。アルノルド・デックスタールが一緒に来られなかったのは残念だった。病気になっていないことを願おう。雑役監督を通してなるべく早く手紙を送ってくれ。とても顔色が良く、少し痩せたが、背が高くなって、健康で落ち着いているのがわかったよ。こんな出会いはすぐに終わってしまうね。もう6月3日か4日の要請をしたかい、それともこちらから要請しなければならないのかな？それともその間にまだ機会があると思うか？必要ならば私も交代できるよ。ワースドルプは 20 日に行く、その日は息子さんの誕生日だ。一緒に行きたいと思っているが、試みてくれるかい？ここ 2 週間またパンが一切れもらえる。ここで焼いた大きなパンの5分の1だ。グラ・ジャワ（ヤシ砂糖）か熟したピーサン入りの美味しくて滋養のあるパンだ。みてごらん、考えることは食べ物のことばかりだ。最近たくさんの果物がもらえて、中国人は倍ほど食べたいと思うほどとても美味く料理するのだ。

ヒール
1944年5月19日

パレンバン上空にパラシュート隊が待機しているとの噂が続いている。チャハヤ[22]によって欧州第二前線基地確認。テッセル・マーメランド島が陥落。ドイツ戦闘機 180 機が 30 ヶ所同時攻撃によって爆破。イタリアのモンテ・カシノはポーランド軍に占領される。50機の爆撃機が昼間スラバヤを数時間にわたり爆撃。噂はレンバンやチリリタンにも及んでいる。

[22]「チャハヤ」（文字通りの意味は光り）は1942年6月8日初版のバンドン日刊紙。

ヒール

1944年6月29日

外部との接触は便所の下にある下水道を経由しても為され、手紙がやり取りされている。

ハウゼル

1944年7月7日

葉書が収容所に届いている、いつになったらもう一度ベーアチェや子供たちからの便りが届くのか。

ヒール

1944年7月7日

ようやく新聞によって噂の多くが立証される。初日、34 万人がフランスに上陸侵入。12 時には上空にも侵入。英国王がフランス訪問。ドイツにとっては深刻な状況、英国は 23 艘の戦艦損失。シェルブール港は占領されたが、都市部は無事。ゲッペルスによれば、侵入は米国がロシアの影響を恐れたために為されたらしい。素晴らしい権力認識である。ローマは他の都市同様、静かに明け渡される。ハルマハラ後方の艦隊はヤップによって爆撃。マーシャル群島の本島が陥落。ボニン近隣は米国戦艦が海上を制覇。ジャワは再び警告を受ける。戦争はすぐ傍だ。

スホルテ

1944年7月16日

なぜなら我々にとって全て奇妙なものだから。顔付き、人間、環境、場所、言語、すべて、詳細のすべて、すべてだ！全てが我々には未知のもの。あの古き良き時代はすでに無く、まったく謎と闇の中にある未知のバビロンに我々は生活しているのだ。

マイエル

1944年7月21日

バンドンの婦女子収容所から連行された 12 歳から 14 歳の約 300 人の少年達が、無人のチマヒ

婦女子収容所に入ってきた。実に国家にとっては危険なタイプである！収容所の外部雑役班を通して様々な父子が対面し妻たちの事が聞けた。この少年たちからの婦女子収容所に関する報告にはとても良いものから悪いものまでかなり差がある。

マイエル
1944 年 7 月 25 日

本日リットフェルトは、まだ収容所の外に住んでいる夫人から 3 歳の息子が描いたぬり絵が入った封筒を受け取った。約 2 年ぶりに子供の物を見るのは彼には大きな感激だった。幾人かの者は 1943 年初頭の欧州から赤十字社の手紙などを受け取っている。「早急に」親族との文通が許可されるだろうと何度も約束したにもかかわらず、我々がこの 2 年間で外部から公式に受け取ったものは、これが全てである！

マイエル
1944 年 7 月 27 日

熱狂的な噂がまた流れている。ヒットラー襲撃、ヒットラー死亡、ドイツ降伏、日露戦争、東条首相辞職、これ以上は望めない！一部は事実であると我々は知っている（どのように人に話すか、どのように誤解される事になるかも分らない）、そしてもうすでに我々はいつものように事態が先走りしてはいるが、終末が見え始めた。

ハウゼル
1944 年 7 月 31 日

楽天家たちは、米国人をカムチャッカに送る、ソ連は日本と参戦、ヒットラーは襲撃から逃れ、連合軍はホルスタインに上陸、日本の艦隊総破壊などなどと噂をしている。もしそれが事実ならば、我々はすぐに家に帰れる。私だけがいまだ疑問を持つ唯一の人間になりつつある。

スホルテ
1944 年 8 月 4 日

現地新聞が世界の暴君であり宿敵のヒットラー死亡を報道した。一方、この収容所特別登録の

中国人が彼らの所持品全てを整理し特売に出し、また我々の空のカバンを買おうとしている様子からして、彼らは解放されるであろうと噂されている。噂は、非現実的そして不安な形をもって、終戦に関して及び我々オランダ人も含めすべての民間人捕虜の解放がすでに語られている。しかし我々はこの 2 年間もう何度も騙されている。まず見て、それから信じ「始め」たい。ああ、本当にそうなるのだろうか、特にヤップが自分でこのような重要な報告やベルリンがロシア軍に占領されたという新聞を持ち込んでいる現在、全面的に確実な正式の知らせがあった後で信じることにする。

マイエル
1944 年 8 月 7 日

ドイツ降伏、そして現在日本の降伏の噂が続いている。しかし特に後者の噂は早まっていると思われる。だが全部終わっていてもオーストラリアからの連合軍が到着するまで我々は何日も知らされず、収容所に留まらされているということもあり得る。さもなければ、期待と興奮で落ち着いていられないことになる。

スホルテ
1944 年 8 月 16 日

今日本当に日本側から葉書が配達された。しかし主にまだ収容所「外部」に留まっている女性達からのものであった。ヤップが二年間ずっと我々の妻や家族との接触を全部、本当に全面的に禁じていたのは恥ずべき、許し難い行為である。全く何の便りも伝わらず、喜怒哀楽、何一つ無しだった。我々はまさしく生きる「屍」であった。その通り。我々は全然状況さえつかめず、家族も我々のことを知ることがない。我々は獣以下にみなされ、扱われた。恥ずべき事だ！私には 2 年間一度も便りが届かない！

ハウゼル
1944 年 8 月 20 日

日曜日、葉書を書くのに忙しい。最初は英語で、後にはマレー語だけが許される。12 の指定文章から 3 文義務として選択し、20 語は自由に書ける。ベーア宛てに書く。

selamat hari tahoenan kamoe dan Aartjan,	みんな、アールトヤンも楽しい誕生日を
Kesehatan baik sekali	迎えて下さい。私は元気だ
Karena ada pekerdjaan harian	毎日働いているから
Banjak tjoem pada	ベーアチェ、フランスヤン
Beertje, Fransjan dan Aartjan	アールトヤンにキスたくさん送ります

否。こんな葉書に価値はないけれど、生きている証にはなる。

ヒール

1944 年 9 月 17 日

1943 年 4 月付けの妻の手紙を受け取った。遅くても来ないよりはましだ。

マイエル

1944 年 9 月 24 日

話しによるとナイメーヘン・アルネムで激しい戦闘があり、ナイメーヘンはほとんど瓦礫に埋もれているとのことである。コースおばさんとデ・クラインおじさん、そしてレーネンのコルはどうなったのだろうか、それにリック母さんとケイスとその子供たち、フースと彼女の夫はどうなったのだろう？「人」は占領後のオランダにはほとんど若い人がいない、多くがドイツでの爆撃で戦死していると云っている。ほとんど思い浮かべることもできない状況だが、いったい何が待ち受けているのか誰にも分らない。我々もここで戦争の最終段階に今少しずつ近づいているところである！

ヒール

1944 年 9 月 28 日

噂は途方も無いものになって、もう書くのも楽ではない。気のふれた者だけがまだ信じている。

マイエル

1944年10月2日

今日はじめて約2年ぶりに家族から葉書を受け取った。ありがたい、ウィリーと子供たちは元気だ。レイニーが一緒に住んでいる。葉書は見たところちょうど我々が8月に許されたのと同様、20語のマレー語だけで書かれている。すなわち個人的なことは伝えられない、だがともかくもみんな元気でいることが分る。

ハウゼル

1944年10月4日

信用できる筋からの報告によると、スンバワからの撤去、西セレベスとミンダナオで連合軍上陸、ステッティンの占領、オスナブリュックで英軍敗戦、それによってオランダで激しい戦闘があった。コブレンツからの米軍支援で追撃。ザイスト、ドリーベルゲンで激戦。ルーズベルトは米国軍の英国に対する感情を静めた。

スホルテ

1944年10月4日

そしてまた目新しいニュースだ！ほとんど受け取れるのか、また返事が来るのかの希望もないまま、8月に家に葉書を書くのを許されたのだが、なんと驚くべきことにそれは郵送されていて、幾人かが返事を受け取った。2年ぶりのことだ。多くの者に何と喜びを与えることか。ただ私自身にはまだ生きている証がない。まだ返事が来るのだろうか？心底良い便りが届くことを願う。

ヒール

1944年10月17日

バロスとの接触はパンを取りに来る者を通して維持している。

ハウゼル
1944 年 11 月 6 日

昨日の夜、ベーアチェからの葉書、住所ジャワ収容所Ｃ.Ｐ.28 号室。指定文の他に、「フランスヤンも大きくなって 4 歳になりました。アールトヤンはまだかわいい赤ん坊。ここにズス、キティ、トミー、そしてニーマイエルの家族がいます。葉書受け取りました。心配しないで。」とある。ありがたい！

スホルテ
1944 年 11 月 10 日

今晩 11 時ごろ、突然のサイレン、空襲警報だ。多くの者が落ち着かない様子で真っ暗闇の中、何百もの新しい話しや噂を囁きあっている。一方、明日収容所の日本人所長が交替する。みんな新しいことばかりなのだ。どうなっているのだ？

ヤンセン
1944 年 11 月 20 日

母のことをいろいろ話してくださったフォルテールさんとの接触が持てました。いずれにしても、母が今チデン収容所に安全で健康でいることを知りうれしく思っています。

ヒール
1944 年 12 月 4 日

第 15 大隊の人たちと話した。カレースの婦女子収容所は無人で、チハピットも千人の女性以外は空っぽだと話してくれた。婦女子たちはバタビアあるいはソロに移送されたようだ。かけがいのない者たちに何て惨めな苦労をさせていることだろう。

スホルテ
1944 年 12 月 21 日

もう 2 年以上経つのに家族からの便りを一度も受け取っていない。なぜなんだ？家族が変わり

ないことを、大丈夫だと願おう！他には 2 月に受け取った 1943 年の 7 月に妻と子供、両親と妹みんな一緒にスラバヤの収容所に入ったという最後の便りを心に納得させて生きている。私にはなにも変えることが出来ないし、彼ら自身が乗り越えていくしかない。いずれにしても彼らは一緒に勇気づけあっている、それだけが安堵である。

ハウゼル
1944 年 12 月 24 日

また日曜だ。再び病院雑役に就く。印欧人の女性が我々に「楽しいクリスマスを、そして元気を出して」と通りすがりに囁いた。

ハウゼル
1945 年 1 月 3 日

父親達は他の場所の少年収容所にいる息子達をここに連れてきて貰えるよう申請出来るようだ。復活祭には本当に家に帰れるという楽天家の目算はどうなっているのだろう？

スホルテ
1945 年 1 月 20 日

新聞（ヤップの）にはマカッサル、バリックパパンなど「大東」[23]のすぐ傍で連合軍が活動しているとある。一方スラバヤの東から連行された 5 名の印欧人によれば、スラバヤは最近ほとんど毎日のように空襲警報があり、爆撃を受けているという。本当だろうか？やっと近づいてきたのか？我々は 2 年半以上も疑いつづけている。

スホルテ
1945 年 1 月 25 日

1945 年 1 月 25 日、ここでの雑役中、思いがけず妻のミアからの葉書をこの手に受け取った。

---

[23] 大東は南セレベス（スワラシ・セラタン）と西ニューギニア（イリアン・ジャヤ）間の地域である。この強硬な地域はマカッササル（ウジャン・パンダン）より指揮されていた。

私は唖然とし、どんな幸福が訪れたのかすぐには自覚出来なかった。あとになって実感した時には感情を制御できなかった。確かにこの葉書から推測できたのは、消印は近い日付のはずでたぶん 1944 年の 11 月か 12 月だ。なぜなら妻が送った 3 度目の葉書で、我々の条件と同様、たぶん約 2 年半ぶりのものであるからだ。一方葉書には妻とかわいい子供が元気で、ルキーは大きくなって「利口」になったと書いてある。残念ながら父と母のそばにはいないけれど、収容所の中にいる。しかし多分遠いセマランかアンバラワだろう。ただミアが書いているように 2 年半たっても 3 度の機会を利用したのにまだ私からの便りを受け取っていないのがとても哀れだ。葉書に書かれた数語（最高 25 語）からいろいろ分ってくる。まあよい。私の一日は幸福でお礼にお祈りする価値はある。始めだけでその後何も便りがないより、2 年半後でも良い便りの方がうれしい。

ヒール
1945 年 2 月 2 日

25 日の新聞では台湾が 1000 機の戦闘機によって爆撃されたとのこと。日本も。千島も爆撃。ドイツはますます窮地に陥っている。

ヒール
1945 年 2 月 12 日

ボイス・オブ・ニッポンが全然来なくなった。我々が家族に書いても良い指定文の中には、新聞によって定期的にニュースが伝えられるとあるのに。それはそうとまた葉書を書いて良いと許可がでた。みごとな指定文の一つには、我々は素晴らしい設備のととのった病院を持っているともある。

スホルテ
1945 年 4 月 6 日

今月の初頭に主としてバタビアの婦女子収容所からの葉書が何通か届いた。これは 3 年間で 2 度目の便りだ。また何人かの（27 人）幸福な者たちはヤップから外国に電報を送る機会を得た。今なぜこんな事が可能なのだ、嘘ではないのか？私自身には新しい便りがない、もしかしたらまだ来るかもしれない、そう願おう。確かにこの間はそれでとても幸福だったのだ。「終わり良ければすべて良し」と願おう。

ヒール
1945 年 5 月 5 日

欧州の戦争が終わったとの確認を得た。ヒットラーが死に、ムッソリーニは民事裁判で死刑の判決を受け、見世物になった。

ヒール
1945 年 5 月 23 日

また便りが書ける。今度はヤップが書いたたわごとではない 50 語だ。これは只事ではない。

スホルテ
1945 年 6 月

向かい側ではヤップのもとから 80 名の兵補たちが逃亡した。そのうち 25 名はつれもどされた。ふむ、ドイツの降伏の後、ここでもなにか起ろうとしているようだ。なぜなら日本に対する処置に関して最高の知らせが入ってきているから。一方、兵補たちは興奮して、時々グループ全体が逃げ散って行く。彼らはいずれにせよ「彼らの自由」が燃え尽きるのは望んでいないようだ。

ヒール
1945 年 6 月 17 日

やっとまた新聞を受け取る。サマリンダが爆撃される。タラカンでオランダ民事行政部が再建。万歳！7 千名の脱営兵補たちがそこで働いているはずだ。タラカンが放送する。まだ長びくのだろうか、それは無いはずだ。

ヒール
1945 年 6 月 20 日

すべては上々だ。日本は落ち込んでいる。我々は迅速な終末を予想している。教師達は別棟に住み教えることが許されている。驚きだ。

ハウゼル

1945 年 7 月 6 日

ありがたい、ベーアチェから葉書だ。みんな病気したけれど、また元気になったようだ。

スホルテ

1945 年 7 月 8 日

収容所全体が緊張している。噂は事実だろうか、収容所全部が連続して閉鎖されるらしい。日本軍の目標に役立つため？なにが事実になるかは分らない、実際には最近の噂は 60%が事実であること次第に分ってきた。1 ヶ月か 2 ヶ月以内にここで終戦が実現することも期待だろうか？そう願おう、命ある限り望みはある！

ヤンセン

1945 年 8 月 18 日

およそ二週間前、僕たちはファン・デル・フェイン氏からエリザベスが死亡したことを聞きました。ひどい打撃でした。僕はまるで頭を殴られたように感じました。ヘルベルトもとても哀れでした。今はすこし回復しています、でも僕たちは決して彼女のことは忘れないでしょう。天国でまた彼女と会えるでしょう。

チチャレンカ鉄道敷設作業

日記の断片より

スホルテ

1945 年 8 月 23 日[24]

我々は、マットレス（ちなみに我々はチチャレンカ到着後 3 週間目の最後の日々に受け取った、また多くは自らのマットレスを二度と見る事がなかった）がすでに積み上げられていたために、チマヒ最後の夜は眠れなかった。最後の食事のため朝早く（4 時頃）起床せねばならず、すでにくたびれての出発。汽車の旅は過酷であった。我々約 150 名は、手荷物などと共に一両の車両に押し込まれ、豚よりもひどい状態で重なり合い、立ち、吊り下がり、座り、殴られながら移動させられる。そして約 2 千名の一群が同時に出発したため、それはおよそ 12 両編成車両の長さを越えるものであった。

ともかく窮屈な体位で 2 時間を過した後、チチャレンカに到着。そこで我々は皆各自のバラン（荷物）を首に掛けて、埃っぽく石の多い道をおよそ 5 km 急き立てられ、ついに非人間的な緊張の後、我々の「仮宿舎」が現われた。同行のヤップが「コノヤロー（日本語の罵言）、早くしろ場所は僅かだぞ」と怒鳴った。我々がそこで目にしたのは、まだ中に入る前から我々の神経を逆なでたのだ！荒れ果てた屋根で蔽われた低く建てられた倉庫は、かつての煉瓦やかわらの保管場所であったことが示され、周囲は急いで立てかけたゲデック（竹で編んだマット）とカワット（鉄条網）で囲まれ、うだるように暑くて、カラカラに乾燥した土地に位置していた。我々はまず様々な男達がもう少しで首を折りそうになった涸れ果てた水田に集められ、約 1 時間「豚たち」の人員点呼があった後、中になだれ込んだ。しかしその時我々がそこで目にし、たどり着いた場所は記すもおぞましいものであった。本当に、豚小屋のほうが我々の行き着いた場所より文字通り快適でまずまず設備の整ったものだろう。だが男達は疲労困憊し、1 日半の間一滴の飲み物もなく干からび、そのひどさも感じ得ないほどであった。繰り返し変動する不規則な部屋割りの時には小さな諍いがあったが、その後、僅かにゲデック（竹で編んだマット）が敷いてあるだけの窪みだらけで石がばらまかれた固い土の上に倒れ臥した。仕切りはゲデックで臨時に作られたもので、穴や節目から不快な強風が吹きぬけ、直ちに発熱や病気の原因になった。屋根は棟木も無く、完全には重なっておらず、無数の大きな穴や漏り口があり、入り口近くの者たちは強風の脅威にさらされていた。そして真っ暗闇、全く

[24] チチャレンカ移送のための準備は 1945 年 7 月から始まっている。この断片は 8 月に書かれているが、7 月以降全期間のものであるため、この稿本は 1945 年 8 月 23 日から始まっている。

灯りが無い、石油ランプさえないし、部屋（割当て後）は立つことも出来ないほど低いものであった。

その上、何も考慮しないヤップが夜中に点呼を始め、男たちは疲労困憊して、厳しい夜の外気の中を約 2 時間近く外に立たねばならなかった。そして朝は、夜明け数時間前の暗闇の中、再び起され、与えられた労働に就く前の整列をするのであった。そして最初の陽光とともにパチョル（鍬）とスコップと固く干からびた兵補パンを持って、しかしまだ一滴の飲み物さえ与えられず太陽と地獄に向かって門を出るのだ。それが午後（夜といっても良い）の 7 時まで続く。何人かの男たち、特に 50 歳以上の高齢者が倒れ込むのは不思議なことではない。残酷、非人間的、描写も不可能である！

その日は皆、喉の渇きを少しでも癒すために（砂漠の比では無い）水田から水を汲み、さらに上流の人や動物、部落すべてが排便した不潔な溝からさえ水を汲んで、そして狂ったように、制御も無くむさぼり飲むのであった。翌日に多くが不快な下痢で寝込んだのは驚くに値しない。もっと驚くべきことは神の恵みか、赤痢やコレラが蔓延しなかったことだ。神の助け。ただ人は自ら立つこともできず、バラック中に便や小便をした。なぜなら便所（？）は驚くほど遠い所にあったからだ。まだ廃棄物がなく、蝿がいなかったのが我々の救いであった。

しかしヤップは病人のことなど全く、またはほとんど考慮にいれていなかった。文字通り叩き起こし、ある程度歩けることが出来た者は皆雑役に狩り出したのだ。全員働く必要ありとヤップは云った。初日から早くも病人たちが倒れ、同行した医師たちとヤップの間で、もうこれ以上一緒に働けない病人に関して激しい諍いがあった。そして若親分「ファン・ノールデン」医師が我々のために勇敢に立ち上がり戦ってくれたおかげで、日本人医師は最初から 5 日目、最初の不適格者グループを送り帰すことに同意した。その後 2 つのグループが続いた。素晴らしい業績だ。なぜなら 45 歳以上の多くの年配者にとっては、まさしくこの最初の数日は死を意味することであったからだ。実のところここでの全期間（約 1 ヶ月）に我々は全エネルギーの最大限を消耗したようだ。これ以上は耐えられなかったであろう！

この場所に関しては、どこも同じように乾燥し不毛で水は無い、ここ数日井戸には飲み水が無く、兵舎の中の重病人への 100cc のお茶さえもない。だから顔や手足、食べ滓のついた食器類、最後は垢だらけの我々の身体さえ洗えない。コロモジラミが大繁殖する。便所は、驚かないで欲しい、目にも無残な溝の上に竹の切れ端がところどころつながっただけで、仕切りも無く、たびたび場所不足のため、無残な姿で二人の男達が同時に隣同士でしゃがみこんで用を足している。だが最後には誰も気に掛けなくなった。確かに場所と状況から為さざるを得ないし、我々は結局男同士なのだから！だがヤップは絶対に許せない。なぜなら我々がこのように豚以下に扱われ、状況はまさしく本物の豚小屋以下であったから、そしてもう一度繰り返すが、これは個人的に実際に体験した者だけが判断出来ることだ。連合軍（誰か）に、いつかここで我々がどのような生活をしたのか、その最後の一片、抑留生活最悪の時期、地獄の一部を実証されないよう、最終日に我々最終グループがヤップの命令で特にその痕跡を消すためす

べてを破壊する必要があったのは理由無きことではなかったのだ!

生活自体は、特に外部雑役ではチマヒで体験したよりも自由に動けた。兵補、現地人、そしてヤップとさえ相当に取引や密かな取引が為された。そう、数千、数万ギルダーが毎日交換取引された。衣類が再取引きされ、数千の卵（アヒルの卵）が密かに持ち込まれた（チチャレンカの卵の話しは、チマヒに戻ったあと「おい卵泥棒、我々の卵はどうなっているのだ」といわれるほど有名である）、そしてあとでタワナン（抑留者）の中さえも、たとえば噂の「不気味な奴」とでも云うべきか、夜も昼もパガー（柵）によじ登って取引のため部落に消えて行く者がいる。しかしヤップも黙認はしていない、全期間に及び多くの者が打たれ、柔なものではなくまともに殴られ、様々な男たちが病院の世話になった。

しかし我々抑留者にも不名誉な部分が無いわけではない、なぜならヤップの「ベランダ・ブスーク」（悪質なオランダ人）の言葉通り、中には多くのブスーク（悪人）がいたし、チチャレンカのこの悲惨な状況においてさえも不正はなくならなかったし、炊事係りさえ一緒になって不正を続けたのである。このことでも我々は最初の（組）収容所委員の、願わくば無意識であって欲しいが、間違った割当てや自由裁量を見直す必要がある。彼らはそれで我々の人生の一幕である「チチャレンカ地獄」と名付けたチチャレンカの「悲惨」な日々の最後の一場面を演じるのに協力したのである。

ハウゼル

1945 年 7 月 8 日から 14 日

重い内臓不調。収容所は大騒動だ。2500 名がどこかに送られる。ファン・デル・カイルと私も、どこにいくのだ？1945 年 7 月 10 日、結局赤痢と診断され伝染病棟に入る。私の出発はもう取り止めになるだろう。私は移送されるには衰弱しすぎているから喜ばしいが、他方では知り合いの多くがいなくなることになって寂しい。伝染病棟で私の病状はかなり回復。厳しい食餌療法のおかげで、また食欲が出たがまだかなり衰弱している。雑役班はまだここにいる。彼らは特配がもらえる（2 度の朝粥、コーヒー、2 度の米）。

ヒール

1945 年 7 月 10 日

100％の動揺。2500 名の抑留者が去らねばならぬという。しかしここに残れると断言する者もいる。この事態に関し多くの講義がある。まず 2500 名の睡眠場所にする 2 班を空にする必要がある。一部はすでに指名されている。倍の食事が貰えるとの噂だ。移送されないものたちは

皆この 2 班から出なければならない。私も荷物と共に頑丈な若者たちの傍でひるんでいる。また楽しい引越しの有り様だ。午後 2 時には全部片付いた。講義がいろいろある。トンネル仕事、チレストック（金鉱）、踏み切り設置、爆撃の後始末。我々は 2 組の衣類、靴、毛布がもらえるだろう（とのことだ）。いやはや。

ヒール
1945 年 7 月 11 日

特別雑役者（そう我々は呼ばれる）の献立は 8 時粥、10 時コーヒー、12 時スープとパン、午後 4 時米とスープである。残念ながら肉は無し。我々の新しい名前は鉄道雑役班だ。本当なのだ。補充をしているのでまだ選択がなされているようだ。

ヒール
1945 年 7 月 12 日

5 人づつ 1 列に並んで、日本人医師が皆を検診した。検査終了。不適格者も幾人かいた。脚気と老いた顔付きをみるだけ。倍の食糧は気に入っているが、粥は薄い。パンは倍ではない。

スホルテ
1945 年 7 月 15 日

出発日はまだ決まらない。ヤップはどういうつもりなのだろう？バロス収容所からすでに 1500 名、そして少年収容所からも何割か供出しなければならぬようだ。我々の収容所ではこの機会にまた徹底的にいざこざがあった、そして 6、7、及び 10 班が作業者として指名された。

スホルテ
1945 年 7 月 19 日

我々は収容所の内外のこと何でもする。まずは一般雑役。今日は 200 名が稲作雑役に行くはずだったが、それは道路敷設であるのがわかった。誰も思ってもみなかったことだ。そこでは一日中食事を貰えなかった。収容所に帰って 750gのウビ、米 400ｇ、スープ 600ｇ、150gのボゴ

ール[25]を待っているうちに特配のウビ（サツマイモ）1kgを貰った。贅沢なものだ。パンの値段が 0,50 ギルダーまで下がった。グヌン・ボホンに 2 本の道を作る。山の中に物を隠すためのトンネルを掘った。我々は出発するのか、否か。

ヒール

1945 年 7 月 22 日

我々は 25 日に出発する、やっと正式になった。歓声が起った。最近は、我々がまるで出発しないかのごとく、つらい雑役だった。

スホルテ

1945 年 7 月 24 日

午後になって急に決まった。我々最初の隊は翌日出発になるようだ。7 月 25 日におそらくチチャレンカだ。目の前が真っ暗だ。これ以上最悪な事はないだろうと我々は思った。

ヒール

1945 年 7 月 31 日

2000 名が 25 日に出発。8 時になってようやく整列。その後普段のように何時間も走り回って、大きなバラン（荷物）を一括し、隊は停車駅に行進。「豚、豚」と繰り返し罵倒されながら、我々100 名は手荷物と共に 44 名用の車両に押し込まれる。蹴られ打たれながら中に入る。早くもどうしようもないのが分ってリュートに最後に残るよう勧め、それは成功した。なぜなら一本の足を中に、もう一本を外に出して我々は乗降口に押し止まったからだ。

一時間後に出発、私は全旅程を乗降口にとどまることが出来た。我々は警官からチチャレンカに向かっている事を聞いた。バンドンから 16 km らしい。そこに着き、我々は固い石の多いまたとない粗悪な道、荷物をひきずりながら 5 km 歩いて到着。大荷物は自動車で運ばれた。幸い我々は同日に貰えた、他の者たちは 1 週間後、ある者たちは受け取らなかった。惨めな労苦だ、そして果てしない列が少しずつよろめきながら入ってくる。グループはみな混ざり合って広場に集められ、混沌とし全員揃うまで何時間もかかった。ついに中に入る。まず

[25] ジャワ名ではゲテム・ゲモンの木、マレー語ではマリンジョと呼ばれる。食べられる実がなりクルプック・マリンジョ料理ができる。

この収容所は、収容所という名前さえつけ得ない。汚れて不潔な動物小屋で、動物を飼うにも不潔過ぎるものである。低いかわら工場の倉庫で、我々はここでゲデック（竹で編んだマット）の上に 3 列になって寝る、このゲデックは立てかけるとすぐに仕切りになる。地面に直接寝る事になる。壊れたかわらで屋根は覆われている。我々は約 95 cm 幅に横たわる。他の倉庫では 50 cm 幅である。結局大きな失望。炊事場は無く、初日にはチマヒから丸パン 4 個を貰っていたが。倉庫には灯りも無く、さらに悪いのは水が一滴も無いことだ。汚いし不潔だ、疲労困憊し寝床に入った。同夜、男が数人足らなかったため 2 度起され外で整列させられる。なぜヤップが真夜中に知り得たのか、不可解である。

このような素晴らしい夜の翌朝は、1500 名が仕事の前、朝 6 時に整列。仮設炊事場で同夜粥が炊かれた。6 時半に整列し、やっと 9 時半に行進が終わる。農業用フォーク、パチョル（鍬）、鋤をたずさえ固く乾燥した水田に沿って約 3 km 歩かねばならなかった。班は 100 名で構成されていた。我々は線路用土手を築く必要があった。横側を掘りおこし、その土を真ん中に積み上げた。各 100 名の男たちにハンチョウ（マンドール）（現場監督）と二人の兵補がつく。出発時に各自パン 1 個、およそ 3 個分の丸パンを貰った。時々休憩。全く水が貰えない。灼熱の太陽、不快な風、日陰は全く無い。部落で水を探し、汚水、不浄水、何でも飲んだ。

我々は最初の日、部落に友好的に迎えられ、果物とクッキーをもらった。だがそれは瞬く間に変化した、というのは近くで非常に大きな衣類取引がどこかで行われていたからだ。シャツは 200 ギルダー、古いタオルは 25 ギルダーなど。第 1 日目は 6 時まで働き、日が沈む頃に帰路についた。帰ってから 300g の米を食べる、他には何も無い。死んだようにぐっすり眠った。

第 2 日目、同様に 6 時起床。暗いうちに食事と着衣。少し早く出発。湧き水を発見して水浴び。気持ちが良い。私は隊の水汲み役になったので水浴を満喫できる。我々は湧き水、養魚池の水、生水、廃棄物がたくさん浮いているもの何でも飲む。今日の食事は 300g の米、コップ一杯の野菜入りスープ。炊事場で人は熱心に働く、班では一晩中収容所の外までゴミを取ってきれいになった湧き水を取りに行く。

第 4 日目、朝食米の粥を貰う、味は良いが少量だ。最初の土手が完成した。班ごとに 50 m仕上げる。部落で食糧が貰えることを願う。何でも欲しいものはあるが値段がまさにせりあがっている。水を取りに行くときには隊と一緒に兵補が一人同行せねばならぬ。彼らは売るためのバラン（物資）を持っていると喜ぶ。なぜなら彼らにも某かの儲けが必要だからだ。数 10 ギルダーは魔力を発揮する。人に売ってもらうが前もって値段を決めておく。収容所の炊事場は幾分規則的に働いている。が支給食は非常に粗悪で、部落で食糧補充が出来なければ顔色もわるいであろう。残念ながら皆が金銭を所持しているわけではない。すぐに収容所いたるところで火が焚かれたが、今は禁止されている。

チマヒを出発する前に 3 kg のコーヒーを取り戻したことを話すのを忘れてしまった。誰もコーヒーを持っていないし、収容所では不潔なお茶が貰えるだけなので大変喜ばしい事だ

った。この収容所は非常に不潔なのだ。穴や窪みがたくさんあり、かわらの欠片、夜中に扉の前でしゃがんで各自扉から 2 m 離れた場所でしている汚物や排便。日本人と兵補たちだけがましな宿舎で、立派な便所がある。我々はほとんど流れの無い水路の上にあるぐらぐらの竹の板に長い列になってしゃがんでいる。これ以上書く必要はないだろう。外の水田で排便するのが最良だが、いつもうまくいくことでは無い。今ではマンディン（水浴び）も水田から缶で苦労しながら汲んできた水でしている。

作業には少しづつ慣れてきたが、夢もみないで眠る。肉や魚はまだお目にかからない。食事は粗末なままだ。早起きも過酷なものだ。これは時間通りに出発しないと慣例の処罰を受けると収容所監督たちが怖れているためだ。我々は今では 7 時に起床し、8 時に出発する。作業中は 4 回から 5 回休憩があるが、非常に不規則である。数百人ごとに一人のヤップの監督がいるが、彼らは相互協力などしない。だからいろいろなグループは帰路の時間がまちまちである。200 人のバラックごとに石油ランプが貰えた。ここでは全部冒険だとみるのが最善だろう。水田はかなり乱雑な有り様で、兵補なしで部落に行く男たちもたくさんいる。112 人が不適格になり、戻らねばならない。各自 4 本の細巻きタバコを貰う。初めて 400g のウビ（サツマイモ）を得た、が非常に粗悪なものだ。献立は今 400cc の砂糖無しの薄い米の粥、パン、300g の米そして 400cc の非常に質の悪いスープだ。

ヒール
1945 年 7 月 31 日

ヤッペンの一人は部落で食糧をたくさん買ってこさせ金を取って割り当てる。悪くない規則だ。戻ってくると隠していないかどうか全部検査だ。取引はここではものすごいのだ、特に部落では卵が 2 ギルダーする。今日何百人もの連中が部落を歩いていた。今日は熱心に働いたので早く戻った。病人と入れ替わりにバロス収容所から 113 人の男達が来た。

ヒール
1945 年 8 月 4 日

今日は根や竹の幹の繁みを掘り起こす必要がある丘に巨大な水路のある部落を貫いて働く。ヤップが傍にいる所で袋入りの米と油を買ったがヤップは見て見ぬふりをした。百名につき 13 足の擦り切れた靴が支給された。16 日に出発するという噂が流れる。ゆっくりやっていれば作業は思ったより楽だ。
ヒール

1945年8月8日

汚物は溝の中に置かれる。収容所の有り様も構わないし、構われない。なぜならみんな水田にいってしなければならないから。4，5オンスの砂糖と5つのピサンをもらった。作業はやっつけ仕事だ。乾いた大きな粘土の塊を正確に積み重ねてすばやく土手を作る。あとでトロッコも通ることが出来ないはずだ。

ヒール
1945年8月10日

飢えのためもう何年も我々は皿をなめている。ここでは水不足のためだ。洗う必要がない。全部で 225 名の男たちが去り、200 名の若者が少年収容所からやってきた。倉庫には入りきれない。溝に汚物が詰まっているにもかかわらず溝の上に覆いを作った。何という有り様。

ヒール
1945年8月12日

今日は日曜日、静かだ。7 時までいびきをかいて寝ていた、普段は 5 時半からやかましいのだ。ほとんど皆 10 時まで寝床で横たわって話したり、本当にまたとない休息を心から満喫している。炊事場か今日は砂糖水をもらった。これはコーヒーだったらしい。カチャン・イジョースープ（小粒のグリンピーススープ）は痛烈なる失望。80kg の肉は炊事係以外たぶん誰も見つけられないだろう。

ヒール
1945年8月14日

これが人生だ。ここで病気になるのは厄介だし危険だ。健康なものは収容所に留まろうとし、目立たないようにしている。だから結局本当の病人がパチョルの柄（鍬の柄）で外に追い出されぶん殴られることになる。今日外では何も食べていない。ヤップは不機嫌だった。戦争は明日終わるとの噂だ。ヤップがまた云ったにちがいない。

ヒール

1945 年 8 月 15 日

昨晩、今日は半日だと知らされた。今朝整列するよう命令が出た、突然兵舎に戻る。休日だ。夜中にヤップが旗を下げ、後ろに放り投げた。奇妙なことだ、噂は事実だろうか？悲しい日だとのことだ。多くの不安、しかし！どうだろう！旗だけでは分らない。我々はチマヒから薬を持ってくるのを許されなかった、薬は十分あったが。すなわち今は何も無いことが分るのだ。

ヒール

1945 年 8 月 16 日

何人かの若者がパガー（柵）の外に取引するため逃亡した。いくつかのバラックの連中は整列の必要があった。幾人かは兵補に捕まり我々の前で凄まじいやり方で処罰された。見事なる終幕。道具は全部返却、明日 1000 名が戻るという。何百本のパチョレ（鍬）を探す。もちろん部落で若者達が売ったのだ。それは上質の英国製の素材だった。夜になって出発延期との報告。突然多くの者が悲観しているが、意味がない。終戦だ。もう終わったのだ。

ヒール

1945 年 8 月 17 日

今晩遅くの報告。明日は出発しない。明後日 1000 名が出発。何という安堵、何という騒がしさ。ヤップによって灯りが消されるまで夜中みんな話し込んでいる。

ヒール

1945 年 8 月 19 日

命令、バケツは持って帰れない。カバン全部とマットレスは点検されブリキ製品、皿でさえも見つかると放り出される。汚い苛めだ。カバンは全部中味を空けられ燃やされることになる。幸い大丈夫だった。1 時に最初のバラン（荷物）が扉を出る。塩、コーヒー、唐辛子そして炊事場の残り物をもらった。5 時整列。またすばやく荷物検査があり、6 時半に退進。駅には旗がない。万歳、やはり本当だったのだ。ヤッペン、兵補たち、その他戦争素材を載せた長い列車が見えた。通過する時バンドンはかなり照明されていた。10 時半チマヒ到着。ようやくここで本当に日本との戦争が終わった事を確認。ありがたい、しかしここで夜の蝋燭が消えたみたいなのはなぜだ。ここで戦闘はないだろうと思っていたが、今の状況は微妙である。

スホルテ

1945 年 8 月 23 日

簡潔に云えば、ある午後思いがけなく（事実より噂が先）収容所の上に掲げられた日章旗が除去（1945 年 8 月 15 日）され、日本人の態度があっという間に変わった。とはいえすぐには正反対になったわけではなく、そして私は 300 名のバラック長として、理解はできるのだが、これから起る事や出来事への期待で希望と期待と喜びで騒がしい人々のためにヤップから激しく殴打されたのである。最後の旅団として我々20 番目のグループは送り戻される時には、何も公式ではなかった為緊張感が続いていた。それから我々はバンドンで灯りが燈っているのを見たが、駅はまだ隠され真っ暗だったのでまだ我々は確信が持てなかったが、ようやく我々の収容所チマヒ 4 号で朋輩たちが我々を納得させてくれたのだった。

平和通告

日記の断片より

ハウゼル

1945年8月16日

収容所の中は興奮状態だ。人々は昨晩受諾された（？）無条件降伏（？）を互いに祝い始めている。これが噂でない事を望む。しかし私はまだ本当に信じる事が出来ないでいる。

ハウゼル

1945年8月21日

夜6時、日本敗戦を表明する正式発表が続く。その他の点では非常に残念な草稿、すなわち、このような大きな収容所の整理はもちろん困難であるという事、懲罰を受けないために日本側の命令はすべて守り従わねばならぬ事という言及ではじまり、そして何気なく連合軍ラジオも一日に何度か進駐軍が到着するまで占領軍隊の命令に従うことが義務づけられることが挿入されたのである。食糧改善への様々な試みの結果は、本日より朝食丸パンとコーヒー、昼食 400ｇの米とスープ、夕食 400ｇの米、スープそしてサンバルである。日本円の価値を基礎とする規定に関する議会の話し合いは全く実の無いものである。始めての眠れぬ夜、緊張もある。ファン・デル・カイルは葉書を受け取ったが、私にはまだ届かない。

ヒール

1945年8月22日

始めて満たされた日、500ｇの米、サンバル、2度の良質のスープ。なんという食事、なんと豪華なんだ。午後7時に無条件降伏宣言が読み上げられる。ヤップは今回の降伏は連合軍からの繰り返しの強要による受諾と発表した。哀れな者たちだ。班長のスピーチ。女王へ万歳三唱。私は未来に向けての詩を朗読。皆がオランダ色を身につけて歩いている。旗が彼方此方で掲げられ、そのあとオランダ国歌（ウィルヘルムス）斉唱。夜には特配の丸パンを貰った。私が組の食事分配係になった。有利である。今日は扶助でカウン・カウル（タバコの一種）と石鹸、夜には特配のパン。たくさんの豚肉とコカップサンバル（肉サンバル）が入ったスープ。やっ

と何ヶ月ぶりかで初めてのにわか雨。

ハウゼル
1945 年 8 月 22 日

午後 5 時、連合軍からの再三の要請によって天皇陛下が敵対行為を終結させた旨公式発表が班長に伝えられた。オランダ国歌ウィルヘルムス斉唱。皆は握手し合っている。

スホルテ
1945 年 8 月 23 日

1945 年 8 月 22 日無条件降伏宣言が朗読された。ミアの、私の妻の誕生日だった。この日はキールス牧師の傍での感謝の祈りで締めくくった。牧師の礼拝は始めと終わりがまだ皆にとって常に懐かしい「ウィルヘルムス（オランダ国歌）」であった。深い感慨の男たちが口ずさむ故国の歌の静かな歌声のうちに教会は終わった。戦争は過ぎ去った。終に！再び「平和」なのだ。「神への深謝」。

ヤンセン
1945 年 8 月 26 日

日本の無条件降伏宣言が数日前に発表されました。この収容所の状況は今では非常に改善され、僕たちは近いうちに貴方を抱きしめる事ができるでしょう。僕たちは今進駐軍を待っています。とても長くかかるように僕には思えます。僕はもうグヌン・ボホンに行く気になれません。10 ヶ月の間僕はあの不正を体験する必要がありましたが、今は何も関わりたくないと思っています。僕は云いたい事が言え、働く事ができ、人に対してお辞儀をしたり縮みあがる必要がなく築いていく事ができるような素晴らしく組織された社会を切に望んでいます。もちろん以前の社会にもたくさんの腐敗がありました。でも僕たちが一生懸命働けば、このような腐敗プロセスをたぶん食い止める事ができるでしょう。お母様、僕たちは貴方やミンスケと早くまた再会できるだろうと喜んでいます。早ければ早いほどうれしいです。

PERSONAL INDEX

Anami, luitenant-kolonel	アナミ
Bas, De	デ・バス
Beer	ビーア
Bennema	ベンネマ
Berg, van den; tolk	ファン・デン・ベルフ 、 通訳
Berkhout	ベルクハウト
Blokhuis, D.F.	Ｄ．F．ブロックハイス
Boedijn; professor	ブダイン 教授
Boerwinkel; voormalig leraar uit Djokja	ブールウィンケル ジョカの元教師
Bollegraaf	ボレグラーフ
Bos	ボス
Bosman	ボスマン
Bovenkamp, Van de; evangelist	ファン・デ・ ボーベンカンプ
De Bruijn; dominee	デ・ブラウン、牧師
Buster; Bandoengs bioscopenkoning	ブスター バンドンの映画館王
Butner	ブットナー
Buys, H.	Ｈ．バウス
Cub	キュブ
Dake	ダーケ
Dikstaal, Arnold	アルノルド・デックスタール
Docemen; pater en secretaris van de bisschop van Batavia	ドースマン
Donk, Arie	アリ・ドンク
Eeckhout, [Piet Hein] Van den	[ピート ハイン] ファン・デン・エックハウト
Ekster, Den	デン・エクスター
Elout	エロアウト
Engers	エンゲルス
Entjes; hoofdinspecteur van politie	エンチェス
Eysvogel	アイスフォーヘル
Fattner, Eddy	エディ・フォトナー
Fokkinga	フォッキンガ
Fortiers	フォルティールス
Furishima; Japans korporaal	フリシマ

Geelhuizen	ヘールハイゼン
Geissler; dominee	ハイスラー
Gezel; sectiecommandant	ヘーゼル
Gille	ヒレ
Gisolf	ヒソルフ
Symon Goldberg ook gespeld als Simon Goldberg	サイモン・ゴールドベルグ
Greve	グレイブ
Groen	フルーン
Van Haasen	ファン・ハーセン
d'Haens	ドハーンス
Hanskamp	ハンスカンプ
Hartstra	ハルストラ
Harteveld	ハルテフェルト
Hazeloop	ハーゼロープ
Hege	ハーゲ
Heintz	ハインツ
Herten, van; dominee	ファン・ヘルテン、牧師
Heuvel, van de	ファン・デ・ホーベル
Hiddink; dominee	ヒディンク、牧師
Hildering; afkomstig uit Poerbolingga	ヒルデリング プールボリンガ出身
Hirasawa; drager van het onderscheidingsteken van econoom en het samurai-zwaard	ヒラサワ
Hoekendijk	フックンダイク
Hoekstra, Jan	ヤン ・フックストラ
Hokke; gezagvoerder van de Gouvernementsmarine	ホッケ
Hulsman	フルスマン
Hulst, Van; toko-inkoper	ファン・フルスト
Igemi	イゲミ
Iken; zendeling	イーケン 宣教師
Jacobson	ヤコブソン
"Jan met de handjes"	「小ちゃな手のヤン」
"Jan de mepper"	「殴り屋ヤン」
Jansen, Henk	ヘンク・ヤンセン
Janssen, Herbert; een jongere broer van August Janssen	ヘルベルト・ヤンセン、 アウグスト・ ヤンセンの弟

Jong, De; BPM-er	デ・ヨング
Jonkers	ヨンカース
Jonkheer; lid van de Christian Scientist's	ヨンクヘール クリスチャンサイエンティストの信奉者
Jonkhoff; dominee	ヨンクホフ、牧師
Kallilay	カリレイ
Kasahara; commandant van Tjimahi	カサハラ
Kanemitsu; Koreaans soldaat	カネミツ
Keers; dominee	キールス、牧師
Keller, G.J.	Ｇ．Ｊ．ケラー
Keuchenius; zendeling	キューヘニウス 宣教師
Kieft	キーフト
Klerk, De; dominee	デ・クレルク、牧師
Kohneman; dominee	コーネマン、 牧師
Kok	コック
Kooper; architect	コーパー
Kottier, Nol	ノル・コティー
Kray	クライ
Kuyl, Van der	ファン・デル・カイル
Laban, E.L.	Ｅ．Ｌ．ラーバン
Lammers	ラメルス
Leent, Van; dokter	ファン・レーント、医師
Leersum, Van; dokter	ファン・リールスム、医師
Leuverden, Van	ファン・レーフルデン
Lier, Jan	ヤン・リール
Loet	ルート
Lucien	ルシェン
Nakada Masayuki, Japans generaal	ナカダ マサユキ
Mansveldt; dr	マンスフェルト
Meulenaarsgraf	モーレナースグラフ
Meyer	マイエル
Moll, J.J.N.M. Van; algemeen corveeleider	Ｊ．Ｊ．Ｎ．Ｍ．ファン・モル
Monsees; sectiecommandant	モンゼース
Mook, Joop	ヨープ・モーク
Mulder, Wim	ウィム・ムルダー

Nakamura	ナカムラ
Niemeyer	ニーマイエル
Nomura	ノムラ
Offeringa	オフェリンガ
Ohara	オハラ
Oosterbaan; tokobeheerder	オースターバーン
Opa	オーパ
Opelette	オペレッテ
Osch, Van	ファン・オッシュ
Pierson	ピアソン
Pieters	ピーターズ
Pieterse	ピーターセ
Poldervaart	ポルダーファールト
Posthuma	ポスチュマ
Posthumus; dominee	ポスチュムス、牧師
Posthumus; professor	ポスチュムス、教授
Pothaar	ポットハール
Prugt, dokter	プルフト、医師
Rahder	ラーデル
Randel	ランデル
Reinders Folmer	ラインダース・フォルマー
Roelink	ルーリンク
Rooy, Van	ファン・ローイ
Rullman, J.A.C.	Ｊ．Ａ．Ｃ．ルルマン
Ruiter, De; hoofdagent	デ・ラウター 巡査部長
Rijckevorsel, Van; pastoor uit Batavia	ファン・ライケフォルセル バタビアの神父
S, een gewezen autohandelaar uit Bandoeng	Ｓ バンドンの自動車ディーラー
Sagami; politie-sergeant en drager van het onderscheiding-teken van econoom en het samurai-zwaard	サガミ
Salomons	サロモンス
Schimmel	スキンメル
Schoevaart	スルューファールト
Schotel	スコーテル
Schuurman, B; dominee	Ｂ．スヒュールマン、牧師

Snel; ingenieur	スネル、技師
Snellen; inspecteur der belastingen	スネレン
Soegono; Indonesische gevangenisbeambte	スゴノ
Sommer	ソンメル
Spit	スピット
Stadt, Lambert van der	ランベルト・ファン・デル・スタット
Starrenburgh; dominee	スタレンブルグ、牧師
Steur, Pa van der	ファン・デル・スティル
Stocker; voormalig Zwitsers consulair ambtenaar	ストッカー
Sunegawa; sergeant	スネガワ
Suyama; Koreaans soldaat	スヤマ
Swaaborn	スワーボルン
Sijen, Van	ファン・サイエン
Taylor, Ron	ロン・テイラー
Tjepkema	チェプケマ
Veen, Van der	ファン・デル・フェイン
Verhagen; dokter	フェルハーゲン、医師
Verveen; dokter	フェルフェーン、医師
Villeneuve, C.H.V. de	Ｃ．Ｈ．Ｖ．デ・ヴィルネフ
Visser	フィッサー
Vogel	フォーホル
Vollinga; was werkzaam bij de NIROM te Soerabaja	フォリンガ
Vos	フォス
Vorenkamp	フォーレンカンプ
Vredenburg	フレデンブルグ
Vries, De	デ・フリース
Waal, De	デ・ワール
Waard, De	デ・ワールド
Waasdorp	ワースドルプ
Weduwer	ウィドワー
Weerd, De	デ・ウェールト
Verwey	フェルヴェイ
Weynen, dokter	ヴェイネン、医師
Wielinga; dominee	ウィリンガ、牧師

Wiersen	ウィールセン
Wilts	ウィルツ
Winfred; RK-onderwijzer	ウィンフレッド
Winkelaar	ウィンケラー
Woldingh	ウォルデン
Wolff, J.W.; dokter	Ｊ．Ｗ．　ウォルフ、 医師
Wijhe, V.	Ｖ．　ワイエ
Wijk, Van	ファン・ワイク
Ijzerman	エイザーマン
Yamagami; Koreaans korporaal	ヤマガミ
Zuidema, S.U.; dominee	Ｓ．Ｕ．　ザイデマ
Zwanenburgh; sectiechef, hoofdambtenaar en hoofd Scheepvaartdienst	ズワーネンブルグ
Zwart; namens de Indische Katholieke Partij lid van de Volksraad	ズワルト